

バグ・クラネルの英雄譚

楯樗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

祖父の死。その喪失感を忘れ去るほどの爽快感と共に異世界の知識を得たベル・クラネルは、オラリオへ行く決意をあっさりとなし、異世界の物語。その英雄達主人公に憧憬を抱く。

いつの時代、どこの世界でも変わらない。

自分の生きている世界と異なる世界に生きる英雄達キャラクターの物語は鮮烈に、ベルの胸中に刻まれる。

目指すは英雄たちへの仲間入り。
漢ならばハーレムを。

お祖父ちゃんの想いを受け継いで、まずは身体を鍛えることにした。

※アンチ・ヘイトしなさいなので注意タグ消しました。

※タグで遊ぶのやめました（大真面目）

※17/3/15 あらすじ修正

※17/5/17 『独自解釈』のタグを追加

感想の設定を変更

目次

ベル・クラネルがバグるまで	1
ベル・クラネルは怒らない	8
バグ・クラネルは打ち明けたい	15
ベル・クラネルは助けたい	21
バグ・クラネルは試したい	28
ベル・クラネルは許したい	36
バグ・クラネルは理解したい	45
ベル・クラネルは背伸びしたい	51
バグ・クラネルは殴りたい	57
ベル・クラネルは笑いたい	65
バグ・クラネルは打ち明けて	72
ベル・クラネルは憧れて	80
バグ・クラネルは憬れて	89
ベル・クラネルは誤魔化して	100
バグ・クラネルは怒られて	109
ベル・クラネルは試して	118
バグ・クラネルは歓喜して	129
ベル・クラネルは疲れて	138
バグ・クラネルは心苦しく	148
ベル・クラネルは告白する	158
リリルカ・アーデは追い着きたい	167
エイナ・チュールは心配性	178
シル・フローヴァは触れ合いたい	190
ベル・クラネルは抱きしめたい	200

バグ・クラネルは夢を見て



212

幕間の物語『豊饒の少女』



223

リユール・リオンは戸惑って



265

ベル・クラネルは下見に行き



275

ベル・クラネルがバグるまで

——ベル・クラネルの祖父が亡くなった。

その悲報はベルの元に届き、唯一の家族を失う悲しみをもたらした。

谷の奥深いところへ落ちていったとの話だった。

物心つく前から両親の顔を知らないベルにとつて、彼は祖父であり父でもあり、そして何よりも目標であり英雄だった。

ベルに漢というモノを教えてくれた人だった。見せてくれた人だった。聞かせてくれた人だった。その背中に憧れを抱いた。悲しんだし、涙も止まらなかった。

でも悲しいからと言ってウジウジとしては居られない。こんな姿は見せられない。

——そうだ、オラリオに行こう。

そう決意したベルが、昔祖父が書いて読み聞かせてくれた英雄譚を引っ張り出して、持っていこうと思ったのは普通のことだ。

例え網膜に、脳裏に焼き付いている物語でも、祖父の遺品だ。その一頁一頁にいろいろな思い出が詰まっている。持っていけないわけが無い。

家にあつたそれらをかき集めつつ、中身を確認する作業を並行してやっていく。何冊か足りないことに気がつき、家中ひっくり返して探して残りを見つけた。食器棚の上に箱に詰めて入れてある。

少し手が届かない位置にあるそれを、椅子を近くまで持ってきて踏み台にして手を伸ばす。

——寿命だったのだろう。

椅子の足が折れ、箱を手にしたベルの体は気持ちの悪い一瞬の浮遊感を感じて崩れ落ちる。

手に持った箱はそれなりに重く。

顔面へ落ちてきたそれと、床との間に挟まれてベルは頭を打って気絶した。

「——思い出した」

気絶から目覚めたベルが感じたそれは、まさしく思い出したという感覚。忘れていた大事なことを思い出したときのリセットされた感覚。

何か忘れていているという強迫観念のようなもどかしさを、物心ついたときから感じていた。それがすつきり、さっぱり解決していた。

そして思い出した知識はまるで知らないはずのモノばかり。ありとあらゆる概念が、間欠泉のように湧いて出る。

『ビル』という建造物。それが乱立する『都会』。一瞬で町と町をつなぐ『電車』。『自動車』という人が動かす乗り物。まるで魔法のような、でも魔法を使わない『電化製品』。

それはまるで異世界の景色。

絵本ではなく紙芝居でもない『漫画』という読み物。まるで生きているかのように絵が動く『アニメ』。まるで自分が物語の主人公のようになれる『ゲーム』。

そして何よりも、様々な媒体で描かれる「物語」は、今まで読んで聞かされた物語よりも鮮烈にベルの心臓に抑揚を呼び起こさせる。

「——かっつっこいい!!」

語彙の少なさをベルはもどかしく思う。

数多の名言を生み出していく主人公達。主人公に負けない濃いキャラクター達。こんな物語は知らなかった。こんなヒーロー達を

——英雄達を知らなかった。

少しでも彼らに近づきたい。少しでも彼らを追いかけたい。

思い出した記憶とも言うべき知識で、この感情、この想いが中二病という一過性の病気なのだと理解した。

だがそれでも構わない。こんな鮮烈な物語にあこがれない奴は男

ですらないとまで今、思っている。

「常にイメージするのは最強の自分、か——くううう……!!」

ある物語の英雄に至った未来の主人公が、凡人でしかなかった過去の自分に語った、己の強さの秘訣。

純粹なまま汚れを知らないベル・クラネルにとって、この言葉は劇薬だった。原初の英雄願望は容易く塗り替えられる。

「まずは身体を鍛えなきゃ、だよ。オラリオに行くよりも」

オラリオに行くのはもう少し先延ばしにしようと、あつさりと決意を翻した。

三——三——三——

ベルが異世界の知識というべきものを手に入れて、初めの一ヶ月。身体を鍛えようと志してまず、腕立て伏せ、上体起こし、スクワットという三つの筋肉トレーニングを100回ずつした後、10Kキロくらいを走り込む。これを毎日欠かさずすることにした。勿論、毎日三食きちんと食べることは忘れない。

これをした趣味：ヒーローの主人公は英雄ヒーローと言って遜色ない力を手に入れてる。

その鍛錬にエアコンを使わない、というのもあるようだが、そもそも無いので問題はない。

禿げないことを祈るばかりだが、圧倒的な強さが手に入るなら、髪の毛ぐらいどうってことは無い。というか、全て（髪の毛）を救ってこそ真の英雄だ。……常にイメージするのは最強の自分であり、その最強の自分に髪の毛はある。

そのトレーニングは苦行といえた。

一日目はなんとかできた。二日目も苦しかったが何とかできた。三日目も頑張った。四日目で一食抜きそうになった。五日目で止めそうになったが、やりきった。六日目、全身をひどい筋肉痛が襲ったがやりきる。七日目で血反吐が出そうだった。八日目に嘔吐した。

九日目、ひどい便秘に襲われた……………。

そうして一ヶ月続けて習慣化した。心なしか筋肉が付いたように感じる。地面に軽くパンチすれば、大きな音を立てて凹んだ。

「……………ベルよ、君のお爺様のごことは残念じゃった。だが、そろそろ——」

「はあ、なるほど」

どうやら村に収める税金を、今まで祖父が自分の分まで払って来ていたようだ。取り立てに村長がやってきたことで判明した。「オラリオに行きたいんじゃないか？」と払わなくても良いという選択肢を用意してくれたが、それは不義理だ。

あの英雄なら何というだろうか。

そう考えてどうにかしてお金を稼ぎ、村長に払うと決めた。

村の外はモンスターが居る。偶に農作物を荒したり、村の人が襲われている。困っている人がいる。

——なら、予行演習だ。オラリオに行けばダンジョンに潜ることになる。ダンジョンには、村の付近で見かけるゴブリン以外にも、もつと沢山のモンスターが居ることだろう。

「気にしなくてもいいんだがなあ……………。本当に、オラリオ、行っても良いんじゃないよ?」

「お願いします、自警団に入れてください!」

「いや、ホント。マジで行ってもいいんじゃないって」

「お願いします、自警団に!」

かつて死の恐怖を与えられたというのに今はその恐怖を感じない。より具体的には、

ゴブリンは皆殺しだヒヤッハー!

と、そんな具合に昂っていた。

—E—E—E—E—

「ふう。こんなものかな」

いつも通り、筋トレついでに小鬼を殴る蹴る。血飛沫とクレーター

が出来た。時折、拾った木の棒を加工した木刀で首を、四肢を切り裂く。一振りで三度斬るといふ燕返し。絶対に防げないという三段突き。知識にある技をゴブリン相手に繰り出していく。

大体知識にある通り行えたのに満足したが、木刀が三段突きに耐え切れず木端微塵に破碎する。初めの内こそ返り血を浴びていたが、今ではもう返り血一滴浴びていない。

既にあの時見た祖父の背中を超えた。今日あたりでこの近辺にいたゴブリンはあらかた皆殺しにした。

無理矢理にでも自警団に入り、農作業の時期には手伝いもしつつ。「ゴブリン殺すべし、慈悲はない」といった具合で村の安全に貢献してきた。

お給金も貰い、なんとかその月々の支払いは滞りなく行えている。

既に祖父が亡くなって季節は廻り、十ヶ月が経とうとしていた。

この十ヶ月のうちに魔法が出ないか試してみたりしたが、残念ながら使えなかった。鍛錬が足りないのかと思い、より一層トレーニングに力をいれるも、ベルの思う魔法といふべきものはやはり使えない。モンスター相手に傷一つ負わない体になって、拳一つで小山が消し飛ぶくらいにはなったが、彼のヒーローが言っていたように、これではつまらない。例え英雄譚に出てくる魔法のような一撃であっても、所詮パンチはパンチだ。

魔法を諦めることなんてできなかった。剣術の先にあった三段突き、燕返しという事象飽和、多次元屈折現象が魔法の一端だと知り、出来るようにはなったがやはり違う。求めているものはこれではない。

魔法とは何か。どこかの誰かは語った。

曰く、万能。曰く、奇跡。曰く、ビーム。

理屈はわからないが斬撃は飛ばし、多次元屈折現象、事象飽和を同時に引き起こせるようになった。拳にのせることも出来る。だが、万能ではない。これで誰かは救えない。非殺傷設定なんてできやしない。

魔法は魔法であるべきだと、神でも首を傾げるようなことを考えて

いる。

迷走しながらも村には貢献してきたつもりだ。しかし村の人間からは、兎みたいな外見をしていることや、モンスターたちを容赦なく首切りをする様子から『首切りバニー』だとか、『マードーラビット』なんて呼ばれて畏怖されてしまっている。

「……………うーん。もう、狩りつくしちやったかな」

仲の良いお兄さんが、夜更かしする自分への脅し文句である怖い鬼だと言う事を村の子ども達はまだ知らない。

しかし英雄とは得てしてそんなものだどベルは達観している。時に好かれ、時に嫌われるモノ。だから、これでいいのだ。

「ベルよ。ちよつといいか」

「あ、村長」

話があると村長は言った。

話というのは祖父が死ぬ前に自分に託した言葉があるという話だった。曰く、『——もし儂が死んだらお前はオラリオに行け』とのこと。

「実はな、元々税何ぞ貰っていなかった。お前をオラリオに送るための方が良かったんじや。もしも何かあればと、お前のお爺様からの遺言でな。……………流石に、いい加減出ていってもらわねば困る。大恩のある、お前のお爺様に申し訳がない」

「はあ」

「これは今までお前から貰っていたお金、その全てじや」

「……………毎月5万ヴアリスは流石におかしいなと思ってました」

「すまん。じゃがお前から貰っていたモノに手は付けていない。きつちり、ここに50万ヴアリスある。——頑張って来い。お前の家はちゃんと見ておいてやるから」

「そうですか。そこまでしていただいたなら、行かないわけにはいきませんよ。——行ってきます、村長」

元々、オラリオには行くつもりだった。しかし生まれ育ったこの村で己を鍛える、というのは思いのほか快適で、中々出立しようと思え

なかったのだ。

毎日10Kのランニングをしても元気だなど思われるだけで済むのだから。

丁度いいタイミングだった、と村長に感謝しつつ、家に戻る。必要最低限の荷物と、村長に貰った50万ヴァリスと貯金していた約30万ヴァリスを持って、村から出る。振り返って万感の思いを込めてお辞儀した。

「オラリオまで何日かかるかなー」

オラリオへの道は叩き込んでいる。暢気にそんなことを言いながら走り出す。途中食事をとるために村に寄りつつ、音を置き去りにして、オラリオには一週間ほどでついた。

ベルはオラリオの門をくぐる。

この夢と欲望の街、オラリオで目指すのは英雄。物語で語られる英雄たちへの仲間入り。あと可愛い女の子たちと仲良くなること。

——お祖父ちゃん。約束は守るよ。

——ハーレム、作るよ。

真面目な顔をしてベルは、誰もが聞けばバカにするだろう理想を一途に描いていた。

ベル・クラネルは怒らない

オラリオに来て見たのは、大通りを行きかう賑わい。異世界の知識には、人の波と言えるような景色があったが、それでも感嘆の声をあげて一時、その場に立ち止まる。

町の中心に見えるバベルは、知識に見た『都市』にある建物の何よりも高く、何よりも大きい。異世界に『神』の姿をみることは無かったが、確かにこの世界には神様がいるのだと実感した。

人とぶつかって正気に戻る。咄嗟のこととはいえ、鍛えられた動体視力でぶつかった相手はわかる。すみませんと会釈するが、「気を付ける！」と吐き捨てられ、ヒューマンの男は一瞥もせず去って行った。「ん? ……あれ、ない」

流石に、80万ヴァリスもの大金を一纏めにして持ち歩けない。小袋にわけて持っていたが、腰につけていたその一つがなくなっていた。一つあたり、大体8万ヴァリス。小銭とはいえない金額だ。呆ける前は、確かに腰に重みを感じていたのだ。——思い当たる節は一つ。

一瞬だったが顔はわかる。男が去って行った方向に向けて、駆けだした。

「わ、悪かったよ! だから——ひいつ?!?!」

男はすぐに捕まえた。それなりの抵抗はされたが鍛えている自分に死角は無い。胸倉をつかみ、項垂れる身体を持ち上げてボコボコになった顔に話しかける。

「貴方の見立て通りお上りだから、貴方の知るオラリオの情報全て吐けば許してあげるよ」

「わ、わかったよおおお!」

想像通り、お上りさんだと思ってスリを働いたのだとか。魔が差したとはいえこの男、モルド・ラトローにとつては不幸だったかもしれないが、自分にとつては運が良かった。Lv. 2というそれなりの冒険者。この程度であれば「ファミリア」に入らずともダンジョンに

潜ってみてもいいということが判ったのだから。

モルドの実力以外にも、基本的なオラリオとダンジョンの知識におすすめの宿場。食事と酒のおいしい店からおすすめの食べ物まで。モルドが知りうる限りのことではあるが、色々と聞き出せた。思いがけない収穫だ。情報料として8万ヴァリスはあげても良かったが、先に盗っていったのはモルドなので返してもらおう。

「ありがとう、モルドさん！ また会いましょうね！」

「……………(ふるふる)」

路地裏で笑う兎にモルドは恐怖した。

色々と情報をくれたモルドを路地裏に残して、モルドが勧めてきた宿ではない、綺麗に掃除された宿をとった。流石にスリをするような人間の勧めてくれた宿に泊まる愚行をするつもりはない。手広く商売をしているらしい「ヘルメス・ファミリア」が経営している宿だ。何でも旅人の神でもあるとかで信用できる。

全個室制で『Lv. 3冒険者でも壊せない』という触れ込みの鍵が付いている。その分、他の宿屋とくらべ割高だったが安全のためには背に腹を変えられない。貴重品を部屋に仕舞って、手持ちに20万ヴァリスだけ持って宿を出る。

流石に無手で挑むのは無謀というもので、ちゃんとした武器を買うつもりをしていた。「ヘファイストス・ファミリア」製が良いらしいが、バベルに出ている店舗以外にも掘り出し物があるかもしれないことと、「ヘファイストス・ファミリア」の駆けだしたちの作品が置いてある8階に行くことを決めた。

「ジャガ丸くん、塩味を一つ」

「はい。……………お待たせしましたー、ジャガ丸くん塩味一つ」

途中、教えられた『ジャガ丸くん』を昼食代わりにツインテールの可愛い売り子さんから買って、バベルに足を向ける。これははまりそうだ、と揚げたてのソレを四口ほど腹に収める。帰りに買う事を決意して、無事に帰ってくると意気込んだ。

掘り出し物の中から、極東の方で主に使われているという刀を購入。鑑識眼は養われていないが手に良く馴染み、重心も程よい。何よりも『知識』にあつた『日本刀』それそのもので興味が惹かれた。燕返しを行えば、木刀で行うよりもスムーズにできる。流石に耐久力がわからないので、三段突きは控えるが、良い刀だと感じる。鍛えた人の名も、銘も打つてなかったが、その値段は7万とんで100ヴァリス。即金で支払い腰に差した。

他にも運命的なとも言える出会いをして、軽くて丈夫なフルセットのライトアーマーを見つけた。『兔鎧』^{ビヨッキチ}という名付けのセンスを疑うような銘が付いていたが、12000ヴァリスというお手頃価格で購入。

そのほかにも潜入予定である18階層の安全地帯までに出てくる、『ヘルハウンド』という敵への対策のため『火精霊の護布』^{サラマンダー・ウール}という耐火性の着流しを別テナントで購入。

装備していた胸鎧を外し、着流しに袖を通す。その上に胸当てを装備しなおす。少々不格好だが冒険者らしくていいんじゃないかと胸がおどる。

その他、持っていた水筒に綺麗な水を継ぎ足したり、保険の為にポーションを一本購入。

これで残金はゼロに。帰りのジャガ丸くんは魔石を売った金で買うことにする。

昇降機に乗ってバベルの1階へ。こうしてダンジョンへ初めの第一歩を踏み出した。

—— 出合い頭、見慣れたその顔を頭ごと身体から切り離す。首だけになったゴブリンは何が起きたか分からずに、自分の背中を見てそのまま息絶える。体から魔石を取り出され、切り離された頭と一緒に身体は灰塵に変わった。

一連の動作が慣れた頃、手に持った刀を見やる。買ったばかりだと

言うのに、やはり刀は手に良く馴染んだ。しかし重さの違いがあるので、万全とは言い難い。三段突きも控えた方が良さそう。

現在4階層。ゴブリンや、オラリオに来る道すがら蹴り殺したコボルトなどがいた階層だ。次の階層からモンスターの排出頻度が増え、キラーアント、ウオーシャドウといった厭らしい敵が増えるらしい。

ゴブリンやコボルト相手に緩んだ気を引き締める。

——降りた直後にウオーシャドウという毛色の違う魔物に出会って、驚いた。アサシンのように洞窟の陰から飛び出してきて、刃物のような腕を振り下ろそうとしていた。咄嗟に胸のあたりを一突きで三回突いて切り抜くと魔石を残して霧になって消える。咄嗟にやってしまったが、一応三段突きが出来る耐久力はあるようだ。それでもかなり摩耗することには変わりない。極力控えるべきだろう。

「モルドさん曰く、気を付けなきゃいけないのはキラーアント、だったかな」

まだ会っていないそのモンスターは瀕死になると仲間を呼び寄せるらしい。Lv. 2の冒険者でも、集られたら危ういとのこと。20万ヴアリスが入っていた袋に回収した魔石を詰め込んでいるが、そろそろ一杯になりそうだった。このまま18階層まで降りても、倒した敵の魔石が回収できない。

今までの傾向から、強い敵からはより大きい魔石が出てきているようで、同じモンスターでも階層ごとに手に入る魔石の大きさも異なっている。今持っている魔石がどれくらいで売れるのかは査定に出さないと分からない。だが、それなりの額にはなるだろう。

一人前に働けていた証拠でもあったが、月々5万ヴアリスの請求を受けていた所為で、貧乏性という自覚がある。結構お高い値段がした『火精霊の護布』サラマンダー・ウールも本来しちやいけない事だろうが、値切って買っている。

「あーあ、残念。……今日はこの辺にして帰ろう」

18階層まで行きたかったなあ、と呟いて、初めて見たキラーアントを一匹瀕死にする。そうしてやってきたキラーアントたちを皆殺しにしたのを最後に来た道を引き返した。

夕方。オラリオが赤く染まった頃合いになって、無事ダンジョンから地上へ帰還。

しかし「ファミリア」に所属していない自分が、ギルドの換金所を使うのはまずい。現在バベルの前で唸っていた。

自分は『神の恩恵』無しにダンジョンに潜っていた古代の勇者でもなければ、自殺志願者でもない。もし所属「ファミリア」を聞かれればアウトだ。自殺未遂とかなんとか罪状を叩きつけられて牢屋に閉じ込められるかもしれない。

「どうしよー。誰かに代わりにやってもらわうわけには——やってもらわう、か」

身長より大きいリュックを背負って、誰かを待っている様子の自分よりも小さい女の子を見て思い出す。サポーターという役割でダンジョンに潜る人の事。もう既に潜った後だが、そのサポーターを雇って換金を頼めばいいんだと。

善は急げ。丁度目の前にはサポーターらしき人がいる。声を掛けてみよう。

「そのサポーターさん、ちよつといいですか？」

「……………はい？」

ちらつと見えたフードに隠された顔が可愛らしかったから声を掛けたとか、そういう下心はない。ないっただけだ。

リルルカ、と名乗ったサポーターにお願いしたところ、換金した額の一割を条件に引き受けてくれた。別に誰かを待っていたというわけではないらしく、自身の売り込みをしていて、今から帰ろうとしていたらしい。

流星に怪しまれたが、事情を説明するわけにもいかず黙っていると、訳アリなのだと察してくれた。10歳くらいの女の子にしては勘が良い。

ギルドの正面で待っているとお金が入っているだろう大きな袋と魔石の入っていた袋を持って出てくる。

「換金してきました、冒険者様。それで——」

「じゃあ、これ換金してくれたお礼」

2万ヴァリスの内、20000ヴァリスを手渡す。

「つ——。あの、冒険者様？ ……リリは換金してきただけですよ？」

「いや、だってそういう約束だったでしょ？」

「で、ですが……！」

渋る彼女に持っていたお金全てを渡す。

「じゃあ明日から一週間サポーターをお願いしても良い？ 20000ヴァリスじゃ少ないだろうから、合せて2万ヴァリスを契約金として受け取るってのはどうかな？」

我ながら名案だ、と思って反応を待つ。

「…………。いいでしょう。そのお金はありがたく頂きます」

少し考えたそぶりを見せて、リリルカはお金を受け取った。

「じゃ、明日。時間は明朝。集合場所はバベル前のあの噴水で…………。いいかな？」

「わかりました。冒険者様改めましてベル様。今日から一週間、よろしくお願いします」

「うん。よろしく、リリルカさん」

去って行く彼女の後姿を見る。可愛いサポーターを雇えたという喜びを隠せそうにない。今日の稼ぎを全て彼女に渡した訳だが、しかし口約束だけだ。だけど明日彼女が来ないことは無いだろう。

サポーターは信頼ありき。大事なものを預ける訳だから、悪評がたれば仕事がなくなる。モルドもそう言った。彼女の気配を覚えて帰路につく。

夕食代わりにジャガ丸くんを買おうと並んでいると、一文無しだと言う事に気が付いて慌てて宿へお金を取りに帰る。しかし、戻ってくるころには屋台は終わっていた。

気落ちしながらも三食はきちんと食べると決めているので、別段安

くもなく高くもなく、看板娘も居ない。そんな極々普通の食事処を見つけて、その日の夕食を済ました。

バグ・クラネルは打ち明けたい

まだ夜半というべき時間に目が覚めた。借りている部屋を施錠して宿を出る。

流星にこの時間帯、このあたりには明かり一つ灯っておらず、月明かりだけが闇を照らしている。南東の歓楽街は昼夜逆転しているというモルドの話の思い出すが今から行こうとは思わない。

これからトレーニングをするのだ。一つ一つを全力でやったクルタイムも計算に入れると、これで大体約束の明朝ぐらいになる。村に居た頃はトレーニングする時間を特に決めていなかったが、ダンジョンに潜って生計を立てる事を考えるとこのぐらいの時間に起きなければならぬ。

軽くストレッチをして腕立て伏せ100回、上体起こし100回、スクワット100回を一つ一つ丁寧にやっていく。常にイメージするのは最強の自分。一つ、また一つと最強の自分に近づいては離れていく。筋繊維が強く、もう一つ強くなるのを感じていく。今の自分の身体のことでは分からないことは一つもない。

ここまでで二時間。そこからオラリオの中を探検がてら走り始める。半分走ったと思ったところで来た道を引き返して宿に戻る。傷んだ体を癒すためのストレッチを終える頃には空がほんのり白んでいた。

「朝ごはん食べなきゃ。お、そうだ。——いいこと思いついた」

名案を思いついて、それをどう実行に移すかを順序立てて考える。ある程度計画を練り終えて装備を身に着ける。1万ヴァリス程を持って宿を後にした。

「や、リリルカさん。おはよう」

ちゃんと来てくれていたようで内心ほっとした。

「ベル様、おはようございます。今日を入れたあと六日、よろしくお願いますね」

「うん。こちらこそよろしく。——じゃ、まずは朝ごはん食べに行

「こうか」

「はい、ダンジョンに——え？」

驚く顔を他所に、口早に続ける。

「だから、ご飯食べに行こう。朝ごはん抜いてきたんじゃないの？」

「それは、まあ。……サポーターは冒険者様抜きでは生活できませんから、節約しないと……」

「じゃ、今日から一週間、一緒に朝ごはん食べようか。僕の奢りでいいからさ」

「……うーん。そういうことなら、一緒にしましょうか」

この時間から出てくる冒険者もそれなりにいるようで、宿屋の主人は食事代を二人分払ってくれるならという常識的な条件で、こうしている間にも作ってくれている。

出る前に美味しそうな匂いがしていたのを思い出していると腹の虫が鳴って、リリルカが小さく笑う。

宿屋で出てきたのは具材がゴロゴロと転がっていて味を出して、うま味を吸っている、見るからに美味しそうなスープと硬めのパン。スープに付けて食べるように腹持ちがよさそうだ。運んでくれた主人に追加でお昼ご飯を頼んでおく。

「へえ、リリが入ってるのは【ソーマ・ファミリア】なんだ。でもなんで一緒に行かないの？」

「はい。ホームの中はちよつと居心地悪くて。……その、リリは【ファミリア】から許されて一人でやっています。ところで、なんでそんな事が気になられたので？」

「んー？ まあ、ちよつとね」

食事で気が緩んだのだろう。リリと呼んでも良いくらいには打ち解けた。

しかし彼女が入っている【ファミリア】のことを聞いてみると、どうやら地雷だったようだと思心ため息を吐く。昨日は感じなかった仄暗い何かは、どうやら【ファミリア】がらみの事らしい。彼女の【ファミリア】に入るのもいいかもと思ったが、止めておいた方がよさ

そうだ。

「不思議な人ですね、ベル様は。…………他の冒険者様のことを悪く言うわけではないのですが、ちゃんと約束を守って、こうしてサポートに食事を奢る人なんて聞いたこともありません」

「そういうものかな？ 大事な物を預かってくれたり、命懸けで戦う自分をサポートしてくれる人の事を大切にするのは当たり前だと思っただけ」

可愛い女の子なら尚のこと、という台詞は飲み込む。

「——ッ！ いえっ…………なんでもないです。本当にベル様はお優しいですね」

「そうかなあ…………？」

「……………いつか足元掬われますよ」

聞こえないように言ったつもりだろうが、しっかり耳に届いていた。聞いてないフリをしながら飲みかけのミルクを飲み干して立ち上がる。

支払いは食べる前に済ましている。出来上がった二人分の弁当を受け取り、リリに持たせる。

「じゃ、君と僕のお弁当しっかり持っててね」

「……………さつき食べたばかりじゃないですか」

「僕の分食べたら怒るから」

「ベル様と一緒にしないでください！ もう！」

食事の時に被っていたフードとつたので気づいたが、獣人だ。耳が頭の上から生えている。そしてピコピコと動いていて可愛い。

一物抱えているようだが、彼女を雇って良かったと素直に思った。

☐—☐—☐—☐

「す、凄い」

「それほどでもないよ。今まで行った事あるのは5階層までだし」

普通にゴブリンの四肢を切断して頭を斬り飛ばしたただけだ。しかし、リリには一瞬の出来事。刹那にして、ゴブリンはバラバラに解体

されたよう見えた。

「なるほど。…………お察しします。リリが行った事があるのは11階層までですが、そこまででよろしかったらご案内します」

「うん…………。ありがとう」

都合よく解釈してくれた。血に濡れた刀をゴブリンの腰衣で拭い
とって、鞘に戻す。リリはそれをみて魔石を取り出す作業を始めた。

「——業物の刀に、『火精靈サラマンダーの護布ウルル』の着流し。やはり、ベル様は凄腕の冒険者……………」

「いやー違うんだけどなー」

「いやいや、そんなご謙遜を。5階層までに炎を使う敵は居ません。本当に5階層までしか行つた事のない冒険者なら必要ないはずです。…………あまり詮索するつもりはないのですが、昨日のことといい、ベル様はかつてオラリオに居た上級冒険者なのでは？ 訳あつて目立
ないようにされてるようですし」

期待半分、もう半分がヴァリスで輝くりリの目が眩しくて本当の事が言えてない。ダンジョンに潜るのには『神の恩恵』が必須だということに、それがまだないことを。

「…………ま、18階層目指してがんばろっか」

「じゆうはち!? やはり、ベル様は……………良い金ヅルですね」

10階層辺りまで進んだら言おうかと緩く決めて、リリがこちらに聞こえないよう、ぼそりと呟いた言葉を拾ったがスルーした。

——僕のサポーターが真っ黒だけど、可愛ければ問題ないよね！

「ベル、さま！ はやい、です……………」

「んん？ そうかな？ ならもうちよつと進行速度緩めよっか」

「はあ。はあ…………。はあ」

リリの息遣いにドキドキしてちよつと歩く速さを早くしていたと言つたら怒られそうだ。

現在8階層。未到達の階層だが、此処までに出くわした敵は軽々と捌けた。途中フロッグシューターという蛙を大きくして目を一つにしたモンスターには一度刀が滑って焦つたが、突き刺せばあっさり殺

せた。

歩く速さを遅くして通路からルームに入り、3秒とかからずにそこに居たモンスターを一掃する。

「そろそろ、昼頃だと思う。ちよつと休憩してご飯にしようか。リリも疲れてるみたいだし。落ち着いたら僕の分ちようだい」

壁を刀で傷つけながらリリが落ち着くのを待つ。

斬撃を飛ばせるが、それをリリの前で見せる訳にはいかない。すれ違う冒険者の戦いを見る限り、そんなことが出来る人間はいなさそうだ。

モルドから聞いた話だと、モンスターを生み出すことよりダンジョンは壁の修復に力を回すらしく、「直るまでの間はそのルームでモンスターは発生しない」とのこと。しかし情報のソースが問題だ。実際に試してみる良い機会だった。

「はひ。ふう——落ち着きました。……はい、ベル様。あの、本当にリリも貰ってもいいのでしょうか？」

「いいよいいよ。自分だけ食べて、リリが食べてないのは申し訳ないからね」

「では有難く頂きます。……ロールパンサンドですか。……、うん。あのご主人腕がいいんですね。まだ葉っぱがシャキシャキします。口の中が乾きそうだと思いますが、余計な心配でした」

「……ホントだ。凄いな、あの人。……今度調理法教わるかな」

ベーシックにトマト、ベーコン、レタスにチーズが入っているだけだが、数種類の香辛料が使われていると思われるソースがピリリと舌を刺激して、嗅覚もツンとした刺激が来る。味覚も嗅覚も飽きさせない。実に美味だったが、ボリユームもあって満足感も大きい。ダンジョンに潜るのであれば最適な一品だった。

少し食後の休みを取ってからルームを後にする。モルドの言葉は正しく、壁が直るまで、ダンジョンはモンスターを産み落とそうとはしなかった。

13階層。冒険者の資質が問われる『ファーストライン最初の死線』。

リリの案内が終わったが、問題はない。

「——凄すぎ。これじゃ普通にサポーターしててもやれそうですよ。別に——」

「……………あの」

「あ、はい！ なんですかベル様！」

「うん、なんでもないよ」

どこの【ファミリア】にも所属していないこと、【ステイタス】も持っていないことを打ち明ける機会を逃したことを除けば概ね順調だった。

ベル・クラネルは助けたい

「ひゃっ——!!」

「ほいっ」と

ヘルハウンド、と名前の通り地獄にいなような火を吹く犬型のモンスターは炎を吐き出してきた。『火精霊サラマンダー・ウールの護布』の耐火性を確かめても良かったが、リリが居るので控える。無力というわけではないようだが、Lv. 1らしいので何があつて死ぬかわからない。身のこなし等から察するに、彼女は0. 1モルド程度の実力しかないだろう。

迎え撃つように腰だめから袈裟掛けに一閃。一振りで飛んで行った不可視の刃は炎を霧散させ、奥にいたヘルハウンドを斬り刻んだ。「す、すみません。リリの為に貴重な魔剣を……」

「魔剣じゃないから安心して。僕の持つてる技術？　みたいなものだから」

「え、は、はあ？　あ、なるほど、そのようなスキルがあるのですね」「そうそう。そうなんだよ——……はあ」

都合よく解釈してくれるからいいものの、騙していると思うと良心が痛む。早々に打ち明けたいが、モルドから聞いた話だと自分はやはり異常だ。「ステイタス」を持っていない人間がLv. 2の冒険者に勝てるわけがないと、親切な彼は涙を流しながら教えてくれた。

丁度壁から生まれて来たアルミラーズ達を一閃。三匹いた彼らを残らず両断する。

すごいすごいと言って、おだててくれるリリに苦笑いしか浮かばない。その目は確かに、刀のことを獲物と見ていたのだから。こんな彼女に誰がした、と冗談めかしてこの世の無情を嘆く。

バットバットの大軍が落石と共に降り注いでくるといふ危険に（主にリリが）見舞われたが、斬撃を飛ばして落石ごとモンスターの大量を切り裂いて難をしのぎ、15階層。

「せいっー」

——閃く銀閃が牛頭人体のモンスター、ミノタウロスの部位を切

断。断末魔もあげさせることなくミノタウロスを処理する。

四肢と頭を失くした身体から血が噴き出て、血だまりをつくる。魔石を肉骨ごと切り出すと、魔石についていた血肉は消え、とんでいった頭から角をドロップして灰に変わる。

傷をつけずに魔石を回収するのも中々骨が折れる。この点だけで言えば、魔石が大した金額にならないため、気にすることがない地上のモンスターの方が楽だ。

刀に付着した血を素振りして払い落とし、鞘に仕舞う。

落ちた魔石とドロップアイテムをリリが拾う。やはりというか振るった瞬間の刀はリリには見えなかった。

「んー手づかたえがない」

「流石ですベル様。それだけ強ければ18階層より下でもどうってことないのでしょね」

「僕って強いのかな？ ……まだまだだと思っただけ」

比較対象が少ないのと、比較する彼ら英雄が遠いところにいるせい、未熟さを感じずにはいられない。

確かに村にいた自警団の他の人達は、パンチで小山は吹き飛ばせなかったし、剣を振るうのも遅くて見ていられない、とは思ったが、それは自分のようにトレーニングをしていなかったからで仕方がないこと。

少なくとも多次元屈折現象を引き起こすような業の持ち主はいなかった。

「少なくともリリが今まで出会ってきた冒険者様たちの中ではかなりお強いですよ」

「ありがとう。 ……まあ、こう易々とできるのはスキルのお蔭でもあるんだけどね」

「それでも、ベル様の実力です！」

「あはは、 ……うん、 そうだね」

こう、慕ってくれるのは嬉しい限りだが嘘をついていることが心苦しい。スキルはおろか「ステイタス」すら持っていないのだから。

「リリ、18階層にいたら話があるんだけど、いいかな？」

「？ ええ、リリは構いません。ですが、ベル様？ 今日には18階層まで行くとのことでしたが、17階層の【迷宮の孤王】モンスターレックスのゴライアスはどうされるおつもりで？ 流石のベル様でもソロでとなると………」
「まあダメそうだったら逃げるから大丈夫。その時は引き返すとしてよ
う」

「はあ、わかりました」

僕、18階層についたら自分の秘密を打ち明けるんだ、と胸の内では
呟き、もう一つ決意を固める。

同情か憐憫か。一日にも満たない付き合いで踏み込むのは悪手だ
と思っていた。だが「ファミリア」がらみで、しかもお金に関するこ
とで困っているとなると、失礼になるかもしれないが、リリ一人にど
うにかできるようには思えない。

——英雄になりたい。ハーレムとまでは言わずとも、女の子と仲
良くしたい。

そんな子ども染みていると言われるだろう理想を持って、このオラ
リオに来たというのに、女の子が一人困っているのを黙って見ている
のか。それを見過ごせるか。仮にも英雄を目指すのだ。自分の正義
を貫こうというのに——当然、見過ごせる筈がない。

ミノタウロスを斬り刻む。牛頭人体の怪物にモンスター一瞥くれて、残った
塵の中から魔石を拾い上げてリリに渡す。

「それじゃ、あと3階層。頑張って行こう！」

「はい！ ベル様！」

—E—E—E—E—E—

階層が変わるごとにダンジョンの様相が一転二転して18階層の
手前。17階層最後の大広間。その広いルームで階層主のゴライア
スがあてもなくウロウロしているのを岩陰から覗く。見て取れるだ
けだが、推定100モルドはありそうだ。

「んーどうだろ。いけるかな」

「えええ——……………【迷宮の孤王】ですよ。階層主ですよ。ソロでだなんて……………」

「まあ、安心して待ってて。死ぬ気でやらなくても行けそうだから」
100モルドといえど、たかがモルドが100人束になったくらいの実力しかない。死ぬ気どころか本気も出さなくて良さそうだ。

「え、なに——」
「じゃ、行ってくるよ」

そう言ってから岩陰から飛び出る。

ゴライアスは赤い自分の姿を補足して咆哮するが、怯むことなく足元まで移動する。

「せいー」

跳び上がり左足の関節に向けて一閃。刃に沿って飛び出した斬撃は切れ込みを半ば程まで入れたが、切断はしなかった。

ダンジョンのモンスターとは言え生きている。苦悶の咆哮をあげるが、意に介する気は無い。剣を仕舞う。

「普通のパンチ」

次に大空間に鳴り響いたのは肉を叩く生々しい音。一瞬で背後に回っての膝裏への一撃。

二つに割れていた膝の皿が衝撃で吹き飛び、半ばほどで繋がっていた左足は断裂し落とされた。

バランスを崩したゴライアスは後ろ向きに倒れる。

その間に素早く移動しゴライアスの頭上へ。腕を振りかぶる。

「ちよつと強殴り」

下方方向に向かったの一撃。ゴライアスは頭を消し飛ばされその巨体は床に叩きつけられた。

衝撃波が生まれてリリのいるところまで風が吹き抜ける。18階層にとどまらずダンジョンが震えた。

ちよつとやり過ぎたかもしれないと反省しつつ、魔石のある場所を割り出して、極力傷つけないようにパンチで周りの肉を抉る。そしてドロップアイテムと傷一つない魔石だけが大広間に残った。

「リリー終わったよー」

「……………(ポカーン)」

一瞬の出来事だった。強い強いと思っただけはいたが、こればかりは咄嗟にどう反応すればいいかわからない。

気がついたらゴライアスが死んでいた。何を言っているかわからないと思うが、自分でも何を言っているのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうでしたよと、帰ってきたベルに笑う。

驚きを胸に秘めたまま、既にゴライアスの報酬が気になっていた。

「……………」

「……………やるんじゃないかった」

「……………そう、ですな」

夕暮れ時。地上に上がってきて肩を落として大広間に残してきたアレらを名残惜しく思う。

幾ら巨大な魔石だ、ドロップアイテムだと言ってもその落とし主が問題だ。都合上、周知されるのがまずい自分にとって、ゴライアスの単独討伐を知られるのは良いとは言えない。

「じゃありりは換金してきますね。ベル様、今日は私の力不足で最大の報酬を逃してしまい、申し訳ありませんでした……………」

階層主ともなれば、魔石の大きさもミノタウロスのものよりも遙かに大きい。落したアイテムも問題で、『ゴライアスの大腿骨』丸々一本という洒落にならないサイズだった。取り回しがきかないこともあって、リリが自発的に持ち帰りが出来ないと申し出てくれたことで、怪しまれずに済んだと内心ほっとする。

「……………いや、うん。僕も目立つのは避けたかったからいいよ。寧ろ持って帰ろうと言われてたら困ってた。……………ま、それにそれだけでも50万くらいはしそっだしいかな」

「……………そうなんです、やはり勿体ない事をした気がしてならなくて」

「……………うん、わかる」

そろって落胆し、どんよりとした空気をまき散らしている。街行く人も気が付いて近寄らないようにするくらいだ。

リリと同じタイミングでため息を吐いた。

「凄いです、凄いです！ 70万ヴァリスですよ、ベル様！」

「!? 中々の稼ぎだね」

傷の少ない魔石、道中拾ってきたドロップアイテム含めて、自分の見たてよりも多くその額なんと70万ヴァリス。努めて平静を装うが、村に居た頃の月収を遥かに上回る一度の収入に内心驚愕していた。もし全額手にすることが出来るなら、現在の所持金が一気に倍になる額だ。

「あの、ベル様。それで、報酬の方は——」

「はい。半分」

「……………ほへ？」

リリは何を言っているんだという顔をする。

契約金として2万ヴァリスもらったが、ダンジョンの稼ぎの報酬を決めていなかったリリは、他の冒険者と同じように報酬を自分にはくれないモノだと思っていた。

額にして35万ヴァリス。そんな額をくれる冒険者に今まで一度もあつたことは無く、ポンと差し出された大金に狼狽える。

「ん？ ああ、そうだ。言ってなかったよね。報酬は山分け。5:5の半分ずつでこれから一週間やってくからね」

「いや、待ってください！ リリはアイテムを運んでただけですよ!」
実際、いままで真面目にサポーターをやってきて経験した事だ。冒険者は卑怯で信用ならない。だからリリは悪事に手を染めるようになった。だが、今回の仕事では本当に『拾う、運ぶ』という事しかしていない。

寧ろ守って貰いやすいよう動き、思惑通り守ってもらった節さえある。

今まで自分がしてきたことは何だったのかと唾然とする。

「だってそれがサポーターじゃない。え、違うの？」

「え、いや、でも………！ 確かにそうですが………！」

「文句があるならあげないけど………」

「いえ、いただきます!!」

とはいえ、もらえるモノなら貰っておく。くれると言うのだから、多いと言って受け取らないなど考えられない。

初めて会ったタイプの冒険者であるベルの底が知れず、困惑する。自分から見ても器のか過ぎる彼に、今まで冒険者に抱いていた憎悪は霧散しかけていた。違うのだ。ベルが特別なだと自分に言い聞かせ、忘れそうになっていた自分を戒める。

そう。どうせ、ベルも最後には――

「じゃ、一緒に飯食べに行こっか。僕の奢りで」

「あ、はい、一緒に奢ります」

暗い思考は何処へやら。底抜けにお人好しなベルに毒気を抜かれてしまい、奢ってくれるのならとついに行った。

バグ・クラネルは試したい

「いらっしやいませー!」「いらっしやいませー!」

外から見ただけでも繁盛しているようだと思っただが、中に入るとなお、その盛況ぶりが熱気となつて伝わってきた。

リリと訪れたのはモルドに勧められた店だ。スリをしてきた人間に教えられたにしては、良い店であることが伺える。冒険者のような無頼漢たちが集まるといふのに、店員が綺麗な女性だけで、彼女たちが活き活きと働いているのがよい証拠だ。

「二名様ですね。カウンター席でもよろしいですか?」

「はい」

「では案内しますね!」

……案内をしてくれる、笑顔の可愛い髪の毛を後ろでお団子にしてちよこんと少し垂らしている彼女など、幾人かを除けば、実力者の方が多い。厨房で料理の腕を振るっている女主人は軒並みいる実力者の中でも飛びぬけて強い。腕っぷしが強いお蔭で女性が安心して働いているのかもしれない。

——ワンパンで勝てる自信はある。だが舐めてかかると危ないかもしれない。

と、戦力の分析をしに来たんじやないと気が付いて戦闘狂な自分を抑えた。

「……………ベルさま、ベルさま」

「なに、リリ」

「ここ、『豊饒の女主人』ってお店じゃ……………」

「そうだよ。最近、親切な人に教えてもらつてさ。一度来てみようと思つてたんだ」

「……………お高いそうですよ? 従業員も一人一人が強いという噂です」

「食い逃げしなきゃいいだけじゃないの? 大丈夫大丈夫。流石に今日一日の収入が無くなる程じゃないだろうから」

「それはそうなんですが……………」

リリと小声で会話しつつ、案内をしてきている女の子の頭の後ろで揺れる髪の毛に目が惹きつけられそうなるも周囲に目を凝らす。案内をしてきている女の子も含めてだが、話の通り本当に綺麗どころが多い。

等間隔に置かれている多人数掛けの机からは、酒と食事に酔う冒険者たちの声が飛んでいた。若草色を基調とした揃いの服に白のエプロン、フリルのついた白いカチューシャを身につけた給仕の女の子たちはその間を縫って、注文や食事、酒を持って動いている。店員の一人がエルフだが……。

エルフは人との接触を嫌うと聞いていたが、此処はオラリオ。色んな人が集まってくる、と納得した。

カウンターの席までたどりつき、荷物を床に下ろして席に着く。

「ご注文があれば承ります。当店、本日のオススメはパスタですが、どうなさいますか？」

「うーん。じゃあ、それで。リリは？」

「あ、リリも一緒でいいです」

「かしこまりました。——ご注文はいりました！ 本日オススメ二つです！」

「あいよー！」

「それでは出来上がりしましたらお持ちしますね。ごゆっくりどうぞ」

丁寧なお辞儀をした店員を見送って、料理を待つ。

隣で手持無沙汰なリリがメニューを見て渋い顔をするのを見て、ちやんと奢りだからと安心するように言う。メニューにあるどの料理も高いが、払えないことはない。

カウンター席だけあって、少し椅子に高さがあるためリリの足は宙に浮いている。足を揺らしているのをベルが見ていると、見られていることに気が付いたのか、そっぽを向いた。素っ気ないフリをしているが、一瞬だが顔を赤くしていたのをちゃんと目撃している。

「はい、おまち。女主人特製スパ、二人前だよ」

ずい、とカウンターの奥から出されたのは山盛りのスパゲティで、ミートソースの間から肉団子が自己主張している。女主人にフォー

クを手渡される。

「んー匂いだけでもお腹いっぱいになりそうです」

「本当。とつてもおいしそうだ」

「そりやそうだ。アタシが作ったんだからね！ さ、冷える前に食べちまいな！」

女主人にも催促され、パスタに三又の穂先を突き込んだ。スパゲティでソースを絡め、口に運ぶ。

それは肉汁のうま味が口の中で爆発したようであった。

「……………美味い」

噛み締めるように一言呟く。語彙力の乏しいことがなんとも口惜しい。美味しいとだけしか言えない自分が情けない。冒険者向けと銘打っているだけのことはある。昨日訪れた店よりかは幾分か値は張るが、品が残る程度にボリュームがある。

果たして、ソースとスパゲティだけでこれほどだ。肉団子はどれほどのものかと口に運ぶ。

「——！！」

嗚呼、先ほどの爆弾ならばなんになる。先のあれは導火線だった。これこそが真の爆発物だ。なんということだ。肉汁が。うま味が。口内で自らを主張し、暴れている。この調理における真のメインはパスタなどではない。我々だと。肉であるのだと。我々こそ主役なのだ。

いつの間にか注がれていたエールを呷る。ベルは喉を鳴らして流し込み、酒気を帯びた息を吐き出した。エールが肉の存在を胃の中へ送り出し、口の中はすつきりとしている。

一息つけた、と横を見るとリリも出された量の半分くらいは食べてしまっていた。……………何処にあの量が入ったのか不思議だ。

「ところで、冒険者にしてはえらく可愛げがあるね。新米かい？」

「まあ、そんなところです」

実際そのようなものだ。冒険者としての基本的なことが抜けていたりする自分に、リリは度々指摘してくれる。

「ベル様が新米でしたら他の冒険者様の殆どが新米になっちゃいま

すっ！」

「あはははー」

リリにしてみれば、強さに反してどうしてこんな事も知らないのか、と疑問を抱くに値する知識だ。だがそれが案外助かっているのだが、リリには伝わっていないようだと話に合わせて愛想笑いをした。「結構結構。無用な争いを避けるのも冒険者として必要なスキルだよ。私はこの女主人のミア・ブランド。………あんだ、名前は？」
「ベル・クラネルです。こっちはリリ………というのは愛称で、リリルカ・アーデ。右も左もわからない僕には勿体ないぐらい頼もしいサポーターです」

リリはというと突然の褒め言葉にフオークを止めて、しばし啞然とした口を晒していた。いい顔が拝めたと思っていると、誤魔化すように食事を続ける。

「へえ、そうかい。実力自体はありそうだけどねえ？」

「………ええ、まあ」

意味ありげに笑みを交わし、止めていた食事を再開する。

「そういえば。リリはお酒出してもらってないけど、いいの？ リリは見た目通りの年齢じゃないと思うんだけど」

「はい。えっと、15歳ですね。お酒はちよつと苦手で………ん、ベル様？」

「なんでもないよ。リリのこと10歳くらいだと思ってたとかないから」

「ベーるーさーまー!？」

袖を掴まれて揺さぶられる。

「あははははー!」

まさか年上だとは思っていなかった、とは思ったが別段気にする事でもなかった。リリが可愛いのは変わりない。

「いやー今日は驚いたぜ！ 18階層まで行くつもりしてたんだが、ほら、手前のゴライアス！ 【ロキ・ファミリア】の遠征から大分経つ。居ると思ったんだがなあ、これがなんとあったのはドロップアイテム

と無傷の魔石でよ!! いやー持って帰るのは苦だったが、儲けた儲けた!!」

臨時収入があつたモルドは『豊穰の女主人』の一角で意気揚々として飲み仲間に今日あつた出来事を聞かせる。

——カウンターに居た白いヒューマンと栗毛のパルウムはぎくりとした。

火照つた頬に冷や汗を流しつつリリの分合わせて1500ヴァリスを支払つて、伴だつて店を出た。そんな『豊饒の女主人』からの帰り道。近くのテールブルから聞こえた話に、既にほろ酔い気分は吹き飛んでしまつている。

それでもアルコールによつて体は熱く、夜風が火照つた体を冷まして行き、心地よい。

リリの年齢以上に気になったことを話題に取り上げる。

「さつきリリが小人パルウムだつて言つてたけど」

「ええ、それがどうかしましたか?」

「……リリつて犬シアンスローブの獣人じゃなかつたけ?」

「っ!? あ、……えつとですね。私のスキルなんです。ちよつとだけ見た目を弄れるんですよ。顔を変えたり、体格を変えたりとかはできないんですけどね」

「へえ、そうなんだ……」

リリが呪文を唱え、犬耳を見せる。じつとそれを見つめた。

「……忠告しておきますが、犬人は特に親しい人や敬愛する人ぐらいでないと触れさせませんよ? 凄く怒られますから、やめておいた方が良いでしょう」

「へえそう。でも、リリは違うもんね?」

「……ちよつとだけですよ?」

頭を撫でる程度にとどめておく。少しだけ、本能のままに愛でたくなりそうだった。

しかし、先ほどから気になっていたことが解決して、絶対に「ファミリア」に入ることを決意する。

憧れの魔法みたいなものが見える、というなら是非もない。ファミリアに入ればギルドにも堂々と行ける。――この二日ダンジョンに潜ってやっていけたが、話を聞いて『神の恩恵』ファールナは必要ないという考えを改めた。

呪文が必要なスキルというのにも興味深い、もう一つ気になることがある。

「リリ、魔法は持ってるの?」

「……持ってません。ですが、あと一つ【アーテル・アシスト縁下力持】というスキルがあります。まあ、これは装備品の重量に比例して補正がかかるだけですけど。ただ、これのお蔭で非力なりりでもサポーターとしてやっていけてます」

「へえ……。そのスキル便利なのに勿体無い使い方してるんだね」

その【縁下力持】というスキルの効果を聞いて、使い道が色々ありそうだとベルには感じた。

三―三―三

「――どういうことですか……。? リリの、この、サポーターにしか役に立たないようなスキルに、何か出来るのですか?」

「あ、う、うん……」

「……失礼しました。取り乱してしまって。……出来たら、教えてくださいますか」

何も知らないくせに、という意味を表に出しそうになってリリは荒だつた心を静める。サポーターとしての機能しかしやらないスキルが本当に役に立つのであれば聞いておきたい。今後の為にも。

「そのスキルって、重ければ重いほど軽くなる、っていうスキルであつてるよね?」

「……まあ、そうですね」

「じゃ、リリは装備していると思えば大概の物は持ってるわけだ」

「よく考えたことはなかったですけど、そうなのかもしれません」

「これは勿論のことだと思っけど、重装備をしても支障はないんじゃないや」

ないかな。それこそ全身鎧を付けても普段通り動けたり。他には武器として重さを必要とする戦闘槌ウォーハンマーでも軽々と扱えそうだよ。ま、本当のところはリリが実際に試してみないとわからないけど」

「それはっ!? その、少し試しても良いですかっ!」

「う、うん………はい、僕の刀」

武器を持っていると認識するのではなく装備していると考える。受け取った刀を『装備している』と意識する。つい先ほど感じていた重さより——軽くなった。

これなら力の少ない自分でも難なく振り回せる。

「すごい………」

「うん。それじゃ、僕を武器だと思って持ち上げてみて。全身に力入れて持ちやすくなるから」

「は? 何言ってるんですか?」

本当に何を言っているのか分からない。とち狂ったのかとすら思う。ベルは続けた。

「自分を騙すんだ。人間は何でも武器にできる。手に持つ、という動作を装備したという認識に置き換える。そうすればそのバックパツクや武器や防具といった身に着けるもの以外のモノでもスキルの補助が働くはずだ」

半信半疑のまま、ピンと背筋を伸ばすベルの腕を掴む。持ち上げようとしてもびくともしない。しかし、言われた通り思い込む。——今握っているのは武器だ。ベル・クラネルという鈍器。それを自分は今『装備』している。

ベルが浮いた。

「あ、あれ? え!?!」

人を持ち上げていると認識してしまった所為か、持ち上げていたベルが急に重くなり持っていられなくなる。だがしかし、一瞬だったが確かに持ち上げていた。

「凄いよリリ! まさか僕も出来るとは思わなかったけど!」

「え、ええ。リリも信じられません………」

冒険者ではなくサポーターとしてやっていくことを決めるしかな

かったスキルに、こんなことが出来たとは。色々と後悔が浮かぶが、自分の可能性が広がったと思うと心が熱を帯びる。

「じゃ、明日もダンジョンに潜るけど、その前にリリの武器とか防具とか揃えよう。雇っておいておかしな話だけど、明日のサポーターはお休みしてもらって……。ちよつとりりが何処まで出来るのか僕が気になるんだ」

明日も同じ時間にバベル前と言って走り去るベルの後姿を見送る。

「……………」

自分にのしかかっていた【アーテル・アシスト縁下力持】では軽くできない重みを少し軽くできた気がした。

ベル・クラネルは許したい

オラリオに来て三日目の朝。

「はー疲れたー」

まだ習慣になつてない、オラリオでのトレーニングも終わり、人目がないのをいいことに上着を脱いで石畳の路上に横になる。体に溜まった熱が冷やされて心地よい。流れ出た汗が、顔の横で石畳の溝に沿って小さな川を作っている。

傷ついた筋線維が修復されていき、自分がまた一つ最強の自分へと近づいたのを感じた。しかし、同時に最強の自分は遠ざかっていく。このままでは終わらない。まだゆける。自分の——ベル・クラネルの至るべき場所は此処ではないのだから。

「よし、それじゃ——」

「ベル様!? なんて格好してらっしやるんですか!!」

聞き覚えのある声がしたと思うと視界が遮られる。退かそうと剥ぐと視界を遮った物の正体は毛布だった。

「ちよ、え、リリ!? なんでここに!」

赤い顔を隠そうと手で顔を覆っているが、指の間からくりりとした目がこちらを除いている。たまらず、受け取った毛布でもう一度体を隠した。

匙を持った手をリリは机に叩きつける。

「もう! 有り得ません!! 公衆の面前で、あんな、破廉恥な!!」

何事かと、新聞を読んでいた主人がこちらを覗くがそれだけだ。

「そうはいつでも、リリだけだったじゃない」

「それはそうですが!!」

「……………しつかり見てたし」

「うっ……………!」

「えっちななあ、リリー」

「ううっ……………!!」

リリに否定することは出来ない。じつくりと見られたのは事実。

心当たりがあるのか、リリは赤面して黙りこんでしまう。

可愛いのだが泣かして、嫌われてしまったら元も子もないのでこれ以上はやめておく。

「ごめんごめん。気を利かせて来てくれたんだよね。僕も帰ってから気が付いたけど、一々待ってもらって、迎えに行行って戻ってとなると二度手間だったよ」

「い、いえ……………本来はあの広場で待ち合わせするという約束でしたので。その……………見てしまっでごめんなさい」

「こちらこそ、見苦しいものを見せてごめんね」

「いえ、別に……………」

少し気まずい空気の中、この主人は帳簿をつけ始めたのか、羽ペンが文字を綴る音が響く。それがさつさと喰え、といわれているようだった。

「冷めないうちに食べよっか」

「……………はい」

昨日と同じメニューだったが、相変わらず美味しかった。

そしてリリと訪れた【ゴブニュ・ファミリア】。【ヘファイストス・ファミリア】と比べると、マイナーではあるが、知る人ぞ知る、という一つ一つの品の質は負けず劣らない一品物だ。受注制ではあるが、幾つか店頭販売用も置いていた。運がいいことにその中から望みに適う鎧と戦闘槌を見つけることが出来る。

「ちよつと、ベル様！・ベル様!?! 何買おうとしてらっしやるんですか!?!」

「いいから、いいから。僕からのプレゼントだから気にしないで」

「いや、でも値段が！・桁が!」

コンセプトとしては厚く、重い鎧。所謂盾役が着けるような重鎧だ。第一級冒険者も御用達の店とだけあって、使う人間があまり動かないとしても、鎧の可動域は動きを邪魔しないよう作られている。

戦闘槌も重量で敵を押しつぶすもので、リリの目指すスタイルにぴったりのものだった。

これらを即金で90万ヴァリス。素寒貧になってしまったが後悔はしていない。

元々が成人男性のヒューマンを基準に作られているので、どうしても使えない部分は仕立て直してくれるらしい。

「お連れ様でよろしかつたですか？」

「はい、構いません。【ステイタス】のお蔭でちゃんと装備できるので」「わかりました。では、サイズを合わせますからお客様、どうぞこちらへ」

「ちよつと、待つ！ ベル様あ——!?」

手を振って、見習いと思われる小人の店員に連行されるリリを見送る。異世界の知識にあった、子牛が出荷される歌を心の中で歌った。

結局すぐにも使える部分は無く、武器だけの受け取りとなった。昼頃に訪ねればできているそうなので、リリを連れてオラリオの市壁の上にあがる。朝の一件から誰かに見られないような場所となると此処だろうか。と思いついた場所だ。

荷物を隅に下ろして、リリに戦闘槌を持たせる。持ち難そうではあるが、重さ自体は感じていないようである。

「それじゃ、ちよつと素振りをしてみて」

「はい」

一番の気掛かりは遠心力や慣性にも適用されるのかという事だったが、重いと感じる事がスキルの発動のトリガーのようだ。遠心力も言ってしまうえば装備に掛かる過重である。そこへ装備しているか否かで効果が適用されるか否かが変わってくるのだろう。

重さを一切感じないかのようにリリは身の丈以上の重さのあるウオーハンマーを振り回している。

「どう?」

「……………不思議な気分です。まるでリリの身体じゃないようです」

「そう。……………それじゃ」

振り回している最中の戦闘槌を掴む。流石ともいふべき重量に速度が合わさり、中々の衝撃だったが鍛えている身としては、そう大し

たものではなかった。

「え？」

「実践した方が早いと思って。捕まえられたらこうなる」

「ぬ、抜けない!？」

引っぱつても押ししても動かないその戦闘槌に困惑する。

「わかったかな？ リリ自身の力はまだ弱いからね。これを防ぐためには捉えられないような素早い一撃。そのあとすぐに後退すればいいと思うよ」

「なるほど。理解しました」

「うんうん。それじゃ、もうちよつと訓練しよつか？」

「はい。……ですが、ベル様。どうしてリリにここまで親切にしてくれるのですか？」

勢いよく落とささないように、ウォーハンマーをおろしてリリが訊ねてくる。

「んーサポーターって、何らかの理由で冒険者が出来なかった人がなるんだよね？」

「ええ、はい。一般的にはそうですね」

「それはリリも一緒？」

「……まあ、そうです。リリには冒険者としての才能は無かったです」

才能の有る無しであれば、あるんじゃないかと思うが今は棚に上げておく。

「じゃ、冒険者ができるのなら冒険者をやってもいいんじゃないの？」

「……と、僕は思ったわけ。リリはスキルがたいして使えないと言ってたけど、僕から見て、そんなことはないよって教えたかったんだ」

「……そんなことで」

「納得できない？」

黙りこくってしまったって、どうしたものかと頭を悩ます。下心があるのは間違いない。でも、助きたい。力になりたいというのは純粋な気持ちからだ。心の底からリリの事を助けたいと思ったからだ。

「どうしてなんですか」

「うん？」

もう我慢がならなかった。

「ベル様は、どうして——どうしてそうなのですかっ!! このハンマーだって決して安くはないです!! それを何でもないかのように私に買ってしまつてツ!! ええ、ええ! ベル様は確かにお金持ちでしょうから、そんなこと出来るんでしょうね! ——お金が必要なりりの事をあざ笑つてツ!!」

「いち、にー………3万ヴアリスと少しかな」

「何がですかッ!？」

「僕の残りの全財産」

「——え!? あ、う………」

「あ、でもちよつと違うかな。冒険者は体も装備も資本だし。でも、本当に3万ヴアリスぐらいしか持つてないよ」

「ど、どうかしてるんじゃないですか! リリなんかの為に、全財産使うような真似してっ!!」

嘘をついている、とは思えなかった。嘘をつくことを知らないように見えたのが、自身の気のせいではなければ怪しくもベルは誠実な人だ。今までの行動がそれを示してきている。約束事にはきっちりとしている人だ。

一つ約束を守っていないと言えば、ダンジョンで18階層についての話がある、ということぐらいだが、あれは18階層にたどり着いていないので無効だろう。

倒してから気がつくという何とも間抜けな出来事だったが、ソロで討伐したことはどうしても目立つからと、18階層へ着く前に引き返したのだった。

本当に、そのことを除けば心配になるほどの誠実で、お人好しだ。

しかしお人好しではあるが、自身と同じくお金にはがめついところがある。だからこそ、なんでそんな大きな買い物、人の為に出来るのか分からない。

それこそ、コソ泥のような生活をしてきた自分の為——リリルカ・アーデの為だなんて到底信じられない。

「リリなんか、じゃない。リリの為だからしたんだ」

「——え」

「……………そんなことはない、ありえないという自分の思いに反して、膝を折り、目線を合わせて——少し照れくさそうにしながら目を逸らすことなくベルは言った。

嗚呼、もう本当にお人好し。ベルはそういう人だということをついさつき再確認していたじゃないか。

——不意をつかれた理由はわかっている。

こんな卑しい自分の為に、何かをしてくれるだなんて、自分が思いたくなかったのだ。ベルにも何か企みがあるんじゃないかと思いたかったのだ。でも違う。本当にベルは自分のためしてくれたのだ。無償の思いでやってくれたのだ。

「ううう！ ……………ばかあ！ ベル様のあほ！ ……なんで、そんなつ……………」

「あ、ははは。そう思うよねえ……………」

本当に今、後悔しかない。疑ってばかりいた自分が情けない。

……………ダンジョンの報酬をちよろまかしていた過去の自分が恨めしい。

こんなにいい人からどうして、横からくすねるような真似をしたのか。半分抜き取ったうえで換金の報告をして、ベルに残った額の半分まで貰っていた。結局ベルが手にした報酬は本来の額の4分の1しかない。それでも30万を超える額を手にしたのには驚いた。……………だがそれ以上に昨日、自分が手にした額は100万を超えている。1万ヴアリス硬貨なんてダンジョンの報酬で初めて見た。

「ごめんなさいっベルさまっ!! リリは、リリは……………」

「え、うわっ！ リリ!? ……なんで泣いてるの!?!」

追及されないからと甘えてしまっっては、本当に墮ちるところまで墮ちてしまう。己の罪は告白しなければいけない。

許してくれるのだろうか。それともベルでも怒りを顕わにするの

か。そんなことが怖くて怖くて仕方がない自分がいる。でも。それでも。

「ひっぐ、べるぎま。じつは——」

罪を打ち明け。そして許され。どうしてそんなに優しいのかと文句を言って。泣いて謝って。

そして泣き止むまで慰められた。

— — — — —

「……………うううー」

急に泣きだして、泣き止んだと思っただらこちらをにらみつけてきたリリ。気軽に女の子にする事ではなかった、という自覚はあるが、どうすれば良かったのだと心の中で頭を抱える。

気が付いたらお昼を告げる鐘の音がオラリオの何処かから響いていたということもあり、「ゴブニユ・ファミリア」へ鎧を取りに行くこととなったのだが、先ほどからリリはこの調子である。

「ねえ、どうしてそんなに睨んでるのかなあ……………?」

「ベルさまのすけこまし。お人好し。……………女の敵!」

「ええ、……………えええー」

まるでハーレムを築く英雄が女の子に言われる台詞じゃないか、とショックを受ける。確かにそれらしいやり取りではあったが、あれだけでそんな風に言われるのは良い意味でも悪い意味でもショックだった。

ハーレムとは霸道である、というのは誰の言葉だっただろうか。

……………嗚呼、祖父だった。

「……………いっ (ぷいっ)」

今度は目を合わせてくれなくなってしまったと天を仰ぐ。

お祖父ちゃんヘルプミー、と祖父の旅立った空へと心の中で慟哭した。

「有難う御座いました。またのご利用お待ちしております」

受け取った鎧と戦闘槌を、落ち着いた様子のリリのバックパックに括り付け、実戦のため北のメインストリートに出て、バベルへと足を運ぶ。戦闘槌だけでも重量はリリの20倍はある筈だが、それを軽々と持ち運べていることに未恐ろしさを感じる。やはり見立て通りアーテル・アシスト【縁下力持】の補正は計り知れない。

「ちよつと復習だけど、リリの目指す戦闘スタイルは一撃入れて、捉えられないように後退、もしくは次の攻撃へ繋げること」

「……………はい」

「でも、攻撃を入れ続けるのは戦闘経験の浅いリリには難しいだろうから、今日は当てたらさがる、が出来るようになるうか」

相槌を打つりり。戦っている自分の姿でも想像しているのだろうか。神妙な顔つきで考え込んでいる。そんなリリを連れて、ジャガ丸くんとツインテールの可愛い売り子が恋しくなつて初日に訪れた屋台に赴いた。

「ジャガ丸くん4つ、塩味で」

「はい。あ、揚がるまでちよつと待っていてくれるかい? ……」

お、君は確か一昨日来た子だね。初めて見る顔だったから記憶に残つてたよ」

「僕も売り子さんが可愛かったので此処にきました」

「もー! 嬉しい事言ってくれるじゃないかっ! でも、神様をそんな風に口説いては駄目だぜ?」

斜め後ろで神妙な顔をしていたりりからジトつとした視線を浴びる。

「ははは、気を付けます。彼女が怒りそうですから」

「な!? 付き合っていないです!! う、ベル様が何しようとりりには関係ありません!!」

「うむうむ。仲が良くて良いね。……………はい、揚がったよ。ジャガ丸くん塩味4つ。熱いから気を付けてね!」

120ヴァリスを払って紙袋を受け取る。背中にぽこすかと痛みも感じない抗議してくるが、ただ可愛らしいだけなのであの神様には

仲が良いだけに見えただろう。

先の件を掘り返すわけではなかったのだが、リリの分を渡すと大人しくなったので良しとする。きっとまたお金を使わせてしまった、とか考えているだろうリリを連れて、少し遅めの昼食にジャガ丸くんを食^はみながら今度こそバベルへと向かった。

バグ・クラネルは理解したい

「そう拗ねないでよ。冗談が過ぎたって。ごめん」

霧深いダンジョン10階層を進む、視界が取れずヘルムを外したりりに続いていく。今はリリが前に立ち、バックパックを自分が背負っていた。すっかりサポーターと冒険者の立ち位置が入れ替わっているが、リリの戦闘は中々どうして様になっていて見ごたえがあった。元々種族的にも足の速いリリが重量を伴って武器を振るう様はさながら台風である。

自分にできなかつたことが出来るようになって少し気分が高揚しているようだが、ジャガ丸くんの一件からリリからの当たりは強い。「ベル様のことなんて知りません！ あんな風にリリを苛めて楽しいですか！ もうちよつと自分のお金を大切にしてください！ リリなんかに使わずに!!」

「ごめんごめん。ほら、許して。ね？ 怒るとお腹が減るよ？」

「もー！ ベル様と一緒にしないでください！」
「えー！」

所持金が心許ないといつても奢れないわけではないのだから、別にいいじゃないかと思ってしまうのは悪くない。と、そんなことを言ってしまうばまたもや、天然ジゴロだとか言われてしまいそうなので言わないでおく。

——リリ自身は戦闘の才能がないと嘆いていたが、そんなことはない。モンスターを鎧袖一触で中の魔石ごと粉碎している。一式そろえるための金額もあつて、重装備をするという発想が無かつたのだろう。出会う前のリリの生活を聞く限り、手に入れることが困難だったはずだ。守銭奴な性格も災いしているのだろう。

自分からの収入で今は懐が温まっているだろうが、そのお金も「ファミリア」退団の資金に加えるそうだ。どれだけあればいいのかわからない、もっと必要なはずと言っていたのが印象に残っている。

危険だと思った。このままだとリリは搾取されるだけ搾取されてしまうだろう。——助けたいと思うのは、駄目なことだろうか。

緩慢なオークが鋭く振るわれた巨槌に吹き飛ばされるのを見た。薄暗くてよくはわからないが、リリの耳が少し赤くなっているように見える。

「もう、良いですっ！ 天然ジゴロのベル様なんて知りませんっ！ そうやって魔石拾いしてればいいんです！」

「天然ジゴロって、そりやないよ……。それに本来ならサポーターはリリだし」

「…………ベル様が今日は代わると言ったからですよ」

「うん。…………そうだね」

異世界にある物語の英雄たちが幾らそうでも、そういうところは見習いたくはないところだ。羨ましいなあと思うが、自分は一人一人と真摯に向き合いたいのだ。率先して真似をしようとは思えない。だから少し複雑だった。

リリに変わってサポーター役に徹している。魔石を拾うだけなのだが、ひどく参った。意外と大変なのだ、とサポーターの役割の重要性を再確認する。

「…………分かってたつもりだけど、サポーターって惨めな気持ちになっってくるんだね」

「っ！」

「リリは凄いな…………こんな大変な仕事、僕には続けられそうにないよ」

インプがリリに殴られてバラバラになる。モンスターの血が付着したハンマーを持つリリの姿は猟奇的ですらあったが、この薄暗い中でもわかる程度に赤い顔を見れば、自分の迂闊さに気が付いた。

「…………その、ありがとうございます」

「うぐっ…………」

また怒られると思ったがそんなことはなかった。効果は抜群だった。

11階層までならリリに案内はいらないはずだが、時折リリは立ち止まる。

嬉々として振るっていた槌を降ろして俯く。

「リリ？」

「……………なんでもありません。行きますよー！」

何か思うところがあるというのを見て取れた。

控えめな彼女は何処に行つたのだろうか、少し寂しくもあつた。

— — — — —

本日の稼ぎ、約7万とんで600ヴァリス。12階層までだったが、昨日、ベルが稼いだ額と比べれば天と地の差だ。

「では、ベル様。約束通りの半分です。……………本当に、本当にリリはお返ししないでいいんでしょうか」

上級冒険者と自身の差でもある。本当に罪深いことをしてしまったのだと実感してしまう。

「いいよいいよ。リリが盗つたつていうお金はリリが持つてて。というかあげたんだし。お金を使うことはあんまり無いから、僕のことには気にしないでいいよ」

「ですがっ！ リリはー！」

「もう、しつこいなあ」

しかし、この人はそんな意も解さない。なんなのだ、と問うても恥ずかしくなるような事しか言わない。許しはしてくれた。しかし、むくむくと成長してきた良心が自分自身を赦さないのだ。

—— どうすればリリはリリを赦せるのでしょうか。

「なんでも、なんでもします！ リリにできる事で償いが——」

「ストップ。それ以上はダメだよ？ ……………僕が、もしリリのことを欲しいって言つたらくれるの？」

「つぐ……………！ そ、それは……………」

「無理でしょう？ 僕が許すつて言つたんだから。それに、リリはもうしないつて言つたじゃないか」

「……………そうなのですが、でもっ！」

「でもはなし。僕の自己満足かもしれないけど、ちよつとでもリリの

事を助けたいんだ。お願い」

「…………ベル様」

そんな言い方をされてしまったては、何も言えないではないか。本当にずるい。

自分自身の力で稼いで手に入れたお金。でも、それはベルの支援があつてのことだ。

昨日、すでに宝石に換えてしまい貸金庫へ入れたお金よりも遥かに少ない。

だが、今日稼いだこのお金は昨日の大金の重みよりもずっと重い。それは金額が半分以下になつてもだ。

なんでだろう、と手に握りしめた袋を見ていたら視界が霞んできた。

「あの、リリ?」

「ううっ……………! ベル様なんて知りません!!」

「ええ!? 今日の夕食は——!?」

「お一人で! 今日リリは用事がありますので!!」

堪らなくなつて顔を背けて逃げ出してしまう。「明日は朝ごはん一緒に食べよーねー」と大声で恥ずかしげもなく自分の背中に告げたベルを横目で見て、下宿先に戻つた。

手に握つたままだった3万5300ヴァリスが入つた袋を備え付けの小棚の上に置く。今日プレゼントされたハンマーと鎧が括り付けてあるバツクパツクを床におろすと、床板が嫌な音を立てた。

また泣き出しそうになつていたのでを誤魔化すためとはいえ、用事があると言つて夕食の誘いを断つたのは良くなかつたかもしれない。きゆうーと情けない腹の虫が鳴る。

「はあ……………」

なんて人に出会つてしまったのだろうか。今まで会つてきたどんな人よりもお人好しで、優しい人だ。あの老夫婦の一件から、誰にも頼らず甘えずに生きていこうと決めたはずなのに、つい心が絆されてしまう。

——頼つてもいいですか、と。甘えてもいいですか、と。
そんなことをつい考えてしまう。

自分は既に天涯孤独の身だ。顔も忘れてしまった両親は幼い自分を残して死に、自分に血の繋がった人は居ない。だから、兄という言葉には無縁だが、……もし居たらあんな感じなのだろうか。

随分と恥ずかしいことを考えていることに気が付いて、羞恥心を誤魔化すためベッドに前のめりに倒れる。埃が舞って少し咳き込んだ。

「はあ………リリは」

今日、自分は嫌っていた筈の冒険者になっていた。今では冒険者にも色々いるのだと認識している。ことごとく理不尽に遭っていたのは巡り合わせが悪かっただけなのだと、あのお人好しに教えてもらった。——しかし、自分はサポーターとして雇われたのだ。依頼主の要望に応えるという理由だけで、役割を交換したのはおかしいことだった。

やはり今日の自分はおかしい。あんな二日ほど一緒に居た程度でしかない人の前で泣き出すなんて今までなかった。

罪の意識を感じて、弱音を吐いて。言われるがまま、自分の可能性に気が付いた。………きつと自分がおかしいのは、全てベルが優しすぎるからだと言いつつ諷する。

だが、楽しくなかったわけではない。むしろダンジョンに潜つてきて一番楽しかった。心が、体が。冒険を。未知を求めていた。お金に変わる魔石を持った、モンスターを倒さんと欲していた。

寝返りをうって天井を仰ぐ。

「冒険者は嫌いです。………でも、」

——ベルの事は嫌いじゃない。嫌いなのは卑しい奴らだけだ。………そして、それには自分も含まれている。

『冒険者なんてっ大ッ嫌いです!! あんな奴らに寄生しなきゃ生きていけない、リリはツもつと嫌いですっ!』

そうやって彼の腕の中で泣いて。ベルは抱きしめてくれた。

『大丈夫。大丈夫』

そういつて頭を撫でてくれた。

今思えばあんな恥ずかしことがなんで出来たのかわからないが、やはり彼が優しかったからだろう。人目が無かったことも一因のはずだ。

つい、天然ジゴロと罵ってしまったのが悔やまれる。

——ベル様はただ優しいだけなのに。

今日一日だけでもそれは顕著だ。……少しだけ、本当にそうなんじゃないかなと、ジャガ丸くんの屋台での一件を思い出したが世辞だろう。全員が全員整った顔立ちをしている神々に麗句を送ったとしても、神々にとっては当然の事でしかない。

初めて受けた他者からの善意は本当に心地よいと、今日一日を振り返って、朝方に見た鍛え上げられた身体を思い出してしまう。

「——凄かったです」

思わず指の間からガン見したほどだ。ベルは着痩せするのだろうか。言ったら触らせてもらえないだろうか、と思いついてしまって、はしたない自分に悶えた。

それは兄に抱くべき思いとは別ものだ。リリは初めての感情に戸惑い、悶々とする。だがその間にも夜の帳は下りていき、何時しか訪れた眠気に彼女は身を任せた。

ベル・クラネルは背伸びしたい

オラリオに来て四日目の早朝。市壁の上に場所を移して鍛錬を終えた後、宿の入り口にてリリを待つ。しかし気分はあまりよくない。昨日、リリとの別れ際に子どものように大声で朝食に誘った（流石に後で恥ずかしくなった）のだが、リリの返事がなかったので不安なのだ。

それ以前にお節介が過ぎたかもしれない。迷惑だったかもしれないと、昨日自分のやったことを考えて少し不安だった。

——でも、杞憂に終わりそうで良かった。

視界の遠くにクリーム色のフードを被った小さい姿が見える。一つ胸を撫で下ろし、中で彼女を待つことにした。

昨日と同じく、リリは宿まで赴いてきて中に入ってきた。鎧と戦闘槌は持っていない。来て早々、リリはフードを外して頭を下げる。

「昨日はすみませんでした。リリの用事で夕食が一緒に出来ず……。それと、調子に乗って随分と酷いことを言ってしまうました。それも合わせて」

「ずい、とバックパックの中から取り出した袋を座っていた机に置いた。」

「これは？」

「ノームの宝石です。丁度、ベル様から盗んでしまった額と同じくらいあります。リリからのお礼と謝罪です」

「あの、リリ。……あのお金は、僕はあげるって言ったよね」

「言いました。ですから、リリも無駄遣いしてしまったベル様に差し上げます」

「なんだか、その言い方だとダメ男みたいなんだけど……」

これは一本取られたと思った。同じように総額90万ヴアリスのプレゼントをしたのは何処の誰だったか。しかし、押し返せない。リリから不動の思いを感じてしまった。これは受け取らざるを得ないと、渋々受け取ってリリを椅子に座らせる。

「ごめんなさい。リリはベル様にまた酷いことを言いましたか？」

「いや、それはいいんだけどね。……でも、本当に良いの？ お金、要るんでしょ？」

「それはそうなんです。……リリの気が収まらないというか。ベル様に与えられてばかりで、情けなくなっていくというか。なんというか、その。サポーター、みたいで……」

「あー、そうかー」

なんとなくリリの言わんとすることを理解する。昨日実際にサポーターをしてみても分かったことだが、幾ら冒険者である自分にその意識がないと言っても、サポーターをやっている者は惨めな気持ちになる。

もしかすると他の所では昨日や一昨日のように取り分をサポーターと冒険者で半々に山分け、ということはないのかもしれない。ソロでやっている人は少ないだろうから、もつと取り分を決める際は難しいのだろう。サポーターは楽をしている、と見られてもおかしくない。リリはそのサポーターの負の面を自分自身に重ねたのだ。

しかし、リリからこうして貰ったことで一つ思いついた。じつとリリを見る。

「あの、リリの顔に何かついてますか？」

「いや、別に？」

「??？」

なに、リリを助ける口実を思いついたただけだ。

変なベル様、とリリが笑う。少しだけその屈託のない笑顔に、自分は間違ってたなかつたと実感した。

今日の朝食はコーンポタージュスープだ。コーンがトロリとしたスープはコクがあり、美味しいの一言。主食にあたるパンもガーリックバターで味付けされているため、スープと合わせて食べるとお腹にガツンとくる。腹持ちも良さそうだ。

昨日の振る舞いに少し卑屈になっている様子だったのでフォローする。

「いや、昨日のリリはすごかったよ。思わず見惚れちゃった」

「もう、そんな風にもリリを揶揄しないでください！」

「ホントホント。なんていうか、こう、攻撃の嵐みたいな感じで！」

世辞ではなく、正直な気持ちである。しかし、当人には伝わっていないのが残念で仕方ない。

小柄な彼女が己の体重以上もある巨槌を果敢に操る様は見惚れた。まるで異世界の知識に見た『ゲームのキャラクター』のようで格好いいと思ったのだ。

世辞のように受け取られているが、本人も満更ではなさそうで、髪の毛から覗いている耳の先が赤くなっている。

「…………でも、そうだとしたら全部ベル様のお蔭です。本当に、ありがとうございます」

「う、うん……………」

そんなことはないと言いたかったが、言えなかった。リリが嬉しそうに微笑む。リリが年上だと一方的に知っているからだろうか。少しだけ大人っぽい仕草に目が行ってしまい、ドギマギとしてしまう。

「さ、冷めちゃわないうちに食べよっか！ ね！」

「え、ええ……………。なんだか、今日のベル様は一段と変ですよ？」

「……………気にしないで」

少しだけ驚かせてしまったが、その原因を作った本人はきつと無自覚だ。年下の身としては困ったものである。

調子を取り戻して、談笑しつつ手を口を動かしていく。

少しだけ残したパンで、残ったスープを拭い、皿の内側には一滴も残さない。少しだけ粗野な感じだが、リリも同じようで、綺麗に食べられている。それだけ美味しかった。

「じゃ、今日も一日よろしくね」

「はい、ベル様！」

初日とは幾分か違う声色に、思い付きを実行するための気合が入った。

ダンジョン17階層。

「じゃ、今日はこの辺にしようか」

「え、でも、これだけしか……」

バックパックの中身を見せる。まったくと言って良いほど、今日は魔石やドロップアイテムを集めていない。自分が稼いだくらいしかないのだ。この人であればもっと稼げるはずなのに。

ベルは来た道に戻る。少し不思議に思いながらも、そのあとをついていった。

案の定だ。合計7万5200ヴァリス。魔物を倒す速さは自分と比べてもおそろしく速かったが、稼ぐ額自体に変わらない。

「それじゃ、リリ。また明日」

「え、あの。ベル様、夕食は？」

「あ、一人で食べて。ちよつと用事があるんだ」

「……………そう、ですか」

寂しいとつい思ってしまったのは、ぬるま湯に浸かってしまった証拠だ。ダメだダメだ。慣れてしまつては駄目なのだと自分を戒める。あと三日もすれば別れてしまう人なのだから。

「……………もしかして一人で食べるのが寂しかったりする？」

「そんなことは、……………ありません」

「ホントごめん！ どうしても今日は駄目なんだよ……………。リリが悲しいのはわかるけど」

「リリは悲しくなんてありませんっ!! ベル様のほか！」

「あははは。冗談だよ、冗談。でも、ホントにごめん。今日は一緒にできないうや。必ず埋め合わせするから」

「は、はい……………」

——真剣な表情にドキツとしたのは、気のせいです。ええ、気のせい。

背中を向けてベルは離れていく。つい追いかけたくなつてしまつて、手が伸びた。まるで子どものようだ、と情けなくなる。

「ああ、リリ。もし、もしだけど。【ファミリア】から抜けれたらどうしたい？」

「え、あの、それはどういった意図で？」

急に振り向かれ、伸ばしていた手を慌てて膝におく。はぐらかすには少し失敗したかもしれない。

「いや、どうしたいのかわかって。もしなかったら、考えておくといいよ？ 一生懸命だった時ほど、人は燃え尽き症候群つてのになりやすいらしいから」

「は、はあ……………」

なんだかよくわからないことを言っただけで、ベルはこの場から去って行った。

一人寂しく食事をした翌日。ベルの宿まで向かう。

「え……………ベル様帰って来られてないんですか？」

自分の顔を覚えていたらしい宿の主人曰く、ベルは昨日から帰ってきていないらしい。それで今日は朝食を作っていないそうだ。ダンジョンで死んだのか、と不謹慎なことを聞かれたが「まず有り得ない事です」と否定して、宿を後にした。

あの人が約束を反故にすることは無いはずだ。そう思っただけでベルと訪れた場所をそれとなく訪ねてまわる。

バベル前、ギルド前、市壁の上に行ってみて、女神が売り子をしていたジャガ丸くんの屋台にも遠目で見て居ないことを確認する。

何処に行ったのだろうか、と立ち止まると、まるで自分が迷子のようだと気が付いた。甘ったれてしまっただけで、本当に子どものようだ。ベルに10歳くらいのお子様だと言われても否定できない。

「はあ……………ダメダメですね。リリは」

「何が駄目なの、リリ？」

「わっ!? え、ベル様!?! なんで!?!」

耳触りの良い優しい声だ。ベルの声だ。自分を甘やかして……………だめだ。これはいけない。

ベルはいつもの格好で、手にはジャガ丸くんの匂いがする袋を持つ

ていた。ベルのことだ。あの屋台で買ったのだろう。丁度すれ違いになつていたのかもしれない。

「リリの姿が見えたから。あれ、リリも何か用事があった？ 帰ったら宿に居なくて心配したよ？」

「い、いえ……。ベル様があの宿に居なかつたので……」

「あ、もしかして探してくれてたの？」

「……はい」

恥ずかしくて、被っていたフードを深く被る。目元しか隠せず、赤くなつた顔は見られているだろう。

「……そつか。ごめんね、何も言わなくて。実は僕もリリを探してたんだ。昨日の野暮用で帰るのが今日になつちやつて。帰つてみたらリリが居なかつたから。でも、ほら。ちゃんと帰つてきたから。安心していいよ」

「べ、別にリリはベル様のことなんか心配してないです……」

流石に嘘を吐くのが下手過ぎた。ベルにもわかるような嘘の吐き方をしてしまった。

「それはちよつと悲しいかなあ……。僕は心配したんだけど。リリは心配してくれないの？」

「……もう」

頭を撫でられてしまい、何も言えなくなつてしまった。そうやって自分を甘やかして笑うベルが憎い。数日で別れてしまうと知っているから、余計に。

——この感情に名前を付けるなら、なんになるんだろう。

ベルに「はい、朝食と昼食」と言つて手渡された袋からジャガ丸くんを一つ取り出して、残りをリリはバックバックに仕舞つた。ダンジョンに行くため歩き出したベルにリリは疑問を抱えてついて行く。早鐘を打つリリの心臓は、リリが知らないときめきにも似た感情を如実に表していた。

少しだけ、忌まわしいあの酒の匂いがした。

バグ・クラネルは殴りたい

オラリオに来て七日目。リリと交わした契約によれば今日でリリと行動を共にするのは最後の日だ。

野暮用で早く切り上げた三日前のあの日からこの日まで、自分だけでもおよそ210万ヴァリスは稼げることができた。丁度半分で山分けをしているので、リリも同じくらいだ。リリが居なければ此処まで稼ぐことは出来なかっただろう。【縁下力持^{アーテル・アシスト}】さまさまだ。

——七日間。リリと冒険を共にし、食事を共にした。知らない仲間とは言えない。誰にも言わせない。彼女の弱音を引き出し、彼女の問題も知った。リリを助ける決意をして、本人の知り得ぬことだがもう解決した。三日ほど前のことだ。穏便に済んで良かった、と思います。

ギルドの前で山分けをして、適当なところで食事をして。その帰り道。

酒場があつまる区画。店から魔石灯の光が漏れる人通りのない街道でリリと対面する。

「……………本当に、本当に駄目でしょうか？」

「ダメ。契約を延長して、リリを雇うつもりはないよ」

『今はまだ』という言葉がつくが、敢えて言わない。

頭を横に振って、リリは嫌だという。

「でしたら！ 契約金なんて要りませんっ。リリの報酬も無くても良いです！ ですから——」

「それは出来ない。リリ、そんな自分を安売りしちやダメだ」

「だってっ……………だってッ！」

「確かにそこまで言ってもらえて嬉しいけど、……………でも、リリにはリリの人生がある。それに、まだリリの問題は解決していないんでしょ？」

「それは……………!!」

歯を食いしばるように、リリはうつむく。……………白々しい、とはこのことだろう。少しだけ悪戯が過ぎている気がしてくるが、だからと

言って自分がリリを縛りつけたくはない。

でも、流星に自分も辛くなってきた。

「実はあるファミリアの女の子からクエスト？ を受けちゃって。そっちを優先しなくちゃいけないんだ」

「っ!? だからですかッ！ ベル様のすけこましっ……………!! やっぱり女の子なんですネッ!?」

「うぐ……………。ま、まあ、最後まで聞いてよ。もう報酬を受け取ってるんだ。報酬の前金だけでもおおよそだけど100万ヴァリスの宝石。だから断ることが出来ないんだ」

「……………。へえ、誰なんですか。そんなお金持ちの知り合いが居たとは、リリは驚きです」

言葉尻に棘があった。目尻には涙が溜まっている。……………苛めすぎたかもしれないと顔に出ないように反省する。

「15歳のパルウムの女の子だね。随分と悪いことをしてきたみたいで。……………でも、人生をやり直したいって。誰にも後ろめたいことがないよう、生きたいって泣きながら言われちゃったら聞くしかないじゃないか。——『ファミリア』を退団したい』って、涙ながらに言ってたよ」

「——え」

リリも流星に見当がついたのだろう。

「……………で、これが三日ほど前に貰った前金の報酬」

「そ、それは……………」

荷物の中からリリが持ってきたノームの宝石が入った袋を取り出す。リリが態々持ち運びやすいように換えてきたものだ。

「だってさ、ノームの宝石だっけ？ 持ち運びやすいようにこうして、わざわざ交換してきてくれたんだから。聞かないわけにはいかないよ。リリが何と言っても、僕は彼女を助けるよ」

そう自分が——ベル・クラネルが決めたのだから。

堰き止めていた涙は、我慢がしきれず流れ落ちてしまう。

「ずるいです、そんな。ベル様はどうして……………」

「どうしてって言われても。前にも言ったけどリリのこと、僕は本当に助けたいんだ」

「だからっ、それがズルいって言ってるんです!!」

——ベルのことを探した日。いや、もっと前からその感情は芽生えていた。名前の知らない感情の正体が解って、より一層この日を遠ざけたくあつた。……だというのに、この人はそんな自分を知らないかのように振舞って、弄ぶ。悪戯好きな子供のように振る舞いつつ、自分の事を考えてくれている。「助けたい」だなんて一度も言われたことが無かつたのに、この人は何度も何度も自分に投げかけてくる。

八つ当たりのように殴つても只々、受け止めてくれる。

——……嗚呼、リリはこの人だから——

「それじゃ行こう、リリ。あとは依頼主を主神に会わせて『改宗待ち』にするだけなんだ」

それでも、差し伸べられた手を取つてもいいのか躊躇する。本当に自分なんかが、この手を取つていいものだろうか。

見かねたように、手を取られた。

「……………」

「この前、言ったよね。退団出来たらどうしたいかって。もしなかったら考えておいてっ。…………全部終わったらでいいから、聞かせてね」

「……………はい。リリは」

「それは後で、ね」

本当に、ずるい。

☐—☐—☐—☐

手を繋いで恥ずかしがるリリを連れてやってきたのは「ソーマ・ファミリア」の本拠^{ホーム}だ。

「え、ええ!?! 正面から行くんですか!?!」

「大丈夫。話は通してるから。お邪魔します」

返事がない、ということが良いと言う事だろう。この時間に訪れることは伝えているので居るに違いない。

「あの、ベル様！ どうしてこの場所を！」

「ん？ まあ、三日前に来てるし。聞き込みしたら親切に教えてくれた人が居たのは助かったよ」

「そうではなく！ そうではなくっ!! ちょっとベル様、待ってえ！」
ちなみにモルドさんではない。酒造をしているらしい、というのは街の人からも聞いたので、卸していそうな酒場を訪ねてまわったのだ。一発目に訪ねた豊饒の女主人で教えてもらえたのは僥倖だった。一番高い料理を頼まされはしたが。

そうこうしていると、この「ファミリア」の主神であるソーマの部屋の前まで来れた。

「ソーマさん、来ましたよー」

「あの、ベル様、ソーマ様は酒造りにしか……………」

『……………？ ベルか。入って来ても良いぞ』

「……………うそお」

リリが唾然とした声を出しているが、理由が不明である。確かに酒造りに狂っていると初対面の時に思ったが、あれは造る以上に無類の酒好きだ。

中へ入ると長い髪を後ろに纏め、顔を出したソーマがひとり一柱、『神酒』を大きな盃に注いで飲んでいいる。表情が変わっていないようだが、ほろ酔い気分なのが伺えた。依頼主の横のパールウムの女の子はさらに困惑している。

「いらっしやい。ほら、まずは駆けつけ一杯」

「したいところですが、酔っぱらう前をお願いします。——リリルカの『改宗』を」

「だが断るー！」

この野郎、と思わざるをえない。話は既に通したはずなのに、どうしてそうふざけるのか。殴ってやろうか、と柄にもなく思った。

「……………じゃあ一杯だけ」

受け取った盃を呷って、中身を飲み干す。先ほどからソーマと自分

に視線を行ったり来たりさせてたりリリの瞳が大きく見開かれる。

「よし、許す。……………というか、私にはこんな眷族子が居たのか？」

「ご馳走様です。ええ、居ました。居たんです。……………勝手に失望して、見限って、放り出した貴方の眷族の中に。……………先に出ますので、リリの『改宗』はしつかりお願いしますよ」

「ああ、わかった。また一緒に飲もう、ベル」

「ええ、機会があれば。また何処かで」

啞然としたままのリリの手を離して背中を押す。ソーマが頷いたのを見て、部屋を出た。

忌々しい『神酒』の芳醇な匂いが漂う中、自分はベルにソーマと二人きりにされた。

「……………リリルカ、来なさい」

「……………はい」

誰か事情を説明してくれ、と心の中で懇願する。

何故、ベルがソーマと仲良くなっているのか。そもそも、何故ソーマが人と関りを持ち、会話が出来ているのか。ベルが『神酒』を飲んでも平気なのは、わからないでもない。あの人は上級冒険者なのだから、当然と言えば当然だ。

「不思議そうな顔をしているな」

「はい。……………どうしてなのですか」

「だが、断るとは言えない。流石に、この程度の空気は読める。……………さて、何から話したものかな。まずは私が『神酒』を配った経緯を説明しようか」

「……………」

ソーマは盃を呷る。

「初めはそう、普通の【ファミリア】だった。私が【ステイタス】を与え、私のために頑張ってくれる団員お前たちがいた。でも私はお前たちに何もしてやれない。何もできない。確かに【ステイタス】を与えてやれはする。だが、それだけだ。私が酒造りに没頭できる時間と費用をくれることへの対価は払ってやれない。だから、私にできることで労

おう。そう思った。ただそれだけの思いで『神酒』を与えたのだ。だが、それがいけなかった……………」

独白のようにソーマは語る。それは自分との会話ではない。饒舌にしやべるその雰囲気は酒場に行けばよく見る光景を見ることが出来る。ソーマはもう一度酒を呷る。

「酒に弱い、強いは個人差がある。それは酒の神である私が一番知っていたはずだった。今なお、神も嗜む酒だ。私が胸を張っている酒だと言える代物を、大した力もない子供に与えればどうなるか。少し考えればわかっていたはずだった。だというのに、私はお前たちに幻滅し、見限った。酒を造ることで、私の所為ではないと言い訳して眷族たちと向き合う事を止めた」

「……………後悔なきさつてるのですか？」

神に後悔しているか、などと問うのは無粋なことだろう。それは自分でもわかっていて。だが、ソーマの独白を聞き、黙ってはいられない。自身の両親が死に、自分が一人で生きてこなければならなかったのは、この神物しんぶつが原因なのだ。

「ああ、しているとも。全知零能の身に落ち、神の権能によって造る酒を人の身で再現できた。そのことに慢心した。私は神の酒を作れはするが、その能力は人と変わりない。未だ全知全能であると慢心した。全知零能であることを忘れ、人の身に近づきすぎた。酒造りしか能のない神に、人と交流する能力は皆無だった。人に近づいたが故に、人を知ろうとはしなかった。……………本当にお前たちには申し訳ないことをした」

ソーマは『神酒』を飲んでいると自分には思えないほど、正気を保った声で言う。しかし、どこか自分を見ていないようでもあった。

「……………こうして、お前と話せているように見えるが、私には判断がつかないのだ。私は誰に話しているのだろうか。誰に向かっているのか。……………いや、確かにお前はリルルカ・アーデなのだろう。だが、それ以上に私には嘗て私の元に居たお前たち眷族にも見えるのだ。本当に苦勞をかけた。世話をかけた。……………迷惑を、かけてしまった。私の浅慮で、命を落としたお前達眷族も居る。許せと言っても届かないだろ

う。だから、リリルカ・アーデ。まずはお前に私の不徳を許してほしい。——すまなかった。……本当に、すまなかった」

それは男神が女神に対して行っているのを見ることができ、極東における土下座と言われるものだった。ソーマが頭を伏せ、自分にもかつて謝罪をしている。もっと早くその言葉が聞きたかったと思う。だが、それは許さない理由にはならない。

「正直、リリは困惑してます……どうして、早く気付いてくれなかったのか。どうして、もっとリリたち眷族に向き合ってくれなかったのか。言いたいことは一杯ありますが、今はぐっと飲みこみます。……リリは、主神さまを許したいと思います。気づいてくれたなら、これから変えてくれればいいのですから」

頭を上げてソーマが語る。

「——嗚呼、本当に二日酔いから醒めたような気分だ。それもこれもベルのお蔭か。あの男は凄いな。酒の神が覚えていなければならなかったことを、思い出させてくれたよ。飲めない酒は、水と変わらないことに」

——酒は飲んで、呑ませるな。

——酒は飲んで、呑まれるな。

——お酒はやっぱり皆で飲んで楽しくないと。

——こんなに美味しいお酒が勿体ない。

ダンジョン探索を早々に切り上げ、ベルが行方をくらましたあの日。この本拠ホームに居た団長を含む構成員を次々と気絶させ、ベルはソーマと酒宴を開いたらしい。『神酒』を一瓶開けてソーマにそんなことを言ったそうだ。

「だから、あの時——」

ベルと再会した時、気のせいだとは思ったが、少しだけ『神酒』の香りがした理由に納得がいった。

「さあ、あまりベルを待たせてはいけない。臆することなく【ステイタス】の無い、ただの人の身でありながら神に刃を向けることのできる

男だからな。……………おお、こわいこわい」

「……………あの、今何とおっしゃいました?」

「うん? おお、こわいこわい、と言ったのだが。……………ああ、酒が足りずまた不器用になっていたか。やはりダメだな、私は。こうして酒の力に頼らねば、人と満足に話すことも出来ない」

そう言つてまた呷る。違う、そうじゃない。

「あの、そうではなく。その、ベル様に「ステイタス」が無い、とかなんとか。ちよつと信じられない話なんですが……………」

まさか、そんなバカなことがある筈がない。だったらあのゴライアスを一瞬で解体したのは何だったのだ。ソーマも他の神々と同じように、酒が入るとこんな冗談を言うのかと呆れる。

「ん? 確かにそう言つたぞ。……………ああ、これは秘密だったか。まあ、いい。酒の席でベルが愚痴をこぼしていてな。三本目くらいだったかを空けた頃だ。お前に「ファミリア」に入っていないということが今更言えないとな。……………どうした?」

呆れたかった。

「早く『改宗』を、ソーマ様」

「あ、もう良いのか? 『神酒』は飲むか?」

「飲みません!! 神酒を使つて機嫌を取るのは懲りたんじやないんですかっ!!」

「ぐっ……………そうだった。すまな」

「いえ、いいですから。早くリリの『改宗』を」

「あ、ああ……………」

おお、こわいこわい。ソーマは冗談抜きにそう思った。

ベル・クラネルは笑いたい

本拠ホームの外で待っていると、中から小さな足音が近づいてくる。

「ベル様！」

「リリー！」

「わっ——！」

出てきたリリーを抱き上げてくるくるとその場で回る。良かった。あとはリリー次第だ。嗚呼、これでリリーは救われる。例え一人でも、リリーの生きたいように生きられる。自分の事のように嬉しい。

——しかし、当の本人は困惑を浮かべたまま、喜んでいる様子は見受けられない。いや、喜ぼうとしているのを抑えている、と言った方が正しいか。

抱えていたリリーを下ろす。

「ごめん。嬉しくなっちゃって。浮かない顔してるけど何かあった？」

「ベル様。リリーはいつになく饒舌なソーマ様から聞いてしまいました。……ベル様の「ファミリア」の主神は誰なのですか」

㊦—㊦—㊦—㊦

これはバレてしまつてると見ていいだろう。

秘密だと念を押したが、ソーマが自分の「ステイタス」について話してしまいかもしれない、とは思っていた。

だがまさかその通りになるとは思っていなかったのだ。愚痴として話さなければよかったと後悔する。ほろ酔いのようできて、存外あのソーマも酔っていたのだろう。酒の力は怖いことを、身をもって知った。

観念して本当のことを話そう。リリーに話しながら帰ろうと言って、歩き出す。リリーが後をついてきているのを確認して口を開く。

「ねえ、リリー。もし、僕に主神が居ない。——つまり、「ステイタス」を持っていないとすると、僕は生身で17階層まで踏破して、ゴライ

アスまで討ち取ったってことになる。リリはそんな僕が怖くないって言える？」

「それはっ……………！」

「答えなくてもいいよ。僕が質問されているんだから。……………それを踏まえて、聞いてほしいんだ」

「……………はい」

少し意地悪な質問をした。怖いのは当たり前だ。怖くて当然だ。本人を前にして、怖いと正直には言えない。

……………今から見せるのは情けない姿だろう。英雄のようになれたかどうかは自分ではわからない。

何事も型から入った。異世界の物語に出てくる二人の剣客。その魔法の域に至ったという剣技を習得した時もそうだった。動きから真似て、自分のものにした。

だから、同じようにまずは英雄らしくあろうと思った。

だが、これから曝す姿はらしくない。……………自分の知る限り情ない姿を周囲に見せる英雄は少ない。

「僕は【ファミアリア】に入ってる。初めはね、入らなくてもいいやと思ったからなんだ。オラリオに来て初日にスリに遭っちゃって。で、追いかけて取っ組みした相手はなんと自分はLv. 2の冒険者だという。大したことは無いと思ったんだよ。それで実際に入ってみて、大したことは無かったんだ。……………それで5階層まで行って、持っていた袋に魔石を一杯つめて帰った。その時、【ファミアリア】に入ってるからギルドの換金所を使うのは不味いと思った。だから——」

「リリに、頼んだのですね……………」

そこからはリリも知っている事だ。

「そう。丁度リリの姿が見えたから頼んで換金してきて貰おうかなって。で、あとはリリも知ってる通り一週間の契約でリリの事を雇った。……………ついでだから正直に言うと、リリを雇ったのはリリのことを可愛いなって思ったからなんだ。下心しかないでしょ？ 『女の敵だー！』とか『すげーまじだー！』とか言われても否定できないから、あの時は結構傷ついたよ。だって本当のことだから」

時に嘘よりも、真実のほうが人を傷つけることがある。それも身をもって知った。

「それは……でも、仕方ないんじゃないですか。ベル様も男ですか……」

「そう言ってくれるのは、なんだか複雑なんだけど。……ありがとう。リリの気持ちは嬉しいよ。だけど、本当なんだ。僕はリリが助けていただけなんて格好つけたけど……もつともつと下心満載な気持ちで、助けようと思った。あわよくば、これから先も契約なんか抜きでリリとパーティを組めたらなって。リリと色んな所に行つて、色んなものを食べて。色んな事を体験したかった。僕って結構田舎者だったから、初めて見るものばかりなんだ。村には魔石灯なんてホント無かったし。……話を戻すけど、リリのことを助けられたら、それを切つ掛けに仲良くできるかなって思ってた。勿論、リリを助けたって心の底から思ったのには違いないよ？ でも、それがリリを助けようと思った動機なんだ」

「……わかりました。凄く、よくわかりました。それで、なんでそのことがベル様が「ファミリア」に入つてない理由になるんですか」

大通りに出ると辺りはすっかり夜の帳が下りてしまっていた。道沿いの店は何処も終業準備をしているところが多い。

仄暗く、魔石灯と月明かりだけが自分とリリを照らしている。半歩の距離を保って歩いていて自分たち以外にはカップルが一組だけ。仲睦まじく肩を抱き寄せあっているぐらいだ。

きつと自分には想像もつかないようなことをしようと思つて宿に行くのだろう。まあ、自分には関係ない事だと思つて視線を外した。

「本当に、ここから情けない話になる。……本当だよ？ 幻滅しない？」

「……それは聞いてからでないといけないです」

先程から後ろを歩くリリの顔を見れない。見るのが怖いからだ。これから話すことで、彼女にどう思われるか。それが少しだけ怖い。

本当に自分勝手な理由なのだ。本当に情けなくなる。

顔が見れないので、リリの相槌は怒っているようにも聞こえてしま

う。

「そうだよ。まあ、時間が無くて入れなかったというのもあるけど。……リリは【ソーマ・ファミリア】だ。僕がもし、【ファミリア】に所属していたら——リリのことを助けられない。リリを助けるために、ちよつと荒っぽい事もするつもりだったから。もし僕が無所属^{フッ}じゃなかったら、所属した【ファミリア】に迷惑が掛かる。でも僕が無所属なら？」

「【ソーマ・ファミリア】は犯人の追及を出来ない……」

「そう。ソーマ様がアレでも【ファミリア】としての体裁があるからね。【ステイタス】を持っていないただのヒューマンに、団員も団長も手も足も出ないどころか、誰一人気が付かないうちに気絶させられた。……と、実際にちよつと荒っぽい事をしたんだけどね。でもそんなこと言っても誰も信じないし、誰も信じられない。その証人としてソーマ様に、僕がただのヒューマンだと愚痴をこぼしたフリをして教えたんだ」

自分なりに考えて結論を出して、行動した結果だ。初めこそ言うか、言うまいかで悩んでいたが、リリを助けるなら黙っておいたほうが都合が良い事に気が付いた。

「それじゃあ……ベル様はリリの為に？」

「その通り！ ……つて言えたらいいけど、突き詰めていったら僕自身のためなんだ。リリを助けたいっていうだけの都合。リリの笑顔が見たいってだけの理由。……実はソーマ様の説得が出来て、目を覚ましてくれたから【ステイタス】を持ってない事を言ってもあんまり意味なかったし。次の日にでも何処かの【ファミリア】に入れば良かったけど……どうせならリリと一緒に同じ【ファミリア】に入れたかったから、つていうのもあるんだ。で、今日にいたるといわけ」

……怒られる覚悟はできた。立ち止まって、リリの居る方へと振り返る。

月明かりが流れる雲で陰る。

——魔石灯の淡い光だけが、リリの被ったクリーム色のフードを

照らしていた。

なんだ、それは。

「……………全部、リリの為だって言うんですか」

「さつきも言ったけど僕のためなんだって。周りに迷惑かけたくないって僕都合。リリの為なんかじゃない。……………ああ、そっか。恩着せがましく聞こえたかもしれないから言っとくよ。——断じてリリの所為じゃないからね」

本気も本気だ。本当にそう思っている。なんで、そうやって自分が負い目を感じないようにさせてくれるのか。

でも結局は全部。全部が自分の為だった。ああは言ったが、何もかも自分の所為だ。そう思うというのが無理だ。

何故「ステイタス」を持っていないのに、あんな偉業が出来たのかを聞いたですつもりでいた。強さの理由を知りたかった。でも、そんなことはもうどうでもいい。

「ベル様のお蔭でっ！ リリは、リリはッ——」

ボロボロと、歯止めが利かないほどに流れ出している。悲しいんじゃない。嬉しくて、嬉しくて仕方がないのだ。自分でも、おかしいんじゃないかと思うほどの涙が滂沱と流れ出ている。いつもは自分を困らせるベルの困った顔が見たくて。でも見れないから拭う。拭って、拭って。

それでも好きだという感情と共に溢れて止まらない。

「あの、リリ？ 泣かないで、ね？」

「泣くなどというのが無理ですッ！ ベル様が悪いんです!! ……………ベル様が、リリを嬉しくさせるからっ!!」

「……………リリ」

ベルに出会って本当に泣き虫になってしまった。自分もつと我慢強かった筈なのに。

笑ってくれという。ベルの言うように笑顔を見せたい。でも、止められないのだ。ずっと一人で生きてきた自分が——泥水を啜るように生きてきたリリル力では無くなっていく。

「それだけのことをつ、ベル様はリリにしてくれたのですよ!? ——
——ずつと、ずつと辛かったんですっ!」

……顔も思い出せない両親が自分にも居た。だが、二人は『神酒』
に囚われ、ダンジョンで命を落とした。

最後は両親と同じようにダンジョンで命を落とすのかもしれない。
そんな覚悟もして、サポーターになった。

そして、盗人になる。サポーターとして搾取されるのは限界が来
た。でも自分の最期は、もしかすると冒険者が逃げるための囮になる
のではないか。非力なサポーターとして、最期を遂げてしまうのでは
ないかと覚悟もして生きて来た。

生きながらモンスターに食べられる自分を夢に見てしまつて、飛び
起きた事もある。

「誰にも相手にされなくて! 誰にも、継ることが出来なくてツ!
これから先もリリは一人で生きていくんだと思つたのに……!!」
一人でも生きたいと。生きていたいと。切に願つて退団のための
ヴアリスを貯めていた。

勿論、冒険者からしか盗っていない。でも、そんなのは言い訳だ。
盗まれる前に盗んだ。盗みをするために、冒険者に自分を売り込んで
いった。

バレない筈だが、自分も人だ。幸いにして今までバレたことは無
かったが、あのままやっていけば何時かは下手をうつことがあつたか
もしれない。

自分はベルに出会うまで、そうやって生きて来たのだ。

「リリは灰をつ。灰を被るように、本当の姿を隠してつ……」
嗚咽が漏れて、みつともないと自分でも思う。恥ずかしくて顔が見
れない。

何が情けない、だ。ベルが情けなかつたら、自分はなんになるんだ。
恥の多い人生を送ってきた。情けないのは自分のほうだ。

それでも、もう——今までのように自分まで偽って生きなくても
良い。

きつと困っているだろう、ベルの顔をもつと見ようと頭を上げると

フードがずり落ちて光を浴びた。

月を覆い隠していた雲は流れて、夜空の闇に消えていた。

「もう、いいんですか………？　リリはもう、真つ当に生きてもいいのですか………？」

月に照らされた顔がしつかりと見える。ベルは自分に苦笑していた。

「——言ったじゃないか。全部終わったら、リリはどうしたいって。好きなように生きてくれればいい。僕はそれだけで満足だから………つて言えたらいいんだけど。ごめん、やっぱり嘘は吐けないよ」

——僕はもつとリリと冒険したい。

「もしも、リリがしたいことが見つかってなかったらだけど。どうかな？」

したいことはある。両手にあまるほど沢山ある。でも、それは一人では叶わない。幸せを、知ってしまったから。

「リリに沢山の初めてを教えてくれたベル様つ。もう、リリは一人では生きていけそうにありませんっ！　好きです、ベル様！　リリは貴方と一緒に居たいっ」

自分は。リリルカ・アーデはこの人について行きたい。

「——貴方の隣に居させてくださいっ！　ベル様!!」

月の綺麗な夜。一人のパルウムの少女は自由を得た。

月の狂気を取り払い、『神酒』を湛えた盃を飲み干したヒューマンの少年は少女を抱き止める。

ややあつて、少しの涙を浮かべた少女は笑う。それにつられて少年も笑った。

バグ・クラネルは打ち明けて

あれからリリを下宿先まで送り届け、自分の宿に戻った。興奮して朝まで眠れなかったのは致し方ない。少しだけだが『神酒』を飲んだのだ。酔おうと思ったたら酔える。だが、あの多幸福感に身を任せて眠りにつくよりも、リリのことを考えながら眠りたかったのだから仕方ない。

もうすっかり早起きは習慣になった。オラリオの市壁の上で日課を終わらせて宿に戻るとリリが居た。

「あ、ベル様！ おはようございます。……………その、昨日は送ってくれてありがとうございます」

「全然。僕がリリを一人で帰らせるのが心配だったただだよ」

「もう。そうやって気を使わないでください！」

別に謙遜でも何でもなく本当のことだ。もし、リリを一人で帰して夜盗なんかにも襲われてしまったらどうしようか、という不安が少しあった。ただでさえ、昨日帰る道すがらあの時気絶させた団長を見かけている。リリに気取られないよう気絶させておいたので問題は無い筈だが、どこかで手抜きをしている可能性がないとは言えない。「それで、どうしたの？ そんな大荷物で」

リリは買い与えた鎧、戦闘槌もバックパックに括り付けていた。いつもより膨らんでみえるのは気のせいではない。口からは何かしらの柄も見えている。調理器具であろうか。

「はい！ 実は、こちらに下宿先を変えようかと。……………こちらの方が何かと都合が良さそうなので」

「そっか……………」

すこしだけリリが小さな声で言う。半日ほど前に好きだと言われたのだ。理由は聞かずともわかる。自分は『鈍感系』を目指しているわけではない。……………なっていないよね？

「ダメ、でしたか？」

「いや、それは構わないよ。部屋を取るんだよね？」

「え？」

「……………えっ？」

こてん、と首を傾げる仕草は一々可愛い。でも、どうにも自分とリリの意識のすり合わせが出来てないようだった。はて、他の部屋以外に泊まる方法なんて——あ。

「もしかして、リリは僕の泊まつてる部屋に」

「!? や、やだなあ！ もうっ！ リリも部屋を取るに決まつてるじゃないですか!!」

「だ、だよねー?」

良かった。そうしてくれても別に良いが、すこしだけ心の準備というか段階を踏むべきだろう。リリは覚悟して来たのかもしれないが、こちらとしては耐えられそうにない。

「……………むうー」

すこしだけ残念そうなりリリは見なかったことにする。自分に合わせて早起きをさせられた主人の元へ行ってリリの宿の入室手続きに付き添う。宿屋の主人に冷ややかな視線で見られる。

与えられた部屋はわざとらしく自分の部屋と離れていた。

リリが荷物を自室に置いてから食事をしに戻る。

何が機嫌を損ねたのか今日の朝食は半額の値段で量は同じ。しかし味の質は半分だった。有体に言って普通だった。そんな食事をリリと微妙な表情をしつつ終わらして自分の部屋に集まる。

「——もう！ 幾らリリとベル様が仲良くたって、あんな風にするこないじゃないですか！ まったくひどい人です！」

自分と同じようにベッドに腰かけたリリは憤慨する。

「そうは言っても、僕が起きる時間に合わせて起きてくれてるんだし」きつと孤独な人なのだ。無口な主人だが、何もしていないときに時折誰かの映し絵を眺めては憂鬱そうな様子だった。もしかすると奥さんを失くしているのかもしれない……………と、あまり深く関りのない人を詮索するのはよそう。

それよりも今はこれからの話だ。

「ねえ、リリ。言つとかないといけないことがあるんだけど、聞いてく

れる?」

「はい? なんですか。良いですよ、何でも言ってください」

リリが微笑み、自分を受け入れようとしてくれる。

「……………なんでだろうか。初めからそのつもりでリリとは接してきたのに、いざ口にしようと思うと中々しにくい。それでも、出来ないことは無かった。」

リリの手を握る。すこしだけ勇気をもらえた。

「到底信じられない、理解してもらえないことだつてわかっている。……………けど、僕は英雄を目指してる」

「英雄、ですか? 御伽噺とかに出てくる」

「そう。リリの事は好きだけど、でもそれ以上に英雄に憧れている。

——笑われたつていい。馬鹿にしてくれてもいい。それでも僕は英雄になる。なりたいんだ。彼らのように。こんな僕だけど、リリはそれでも付いてきてくれる?」

正直な所、笑われてしまわないかと思うと怖い。やはりどんな風にも思つて臆病な自分はあるのだ。自分は偽り切れない。——そう思っている。リリは握り返してくれた。

「……………ええ。リリはベル様に付いて行きますよ」

「いいの?」

「はい。……………何を馬鹿な事かと思いましたが。でもベル様は本気なですよね?」

「うん。本気。子供の頃からの夢だから」

「そうですか……………」

ぎゅつとリリのその小さな手が自分の手を握りしめる。

「リリは自由になることが夢でした。【ファミアリア】から抜けて、ダンジョンに潜らなくていい生活をしたかったです。でも、ベル様に自由にしてもらつて。冒険者としてやっていけることを教えてもらつて、ちよつと変わりました」

「そう。リリに悪い事をしたかな」

「いいえ。ベル様が謝るようなことはしてません。むしろリリは感謝しています。……………昨日も言いましたけど、リリの今のやりたいことは

ベル様と一緒に居たい。ベル様の助けになりたいてってことです。勿論もつと先の夢はありますが、それは一人では叶えられそうにないの
で。それはリリの頑張り次第といったところですか」

その言葉が聞けて、というよりもここまで言えてちよつと気が楽になる。強張っていた手の力が抜けた。

「そつかあ……………ありがとう凄く楽になった。……………やつぱりリリは大人だなあ。お姉さんだけあるよ」

「こんなでも15ですからね！……………え、あれ。ちよつと待つてく
ださい。ベル様、今『お姉さん』つて言いました？」

「言った。今年で14になるよ。リリの一つ下かな？」

「うそお——！」

いつかは知れることだ。むしろ少し教えるのが遅かったかもしれない。リリは目を見開いてすこし間の抜けた顔をしている。ちよつと嗜虐心が湧いた。

「リリ姉さん？」

「?!?!」

びくり、と体を震わせる。

「リリ姉^{ねえ}? それともお姉ちゃん？」

「うわあああああ！ ベル様やめてくださいいい！」

耐え切れなくなつたようで、ベッドに倒れ込み、枕に顔を押し付けて顔を隠してしまう。

違う、こんなじゃない。でも……………。

そんな風に言っているようだが、うわ言のようでよくは聞こえない。ばたばたと足が動いて、止まってを何度か繰り返し返して恥ずかしそうだった。

「寝汗かいてるから枕におうよ？」

がばり、と起き上がつてリリが座り込んだ。睨まれる。

「ベル様がいじめるから！」

「ごめんごめん。ちよつと言つてみたくなって。ほら、僕一人っ子だからさ」

「むう……………」

「ごめんって。…………ちよつと話を戻すね？」

リリが膨れているが、これ以上話を横道に逸らしてもいけない。「まあ、そんなわけだから…………えつとね。ハーレムにも憧れてるんだ。育ての親だったお祖父ちゃんが、浪漫だーって言ってるさ。実際僕もそう思ってる」

さつきは馬鹿にされないか怖かったが、これを言うのはすこし照れ臭かった。

「…………まあ、はい。なんとなく思っていましたよ。ベル様がお優しいのはリリだけじゃないんだろうなあって。露店の綺麗なお姉さんにデレデレしてるの目撃してますし？」

「…………リリ？」

怒ってる？

「ベル様はお優しい人ですから？ リリみたいな子をほっとけないのかもしれないねっ！」

「あぐっ……………」

怒ってる。

「ベル様のバカーっ！ 浮気者ーっ！ 女の敵いーっ!!」

背中を殴られるが痛くはない。かわりにすこしだけ心が痛い。そりやそうだ。自分がいくら誠実に向き合おうと思っても、相手にとっては浮気されてるように思えるだろう。

——お祖父ちゃん、ハーレムって難しいんだね。

死んだ祖父に想いを馳せながらしばらく殴られていたが、リリからの攻撃が止む。

「はあ、はあ…………。もう、ベル様のそれはしょうがないと思って諦めましょう」

「…………よかった。わかってくれた」

「じゃあないですよ！ もう！ だって、リリが好きなんですから…………仕方ないじゃないですか」

「う、うん……………」

艶っぽくみえるのは、汗を少しかいているからだろうか。他に理由があるならそれはわからない。ただ、可愛いリリが綺麗に見えた。

「でも、一つ条件です！ きつと女泣かせな男になるだろう、ベル様にお願いです！——好きな人が出来たら、どんなことがあっても大事にしてください。その人を出来るだけ悲しませないでください。いいですか？」

「もとよりそのつもりだから。勿論リリのことでも大事にするつもり」
「……………っ！ ずるい人ですね！ もう！」

笑ってくれはしたけれど、自分に全てはわからない。無理をしてくれているのかもしれない。

でも自分の想いは曲げられない。もう一度、死んだ祖父に向けて想いを馳せる。——嗚呼、女心は難しい。

☺—☺—☺—☺

「はあああああ……………」

肩を落とし、長いため息を吐いている神物じんぶつがそこにいる。どうやら勧誘の声を掛けているが、悉く断られているらしい。

それもそのはずだ。冒険者のような恰好をした人物は、確実にどこかの「ファミリア」に属している。そのため、声を掛けるのは一般人。しかし此処はオラリオ。ダンジョンに関係する商業が盛んなこの街で、それも冒険者通りを始めとして大きな通りの付近で生活を営むものが、ある程度の年齢に達して手に職を持っていない訳がない。

確かに冒険者は一度の稼ぎは良いだろう。一攫千金の夢がある。だが、それは命を危険に晒した上でのことなのだ。安定した職を持っている人が、態々『冒険者になる』という冒険をしようとは思わないのが普通だ。

それでも、中には冒険者になろうと密かに思っている人がいるかもしれない。人の往来は激しく、自分と同じようにオラリオに夢見てきた人も、通りを歩く人にはいるかもしれない。

商売と同じだ。宣伝を行わなければ気にされない。

彼女の旧知の仲の人たちに声をかけて回っているようなのだが、慣れたように断られている。……………控えめに言っても可哀想だった。

動きに合わせて揺れ動くツイントールが今は哀愁を漂わせている。

「…………ベルさまベルさま。もしかしてあのジャガ丸くん売ってた女神の【ファミリア】に入るおつもりで？」

「だめかな？」

壁に身を隠して、顔だけ覗かせつつ声を潜めてリリと話す。

今はリリも自分も普段着だ。ゆったりとしたローブに覆い隠されていたリリの身体は幼さを感じさせるも、やはり年相応の凹凸があり、その膨らみを感じさせる。……一週間でしつかりと食事をしたからだろう。大変可愛らしい。

こうして陽の光から隠れるような生活をしなくてもよくなったと喜んでいただけだが、それが身体からにじみ出ているようにも思える。

「まあ、なんとなく予想はついてましたよ。でもなんだってあの方なんでしょうか？ どうにもリリにはわかりません。規模が大きくて、美の女神が主神の【ファミリア】があると思うのですが」

「それもそうなんだけどね。……………なんだか、放っておけなくて。あと運命みたいな感じた」

「……………なんですか、それ。リリには感じました？」

自分の下で顔を出しているリリは口を尖らせて、少しだけ拗ねているようだった。

「感じなかったけど……………でも今は運命だったんだなあって思ってる」

「そう、ですか。——なら、その運命にも感謝ですね。お蔭でリリはベル様に会えたんですから」

「うん。……………僕も感謝してる。リリに会えてよかったよ」

「っ。それで、行くんですか？ 行かないんですか？」

ちよつと恥ずかしかったらしい。声が上がっていた。

先ほどからいじらしくて仕方ない。抱きしめてずつと一緒に居たいと思ってしまう自分を抑える。今は【ファミリア】に入ることが先だ。

「それじゃ、行くっか」

落ち込んでいる女神に声を掛けるべく、身を隠していた壁から出

た。

ベル・クラネルは憧れて

その女神が丁度50人目の勧誘が失敗して、肩を落として落ち込んでいたころだ。

「——もしもし、その女神さま」

「ん、なんだい、ボクに何か用事かな？」

声をかけられ、振り向いた先には少年と少女が居た。他には誰も居らず、女神へと話しかけてきたのは間違いない。

——声をかけてきた少年の第一印象は白。白い髪に燃えるように赤い目をしたヒューマンの少年。兎のような見た目をしているが、その目から感じる強い意志がそんなイメージを消している。

女神には見覚えがある。しかし、微妙に思い出せない。これだけ印象的な子は一度見たら忘れられないだろう。もしかするとその時は違う恰好をしていたのかもしれない。

「入団希望者をお探しですか？」

「ううん？ ああ、見られてたのかあ……。恥ずかしいところを見られちゃったなあ」

もう一人はパルウムの少女だ。健康的な白い肌が空気に晒されており、元氣そうな印象があった。この子も見覚えがある。

それ以上にヒューマンとパルウムの組み合わせ。これをどこかで見たことがある気がする。いつそ既視感デジャブと言ってもいい。しかしいつ見たのだろうか。心の中で首を傾げるも女神は思い出せそうにない。

「それで二人はどうしたと言うんだい？ まさか入団したいだなんてこと、あるわけないだろうし……」

卑屈になってしまっていると女神は自分自身を省みる。

——何せ、先ほど50人目に断られたばかりだ。もしかして、と期待して裏切られてしまえば暫くの間立ち直れそうにない。

「それですよ。それ」

「へ、それ？ 何のことを言ってるんだい君は」

まさか、まさか。そんなことがあるのか。神を疑いたい人の気持ち

を女神は知る。

「——僕たちを【ファミアリア】に入れて欲しいんです！」

女神は目を見開いたまま暫くその言葉を反芻し、現実かどうか自らの頬を掴まんで確かめる。

「て、えええええええええええええええええ!!」

大通りから少し外れた路地で女神が絶叫する。通りにいる人たちは足を止めて声の方へを意識を向けるも、それ以上気にかける者は居なかった。

— — — — —

至近距離からの絶叫の後、しばらくして。

「えつとだね。正直に言つて、僕の【ファミアリア】は一人もいないんだ。それでも二人はボクの眷族になってくれるって言うのかい？」

喜色満面といった風に自分とリリの手を持って『びよんびよん』と音が出ていそうなほど跳ねて居たが、今は流石に不安そうだ。

「まさか一人も居ないとは思いませんでしたが、僕はいいですよ。むしろ燃えてきました！」

一から【ファミアリア】をつくる。なんて英雄的だろう。大きな【ファミアリア】に行つても、味わえない感覚のはずだ。この女神を選んで正解だった。

——それにしても中々面白い神だ。バイトをしている時にはわかりにくかったが、こうして改めて接してみると感情豊かなひとだとわかる。一つ一つに一喜一憂して、まるで子どもひとのような神だ。

「マジですか……」

ポツリと呟いたリリの言葉が、この女神様を不安にさせたようで、少しだけその綺麗な瞳が潤んだ。

リリがこちらを見て、本当にいいのかと目配せしてくるので頷く。「はあ……ベル様が良いと言うのだから、仕方ありません。女神様、リリもよろしくお願いしますね！」

「え、えへへ！ やったよ！ ボクにもようやつと眷族が出来たん

だっ!!」

同じくらいの背丈のリリに抱き付き、今度こそ本当に心の底から嬉しそうにしていた。胸が顔に押し付けられてリリは苦しそうだ。

異世界の知識によればこのような女性のことを『ロリ巨乳』というらしい。ロリってのは『幼い』という意味らしく、なんとなくその矛盾した概念に納得がいった。

——信じてくれるのは嬉しい事だ。しかし本当に神なのか。この世界に下りて来た神々は永遠に近いほどの命を持ち、永遠という見合うだけ生きてきてるらしいのだが無条件に信頼してくれる姿を見ると『ロリ巨乳』だからではないにせよ、本当に幼いのではと心配になる。

「僕が言うのはなんですけど、もうちょつと疑った方が良いですよ？」

もし僕たちが悪党だったらどうするんですか」

「——それはそうだけど。でも、君たちはそんなことしないだろう？」

違うかい?」

「違わないですけども」

「ふふふー安心してくれよ。こんなだけどボクも一応神だぜ? 全知全能ではないけど、君らが良い奴か悪い奴なのかぐらいはすぐわかるさー!」

なるほど。言うだけの事はあってその言葉には妙な説得力がある。根拠のない自信のようでもあるが、これが神々なのかと改めて感心した。

でも、そろそろリリを離してあげて欲しい。

「あの、女神様。リリが死にそうです」

「す、すまないっ! えっと、大丈夫かい?」

「げほっけほっ………死ぬかと思いまひたあ」

ぜーはー、と。リリは空気を求めて膝をつき体で息をしていた。女神の着ている服が掴みにくい素材のようだから無理矢理離すことが出来なかったのだろうか。

「すまない本当にすまない。えっと………あ、しまった。ボクとしたことがちゃんと自己紹介してなかったね。ヘステイアだ。君たちの

名前は何？」

謝りながらリリの背中をさする女神はヘステイアというらしい。

……異世界の知識にも神の名がある。このヘステイアが知識にある『ヘステイア』と同一神物じんぶつなのかはわからないが、どうせ確かめようがない。気にしなくともいい事だろう。

「僕はベル・クラネルと言います。で、そつちが」

「リリです。リリルカ・アーデです。……落ち着きました。もう、大丈夫ですよ」

「ごめんね、リリルカ君。ボクは危うく君を殺すところだったよ……」

リリは立ち上がったが、ヘステイアは自己嫌悪しているようで、その場で座り込んだままだ。そんなヘステイアの手を取ってリリは立ち上がらせる。

「もういいですよ。ヘステイア様。怒ってませんから。リリルカなんて固くなくてもいいです。ヘステイア様もリリの事はリリって呼んでください」

「あ、僕もベルでいいですよ」

俯き、震えだしたヘステイアにリリだけでなく自分の手も掴まれる。

「リリ君に、ベル君——……嗚呼、ボクは今凄く感動してる！　こんないい子たちがボクの眷族になってくれるだなんて！」

「大袈裟ですよー」

「大袈裟なもんか！　二人とも、早速だけどついてきて！」

そう言つて走り出して通りに出た。会う人会う人に挨拶を交わして、ヘステイアは小さな手で自分たちを引っ張っていく。眷族は居ないが多くの人に愛されている。先に行くヘステイアを見てそう思った。

通りを駆け抜けて、やってきたのはお爺さんのやっている本屋の二階だ。書庫になっているスペースを借りるとお爺さんへ告げて早々に、ヘステイアは我が家のように入り込んだ。

「態々ここに連れて来たけど、ボクの初めての眷族にはここで恩恵を

与えたかったからなんだ。ごめんね引っぱりまわしちゃって」

「良いですよ。でも、なんでなんですか？」

「へへへ。一番初めに出会ったその子と一から「ヘスティア・ファミリア」を作っていく。だから、その子の「スティタス」は「ヘスティア・ファミリア」の軌跡でもあるんだ。歴史って言ってもいいかな。ほら、歴史の一ページ目を刻むには、打ってつけの場所だろう？」

筋の通ったその鼻を擦って自慢げに言う。ああ、それは浪漫なんだろう。自分が英雄になりたいのと同じく、ヘスティアは自分の「ファミリア」を持ちたいと思ったのだ。

「神様でも、ロマンティックなんですネ」

「そうだぜ？　ボクたち神は娯楽を求めて下りてきたくらいなんだからね。ロマンティックじゃない奴の方が少ないぐらいだよ！」

楽しそうに語るヘスティアにつられて楽しくなる。

「それじゃあ、僕からお願いしてもいいですか？　いいよね、リリ」

「はい。リリはベル様の後でいいですよ」

「よし、それじゃあベル君！　上着を脱いで横になるんだー！」

言われた通り、上着を脱ぐ。……リリとヘスティアの視線がくすぐったい。気にしても仕方ないので言われた通りうつ伏せに横になる。

「横になりましたよ、ヘスティア様。——ヘスティア様？」

「はっ!?　あ、ああ……うん。大丈夫大丈夫。それじゃあ、ちよつと上に乗っかるね……」

ヘスティアの柔らかいお尻が上に乗った。自分についた筋肉に沿って少し形を変えたように密着している感触がある。こう、地肌に密着されると流石に恥ずかしいものがあった。

しかし、何を思ったのかヘスティアは少し上で揺れ動いているようだった。むにゆりむにゆりと腰のあたりで形が変わる。

「何してるんです？」

「う、うん。なんだかちよつと落ち着かなくて……」

確かに座り心地はお世辞にもよくはない、はず。いや、自分の座り心地なんて知らないからわからない。

リリが近づいてくる気配がする。

「……………へステイア様。何やってるんですかさつさとしてください」「ひゃう!?」 ちよつとりりくん!? そんな怖い声を耳元で出さないでおくれ! 心臓に悪いよ! —……………あ。な、なにを馬鹿なそんなことあるわけないじゃないか、あははは!! ———さあベル君つ!

【ステイタス】を刻もうかあ!!」

リリがへステイアの耳元まで口を寄せて囁いているらしく、何かを言っているようだがまったく聞こえない。何を言ったのかは不明だが、へステイアが誤魔化すのが下手なのだけは確かだった。———何言っただろ、リリ。

そんなこんなで、へステイアの神血イコルが自分の上に落され、「ステイタス」は刻まれ始める。

———ここから【へステイア・ファミリア】は始まるのだ。

もう一人の眷族になる予定の子に怒られたが、その背中に記している。【へステイア・ファミリア】第一の眷族だ。一人目の自分の家族だ。

……………まだまだ、知らないことは多い。———ベル・クラネル。この子が何を思っているのか。全てを計り知れるなら知りたい。ようやく【ステイタス】が刻み終った。

熟練度もなく、ランクは最低である基本アビリティ。

全てがまっさらなその基本アビリティを見て改めて安心する。

魔法のスロットは一つ。何もない事を空白が主張している。ただのヒューマンなら無くても当然だ。

だが、スキルのスロットは埋まっている。へステイアの手を離れ、勝手に発現された。その数は五つ。そして最後の一つを除くとしても、そのどれもが見たことも聞いた事も無いレアスキル。

《スキル》

リアリス・フレイゼ

【憧憬一途】

・早熟する。

- ・理想おもいが続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

- ・精神異常に対する完全耐性。

【常想強我】
フォルティス・イデア

- ・ステイタスの自動更新権。
- ・理想が続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

【起死回生】
レ・アニムス

- ・精神力を消費して再生させる。
- ・瀕死度合によって効果向上。
- ・意思の強さによって効果向上。

【大魔法使】
アルス・マグナ

- ・魔力・魔素における絶対干渉権。
- ・魔力放出。
- ・対象への属性付与。
- ・周囲の魔素を精神力に変換し吸収する。

【

- ・あらゆる不可能を不可能のまま可能にする。
アクティブ・アクション
- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

眩暈がするとはこのことだろうか。

早熟する、という効果は計り知れない。

ステイタスの自動更新権、なんてものは神の存在意義が失われる。存在自体を疑わざるえない。

魔法のような二つのスキルは、どう取り扱って良いものかわからなくなる。魔法ではなくスキルというのはどういうことなのだ。

最後の一つにいたっては、その名称は不明。効果のみが記されていて、その効果もよくわからない。『神の恩恵』が機能不全を起こしているようでもあった。

——どうしてこうなったっ!!

声を出さなかった自分を褒めたい。しかし色々言いたいことはあ

るが、一番は不安だった。

——……………この子に全てを伝えるべきか。否か。

ベルはパツと見は兎のようでいて、その瞳から感じた意志は百獣を統べる獅子のように力強い。だが、悪意には慣れていないように見える。もしこのスキルたちが他者に知られれば、この子はどうなってしまうのだろうか。

とりあえず後回しにしよう。そう問題を棚上げして、スキル以外は普通の「ステイタス」を一応全て写しベルの上から退く。

「ベルくん。【ステイタス】を教えるのはリリ君も終わってからでいいかな?」

「? 何か問題でも?」

「いいや、違うんだけど。ただ、ちよつと気になることがあったんだ。ダメ、かな」

起き上がったベルはリリによって畳まれていた服を着なおす。

「いいですけど……………あ、スキルとか魔法とか発現してました!」
「お、おおう。それも後でね?」

食い気味に聞いてきたベルに少し驚いたが、やっぱりそういうのに憧れるのは男の子だからなのか。一度落ち着かせて、期待に胸を膨らませているベルを離す。

「それじゃ、リリ君の番だ」

ベルは立ち上がり本に囲まれたその場から退く。リリが自分の所へと来て——あれ?

「……………。リリ君、そういうえばベル君の見たたよね」

「はい。ばつちり見ましたけど、何か問題でも?」

「リリ君は見られて恥ずかしくない?」

「……………あ」

「今度【ステイタス】を更新するときは別の部屋に居ようね。——ベル君! ちよつと下に行つててくれないかな!」

「はい!」

「~~~~!!」

先ほどリリから忠告されたように、別に横になる必要はない。上に

乗る必要もない。

その方が格好つくだらうと思ったのだが、実際やってみれば男性に跨っていた。背中だったとしても処女の身の上としては少しだけ思うところがある。

——でも、ちよつと癖になりそうかも。

往年の神友しんゆうにも言えそうにないよろしくない感情を押し込める。

そして、リリの背中に自分の神血イコルで濡れた指先で触れて、既に施されていた「ステイタス」の存在を知った。これは色々と事情を聴かなければなるまいと覚悟して、リリの「ヘステイア・ファミア」への『改宗』を終える。

「それじゃ、ベル君を呼んできてくれるかい？」

「はい。やはりベル様の「ステイタス」のことで何かあるんですよね」「うーん、まあね。それも含めて、リリ君の背中にあった「ステイタス」についても聞いておきたくて」

「……………わかりました」

思い詰めた様子のリリが下に降りるのを見届けて、天井を見る。

——今日はなんて日なんだろう。

色々あるが、それでも家族が二人も出来て嬉しかった。なんて本人たちを前にして恥ずかしくて言えない。問題は色々と抱えているようだけれど、それを乗り越えていくのも家族なのだ。と、言えたらいいがやっぱりすぐには言えそうにない。

これからの事を相談するため、二人をもう一度自分の目の前に座らせた。

バグ・クラネルは憬れて

リリを待つ間、本屋のお爺さんに断りを入れて立ち読みさせてもらう。ヘステイアの「ファミリア」になるんなら、と快く許してもらえた。

棚に並べられていた『ダンジョン・オラトリア迷宮神聖譚』を手に取って開く。

無数にある異世界の物語に埋没してしまいそうだったが、それでも英雄譚の内容は鮮明に思い出せる。自分の原点。英雄への憧れを抱くこととなった懐かしい一冊だった。

自分は亡き祖父に書いてもらい、大切に読んだものだが、しかしこうして改めて読んでみると、祖父の書いた内容とは若干異なっているように思う。村長が家を見てくれるから、と結局置いてきてしまったが、自分の持っていたものはなんとというか劇的で、登場人物の表情一つ一つが鮮明に描かれていた。挿絵も多かったはずだ。

「ベル様ー。終わりましたよー」

「わかったー。今行くよー」

まあ、絵本や書籍で違いがあるように、書いた人がお祖父ちゃんだったから違いが出たのだろう。そんな風に結論づけて本を棚に戻す。

一言お爺さんにお礼を告げて、ヘステイアとリリの居る2階への階段を昇った。

— — — — —

二階に上がると、ヘステイアは神妙な顔をして『神の祝福』を与えられたその一角に座っていた。リリにならって、ヘステイアの前に座る。

「お待たせ、ベル君。わざわざ下に行ってもらったのには訳があるんだけど、そこはほら。女の子と男の子違いだから」

「ヘステイア様ー！」

「そっか。えっちなーリリー」

「もー！ ベル様も揶揄わないでください！ それについてはリリがうっかりしてました!! ごめんなさい!!」

リリが顔を赤くして俯いてしまう。嗜虐心を刺激されたのもう少し揶揄いかけたが、ヘステイアがわざとらしく咳ばらいをしたので止めておく。

「で、だ。これから二人に「ステイタス」の写しを見せよう。ただ、その前に幾つか質問してもいいかい?」

ちよつと冗談めかしてヘステイアは言ったが、その表情からは陰が取れていない。それだけ重要な事なのだろう。少し崩していた姿勢を正して相對する。

「良いようだから続けさせてもらおうよ。——まずはリリ君！ 隠し事があるなら、正直に言いたまえよ。君は何処の「ファミリア」に居たんだい?」

中々リリには言いにくい事を聞いてくれる。

「ソーマ・ファミリア」ですよ」

「ソーマっていうと、あの酒の神の?」

「もしかしてお知り合いでしたか?」

「いや、知り合いじゃないけど名前は知っている。近所ではなかったけど、天界でも有名だったよ。……その、それで。理由を聞いてもいいかい?」

「ええ、いいですよ」

「え、えらくあっさりしてるね……。もつと言にくい事かと、ボクも覚悟していたんだけど」

しかし杞憂だったようで横のリリを見ると平然としていた。ヘステイアが調子を外したくらいだ。

「まあ、言いたくなければ今は言わなくてもいいとも。言えそうかい?」

「うーん」

袖を引いてリリが耳打ちしてくる。

「……………ベル様、どうしましょう」

「……………まあ、僕が怒られるだけなことを期待するしかないかな。全

部話してくれる?」

「はい」

ヘステイアを見ると、言いにくい事なのかと戦慄しているようだった。

「その、二人とも……………」

「いいですよ、到底信じられないような話ですが、お話ししましょう」
「ごくり……………」

ヘステイアの喉が鳴る。どんな話をされるのか想像がつかないという困惑した表情で、リリが話し始めるのを待っていた。

「……………」まず、リリとベル様と出会いは一週間ほど前に遡ります。
……………で、色々ありましてリリはヘステイア様に」

「いや、その色々を聞かせてくれるんじゃないのかい!？」

「……………察してくださいよ」

「流石のボクでも察せないよ!! 神々に期待するんじゃないよ! ホントに無能なんだからね!!」

別に威張れることじゃないような気がするが、事実そうなのだろうかから仕方ない。

「リリ、もしかして話しくい?」

「……………はい。リリには難しいです。だってあんな荒唐無稽な話、誰が信じるって言うんですか……………」

「……………ごめん」

「はい、そこイチャイチャしない!! むう……………何かあるとどうしてそうやって自分たちの世界に入っちゃうんだ……………。ボクは寂しくて死んでしまいそうだよ」

大袈裟なようだがヘステイア曰く死んでしまうらしい。

イチャイチャしてないと言いたそうなりりを放っておき、話を引き継いだ。

全てを話し終えて、ヘステイアの様子を伺う。別段悪いことをしたつもりはなかったのだが、なんというか申し訳なくなってしまった。
「……………色々と言いたいことはあるよ。リリ君を助けたのはよくやつ

たと言いたい。「ソーマ・ファミリア」にやったことは色々と思うところはあるにせよ、君なりに考えての事であれば良いだろう。ボクもそれでいいと思った。あと、ジャガ丸くんをここ数日買いに来ていたお客が君たちだつてことも思い出した。——でも、どうしてダンジョンに生身で入つて行つたのか。どうして無傷で帰つてこれたのかか」

肩を怒らせて震えている。

怒つてる？

「怒ってます？」

「なあにが怒ってます？だよ！　これが！　怒らずにいられるものか！　——なんて無茶をしたんだ！　君は！　下手したら死んでいたかもしれないんだぞ！」

「……………ごめんなさい」

怒つてた。

でも、ただ感情的なだけでなく、神として許せないことがあつたのかも知れない。なにせ、ダンジョンの事はそれなりに知つていても、神が語つていないことはある。禁忌を犯さないために敢えて教えてない、なんてこともあるだろう。なんでそんなに怒るんだとは思わない。

むしろ申し訳ない。小さな体で、髪を逆立てさせながら怒るヘスティアの顔は見れなかった。

「はあ。……………でも、生きて帰っているんだ。そのことでもう怒りはしないよ。ただし、一つ約束だ」

怒気が収まり、髪が動きを止めた。

「……………なんですか？」

「これから君は冒険者をやるんだろう？　ベル君が生身で、その、ゴライアスだっけ？　階層主を倒せたことは絶対にバレちゃあいけない。そのためにも念には念を入れて、「スティタス」に則つて冒険者をしてくれ。ボクは君が神々の玩具にされてしまうのが恐ろしいよ」

「……………はい」

両手を頬に添えられて、そう言われた。——この神様には心配を

かけたくない。

神々は永遠の命を持つからこそ人間にしてみれば刹那的快樂を求めると聞く。でも、そんな神々にもこんな神ひとが居るなら、その期待に
応えてもいいと思う。

「いいかい絶対だよ。……君が戦うところを直に見たわけじゃないから、リリくんに聞くけど。そんなに常人離れしていたのかい？」

自分の頬に添えられていたその小さい温もりのあるヘステイアの手が離れ、自分の手を握る。確かめるように撫でられる。

「そう、ですね。少なくともリリの目ではベル様を捉えきれませんでした。リリが瞬きした一瞬でモンスターの大軍が全滅していましたから」

「……ベル君の実力をリリくんのわかる範囲で良いから、冒険者に換算するならどのくらいになるんだ？」

「少なくともLv. 4以上、手も足も出せずゴライアスが倒されてしまったので、もしかするとLv. 5やLv. 6の冒険者——いえ、それ以上かもしれませぬ」

「……それが、生身でなのか。じゃあ、あの「ステイタス」が——」
「「ステイタス」？」

「あ、いや——兎に角！ 君は並はずれた、だなんて言葉が生易しいほどに強いかもしれない！ だからこそ、気を付けてくれ！ 敵はモンスターだけじゃないんだ！ わかったね!？」

「はい。……わかりました」

小さくも、まるで覚えのない母のような手が離れていく。若干の名残惜しさが、ふとよぎる。

「色々聞いて悪かったね。ベル君にはまたで悪いんだけど、リリ君から「ステイタス」を渡そう」

リリルカ・アーデ

Lv. 1

力：I 42↓78

耐久：I 42↓98

器用：G 1 4 3 ↓ 2 0 4
敏捷：F 2 8 5 ↓ 3 6 1
魔力：F 3 1 7 ↓ 3 9 8

《魔法》

【シンダー・エラ】

- ・変身魔法。
- ・変身像は詠唱時のイメージ依存。具体性欠如の際は失敗。ファンブル
- ・模倣推奨。
- ・詠唱式【貴方の刻印きずは私のもの。私の刻印きずは私のもの】
- ・解呪式【響く十二時のお告げ】

《スキル》

アーテル・アシスト

【縁下力持】

- ・一定以上の装備過重時における補正。
- ・能力補正は重量に比例。

リリに渡された【ステイタス】を横からのぞき込むと、リリが昨日の告白の後帰り道で教えてくれた魔法があった。やはり詠唱が必要なスキルは無いのかと安心する。

モルドから聞いたように名前があつて、L.V. があり、アビリティ、魔法、スキルの順で書かれている。

そういえばモルドにバレているかもしれないが、どうなんだろう。吹聴してないことを祈るしかない。

「伸びているように見えますが、半年【ステイタス】の更新が出来ていないので、恐らく少ない方でしょうね」

「そうなんだ」

「まあ、そう気を落すもんじゃないよりリリ君」

「はあい」

気落ちしたりリリはその【ステイタス】をヘステイアに返し、ヘステイアは書き込んでいた文字を一撫でして消した。どういう原理で出来るのかはわからないが、あれで【ステイタス】が漏れることは無いんだらう。

「さて、ベル君なんだが……………」

「はい！」

ドキドキする。念願叶って魔法が使えるようになったのだろうか。スキルが発現しているのだろうか。アビリティはどの程度上がっているのか。

そんな期待など知らないヘステイアは、なにやら唸っている。

「正直、教えるのを止めようかとさえ思っている。でも、それは——」

時が止まったように感じた。

なんだ、アビリティがそんなに低いのだろうか。今までの鍛錬は間違っていたのか。いや、そんなことはない。着実に強くなった自信があつて、実際にゴライアスも本気出せばワンパンで行けた。強くなっている自信はある。

「……………うん、ごめん意地悪だったね。でも、まずは口頭で言わせてもらう。合計五つのスキルが発現したんだけど」

「五つもですか!?!」

「き、気になるだろうけど、どんなスキルが発現したのかだけ言わせてもらうよっ! 全部レアスキルだ。それも恐らくすごい効果の。強力なスキルなんだろうけど、超弩級の厄介事の種でもある。まったく、運命の神は悪戯好きなのはウン千年前からのお約束だけど、こんな悪戯を仕掛けなくても、と抗議したくなるよ」

「え、ヘステイア様が発現させたんじゃないんですか?」

神が「ステイタス」を刻む。更新する。それは神が天界から降りてきて以来不変の筈だ。自分が知らないだけで、そんなスキルがあるのか、と不思議に思う。

「……………うん。ボクが神血イコルを垂らして、あるスキルが一番初めに発現した。そのスキルが「ステイタス」にスキルを刻んでいった。ボクは「ステイタス」を刻むのは初心者だけど、ボクより先に下界に降りてきていた神友のところに厄介になっていた頃があつてね。その手際を見たことがあるんだ。でも、それ以上に鮮やかに、効率よく「ステイタス」が刻まれていった。まるで「ステイタス」自身が意思を持つて

いるかのようね」

「そういえば、リリが見ている限りですがヘスティア様があまりベル様の背中に触れてなかったような」

その証人が居たことには感謝だ。リリも言うなら間違いないのだろう。

しかしリリは【神聖文字】^{ヒエログリフ}が読めないはずなので、見ていてわかる程見られていたということになる。リリのえっち。

「まあ、そういうわけだ。そのスキルことはまず置いておいて、書いてある順に説明していくよ。一つ目が成長率を上げるようなスキル。二つ目がさつき話したスキル。三つ目が回復系のスキル。四つ目が魔法のようなスキル。五つ目は——意味不明なスキル。まあ、五つ目のスキルについては置いておこう。これは大した問題にはならなそうだから。先に二つ目のスキルについてだ。いいかい？」

そう訪ねてくるヘスティアは震えていた。本人はバレないようにしていたようだが、束ねられている髪の毛が心の内情を明かすように、震えていた。

「…………あの、ヘスティア様？ 何を恐れているんですか？」

何かを恐れているのは明白だ。それがおそらく自分の二番目のスキルなのだろう。

「…………正直、二つ目のスキルについては誰にも教えたくないんだ。ボクが下界で過ごす間はボクの胸の内に仕舞って天界まで持っていくきたい。そんなスキルなんだ」

「信じられませんか。僕たちのこと」

「信じたいよ。信じたいんだけど…………もし、このスキルを教えて、君たちと別れなければいけなくなったらボクは死ぬよ。比喩抜きで下界から去らなければならぬとまで思ってる」

そんなに危ういスキルなのか。自分の【スティタス】の写しはヘスティアに抱きしめられ、くしゃくしゃになる。

「もし、このスキルの発現方法が知れ渡ったら。もし、このスキルが他者にも影響を及ぼしたら、なんて思うと——」

「神様！」

「わ、ベル君!？」

悪い想像をし始めたようだったので止めたが、止めて良かったはずだ。どこからどう見ても尋常じゃないほどの怯えようだった。何がそんなに怯えさせるのかは気になる。だが——今でなくとも良い。「今じゃなくていいです。教えられる、信じられると思ったその時でいいので教えてください。信じられない、だなんて当たり前ですよ」

「ベル君………?？」

元気づけられるなら、元気づけたい。この神ひとに、こんな表情は似合いません。そうにない。

「良いですか。リリは僕についてきてくれて、神へステイアの下にきました。でも僕は貴女だから。貴女のところへ来たのです。勿論、夢のためという打算的などころはありますよ。でも、あの時貴女が女神だと知って運命だと直感しました。何回か通ううちに確信に変わって——だから貴女の「ファミリア」になら入りたいと思っただんです」

元気づけるために言葉を重ねる。リリに後で何を言われるかわかったもんじやないが、でも、怯えて怖がるへステイアをそのままにはしておけない。

「だから、悪戯好きだとしても運命の神様がいるならその方に感謝したい。ソーマ様のような酒乱でもなく、放蕩ばかりするような神々でもない。神へステイアに出会わせてくれてありがとうって」

俯いてへステイアの表情は少ししかわからないが、震えが止まり怯えた様子がなくなっていた。なんとか元気づけられただろうか、と一安心する。言い切った自分を褒めたい。

「ぐずっ………べるぐん………」

しかし、へステイアは泣いていた。あれれ。

「な、なんで泣いてるんですか!？」

「………はあ」

リリの呆れた溜め息に、やり過ぎた事に気が付いた。

リリに慰められてへステイアは泣き止んでくれた。

「ごめん、ベル君。急に泣き出しちゃって。——………あれで、リリ

くんがコロリと行ったんだな」

「……………そうですよ、ヘステイアさま。気を付けてください」
「……………」

聞こえているのでやめてほしい。仲良くなれたらと思うのに間違いはないので否定できないのが苦しい。

「まあ、うん。とりあえず今はまだ教えられない。そういうことで構わないかな?」

「……………はい」

「ふふふ……………でも、ああ言ってくれて嬉しかったよ。ベル君の気持ちにはわかった。——だからと言って、主神様をそんな風に口説いては駄目だぜ?」

客と店員として二度目に出会って、声をかけられたとき。そう言えばそんなことを言われた、と思い出す。

色々と申し訳ないばかりだと思いつつも、ヘステイアが笑ってくれて良かった。

ヘステイアにより「ステイタス」の写しからスキルの欄の上から二つ目が消される。

「はい、ベル君。遅くなってしまって申し訳ない。これが君の「ステイタス」だよ」

ベル・クラネル

L v. 1

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

俊敏 : I 0

魔力 : I 0

《魔法》

□

《スキル》

リアリス・フレイゼ

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・理想おもいが続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。
- ・精神異常に対する完全耐性。

【起死回生】レ・アニメムス

- ・精神力を消費して再生させる。
- ・瀕死度合によって効果向上。
- ・意思の強さによって効果向上。

【大魔法使】アルス・マグナ

- ・魔力・魔素における絶対干渉権。
- ・魔力放出。
- ・対象への属性付与。
- ・周囲の魔素を精神力に変換し吸収する。

【

- ・あらゆる不可能を不可能のまま可能にする。アクティブ・アクション
- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

「まあ、初めだからね。アビリティはまっさらだよ」

そう言って渡された「ステイタス」のアビリティの欄が最底辺で一瞬落ち込んだのは内緒だ。知らなかったとはいえ、リリの「ステイタス」を見た後だったので鍛えてきた身としては中々ショックなアビリティ欄であった。

スキルは空白を挟んで全部で四つ。そこに名前と効果がしつかりと記されている。中でも下から二つ目。スキルに分類されているが、念願の魔法を手に入れられた。自分の思い描く魔法の条件そのものだ。彼ら英雄に夢みた、魔法が使えるようになる。それだけでも感謝したい。オラリオに来て良かったと。

——嗚呼。ヘステイアに出会えて本当に良かった。

ベル・クラネルは誤魔化して

ヘスティアに教えられていないスキルは兎も角として、【大魔法使^{アルス・マゲナ}】以外の他のスキルも異世界の知識に則って考えれば、ヘスティアの言う通り空恐ろしいものがある。最後のスキルなどは名前こそないが可能性の塊と言えるだろう。

しかし、なんとなくただ便利なだけのような気がしないでもない。一つ目の【憧憬^{リリス・フレゼ}一途】は理想が途絶えぬ限り早く強くなれるという効果だし、実際には三つめであるスキルの【起死回生^{レ・アニムス}】はトレイン^{アルス・マゲナ}の時に使える。【大魔法使】などは異世界にあるだろう魔法以外にも、その他の再現をするのに使える。最後のスキルはあの物語の中で出てきた能力に似たようなものがあつたので、想定していることがもしかしたら自分に限り可能になっているのかもしれない。

………なにせよ検証が必要な事は確かだ。

しっかりと記憶してから共通言語で書かれた自分の【スティタス】の写し書きをヘスティアに返す。リリの時と同じように文字は消えさり、ただの紙にもどる。

「一つよろしいですか、ヘスティア様」

「なんだい？」

それを見ていたりリリがヘスティアに尋ねる。

「もしかしたらヘスティア様が知らないのではないかと思って聞くのですが………。その、スティタスって隠蔽できるのは知っていますか？」

「………んん!？」

自分も初耳だ。モルドからは聞かされていない。今度会ったときにどうして教えなかったのか追及しておこう。

「ああ、やはりですか。ソーマ様でも知ってる事なので申し上げておきますが、背中にある【スティタス】は見えないように出来るそうです。実際にリリの【スティタス】も隠れてましたよね？」

「ああああああ!! そうだった! ど、どうやるんだい、それ!」

「わ、わ、わ!」

リリの背中は見れてないのでわからないが、確かにふとした拍子に背中を見られると言う事があるかもしれない。神でなくとも、長く生きたエルフであれば【神聖文字】^{ヒエログリフ}ぐらい読めても不思議ではない。

そんな事故が防げるのであれば、予め隠せた方が良い。

そんな方法があるなら、と鬼気迫った様子のヘステイアがリリの肩を掴んで揺らす。

「あの、神様。リリが」

「あー！ ぐ、ごめんリリくん!!」

ヘステイアの揺れる二つの双丘に目が行ってしまつて気づくのが遅れたが、揺さぶられていたリリは目を回していた。ヘステイアがリリの肩から手を離す。

「だ、だいじょうぶれす……うえ」

「お、抑えて抑えて！」

床に手を突いていたリリは息を荒くしながら、何とか持ち直した。

「はあ……はあ……ん、もう大丈夫です。先ほどの質問ですが、リリは良く知りません。先ほどヘステイア様の話に出てきた神友にお聞きになったら如何でしょうか」

「あーそうだ！ 確かにヘファイストスなら知ってるはずだ！ 隠してたし！」

「……なんで聞いておかなかったんですか」

そう言ったリリの目は冷ややかだ。危うく吐きかけたのだから当然だろう。本屋で吐いてしまうだなんて考えられないことだ。

……ヘステイアの揺れる物体に目が引き寄せられていたことは言えそうにない。

「ま、まあ……その、聞いておくからさ。そんな怖い顔をしなくてもいいじゃないか……」

「リリは怒ってません」

「別に神様に悪気があったわけじゃなさそうだし、機嫌直して、ね？
リリ」

「怒ってません！」

怒ってる。

リリが機嫌を直してから、ヘスティアは切り出す。

「それじゃあ、これから二人にボクの住んでいるところを案内しようと思う。……ただ、ちょっと片づける必要があるから、まずは場所だけ案内しておくよ。二人も宿に荷物があるだろう？」

「そうですね。それだけでなく、ギルドにも一度行かなければいけません。リリは『改宗』の報告を。ベル様は冒険者の登録が必要なはずです。やることは多そうですから、今日だけでも出来る限りのことはしていきましょう」

「じゃ、行きましょっか」

本屋を出てヘスティアについて行く。

……ヘスティアに案内されてやってきた本拠^{ホーム}の場所はバベルを中心に伸びる北西のメインストリートと西のメインストリートに挟まれた区画にあった。

辺りを伺いつつヘスティアは二階建てのうらぶれた教会に足を踏み入れ、その後をリリと顔を見合わせて続く。

外観だけでなく、長い年月を物語るように内観も酷いありさまだ。半壊していると言つて良いほどに朽ちていた。

奥にあった祭壇横の壁をヘスティアが押すと、なにかしらの仕掛けが施されていたようで、隠されていた扉が開く。

「こんなところに……」

リリは呆れ驚いたように声を漏らしたが、自分としては凄くワクワクしている。秘密基地みたいでカッコいい。

「ベル君ちよつと待ったあ！ 片づける必要があるつて言ったじゃないかー！」

「ええー」

入ってみようとするやほりというか止められた。

「……どれだけ酷いんですか」

「そんなに酷くはないと思うけど……どうせ今日も眷族は出来ないんだらうなと思つていたんだよ。それに、せつかく二人を招くんだ。一度、綺麗にしておきたいんだ。……いいだろう？」

「まあ、そういうことでしたら……………」

「仕方ないのかな」

「それじゃ、二人の用事を済ませてきておいで！ ゆっくりでいいからね！ ゆっくりで！」

そう念を押すヘスティアに送り出されて、リリと泊まっている宿に行く道へと出る。

「……………随分と貧相な暮らしをしているみたいだった」

「はい。……………流石にリリも可哀想になりました。あれはちよつと……………」

「ほつとけないって直感の間違いじゃなかった」

「……………ベル様の言う通りでしたね」

暫しの間、喧騒のあふれる通りでリリとの間に沈黙が流れる。

「リリさん。苦勞をかけるかもしれないが」

「ベルさま、それは言わない約束です」

——ヘスティアにいい暮らしをさせてあげよう。

リリと自分との間に一つ大きな目標が出来た瞬間だった。

————

宿の主人に引き払う旨を告げて、荷物を持って宿を出る。少しだけ過払いが発生したが、払い戻しの手続きはしなかった。一週間ばかりではあったが、随分とお世話になったのだ。異世界にもあった風習を真似てもいいだろう。

村に居た頃のような極貧生活を送っているわけではない。もしかすると少々金銭感覚が麻痺しているのかもしれないが、それはそれでいいと思った。ケチな英雄になりたいわけではないのだから。

荷物を持ったまま、というのが気が引けたので先に大荷物を抱えたリリと一緒にヘスティアの居る廃教会に行く。しかし、まだ入れそうになかったなので、見えないように荷物を隠し、冒険者通りに出てギルドに向かう。

ギルドの前で立ち止まる。今まで建物の前までしか行ったことが

無かったので、緊張しているのが自分でもわかる。

「それじゃありりは報告に行ってください。理由は聞かれるでしょうが、ベル様の名前は出さずに何とかしてきましょう」

「うん。リリも頑張ってるね。僕も頑張ってくる」

「ギルドの職員にもバレないように、ですよ？」

「わかってる。それじゃ、また後で」

「はい！」

先に入ると、少し間をおいてリリが遅れて入ってくる。

これぞ職場というような雰囲気にならずに少し圧倒されつつ、きよろきよろとじつじつ暇そうにしている人を探す。

ふと、後ろに気配を感じて振り返った。

「どうかしました？」

「うわっ!？」

「あ、ごめんなさい！」

急に振り返ったのが悪かったのか自分の後ろに居た女性は、驚いた拍子に持っていた書類を落としそうになっていた。落ちないうちにキヤツチする。

「ふう、良かった。はい、どうぞ」

「あ、うん。ありがとう」

「それで何か僕に用でもありましたか？」

「うん？ あ、そうだった。君がなにか迷っているようだったから。もしかしてギルドが初めての人かと思って」

そう言ってきたのはエルフ——いや、ハーフエルフの女性だった。

カウンターに付き添われ、言われた通りに用紙へ記述していきハーフエルフの彼女に提出する。

仕事が出来そうな人だ。

「それじゃあ確認していくね？ 名前はベル・クラネル、14歳。え、14歳なの？」

「はい。見えませんか？」

「うん。てつきり17、8歳くらいかと思ったよ」

それは流石にないだろう。………と思ったがハーフエルフの彼女と身長はそんなに変わらなかったはずだ。

「それで——【ヘステイア・ファミリア】？」

「はい。あの、何か問題でも？」

羽ペンを持ったまま頬に手を当てて考え込む。

「……………うーん。ちよつと聞いた事が無くて。あ、もしかして新設の【ファミリア】だったりする？」

「そう、ですね。今日出来たばかりです」

「なら分かった。じゃあ【ヘステイア・ファミリア】で登録するね。でも君から、神ヘステイアにはギルドへ出頭するよう伝えておいて。新設の【ファミリア】はその主神がギルドに結成報告をしなくちゃいけないから」

「わかりました。神様に伝えときます」

話のとおりであれば、もしかするとリリが少し苦勞しているかもしれない。届かないだろうが心の中でエールを送っておく。変にここでフォローすれば話の辻褄が合わなくなるかもしれない。

「で、Lv.1の冒険者と。はい、これでよし、と。これで冒険者登録は終わったよ。あ、多分まだまだ先だろうけど、このランクアップの報告だけはちゃんとしてね？ 嘘ついたり、ちゃんと報告してないと罰則があるから」

「はい。……………気を付けます」

記入した用紙を彼女はファイルに仕舞う。

「それじゃあ改めまして。これから君の担当をさせていただきます、アドバイザーのエイナ・チュールです。受付もやってるけど、ダンジョンの事やギルドのことで分からないことがあったら私を呼んでくれたらいいから」

そう言つて手を差し出される。

「えっと、よろしくお願いします。エイナさん、でいいですか？」

「うん。よろしく、ベル君」

エイナと握手を交わし、自分は晴れて冒険者になった。ハーフエルフ

フだけあつてエイナが美人なので少し緊張してしまうが、優しそうな人なので安堵する。

「もしかして、これからダンジョンに行くの？」

「いえ、今日はさつき言ったように【ファミリア】が出来たばかりなので。一緒に【ファミリア】に入った相方を待つて、色々と買い出しとかですかね。宿に置いてた荷物もありますし」

「そっか。……でも、不思議だな。宿にいるっていう事はベル君、別の場所からオラリオに来たんだよね？ どうしてすぐにギルドに来なかったの？ 門番の人にすぐ来るよう言われなかった？」

そういえば言われたかもしれない。……しかし、よく覚えていないのだ。なんせオラリオに来たことで浮かれていたこともあるが、入った直後スリにあったのだから。

「先に宿をとつて、色々とバタバタしてたら来るの忘れちゃつてて。あと、【ファミリア】を探してみました」

「自力でなくても、来てくれれば紹介してあげたのに……」

自力でダンジョンに入つて、【ソーマ・ファミリア】に乗り込んで、女の子一人助けてましたなんて言える訳がない。

「あはは……」

気遣いがありがたかつたが、誤魔化すしかなかつたので笑い、本当の事を言えないことに落ち込む。嘘やごまかしはあまりしたくないのだ。ハーレムの為とあれば相手に害のない程度であれば妥協はする。妥協は。

そんな内情を知りもしないエイナは微笑む。

「うっかりやささんね、ベル君は。……でも、ダンジョンではそのうっかりが命取りになるからね。冒険者は冒険しちやいけないの。矛盾してるようだけど」

中々言い得て妙だと思つた。なるほど。冒険者は冒険してはいけない。ただ稼ぐのであれば不必要な冒険は足をすくわれると。

「ええ。エイナさんを心配させないよう、頑張りますね」

「うん。そうしてくれると私も嬉しい。とりあえず、初日は1階層までだからね！ いい？ 絶対だよ！」

——でも、それじゃ駄目なのだ。ベル・クラネルが至るべき場所には辿り着けない。

「はい。……………それじゃあ僕はこれで」

「うん。これから大変だと思うけど、頑張つてね。私もすっかりアドバンスしていくから!」

エイナの居る受付を離れて外に出る。

「ベル様」

「あ、リリ」

外に出ると、入口の横でリリが仁王立ちしていた。……………ちよつと怒つてらっしゃる。

「また随分とお綺麗な方を引っかけましたね。ハーフエルフの方ですか」

「ち、違うからね。僕が声を掛けたんじゃないよっ」

「知ってます。でも、仲良くなりたいとは思ったのでしよう?」

半目になりながらリリは言う。

「うん。……………やきもち?」

「なに言ってるんですかあ、もう!」

否定しようが無いのでいっそのこと認めてしまおう。美人な人だったし。

「……………しようがないですね、ベル様は」

頬を膨らませて、リリはそのための息を吐き出して歩き出す。

「ごめん……………」

「いいんです。ちよつとだけリリの胸が苦しくなるだけですから」

強がっているようだった。そんなリリも可愛らしくてたまらないのだが、人目があるので頭を撫でたりしたら逆効果だろう。

「——ベル様、手を繋いでもらってもいいですか……………」

そう言われたら繋がずにはいられない。切なそうにするリリを見て申し訳ないと思うが、ハーレムを目指す想いのほうが勝つてしまいい、さらに申し訳なくなる。

そうこうしているうちに昼飯時だ。近くの喫茶店に入って軽い食事をし、そのあと冒険者通りで服飾のお店を見てまわる。そんな

ちよつとしたデートをしてリリの機嫌を取りつつ、ヘスティアへのお土産兼お祝いの品として髪留めをリリと相談して買ってホームへの帰路に着いた。

やはりリリは笑っている表情が一番似合う。

しかし、その笑顔を曇らせる原因に自分になっているのかもしれない。やってきたことを省みて、まだまだハーレムへの道が遠い事を再確認した。

バグ・クラネルは怒られて

廃教会に戻ると荷物を置きにきた時には閉じていた隠し扉が半開きになっていた。

「終わったんでしょっか？」

「さあ、どうだろう」

隠していた荷物を軽々と運びながらリリが言う。

「ベル様のお持ちしますね」

「あ、ありがとう」

入って来ても良い、という合図なのか。——それともヘステイアに何かあったのか。警戒は解かずに半開きの扉の向こう、地下へと続く階段を降りる。リリが扉を引いて閉める音が響く。

階段を降りた先は正方形と長方形がくつついた『P』の形の空間が広がっていた。壁や天井の損壊の程は地上よりは少ない。ベッド、ソファ、テーブル、キッチンといったそのほか諸々。家具はヘステイアの背丈に合わせて少し小さめに作られている。一人暮らしをするために必要なものが備え付けられていて、実際にここで暮らしているという生活感が出ていた。すこし煤けたソファの上で若干の疲れをみせるヘステイアの姿を認めて警戒を解く。

「やあ、お帰り二人とも。ギルドはどうだった？」

「はい。僕は問題なく冒険者登録が出来ましたけど」

「ということば、リリくんは？」

リリが手に持っていた大小二人分の荷物を降ろす。

「はい。リリは少し手間取りましたね。『改宗』をしたとしても、その行き先が無名の、それも発足もしてない「ファミリア」というのは異例………というか前代未聞のことだったそうで」

昼食をとっている時にリリから自分は聞いたのだが、やはりというか『改宗』に時間を取ったようだ。自分のことは一切話していないとこのことで、やはり大変だったようだ。成り行きもあったのだが、デー卜は功労者であるリリを労うためでもあった。

自分にしたようにリリは掻い摘んでギルドでのことをヘステイア

に説明し終える。

「でも、上手くやれたんだだろう?」

「はい。まあ、ちよつと大変でしたけど。……あと、ベル様も言われたそうなのですが、一度ギルドに来てほしいとのことでしたよ。冒険者の登録と同じで【ファミリア】を作ったら手続きが必要とのことでした」

「そうなのかい、ベル君?」

「はい。アドバイザーになった人に言われました。明日にでも行った方がいいかもしれませんね」

「うーん。じゃあ、明日のお昼にでも行くとするよ。ちなみに二人は明日どうするんだい? ダンジョンに行くのかな」

ヘステイアはソファから下りてキツチンのある方へと向かう。二人とも座つていいよ、と言われたので遠慮しつつソファに腰かけた。「僕はそのつもりです。【ステイタス】がどの程度の物なのか確認したので。リリはどうする? 僕としては危険かもしれないから別行動したほうがいいと思うんだけど」

「ベル様がそう言うなら、そうなんでしょう。それじゃありりは、明日は【ファミリア】運営のための諸々をやります。あと、ノームのお爺さんのところにも行きたいので単独行動ですね」

ヘステイアが台所から帰ってくる。その手には皿が。皿?

「よし、二人の予定がわかったことだし早速——ふっふっふ。ささやかだけどお祝いだ! 二人ともお昼がまだだろう!」

「あ、食べました」

「なにいいいいいい!!」

「ごめんなさい。」

まったくもうと怒つてみせているが勝手に用意して待つていたのは自分だ。空いてたベルの横に座つて鶏肉を使った料理を頬張る。

「二人でよろひくしてくれちゃってさ。あむ。ボクだけ除け者にして!」

「許してくださいよー神様ー」

「ふんだ。せっかく美味しいお肉があるから君たちに振る舞ってやろうと思ったボクが間違いだったよっ！ もう！」

「ええー」

とはいえ、せっかくの好意を無下にされたのは思うところがある。感情的なのは重々承知しているが、喰わずにはいられない。

こうして人と同じように摂取しなければならぬのは不自由だと思いが、それもまた下界の醍醐味だ。食の楽しみを知って、誰かと食べるのを期待していた。自分の眷族ファミリアと一緒に食事をする、というのは一つの夢だった。

裏切られたというわけではないが、自分は二人と一緒に食べたかったのである。用意できた量も少ない。しかし、その機会を逃してしまったのがちよつとだけ悲しい。……二人を待っている間に冷めてしまった肉料理はそれでも美味しかった。ジャガ丸くんの屋台で磨いた自慢の塩を振る技術を見せたかったがもう遅い。最後の一切れだ。

「ふう、ごちそうさま！ ……ふん、どうせ歓楽街の宿にでも行つてたんだろ！ 二人は、その、付き合っているようだし……」

言っていて恥ずかしくなる。二人がくんずほぐれつしているのを想像したのが悪かった。

「してませんって！」

「……………それも良かったですね」

「何言ってるのりりり!？」

「ふふふ、冗談です」

まあ、じゃれ合っている様子からそれはしていないようだから一安心だ。一度もしたことがないようでもある。入団の際にもりりはベルに見られるのは恥ずかしいようであったし。

でも、改めて思うと不思議なのだが、ベルとりりの関係はそこらにいるカップルとは違うような感じた。まあ、人であろうところの子供と言っても差し支えないのでそう見えるのかもしれない。しかし、それだけじゃないような気も。

「りりくん、改めて聞くけど二人は付き合っているのかい？」

「うーん。どうなんでしょう?」

「え!？」

ど、どういことなんだ!？」

「…………ベル様、言っても?」

「ん、何を?」

「ハーレム」

ハーレム!？」

「あ、うん。あのですね、神様。リリが言うには、リリは僕についてきてくれるだけなんです」

「…………。ちよつと整理させてくれないか?」

頭を抱える。——えつと、どういことなんだ。

ハーレムと言ったのか、今。

「…………男の子が女の子を沢山侍らすあれの事?」

「そうです。英雄に憧れて僕はオラリオにきました。ハーレムを作るような英雄に」

「リリくん。ボクは夢を見ているのかな。ねえ、教えてくれよ」

「いいえ、夢ではありません。現実です。ベル様は本気で言ってます」
頭がいたい。

「だって、死んだお祖父ちゃんが漢だったらハーレム作らなきゃなつて言ってたんですよ!」

知り合いに似たようなことを言いそうな奴がいた気がする。

…………いやいや、今はベルのことだ。

「それよりもベル君! それはリリくんに不誠実だとは思わないのか!？」

「リリの事は大切です。言われなくてもリリと一緒に居てくれるなら大切にします。でも神様! 女の子と仲良くしたいって男だったら誰もが思つてることです!！」

ベルの目は本気だった。嘘偽りのない本心だ。その絶対に引かないという決意に尻込みする。

「リリくん。君は無理していない?」

「ヘスティア様、その質問はズルいです…………」

答えたくないということは、無理はしているのかもしれない。しかしだからこそ、それでいいのだろうか。

「……………その、いいのかな?」

「いいんです。リリは好きでベル様について行くってだけです。ちやんとリリの事を大事にしてくれると言ってくれましたし」

「リリくん……………」

「いいんですよ、ヘスティア様。沢山困らせられる分、困らせるので。お相子です」

ベルへの懐疑心を募らせつつリリに憐憫の情が湧く。しかし、同時に少女とは思えない大人の表情を浮かべたことに驚いた。その表情には覚悟のようなものも感じ取れる。

ベルのお祖父ちゃんとやらはどんな教育をしたのだ、と問い詰めたくなるが、すでに天に還ったのであれば独り言にしかならない。これ以上言うのは良そう。

「……………はあ。二人がそれでいいならボクは何も言わないよ。ただ、ベル君。夢を見て……………いや、そうか。君の憧れは英雄へのものなのか」

「はい。英雄に為れと僕の心が、体が、魂が叫んでいます。——英雄になって、女の子たちと仲良くしたい。それが僕の夢ですから」

男の子らしいその願いに、得心が行く。ベルは英雄に為りたいのだ。英雄に成り、ハーレムを作る。口ではああいっているが、ハーレムは二の次なのだろう。女の子にモテたい程度なのかもしれない。自分の直感でしかないが、話にあったお祖父ちゃんの刷り込みを踏襲しているだけということもある。

だが、年齢相応に可愛いと思えるような純粋なその願いに「スティタス」は呼応した。理想を追い求める限り効果が続くという条件付きだが、スキルの保有者が熟すまでの時間を早めるスキル。スキルが発現するほどの強い想いだ。果たしてベルはどのような英雄に為りたいのだろうか。

「……………君は、」

「なんです、神様」

「いや、なんでもないよ」

——いや、よそう。それを聞くのは野暮というものだ。

それに、ハーレムを作るといことがもしもベルの理想に含まれているのなら、彼の願いが間違っていると説教をしても良くない。その資格は自分がない。あるとすれば、ベルについて行くと決めたパルウムの少女だけだろう。

「不幸にだけはするなよ、ベル君？」

「もちろんです」

先が思いやられるが、しつかり見守つていこう。悪い子たちではないんだ。ただ、少し歪んでいるような気がしないでもない。下界に生きる人なのだから、その在り方が不完全でもおかしいことではないのだろう。少し心配だけでも。

そんな風に結論付けた自分を他所に、こそこそとまたもや二人は自分を他所に耳打ちをし合つて相談事をしている。

——それがちよつと気に喰わないんだよね。

自分とも仲良くしてほしい、とはとてもじゃないが言えない。しかし本心だ。せつかく家族ファミリーになったのだから、とも思う。

「ねえ。また、二人で相談ごとかい？」

「あ、いえ。その実はヘステイア様にプレゼントがあるんです。ね、ベル様」

「ふ、ふれぜんと？」

「はい。その、ご迷惑でなければ」

差し出された包みは可愛らしく、小物であるというのが伺えた。

——二人だけで話していたのは全部打ち合わせのため？

いや、まさかそういうわけではないだろう。まだ二人との距離が縮まらないのはしょうがないことなのだ。

聞けば一週間、二人は命を預け、預けられてという関係を続けていたようだし、互いに互いを好きだと言いついて仲だ。それに今日出会ったばかりの自分と親密であるわけがない。

むしろ二人は積極的に自分と仲良くしようとしている。自分が感謝すべきなのだろう。

ありがたく二人からのプレゼントを受け取って、包みを丁寧に開く。

「これは、鈴？ いや、鐘か。……………ん、髪留めか」

蒼い花弁を彷彿とさせる飾り付けのリボンに、小さな銀色の鐘が付いている。

「その、神様の髪留めが切れそうだったので。あ、一応リリに神様に似合うかどうか確認してもらいましたから、気に入ってもらえる自信はあります」

ベルに言われて今つけている髪留めに触れる。確かに所々ほつれて、いつ切れてもおかしくない。中々気づいても、その時すぐというわけにはいかず、つい使い続けてしまう。下界に来て身に付いた貧乏性と元々の自堕落な性格の所為だろう。

ジャガ丸くんの調理用発火装置を爆発させてしまい、その弁償で生活に余裕がないからなのだが。

「態々リリも魔法を使ってヘスティア様を真似てモデルになったんですからね。リリの知らない人に声を掛けられた時はどうしようかと思いましたが、もう！」

「悪かったよー。でも、女の子にハンマーと鎧をプレゼントするような人には決めさせられないってリリが言ったからさ」

「だって事実じゃないですか！」

「ぐう……………」

二人が仲睦まじく言い合っている。でも、それは自分のこと ведь。それが堪らなく嬉しい。感動のあまり涙が出そうだが、今日は既に一度見せてしまっている。流石にそれは恥ずかしい。

「二人とも、ありがとう。……………その、着けてもらってもいいかな？」

「リリはいいですけど」

「僕もですか？」

「……………二人に付けて貰いたいんだ」

鏡の前に行って着けている髪留めを取って髪をおろす。

ベルは少し不器用に、リリは同性と言う事もあって器用につけてくれる。

何と表現したらいいのだろう。左右から二人に髪留めを付けて貰うのは少しこそばゆい。それでいて心が温かくなった。

左右のバランスが悪いが、それでも、髪留めは自分に良く似合っている。リリの魔法で自分の姿を真似て確かめたというだけのことはある。

鐘に触れる。鐘がリンと鳴る。

「ごめんなさい、やっぱり僕がやったほう変ですね……………」

「いや、いいんだよ。……………これでいいよ」

「気に入ってもらえました?」

「うん。とつても」

ベルのチョイスということで、この鐘は狙ってやっているのだろうかと思っただけが違う。鏡に映る自分を見れば間違いだということが判った。

ただ、自分に似合いそうだからという理由で選んだに違いない。だが自分の髪留めの傷み具合に気が付いたのはこの少年だ。

「ベル君だろ、ボクに買って帰ろうって言ったの」

「はい、そうですけど」

「あんな話を聞いた後だから、さ。……………その、ベル君はボクにも好意があるのかな?」

「……………どうだと思えます?」

そう言って鏡に映るベルは笑うだけで答えはしない。——なんだろう。胸がざわつく。

「あ、あははは! なんてね! 冗談だよ、冗談! だからいつてるじゃないか! 女神を口説くもんじゃないって!」

「はあ……………」

「な、なんだい、リリ君?」

溜息を吐く鏡の中のリリは自分へと苦笑する。

「ヘスティア様。正直者じゃないほど後で痛い目を見るんですよ」

——リリの前でなんてこと言ってるんだ、ボクは!

急に良心の呵責が苛まれて、二人に見られている状況がとても恥ずかしくなった。

夜になり、ホームで三人で夕食を食べてシャワーを浴び、自分はソファで。ヘステイアとリリはベッドで眠りにつく。

……プレゼントの一件から、ヘステイアの様子がどこかぎこちなかった。眠りにつくころになればすっかり調子を戻していたので安心ではあったが、自分の顔を時折見てなにやら思うところがあるようだった。リリも少し拗ねていた。

ちよつと悪戯が過ぎたかもしれない。しかし可愛らしい姿を見せてもらったので後悔はない。これから「ヘステイア・ファミア」での生活が始まることに胸を膨らませ、眠りに――……つければよかったのだが。

女の子がすぐ近くで寝ているという状況に、しばらく悶々として眠れなかった。

ベル・クラネルは試して

いつもの時間に目が覚める。ベッドで眠る二人を見て眠気を誘われたが、誘惑に負けぬようホームから出る。大きく伸びびをして、寝ている間に凝った体をほぐす。気つけのために一つ頬を叩くと、眠気は吹き飛んだ。

暗闇の中、オラリオの市壁の上へ行ってトレーニングを始める。いつものように一つ一つを丁寧に『最強の自分』を常にイメージしつつ腕立て伏せを行う。身体ではない場所が鍛えられる実感があつた。これが「ステイタス」だろうか。

そう思い至ると昨日見た「ステイタス」が思い浮かんできたが今は気にかけていられない。時間をかけて腕立て伏せを終えて一息つく。「…………え、なにこれ」

ベル・クラネル

L v. 1

力 : S S 0 ↓ 1 0 0 0

耐久 : A 0 ↓ 8 0 0

器用 : D 0 ↓ 5 0 0

俊敏 : G 0 ↓ 2 0 0

魔力 : I 0

《魔法》

《スキル》

【憧憬一途】
リアリス・フレーゼ

- ・早熟する。
- ・理想おもいが続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。
- ・精神異常に対する完全耐性。

【常想強我】
フォルテイス・イデア

- ・ステイタスの自動更新権。

- ・理想が続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

【起死回生】
レ・アニメムス

- ・精神力を消費して再生させる。
- ・瀕死度合によって効果向上。
- ・意思の強さによって効果向上。

【大魔法使】
アルス・マグナ

- ・魔力・魔素における絶対干渉権。
- ・魔力放出。
- ・対象への属性付与。
- ・周囲の魔素を精神力に変換し吸収する。

【

- ・あらゆる不可能を不可能のまま可能にする。
アクティブ・アクション
- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

やっている最中ずっと思い浮かんでいた【ステイタス】に意識を向けると、想像上にある筈の【ステイタス】の魔力を除くアビリティは『力』から順に大きく増えている。想像上だというのに何故？

【常想強我】
フォルティス・イデア ……?」

スキルの欄を見ると上から二番目、空白になっていた部分が埋まっている。ヘステイアによって教えられなかった筈のスキルだ。

……その効果を見て納得が行く。想像上にある筈の【ステイタス】のアビリティと、教えられなかったはずのスキルの名前と効果が分かったことに。

——自動更新権。

つまり、自分で【ステイタス】を更新できるのだ。半ば意識しなくとも強くなりたいと思えば自動的に。それだけではなく、【ステイタス】を意識すればその詳細もわかるのだろう。

もしかすると一般的に言われる『更新』ではなく、『新しく変更する』『自ら動かす』という意味であるなら——やっぱりできた。昨日話

していた【ステイタス】の隠蔽を行えた。

「もしかして……………」

いや、もしかしなくともヘステイアはこれを恐れているのだ。きつと隠蔽だけでなく他にもできる。その確信がある。

……………神と人との関係は利害関係によるところが大きい。本来であれば自分がヘステイアから逃げ出しても【ステイタス】の更新は出来ないから、【ステイタス】の持ち逃げは出来ない。

しかしこのスキルによつて眷族が自分で【ステイタス】の更新を行えるようになったら。

「神様が死ぬって言っていたのも……………」

自分が逃げ出したときに止められるのは自分だけだと思ったからだろう。

もし、このスキルの発現方法が周知されてしまえば。

もし【ステイタス】以上に強い実力への疑いを持たれて神に尋問され、うっかり話してしまえば。

神の玩具どころじゃない。下手をすると下界で禁じられている【神の力】アルカナムの行使も許される事態になる。

ならいつそ知らない方が良いと思つたのだ。教えない方が良いと。そんな目にあわせられないとヘステイアは思つたのだ。

信用されていない、信頼されていないと思つたがまだ出会つて一日であるなら当然のこと。

むしろヘステイアは出会つて間もない自分にそこまで思つてくれたのだ。そう思うと胸の奥が温かくなる。

「心配しなくても僕から離れていくことは無いんだけど」

もし、離れることがあるとすればヘステイアにそう望まれたときだろう。その時まで、自分はヘステイアと共にいることを既に決めている。勿論、出来ることなら仲良くなりしたい。リリの事でヘステイアに良く思われていないことは重々承知の上だ。仲良くできなかつたときはその時だが、その時^死まで諦めるつもりはない。

「——僕は総てを愛したい。……………なんてね。壊したらだめだと思うけど」

黄金に輝く獣が言った。『私は総てを愛している』と。壊してしま
うが故に、それが愛だと悟った物語の主人公ではない彼だが、自分か
らみれば英雄主人公に足り得た。

異世界の知識を得たばかりで、異世界の物語に魅了され祖父が話し
た以上に、ハーレムを心の底から望み、どうしたらよいのかを考えた。
ハーレムの女の子たちが一人の男にヤキモキとするのを見て、ハー
レムが一人一人への誠実さを欠くのではと苦悩した。

彼とは心境も状況も全く異なるが、あの時の自分には救いのような
言葉だった。

誰もが理想とするのは、総てを救えるような英雄ヒーローだろう。

しかし自分が目指すのは自分に守れるものをきつちりと守れる存
在だ。大切だと思う人を大切にできる、そんな当たり前で、難しい事
の出来る人だ。

漢ならハーレムを。そう語った祖父の器の大きさを、幼き頃の自分
はハーレムという言葉に垣間見た。祖父の語る英雄。それが初めて
の憧憬だった。

好きになった女の人を幸せにするのは一人でも大変だ。そんなの
はわかっている。だが、自分が好きになった多くの人達総てを幸せにで
きるなら、それを英雄と言わずに何と言うのだ。

「まだまだだ。……僕はリリを幸せにしてあげられてない」

リリに自由を与えた。彼女に好かれたと思った。リリの事を愛
しているかと、聞かれれば愛していると答えられる。

でも、彼女の願いには応えられない。リリだけのベル・クラネルに
はなれない。それが申し訳なくて申し訳なくて……でも願
わずにはいられない。

『英雄になりハーレムを作る』

自分にとって原初の英雄である祖父が語る、それが出来る英雄漢に自
分はなりたい。

「うん、こうしている時間が勿体ない」

考えている時間が惜しい。トレーニングを再開しよう。

まだまだ自分には足りない。力も。それを振るう事の出来る環境

も。……女の子への気の利かせ方は特に。あと女心への理解も足りない。

ハーレムの難しさを再確認して、ただ、最強の自分を目指して今は体を動かす。

「あ、全然身体が鍛えられてない」

実感としていつもの一割にも満たない。いつもなら息が上がるくらいに疲弊するのだが、もしかしたら【起死回生^{レ・アニムス}】が働いているのだろうか。

脳裏にある【ステイタス】のアビリティの数値が上がっているのも、もしかすると思っていた以上に負荷が少なかったのかもしれない。
【常想強我^{フォルティス・イデア}】で【ステイタス】の効果を切れるかどうか試すとあっさり出来た。一応、オンオフが効くのを確認してもう一度オフにする。
「さて、もうワンセット頑張ろう」

どんな苦労だろうと惜しむことは無い。

……それにしても、リリのアビリティの数値が多いとなると、これはなんと言ったらいいんだろう？

— — — — —

「おかえりなさいベル様」

「うん、ただいま」

ホームに帰るとエプロンを付けたリリが出迎えてくれる。昨日決めた食事当番の通り朝食を用意していたようで、良い匂いが漂っていた。ヘステイアはまだ眠っているようだ。

「遅かったようですが、何かありましたか？」

「ちよつと時間がかかっただけ」

テーブルに用意してあった朝食は目玉焼きとトーストに、昨日の残り物のスープという簡単な物だ。とはいえ、リリのエプロン姿が映えている。若奥さん、いや幼妻^{おさなつま}だろうか。

「——昨日のベル様の料理のようには……あの、ベル様、聞いてま

す?」

「ごめん。見とれてた」

「え、なにに……もうっ! ベル様のバカっ!」

お玉杓子を持って怒るリリも可愛い。と言えればいいが、怒られそうなのでやめておく。

「……………まったくもう」

「ごめんごめん。で、何の話だっけ?」

「もういいです……………。早く食べてください!」

何か失敗したかなあ、と反省しつつソファに座ってリリの作った朝食を食べた。

食事を終えた段階になってもヘスティアは起きてこず、リリは作つてある朝食を食べるようと書置きを残して支度をする。

「それじゃ、リリはノームのお爺さんの所に行つてきます。ベル様の預けている宝石も受けとつてくればいいんですよね?」

「うん。ただ、気を付けてね。特に変身するときは……………リリが悪さしてた時、かなり恨まれてるでしょう?」

「はい。でも、ここで変身していくので大丈夫ですよ」

とはいうものの、どう変身をするというのだろう。

「貴女の刻印きざずは私のもの。私の刻印きざずは私のもの……………どうです、ベル様? ちょっとベル様を意識してみました」

「おおお……………」

赤眼に白い髪、白い肌。まるで『女の子のベル・クラネル』のような姿に面食らってしまう。身長的に妹と言つても十分通用しそうだ。

「兄さん……………どうです? ぼいですかね?」

「うん。とつても可愛い妹で通じるよ」

「もーそんな風な褒めかたしないでください!」

とはいつても可愛いものを可愛いと言わないでどうする。頭に手を伸ばすと避けられることはなかった。姉も居なかったが、妹も居なかった。もし居たらこんな気持ちになるのだろうか。

「可愛いかわいい」

「もう………」

恥ずかしくなったりリリが逃げ出すまで暫くの間その髪を撫で続けた。

リリが出かけて行ったあと着替えを済ませ、帯刀してダンジョンに向かう。ヘスティアは出るころになってもまだ寝ていた。もしかすると夜更かしをしたのかもしれない。

今日は色々と試したいこともあるので少し楽しみだ。ヘスティアとの約束の意図は全力を出すときにバレないようにしろ、ということだ。でも、もしかするとスキル【大魔法使^{アルス・マグナ}】でなんとかできるかもしれない。

期待に胸をふくらましつつ、ダンジョンにもぐっていく。

E—E—E—E

ダンジョンを視認されない程度の速度で駆け抜け、とろくさく動いていたモンスターを殺しつつ、17階層の正規ルートから遥かに離れてダンジョンの一番端にあるだろうルームにたどり着く。

「さて、まず【ステイタス】」

自分の身体に刻まれている【ステイタス】を意識してアビリティの欄を見る。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : SSS 3597

耐久 : SSS 3000

器用 : SSS 2081

俊敏 : SSS 3524

魔力 : I 0

「トータル上昇値1万2000オーバー、かあ………」

流石に疑わしい。しかしスキルの効果でそう出ているというのならそうなのだろう。ヘスティアに見せてどんな反応をされるか見ものだとは思いますが、これくらいは覚悟していると思う。多分。

早く強くなれることに越したことは無い。トレーニングを終えてからの数値より微々たる量上昇しているが、モンスターを倒したせいだろう。今1上がった。

さて、待望の魔法だ。

自分の背中に刻まれている【大魔法使^{アルス・マグナ}】を意識する。

途端に周囲に漂う魔素、ダンジョンに宿る魔力が手に取るように理解が及び始めた。第六感、というやつだろうか。万能感が自分の身体を満たしている。

まずは周囲の魔力の収束、分散を試し、属性を付与する。この「属性」はどうかやら地水火風やその発展形だけではなく、効果や概念と言い換えた方が良いのかもしれない。刀には『不壊』の属性が付与できた。

次は魔力の放出そのものによる攻撃の実践だ。魔力を手元に収束。付与する属性は『非殺傷』だが……成功。これで加減が容易になる。全力で殴っても人的被害はゼロで終わらせれる。しかし今試すのは魔力そのものの攻撃力で、拳や刀に乗せられるかは後で試そう。収束収束収束収束……。

出来上がった白色の光球をこれ以上圧縮すれば結晶化することをスキルが告げている。高純度の魔石が出来上がるという。自分の精神力^{マインド}を使っていないせいか、疲弊は一切ない。

流石に人がいるかもしれない方向にやるのは気が引ける。指向性をダンジョン外に行くように向けて射出。

「……………あ」

——それは白く太い光の奔流だった。

しかし、ダンジョンの壁だけでなく、ダンジョンの向こう側にあった人工物もぶち抜いていく。山を吹き飛ばすというほどじゃなかったが、ルームの壁が全て無くなる程の大出力だった。すぐさま周囲に漂う魔素を回収して一度精神力^{マインド}に転換して魔力を放出。精神力^{マインド}が減

る感覚を理解する。その魔力に『土』の属性を付与して、壊れた部分を修復して穴を埋めなおす。自分の魔力にも滞りなく属性が付与できた。

「というかまずい。『非殺傷』のとおり視界の奥で何人か人が真っ裸になつて倒れていた。生きてはいたが、あの建物がもしギルドの建物だったらどうしよう。……うん、バレないはずだ。すぐ直した。」「よし、気を取り直していこう。あとは……」

これから再現するのは『夫婦剣』だ。放出した魔力に軽度の『引力』と手に帰るよう『帰還』、『不壊』の付与は……出来た。結晶化、形状固定、着色。片方を投げれば、ちゃんと戻ってきた。これが出来るのならあの物語で言うところの『宝具』も出来るだろう。

次に試すのは『己が栄光の為でなく』。素性隠しの『宝具』。これさえできれば、自分の「ステイタス」に対するヘステイアの心配は全て杞憂に終わる。原理はリリの魔法に似ているのかもしれない。

付与する属性は『認識阻害』『変身』『偽装』。それらを付与した魔力を黒い霧状に変化、身体に纏わりつかせる。ついでに服装も誤解されるようにしておく。丁度いい具合に霧の濃さを調節。

「これなら問題ない、かな？」

変身を試してみる。リリとヘステイアに順に変わってみると、身長に合わせて視界が低くなった。視界だけ戻すことも出来るようだが、それはそれで動きの具合が悪い。出来るだけ身長差のある人には変身しない方が良さそうだ。

「うーん。一応試してみたいことは終わったんだけど……」

もう一つあるが、さすがに再現は難しいんじゃないだろうか。いや、試してみても損はないだろう。一つ一つ仕組みを考えたら出来そうにない。ごちゃごちゃと考えずに『魔法の靴』をイメージする。――出来た。

精神力を消費したが、イメージした通り肩掛けポーチで見た目の容量は小さいが、中に手を突っ込むと肩まで入る。でも、これだと取り出すときが大変かもしれない。

異世界の知識にあった『四次元ポケット』の概念は――付与でき

た。試しに刀と石を入れるとポーチの中の暗闇に消えた。ひっくり返しても何も出てこないが、手をポーチの闇の中に入れて刀をイメージすると手の中に現れる。リリへのプレゼントにいいかもしれない。さて、となると『魔術』そのものが使えるのかもしれない。『無限の剣製』をイメージすると精神力を消費する。微量の精神力の消費はあるが、先ほど作った『夫婦剣』を含めて自分の知る限りで刀剣の類いの再現ができそうだ。

あと、あれば便利だと思うのだが『彼』と同じ異世界の物語に出てきた『英雄王』の宝物庫。不敬だと言われそうだが——……いや、流石に、あれを全て再現するのは不可能だろう。

無限に等しい財なのだ。それを再現しようというのは流石に無茶だ。自分でも不遜な行いだと自嘲する。

しかし、彼の宝物庫だけであれば、再現はできるかもしれない。今しがた作成した『魔法の靴』より遥かに使いやすくていい。

自動的に蒐集する機構は無くていい。自分には過ぎたるものだ。それ以外の機構は残そう。

……ああ、そうだ。『魔法の靴』とリンクさせよう。恐らく精神力の消費も庫の分だけ少なくて済む。庫の対象を『魔法の靴』に変更して、具体的なイメージを魔力に乗せる。

「うぐっ……!?!」

急に身体力が抜けて、崩れそうになる。これが精神疲弊という状態なのだろう。急ぎダンジョンの魔力を魔素に変換、魔素を精神力に変換して回復させる。何はともあれこれで『倉庫』はできた。

『魔法の靴』の中に入れていた石を『倉庫』で前方に射出できるかを試す。黄金の揺らめきを手元に残して拳大の石は前方に飛んでいき、威力は自分の一撃よりかは遥かに低いものの、壁を抉ってそれなりに大きい凹みを作り上げた。

「うん。……ちよつとずつ再現していけばいいよね」

あの魔術の再現は出来たのだから自分で『宝具』は作れる。もしくは人に作ってもらったものを蒐集していくのも悪くない。一から自分だけの宝物庫を作るといふのは少し。いや、かなり惹かれた。

でも『魔法の鞆』を紛失した時が怖いな。対策として『魔法の鞆』の使用権限を「ヘステイア・ファミリア」の団員限定に設定し、さらに『倉庫』経由で入れた物については自分の承諾なしには取り出せないようにしておく。

周囲から感じる魔力が弱まっていることに気が付き、マインド精神力を消費して探查魔法を創造、出来た。

17階層全域を調べると、やはり魔力が薄くなり、魔物の出現頻度が極端に下がっていた。

「そろそろ離れるかな」

『フォーサムワンスグロウリー己が栄光の為でなく』の変身に『透明化』の付与を施して人の目に映らぬよう姿を消す。その他に諸々の効果を施し、臭いや熱といった姿が認識される恐れを極力減らしていく。

さて、これで完璧のはずだ。誰かに見つかることはないだろう。

「ステイタス」込みで全力で力を振るえる階層を目指して下へ下へと向かった。

バグ・クラネルは歓喜して

それは突然現れた脅威への対策だった。迫りつつあるその脅威から逃げるように、沈下させていく。

——あれは、いけない。

デウスデア

神々の仕業かと思いきや、そうではなかった。忌々しき、あの憎き者たちの気配は感じなかった。

初めは地上に近い場所。そこから異常は起こり始めていた。破壊されたわけではない。ただ奪われていく。我が子らが滅されたのではなく、その者の周りから直接力が奪われていく。徐々に近づいてくる。初めての経験だった。

——亀裂が入る音が響く。

ただでは終われない。

——ぴきぴき。

あの脅威をただ帰してはならない。

——人型が壁から落ちた。

あの脅威は神々であると思わねばならない。

——アアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

地上から遥か遠い地の奥底でモンスターが一人産声を上げた。

—E—E—E—E—E

探査魔法は便利だった。次の階層への最短ルートを見つけられて、正規ルートを通るよりも大幅に時間の短縮が出来る。精神力の消費マインドはするもののダンジョンからせしめればよいので、脳裏に映る「ステイタス」の『魔力』のアビリティも上がる一方だ。今現在で2500を超えた。

それにしても、自分の姿を見えないようにしてはいるが、念のため
に人やモンスターを避け、探査魔法で気が付いたダンジョンの中でも
特に異様な雰囲気を感じた場所には敢えて関わらないようにしてい
る。『神の恩恵』^{ステイタス}で五感が強化されるといふなら、自分の姿も見えない人
物がいるかもしれない。

可能性を潰しては見たものの、その可能性が少しでもあるならな
方が良い。……ひと階層につき所要時間十秒に満たないというの
は、流石に気取られることすら危うい。「ステイタス」が手に入ったお
かげなのだが、格段に生身の時よりも移動速度が向上している。時折
床に穴をあけて下に降りているので、もっと早いかもしれない。

別に時間を競っているわけではないのだが、100階層あたりから
気を付けなければならなくなったのだ。

100階層のあたりから、自分からしてみれば誤差の程度ではある
が、徐々に床や壁の硬度は増して壊れにくくなった。そしてダンジョ
ンに宿る魔力は強く感じられるようになっていく。活性化している
と言いつつ換えた方がいいのかもしれない。

毎秒ごとにひと階層で1000近いモンスターが生み出されてい
た。何度もその場面に出くわしかけたし、探査魔法によって事前にわ
かっていたなければ、生まれた直後のモンスターと鉢合わせてしまうこ
ともあっただろう。

だが一番変わったことは、モンスターたちの挙動だ。上で存在を
知った食糧庫^{パントリー}がないのも原因なのだろう。モンスターたちは互いに
争い、そして魔石を喰らっていた。驚いたことにモンスターは共食
いを行っていたのだ。魔石を喰らい、個としての能力を高めていく。

それを知った時、蠱毒のようなその光景に震えた。
「さて、そろそろいいかな」

新しい階層に足を踏み入れる。計算が間違っていないければ127
階層だ。

……入ってすぐに気が付いた。100層からの光景としては此
処が最も如実だ。地形はここから遙か上の49層のように階層一つ
が巨大なルームとなっていて、空^{天井}がとても高い。此処への入り口は高

台となっており、足を踏み入れた途端、その地獄のような様相が一望できる。

喰らい、喰われ、そしてより強者に喰らわれる。モンスターの一体はより強さが純化されていく。ルームの端に行くほど、その激しさは増す。

——探査魔法を使わずとも感じる強いモンスターの気配に武者震いした。

ただ、全力が振るえることに感謝し、自分の生きる世界でも未知が溢れていることに歓喜する。

……村では常習化していたが、生活圏内にクレーターなんて作ったら怒られてしまう。実際にオラリオに来る途中で怒られた。幾ら小さくとも、荷馬車なども通る道に穴を作ったら本当に迷惑される。小山を吹き飛ばして開拓できる場所が広がったと感謝されていた村が、あの時は唐突に恋しくなった。

しかし、此処はダンジョン。幾ら壊そうとも、時間さえ経てば人の手を煩わす事も無く元通りとなる。気にすることなく力を振るえる。

「よい、しよつとー」

新しい獲物を見つけたとばかりに自分のいる高台まで襲ってきた体長300Mはあるだろう蛇型のモンスターの頭部を拳で一撃。しかし、地上やダンジョンの上に居たモンスターとは違って、頭をのけぞらせるだけに終わる。

「あれで浅いんだ」

やはり上に居たモンスターたちとは一味も二味も違う。自分が下に降りると大蛇のモンスターは頭を振り、大口を開けて再び襲い掛かってくる。

もう一度、拳を握りしめて一撃。——今度は消し飛ばせた。

だけでなく金属質な轟音を立てて天井に大穴が開き、争いあっていたモンスターたちは動きを止め、自分と視線が合う。

「さて、と。どこからでもかかってこい」

戦闘狂な自分のスイッチが入る。モンスターたちは一斉に襲い掛

かつてきた。

——モンスター殺すべし。慈悲は無い。

滾る、滾る。血が、肉が。モンスターを打倒し、打ち負かせと。鍛えた力を十全に振るえと。

血が迸り、肉が千切れる。

余波に巻き込まれて骨が砕ける音がルームで木霊し、殴られたモンスターは塵の山へと変わる。

……村ではもう感じられなくなっていた満足感で、自然と笑みが浮かぶ。全力を振るえなかった分、なおのこと。

——ああ、そうだ。日々のトレーニングでは物足りなかった！

己の限界を超え続けるだけの一週間は何が足りなかった!!

再び現れた蛇にダンジョンの毒を吹きつけられるが、スキルが十全に働いて効くことは無い。

巨大な鼠のモンスターが齧りつくが、そんなもので傷はつかない。腕を振るって、魔石を砕く。

巨大な狼に啣えられた。顎を引きちぎり、上顎を掴んで放り投げる。

巨大な怪鳥が耳障りな声を上げる。周囲に罅が入る程の怪音波を、拳圧を飛ばして終わらせる。

「あは」

この瞬間に楽しさを感じてしまっている。それが声に出してしまう。

ルームの中心にいた天井そらに届くのかと思うほどの一際巨大な大鬼が腕を振るい、辺り一体のモンスターを掴みとって口に運び、咀嚼する。

そんな大鬼を自分が殴り飛ばすと大穴が空いた。

「ははははー」

千切っては投げ、千切っては投げをくり返していく。

巨大なモンスターばかりかと思えばそんなことは無い。黒い波のようになつた無数の蟻がダンジョンの壁から生まれて押し寄せてくる。黒い濁流に飲まれたモンスターが一瞬にして灰になり、魔石が粉々に喰われ塵へと変わる。

そんな蟻たちに対して、拳に周囲の魔力も収束させる。イメージするのは物語を見た多くの人から『白い魔王』と渾名された魔法少女。信念を曲げないその意地の強さを見習う憧憬の一人。………気のせいではないければ拳の輝きは増し、大鐘楼グランドベルの鐘の音が響いている。

「これが僕の全力全開………」

溜響める、溜響めて、溜響め続けろ。

魔力が結晶化する臨界まで魔力を溜め続け、地面と空の間まで跳ぶ。

「スターライト——ブレイカアアアアア!!」

掛け声に合わせて、全力の腕の振り抜きと共に撃ち放つ。極光の奔流は視界に映る全てを真っ白に染め上げた。黒い波は白い奔流に飲まれて掻き消える。地面を抉り、天井も抉り、遙か先に見える壁にも魔力の奔流と拳圧によって削り取られた跡がくつきりと見える。

威力で言えば17階層で打った時の倍、いやもっとだろう。

再現した攻撃の余韻に浸りつつ『不壊』の属性を付けた刀を『倉庫』から抜刀、背後に多重次元屈折現象に事象飽和を乗せた斬撃を飛ばして地面に降りる。

三度振るって出来た十二の斬撃は背後にいたであろうモンスターを巻き込み階層の床を削っていた。モンスターが減ったルームの中心でしばし休息する。

「あああ………」

心地よい陶酔感が続く。『温泉』というものに入ったらこんな気分になれるのだろうか。

正気に返ってみると、少しだけ恥ずかしくなった。自分でも思っていた以上にストレスが溜まっていたようだ。誰にも見られていないからと、少しはしやぎ過ぎた。

「うん。たまに来るかな」

でも、気晴らしにはとてもよかった。目的は果たせたことだし帰ろう。また来ればいい。今は心配をしてくれる人たちがいる。

魔石は回収しても換金できないので放置だ。落ちていたドロップアイテムだけを拾って『倉庫』にしまう。

——アアアアアア……。

128階層へと続く階段の方から空洞音が響く。

何かの声のように聞こえたその音は、帰ろうとしていた自分の耳にしつこくこびりついた。

E—E—E—E

姿を隠して3階層の人目のないルームに行き、上に着ていた着流しと軽鎧を脱ぎ、魔力で服を編んで着る。ギルドを利用できるようになったのは良いが、実力を隠すというのは面倒だ。身体を動かしてきかせいかそんなことを思ってしまう。

何体か居たモンスターを倒し、何食わぬ顔でダンジョンから出る。日の傾き具合から言って時間帯的にはおやつ時だろうか。昼食にジャガ丸くんを買って食べたが、運動したこともあって小腹がすいた。通りにあつた屋台でジャガ丸くんを一個買って、ギルドに向かった。

ギルドに着くと自分のアドバイザーになったエイナが受付に居て作業をしていた。誰も並んでいない。

エイナは顔を上げて入ってきた自分に気付く。

「あ、ベル君」

「こんにちは、エイナさん」

「うん、こんにちは。……あのベル君、もしかしてダンジョンに？ その格好で？」

「そうですけど……」

何を言っているのだろうか。自分の今の肩書通りに駆け出しの冒険者らしい格好をしている。見た目的には布の服だ。これでひのきのぼうを持ったら異世界の知識に曰く、駆け出し勇者としては完璧だ。

勇者ではないので、腰には一応魔力で作った見た目以上に切れる短

剣を挿している。エイナが不思議に思うようなことは無いはずだ。

しかし、自分が肯定すると「私、怒ってます」と言わんばかりにエイナの整った眉がっり上がっていた。

エイナが隣の同僚の人に一言告げて表に出てくる。

「来て、ベル君」

怒ってる。

「エイナさん？」

「いいから来て。ちよつとお話ししましょう」

エイナに個室へと連れられて入った。

怒られた。それはもう怒られた。お説教された。

「まったくもう。…………一人で【ファミリア】を探したって言うから感心してたのに、なんでそんな普段着みたいな恰好でダンジョンにもぐるのかなあ……………」

「……………はい」

とはいっても、服自体の耐久性は抜群なのだ。魔力で作っているから、早々のことでは傷つかない。もともと傷つかないけど。そんなこととは言えないから仕方なく怒られる。

エイナは大きく息を吐いて、冷静さを取り戻そうとしていた。

「それで、どうだったの初めてのダンジョンは？」

「あ、はい。3階層にもいけました！」

嘘は言っていない。127階層まで行けたなんて正直には言えない。

「私、言ったよね！ 1階層までって！」

また怒る。

「でも余裕でしたよ！」

「余裕って…………昨日【ステイタス】を貰ったばかりで？ そんなわけあるかー！」

「そんなわけあるかって言われても……………」

事実なのだからしょうがない。はあ、はあ、と怒り疲れたのか荒い息を繰り返すエイナに少しドキドキした。

息を整えたエイナの表情は少し憂いを帯びていた。

「いいかな、ベル君。確かに今は大変なんだと思うよ？ 今日神ヘスティアが来たけど【ファミリア】が出来たばかりでお金も必要なんだと思う。でも、そうやって生き急いで自分の力量を誤解したり、知識不足で帰ってこなかった冒険者を私も何人も見てきた。勿論、ベル君にも死んでほしくないから言うの」

——冒険者は冒険をしちやいけな。昨日と同じことをエイナは言う。

しかし、今日聞いたその言葉にはエイナの経験した悲しみが強く感じられた。

「もう無茶しません」

「本当に無茶しない？」

自分でも無茶だと思うことはしない。たまにしか。ジトつとした目で見られる。

「……………はい」

「嘘だ。目を合わせてくれない」

しまった。

「まったくもう……………。うん、決めた。ベル君、今日この後時間はある？」

「……………はい、あります」

正直疲れた。もう帰りたい。でも、美人のエイナからのお誘いであれば断るわけには——！

「もう今日の仕事は終わりそうだから、本当なら昨日からやっておくべきだったんだけどこれからダンジョンの事、私がつちり教えてあげる。どれだけダンジョンが危険なのかベル君わかってない！」

「わかってますよお……………」

なぜ危険なのかについては英雄譚でもよく見た。でも危険だとあんまり思っていないのは事実だ。

世話焼きなお姉さんといった風に心配してくれるエイナに悪い気はしない。悪い気はしないのだが、ただちよつと面倒だなど思ってしまう自分がいる。

しかし、実力を偽っているせいで心配させている。つい面倒だと

思ってしまったことが罪悪感を生んだ。

熱心に教えてくれるエイナを見て、実の姉というのが居たらこんな感じなのかなあと、教えられながら取り留めもなく思う。

つついとお姉さんみたいだと呟いてしまつて、手に持っていた教材を頭に軽く置かれて、早く覚えるよう急かされる。

……ちよつとだけ、その少しががった耳が赤くなっているのが見えた。

ベル・クラネルは疲れて

エイナのしごき………というほどではなかったが、ギルドの資料室で行われた二人きりの勉強会を若干疲れながらも受け終った。

新しくダンジョンについて知れたのは収穫だ。しかし、同時に自分の物覚えはあまり良くないことが発覚してしまった。そんな自分を見かねて「厳しかったようならごめんね」と顔色を窺われて気遣われたなら、男として情けないところは見せられない。齧りつくように、覚えるよう言われたことを覚えた。

勉強をしていた資料室から出て、エイナの後ろに続いて受付へ行く。

「それじゃあ、また明日。もしもの時、絶対に役に立つから。無駄にはならないはずだよ。………頑張ろうね、ベル君」

「はい………ありがとうございます………」

それにしても、まさか自分にこんな弱点があったとは思ってもよらなかった。異世界の知識が沢山あるから、というのは言い訳にならない。………これも英雄になるために必要な事だと言いついて聞かせて、継続していくことを決意する。

エイナに別れを告げてギルドから出ると夕暮れになっていた。子供が同じ年ぐらいの友達に手を振っているのを見かける。

——今日教わったが、現在地図が存在するのは59階層まで。………報告によるところも大きい。現存する【ファミリア】全てが59階層に到達できていない。現在オラリオの一翼を担っている【ロキ・ファミリア】も行けていないようだ。英雄の域だと言われているLv.6の冒険者が三人在籍する【ファミリア】でもたどり着けていない。

「何階層まであるのか」と質問をすると、エイナの推測だが「100階層以下が存在するかどうかはあやしい」とのこと。

じゃあ自分が今日行ってきたのはなんだと言いたかった。

「………。まさかあー」

既に自分は英雄と言われてもおかしくないんじゃないか、と思いかけたが

そんなことは無いと改める。

異世界の彼らと比べても自分はまだまだ弱く、まだ何も為せていない。127階層がどうしたというのだ。彼らならもつとすごい偉業が果たせる。自分はまだまだ英雄足り得ない。ハーレムもしてない。

まだまだ足りないぞー、と疲れている身体に活を入れて、二人が待っているホームへの帰り道を辿った。

「おかえりなさい、ベル様」

「ただいま、リリ。神様、ただいま帰りました」

「おかえりーベル君ー」

教会の隠し扉を開け、階段を降りると、リリが出迎えてくれる。ダンジョンに持っていく荷物を整理していたようだ。リリのバックパックの周りを物が囲んでいた。

ヘステイアはソファに座っている。片手に本を持っていることから、本でも読んでいたのだろうか。テーブルの上にヘステイアは本を置き、隣に座るように言う。

「それで、スキルの検証しに行ったんだらう？ どうだったんだい？」

「はい。概ね把握できましたよ」

ヘステイアが隠したスキルもわかった。

「……………そつか。それじゃあ、あまり上がらないかもしれないけど「ステイタス」の更新してみようか。リリくんはちよつと階段の方に行つてくれるかな」

そう言ったヘステイアにリリは返事をして、階段の方へと姿を消した。

「さて、ベル君。上着を脱いでベッドに横になるんだ」

少し声量を抑えてヘステイアが言う。

少しだけ恥ずかしいのだが、更新のために必要とあれば仕方がないだろう。ほらほら、と急かされてベッドの上につつ伏せて横になる。そしてヘステイアは自分の上に跨った。

やっぱり座り心地が悪いようだ。昨日と同じく、位置を調節しているようだった。

……：そういえばリリの時も跨っているのだろうか。自分なら体格に差があるので苦は感じない。だが、身長が同じくらいのリリはしんどいんじゃないか、と少し不安に思う。

リリがしんどくない体勢、例えば座ったままできるのであれば別に跨る必要——いやいや。ヘステイアが態とやってるわけがないだろう。

そんなえっちい神ひとだとは思えない。いや、魅力的な人神ではあるけど。

「あ——」

「どうかしましたか、神様？」

「んー、何でもないよ」

背中に「ステイタス」がない事に驚いたようだったが、親交のある神に今日聞いてきたのだろう。もとより「ステイタス」の操作の権限を明け渡していたこともあり、神血イコルが垂らされ、隠蔽は滞りなく解除された。

「さてさて、ベル君の【経験値】は——」

背中でもぞもぞとしていたヘステイアの動きが止まった。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : SSS 4 9 4 3

耐久 : SSS 4 3 6 5

器用 : SSS 3 2 6 2

俊敏 : SSS 4 5 8 9

魔力 : SSS 3 2 6 7

《魔法》

□

《スキル》

リアリス・フレージェ
【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・理想おもいが続く限り効果持続。

- ・理想の丈により効果向上。
- ・精神異常に対する完全耐性。

【常想強我】
フォルティス・イデア

- ・ステイタスの自動更新権。
- ・理想が続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

【起死回生】
レ・アニムス

- ・精神力を消費して再生させる。
- ・瀕死度合によつて効果向上。
- ・意思の強さによつて効果向上。

【大魔法使】
アルス・マグナ

- ・魔力・魔素における絶対干渉権。
- ・魔力放出。
- ・対象への属性付与。
- ・周囲の魔素を精神力に変換し吸収する。

【

- ・あらゆる不可能を不可能のまま可能にする。
アクティブ・アクション
- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

自分でも異常だとわかる「ステイタス」を見て固まったのだということ
は察しがついた。

「……はっ!? ……ベル君今日は何処まで行つたんだい?」

「3階層は行きました」

「……3階層は、ね。それで、どこまで行つた?」

「3階層は! 行きました!」

「言え! 言うんだベル君! なんでこんな数字が見える! ボクの
目は狂つてないぞ!」

「にやにがれひゆかあ!」

頬を引っ張られ、上手く喋れなくなる。

「何やってんですか二人とも……………」

何事かと顔を見せたりりに呆れられ、ヘステイアとの攻防は仲裁さ

れた。

ヘステイアは「ステイタス」の更新を終えたが、自分の「ステイタス」が更新された気配はなく、ただ「ステイタス」の写しを見せてもらって、【常想強我】フォルティス・イデアの効果の間違っていないことを確認する。

リリはあまり表情には出していなかったが「ステイタス」を見て驚いていたようだ。直後にしようがないと言いたそうな諦めに似た表情になっていたが。

そんなリリに「こうなつたヘステイア様は諦めませんよ」と言われたので正直に白状する。リリの言葉には実感がこもっていた。

自分が居ない間に何かあったのだろうか。もしかしてリリが悪さしていた時の事を問い詰められて白状させられたのかもしれない。

「姿は見られていないんだろうね？　ちゃんと隠したと言っていたけど」

ヘステイアは胡坐を組み、ベッドの上に正座する自分に片目を瞑つて訝しげに聞いてくる。

「はい。それは抜かりなく」

「ならよし。今回の一件は許そう。……………それに、【ステイタス】に則つた行動だなんて、君の成長を阻害するようなものだどボクも反省したんだ。でも、ボクには方法が思いつかなかつた。……………無理を言つたよ。すまないベル君」

「いえ、良いんです。神様の心配はよくわかってますから」

「ならいいんだけど……………でも、本当に気を付けておくれよ？」

ヘステイアに念を押され、改めて慎重に動くことにした。

「はい。ありがとうございます。それで、今日の実験で出来ただけど、リリにプレゼントがあるんだ」

「リリにプレゼント、ですか？」

「うん。はい、これ」

『魔法の鞆』だ。『倉庫』の中に入れようとするのと弾かれたので入れられなかった。よくよく考えてみれば、倉庫本体を倉庫の中に入れるのは不可能だった。

別に入れられなくても構わない。もし盗まれても「ヘステイア・ファミリア」の団員でなければただのポーチでしかないからだ。

リリは不思議そうな顔をして『魔法の鞆』を手に取る。

「そういえば帰ってきてから持つてましたね。ポーチ、ですか？ 容量も大して入らなさそうですし、ダンジョン用ではないですよ？」

その、リリの感性から言ってもお洒落とは言い難いんですが……」
見た目はただのポーチなので仕方ない。お洒落じゃない、というのは少し傷ついた。一応、リリの持っているフード付きローブの色合いに合わせてみたんだが。……後でちよつと改良しとこう。具体的には留め具の辺りでワンポイントつけよう。

「まあ、中身を見てみて」

そういうと、リリは腕を肩まで突っ込んで驚く。ヘステイアも目を丸くして驚いていた。

「——!? ベル様！ これって!!」

「うん、これさえあればリリもサポーターじゃなくて冒険者として活動できるかなって」

「……でも、これ人前で使えませんよ!」

「大丈夫。『ヘステイア・ファミリア』の眷族にしか使えないようにしてるから。調べられてもただのポーチだよ。それに紛失した時也使えないことはないから。試しに何か入れてみて」

「は、はあ……」

リリは啞然としながらも、ベッドにあった枕を入れる。ポーチの口よりも大きかった枕は、何の抵抗もなくポーチの中に納まった。

「中に手を入れて。入れた物を想像してみて。手に当たった?」

「え、ええ……」

「それで取り出せるんだけど、今はそのまま取り出さずに手を抜いてくれる?」

リリが頷いて『魔法の鞆』から手を抜くと、その手元に『倉庫』から枕を取り出した。

「ええ!? 今どこから枕が出てきたんですか!! ベル様!?!」

「まあ、うん。簡単に言うると今日作った魔法で取り出せるんだ。この

魔法で収納も出来る。ただ、この魔法で入れたものをその鞆から出すには僕の許可がいるから気を付けて。…………見られて驚かれはするだろうけどね。使えるなら使っていけないと」

「いや、でも…………」

「まあ、便利なものだと思ってくればいいから。そんなに思いつめなくても、ね？ これでリリも冒険者としてやっていけるってだけだから」

そう言うとりりは一つ大きく息を吐いて、自分を納得させたようだった。

「…………色々と言いたいことはありますが、リリの為とあれば納得するしかないじゃないですかあっ！ ベル様はやっぱり意地悪です！」
頬を膨らしているが、無理をしている様子が見られないので一安心した。リリの頭に手を伸ばして撫でる。

「ありがとう、リリ。これから一緒に頑張ろう？」

「そうやってリリを甘やかすんですから…………」

「むしろ楽しいやない道を歩こうって言ってるんだけどね」

「…………それが良いんです。…………リリにとっては嬉しいんですっ」

リリはそんな風に納得してくれたようだが、ヘスティアは難しい顔をして唸っていた。視線の先がリリの頭に置いている自分の手に向かっていたので手を離す。

「むー。ボクの前で二人がイチャイチャするのにも色々言いたいことはあるけど。…………あのね、ベル君。君は何をやったのかわかっているのかい？」

「わかってますよ。…………空間操作だとか、時間操作だとか。天界にいた頃の神様たちがするようなことですよね」

「ああ、そうだとも。…………『神秘』という発展アビリティはある。でも人間の手で此処までできたことは無いっ！ ぬあああっ！ もうっ、どうしてこうもベル君は世話が焼けるんだっ！ 心配し過ぎてボクは死んでしまいそうだぞっ!？」

髪の毛を掻き乱し、ヘスティアはそんなことを口にする。死にそうだと発言は昨日と合わせて二回目だ。

しかし、ヘステイアの弁には一つ物申したい。

「でも神様、魔法ですよ？ 物理法則を超越した魔法なら、出来てもおかしくないじゃないですか」

「それは、そうかもだけど……、いや、でもだね！」

「過去には不老不死になる方法を見つけたという『賢者様』も居るんです。これくらい人間に出来てもいいでしょう？」

「ベル君は何と比べてるんだい——……いや、もう言わないでおくよ。確かに使えるものを態々使わないのは勿体ない。ただ、気を付けるんだぞっ？ いいかい？」

ヘステイアは折れたあと真面目な表情を作ってそう言った。

幾ら関係者以外の人間に使えないと言っても、『魔法の鞆』と知られば狙われることは確実だ。リリにも、ヘステイアにも火の粉がかかるかもしれない。……その火の粉を振り払えるように、もつと強くないと。

「はい。心配させてごめんなさい。上手くやりますから神様は信用してください」

「……ああ、信用させておくれ。リリくん、言われなくてもわかってるだろうが、ベル君のことをよろしくたのむよ？」

「ええ。でもまあ、ベル様はちゃんとわかってやってくれるでしょう。むしろリリが足を引っぱってしまわないよう気を付けます。……頑張りますね、ベル様っ」

そうリリが宣言したと同時にきゅるる、と腹の虫が鳴いた。二人の視線が集まって居た堪れなくなる。

「……夕食の買い出し行ってきます」

「うん」

「はい」

生暖かい目で見られて、むず痒かった。

— — — — —

「……なんだい、これ」

「お金です」

「見ればわかるよっ！」

少し奮発した豪華な食事をして、それぞれがシャワーを浴びた後。朝方リリと相談しておいたようにヘステイアの前にヴァリス硬貨の入った袋を置く。「ファミリア」の運営資金、総額600万ヴァリス。リリの300万ヴァリスと自分の300万ヴァリスだ。

「朝、ヘステイア様が起きてこない間にベル様と相談して決めたのですが、これを「ファミリア」に献上させてもらいます」

「…………リリくん、これはでも君が悪さをして手に入れたお金だろう？」

「半分はベル様のお金ですが確かにそうです。でも、だからといって死蔵させておくんですか？」

「む」

ヘステイアは感心しないとしかめっ面を見せる。

やはり自分のいない間に、リリはどうやら、今までやってきたことをヘステイアに告白していたようだ。

「それに、今更返すなんてこと出来ません」

「…………それは、そうかもだけど」

「お金に名前なんて書けませんから。使ってもバレやしません」

「…………随分と苦労してきたんだね、君は。やっぱりベル君以上に強かだよ」

そのヘステイアの言葉にはリリは答えず、ただ苦笑した。

「よし、まあいいだろう。でも、これは受け取れない。…………ベル君、君が持っていてくれ。管理は君に任せる。一応君はこの「ヘステイア・ファミリア」の第一の眷族。ベル君は言ってしまうえば団長だぜ？」

「え、僕で良いんですか？」

「良いも何も、君が一番の稼ぎ頭だろうに。それに、リリくんにはそのつもりはないようだしね」

直接そうだと聞くのは初めてのことで驚いた。

——団長。「ファミリア」を率いるリーダー。

ヘステイアはこう言っているがリリはやりたくないのだろうか。

「はい。リリに団長だなんて勤まるわけがありませんから。ベル様が居なければ、此処にリリは居なかつたでしょうし。ベル様がやってください」

そういうならそうしよう。やりたくないどころか、やりたかつたことだ。

「——僕で良いなら喜んでやらせていただきます」

………責任感もなにもまだ全然感じられていないが、リリにも力を借りて自分なりにヘステイアを支えてこの「ヘステイア・ファミリア」を興していこう。そう決意を新たにする。

ヘステイアによって、机の上に置いていた600万ヴァリスの袋を押し寄せられる。重くて持ち上げられなかつたようだ。

「はい。それじゃあ君の言っていた『倉庫』とやらに仕舞っておいてくれ。そこが一番安全なようだからね」

「わかりました」

受け取った袋を『倉庫』に仕舞って寝る前のミーティングを終えた。

二人が寝る準備をしている最中、今日の出来事を踏まえての翌日のトレーニングの時間の割り振りを考える。これからはトレーニングに掛ける時間は倍要るだろう。もっと早く起きるようにしないといけない。

そんな決意をしてソファに寝転がる。ヘステイアが魔石灯の光を落し、ベッドの枕元にあった小型の魔石灯が灯ともって仄かな光が部屋を照らす。

——こうして、自分が正式に団長だと言い渡された「ヘステイア・ファミリア」二日目の夜は更けていった。

バグ・クラネルは心苦しく

なんだかんだとあったものの「ヘステイア・ファミリア」が発足して半月が経った。村に居た頃よりも一つ一つの出来事が充実していて、半月という時間はあつという間のようでもあり、長くもあつた。人と神を問わず、多くの出会いがあつたからだろう。

そんな「ヘステイア・ファミリア」での生活はとても感慨深い。

到底、人に聞かせることのできない「暴れたりない」という理由のもとダンジョンの奥深くに週一回、一人で行く以外にはリリの歩調に合わせてダンジョンの探索を行っている。

重装備でダンジョンにもぐるリリの到達階層は半月で18階層。Lv. は1のままだが、基礎アビリティは大きく上がり、隙さえ見せなければ十分ソロでそこまでやっていける。一般に中層と言われている階層だ。

リリの成長の要因には、未だ未熟な身ではあるがそれなりに強いことは自負している自分が訓練をつけていることが大きいだろう。

しかし、一番はリリにスキルが発現したことだ。そのスキルがリリの成長に一役買っている。ヴァンジュラバニー【執金剛】というスキル。あのスキルがリリの不足していた能力に強い補正をかけて成長を促している。

スキルの補正による後押しを受けて、格上を圧倒できるリリの『魔力』を除くアビリティのランクは最低でもCになり、スキルの効果も加味すればリリの実力自体はLv. 2の中堅程はある。少なくとも1モルドはかたい。

だが、そんな強力なスキルは勿論のことレアスキルだ。すぐさま【ステイタス】を隠蔽、ヘステイア曰く錠ロツクを施したとのこと。口を滑らしさえしなければ大丈夫ということ、ひとまずは事なきを得た。

そんな成長著しいリリに対して、エイナ主導による自分の勉強の発展は乏しい。

ようやくと5階層ぐらいいまで勉強が進んだのだが、時折出されるテストに合格しなければ、それ以上の階層に進むお許し、というか推奨はできないとのこと。アドバイザーが冒険者の探索の進行を制限す

るよう言うのは、職務としては本末転倒だからだろう。忠告は心に留めて「駆けだし冒険者のベル・クラネル」は5階層以下には行っていない。

確かに面倒だと思う時もある。実際には忠告など無視している。ただ、エイナが自分の身を案じてくれていることは分かるので、厄介だと思う以上に気にかけてもらえていることが嬉しかった。言ったら照れられたが、実姉がいればあんな感じなんだと思う。

……リリに聞いた話、アドバイザーであそこまで親身になってくれる人はいないそうだ。

勉強会はエイナと仲良くなるいいチャンス、という下心もあって頑張っているのだが、二人きりで勉強という状況が自分の物覚えを悪くさせているような気がしないでもない。

——ここ半月で特に印象に残っている出来事へ思いを馳せながら、ダンジョン4階層を駆けだし冒険者のスタイルで進む。

リリとは別行動中。ノームのお爺さんの所へ世話をしに行つてくるとのこと、一人でダンジョンにもぐっている。

今日は自分の週一回のストレス発散の日だ。透明化すれば幾らでも進行速度を速められるので、気分転換の散歩だと思いついて進んでいる。時には休息も必要だろう。生き急いでばかりでは疲れ果ててしまう。

初めて行つた時から一回ごとに1階層ずつ増やしているので、今日目指すのは129階層。128階層は灼熱の風が吹き荒ぶ地獄だったのでどう変わるかが楽しみだ。

一先ず着替えをするため、5階層のルームを目指して下へと続く階段に足をかけた。

5階層に来て、人のいないルームを探すために探査魔法を発動させる。索敵をしていると異常を捉えた。

「なんでこんなところにミノタウロスが？」

6階層から上がってきたそのモンスターは、明らかにこのあたりの階層の冒険者では太刀打ちできない。確実に死んでしまう。

見過ごすわけにはいかないだろう。幸いにもミノタウロスの進行方向に冒険者が居て鉢合わせると言うことはなさそうだが、放っては置けない。着替えをしようと思っただが後回しだ。

刀を『倉庫』から取り出して帯刀し、ミノタウロスのいる方へと走る。索敵して周囲に人が居ないことは分かっているが、エイナとの約束もあつて見た目以上の実力を出すのは憚られる。

「……………っ！ 見えたー！」

「ブモ？ ブモオオオオオオオオオオ!!」

傍から見ると無謀をしているように見えるかもしれない。格上のモンスター相手に自棄になった冒険者と映るのかもしれない。だが、放っておけば確実に誰かが悲しむことが判っている以上、自分の都合で脅威をそのままにするのは英雄といえるだろうか。勿論違う。

あと6 M^{メトル} 刀を下段に構え、袈裟掛けに一閃。ミノタウロスを切断できるとどまる少量の斬撃を飛ばして、効率よくミノタウロスの右脇から左肩を切断する。ギリギリ魔石の位置を外してしまったようで、ミノタウロスは塵に変わることなく一拍の間を置き、切った所から少しずつずれる。大量の血が噴き出……………

——バシヤアッ！

「?!?!」

「……………あ」

このミノタウロスを追ってきたであろう女性が自分が身体から切り離れた部分を斬りつけ、ミノタウロスの血飛沫を浴びる。勢い余つて止まれなかったのだろう。

彼女は頭から血飛沫を被つたまま、ミノタウロスの魔石を破壊し、牛頭人体からそれ以上血を流させないようにする。

改めて顔を見合わせると、その唯一紅くなつてない目が困惑の色を浮かべていた。

アイズは真っ赤になって血を滴らせてその場に立ち竦んでいる。今見た光景が信じられなかったからだ。

目の前にいるヒューマンの少年は真っ白な兔のようだった。恰好

はどう見ても下級の冒険者で、ミノタウロスに向かって走り出したのを見て、自暴自棄になったのではとアイズは思った。ミノタウロスには勝てないと思ったから、魔法エリアルを使って速度を上げて一瞬一秒でも早く助けに入ろうとした。

「どうして?」

「いや、どうしてって言われても……」

しかし、ミノタウロスを倒したのはこの少年だ。どう見ても倒せるように見えなかったからこそ、アイズは助けに入った。しかし、アイズが斬りつけた時には既にミノタウロスは事切れていて、あとは魔石を回収するか破壊するかだった。殺されてしまう、というのはアイズの早とちりだったのだ。

安堵よりもアイズは困惑する。駆け出しの冒険者でないのなら、少なくともLv. 2の冒険者でなければ、ミノタウロスを倒したことと辻褃が合わない。そして、その手に持っている極東の武器でミノタウロスを斬った所をアイズは見えないのだ。アイズの知る限り、第一級と呼ばれる冒険者にこのような出で立ちの者はいない。仮にアイズほどの実力のある冒険者だとしても、アマゾネスのように極度の軽装を好んでいるようではない。何故、町人のような恰好でダンジョンに來ているのか、アイズにはわからなかった。

「……………どうして?」

次々と浮かぶ疑問に何からいえば良いかわからず、どうしてなのかという問いしかできない。

「えっと……………あの、怒ってますか?」

アイズは首を横に振って否定する。

確かに臭いし、赤いしで気持ち悪かったが怒ってはいない。むしろアイズは怒られるのを覚悟していたほどだ。

もしアイズたちが逃したミノタウロスが上層の冒険者たちを傷つけたら。あまつさえ、殺していたら。全てはミノタウロスの群れを逃した「ロキ・ファミリア」の責任だ。例え遠征からの帰りで疲れていても、それは理由にはならない。

アイズの目の前にいる不可思議な少年は、アイズが怒ってないこと

を知って安堵したように息を吐く。

「ごめんなさい。私、話すのが下手で……………」

自分が怒っているように見えたのかもしれない。聞き方が悪かったとアイズは反省する。

「はあ」

「えっと、ミノタウロスは私たちが逃がしちゃって。……………その、倒してくれてありがとう」

アイズたちの不手際だ。自分たちの失態をこの少年に拭ってもらったのだから感謝すべきだとアイズは思う。

「え、あ、いえ。僕の方こそごめんなさい」

「？ 怒ってない、よ？」

逆に謝られてしまって、アイズはまた自分が怒っているように見えるのだろうかどと慌てた。確かにべたつきもするし、気持ち悪いが怒るほどの事ではない。洗って落ちるだろうか。

「でも、気が済まないというか……………。ん、私たちが逃がした？」

「うん。遠征から帰ってくる途中で」

「……………もしかして「ロキ・ファミリア」の人？」

「そう、だけど……………」

目を見開き、何度か瞬きする。兎っぽい、とアイズが思っていると少年はそわそわとし始めた。

(焦ってる?)

「あの、貴女が僕に会ったというのは秘密にしておいてください。後から来るだろう貴女の仲間には、何処にでも居るしがない駆け出しを助けた、という事にでもしていただければ。今度会ったときに何か償いはさせてもらうので、今はこれで失礼しますっ!!」

「あ、待っ——」

(速いっ……………!)

追いかけるようにも速すぎて追いつけそうにない。名前だけでもいや、所属している「ファミリア」だけでも聞いておきたかった。アイズは自分の名前も言えていない。しかしどう思ったところで既に遅く、少年の姿は消えていた。

一瞬の出来事だったが、さっきのことは幻覚でも何でもなく現実だ。アイズが頭からかぶってしまったミノタウロスの血の色と臭いは確かなものだ。

逃げられてしまったようでアイズは少し落ち込む。自分でも捉えられない速さで立ち去ったということは、自分より上級の冒険者だろう。しかしLv. 5の終局にアイズはいるので、アイズより格が上となると彼は団長たちと同じくLv. 6の冒険者ということだ。

(居たかな、あんな子)

しかしあの兎っぽい彼に該当する記憶がアイズにはない。一度や二度は顔を合わせていたとしてもおかしくないはずだと、アイズはギルドに行つて調べることを決めた。

「――ぶっ！」

「ベートさん、あの」

今しがたやってきた、笑いをこらえきれしていない仲間にアイズはとう事情を説明したものかと考える。一応、彼は「ロキ・ファミリア」の恩人だ。その恩人が自分の事を秘密にしてくれと言つたのだから、言うわけにはいかないだろう。

「ぶ、くく、アイズっ、お前真っ赤なトマトみてえになつてんぞっ!!」
「……………っ。ちよつと、失敗しました……………」

かと言つて、あの兎のような白髪の少年を駆けだしたつたというのは憚られる。助けたのではなく、助けられたのだから。

そんな人の気も知らないで笑う同僚を血に塗れたままアイズは睨みつける。頭の中の小さなアイズは頭を抱えた。

—————

彼女と別れて索敵しつつ、人気のないダンジョンの道を駆け抜けたから『己フォーサムワンスグロウリーが栄光の為でなく』で姿を消す。魔力で編んでいた服を見た目だけ全身鎧に再構築を行い、目的の階層を目指す。

それにしても先ほどの少女には随分と失礼な事をしたと想起する。
「ロキ・ファミリア」と聞いて事情聴取されることから逃げたのは自分

本位だった。

「(血塗れにしちゃうなんて……あーもうっ!)」

他にも反省することは多い。未だ至らない自分に嫌気がする。主に女心関係。

飛ばした斬撃の威力を抑えていたとはいえ、察知していなかったのは本当に失敗した。彼女に気が付いていれば、自分でミノタウロスに手を下すことはしなかつただろう。誤って攻撃しなかったのは不幸中の幸いだった。

——被害予測と周囲を確認し、八つ当たり気味に床に穴をあけてショートカットする。

自分が血塗れにしてしまった彼女は明らかにLv. 5に相当する冒険者だ。このオラリオでさえ数少ないLv. に位置する上級冒険者が、所属している「ファミリア」の中でそれなりの地位があることは考えればすぐにわかる。少なくとも「ロキ・ファミリア」の幹部だろう。自分のことを秘密にしてくれることを祈るしかない。

血塗れにしてしまったので先ほどの少女の顔はわからなかったが、「ロキ・ファミリア」の幹部ともなれば有名人。エイナの授業で小話として聞いた中に出てきているはずだ。

一応、背格好で判別がつかないわけでもない。会える機会は殆どないだろうが、街ですれ違ってわからないということは無いので安心してるといえばしている。

しかし悪いことをしてしまったという意識は拭えず、罪悪感が募る。

ほぼ自分の中では確定しているが、彼女は「ロキ・ファミリア」の幹部。直接は謝れない。会う事も難しいだろう。

本当に街でばったり会うしか方法がないのかと、悶々としながら100階層を越え、更に下へ下へと足を動かした。

血塗れにしてしまった少女の一件から少し胸につかえるものがあったが、129階層の地に着くと少しばかり気にならなくなった。巨大なルームだ。127階層のように階層一つがルームというわけ

ではなさそうだが、この壮大な景色に圧巻される。このようなルームが他にいくつもあるのだと思うとぞつとした。

——天井を衝くほどの巨木が乱立し、巨大樹のジャングルを作り上げている。遙か彼方の天井から降り注ぐ架空の陽光は温かい。しかし、巨木に茂る枝葉が地を覆い隠し、影というには暗すぎる闇を密林の中に作っている。

この先に行くにはモンスターが枝葉に潜んでいる木の上を渡るか、視界が悪く、根が隆起して足もとも悪い地面に行く他に方法はない。

木の中にもモンスターが潜んでいるようで、視界外からのモンスターの襲撃に耐えられるかどうかがこの階層の攻略には関わってくるのだろう。探査魔法が察知する限り、暗闇の中には大自然の美しくも残酷な光景が広がっているようだ。モンスターがモンスターを喰らうのは当然のことのように思えてくる。

上を通ればいいのだろうか、巨大樹の森の中にあるのは待ち構えるモンスターだけでなく、彩色豊かな草花が木々に絡みついている。その効果と効能は人体に害を及ぼす物もあれば、蜜の一滴がエリクサーに匹敵する回復効果を持つものまである。

ここに訪れた冒険者は比較的安全な光の中に行くか、誘惑も危険もある闇の中に行くかを選択させられるようだ。

しかし、そのような選択に囚われるのは自分の此処まできた目的に反する。窮屈でしかない。

少し跳びあがり、『倉庫』の中に手を入れ、ある一本の剣の柄に触れる。【大魔法使^{アルス・マグナ}】で創ったそれは剣というには余りにも長く大きく、武骨で太すぎる。本来ならば人間が扱えるサイズではないが、自分がしっかりと握れる取っ手を付けているため、持てるのであればなんとか扱える代物だ。『倉庫』から引き抜く。

「ふううッ——『千山斬り拓く翠の地平』アアアアアアアアツツ!!」
吸った息を吐き出すと共に気合一閃。自分を中心に半円を描くように振り抜けば、触れた巨木は勿論、直接触れていないはずの木々がなぎ倒される轟音と共に、闇と光のコントラストは失せていく。

この剣に付与した効果は『振り抜きと少量の精神力の消費により発

動』剣の残存魔力に応じて使用者の視界に映る範囲を斬り拓く』というもの。地上で使えば見える範囲——地平線まで斬り拓いてしまいうためルームで区切られているダンジョンでなければ到底使えない。上層では振り抜きができないため射出する以外では使うことは出来ない。精々剣として機能できるのはゴライアスのいたルームか、使う機会があるとは思えないが18階層の安全地帯ぐらいだ。

剣に込めた魔力を消費して空っぽにしても、振るうことさえ出来ればこの質量は驚異的だ。場所が整っていれば使えるだろうという憶測のもと、リリにも使用許可を出している。存在は勿論教えているので、込めていた魔力が減っていないところを見ると振る機会がなかったのだと思われる。

ただ、イガリマを使わなければならないような危険な目に遭っていないということでもあるので安心ではあった。自分と一緒にいきたくない、というリリの思いは嬉しい限りだが無理はしないほしい。

……視界を取るために伐採した巨木を遠隔で『倉庫』にしまつて行くと向こう側の壁が見えた。

使い終えたイガリマを『倉庫』の中へ収納し、森の中に隠れていた生き残りのモンスターたちを全て殴り倒して隣のルームへ向かう。

イガリマで斬り拓き、視界をとって次のルームへ行くということが続いていると、階層主らしきモンスターに遭遇した。127階層に居た蛇をさらに大きくさせたモンスターは斬り拓かれてしまって、3Kはあったであろう長躯は頭と尻尾で二つに別たれている。体表から滴り落ちる毒は地面に落ちると煙を上げ、大きな穴をその場にあけている。いつそ痛ましくもあった。

腰だめに拳を引いてチャージを行う。イメージは拳一つで敵を打倒する『彼』だ。

未だ生身では『彼』に及ばないが、『ステイタス』を含めれば『彼』は越えられただろう。でも、まだまだ。少なくとも生身で彼の域に行かなければ英雄にはなれない。英雄とは言えない。

——憧憬を燃やせ。大鐘楼を鳴らせ。

10秒のチャージ。魔石のある頭の方が這いずり寄ってきて、大き

く口を開けて飛び掛かってくる。その生命力の強さを見せる蛇に拳を叩きつけて体内に残っていた魔石諸共消失させた。自分が手を広げた倍ほどあるウロコを落^{ドロップ}してして、残っていた尻尾も塵灰となって散っていく。

「ふー。……………うん」

もう倒すものも倒してしまったし、一気に巨木を伐採するのはモンスターを一体一体相手取ることよりも随分と気分が良くなった。

既に残っていた根から続々と巨木が生えてきているようで、そこにダンジョンの神秘を垣間見る。

伐採した巨木はやはりダンジョン産とだけあって、かなりの耐久性のある木のようなだ。そのうち何かにつかえるかもしれない。木の中に居たモンスターたちを『倉庫』から排出して、木材とその他に落ちている有益そうな素材を回収する。

用事が済んだとあれば長居は無用だ。元来たルームの方へと戻り129階層を後にした。

ベル・クラネルは告白する

ダンジョンを出ると夕暮れ前だった。100階層以下からの帰りはいつもだ。そろそろ空間転移の魔法を創った方が良いのかもしれない。まだ日が暮れる前に帰って来れているが150、200となると日付を跨いでしまうだろう。異世界の知識の中から幾つか方法をピックアップしておく。

冒険者通りの賑わいを避けながら、ホームに帰る。今日はギルドに寄ることは無い。

……100階層以下での戦利品はギルドへの持ち込みも生産系「ファミリア」への持ち込みも出来ない。週に一回、休日を設定することをエイナに伝えていたため、勉強会は無く本当に用事は無い。エイナに教わる知識は現地で知れることなのだが、ためになることもあるので助かっている。

まあ、授業を受けたい理由は圧倒的に下心が占めているのでエイナには頭が上がらない。

……本当に今のところ魔石を除いた戦利品が『倉庫』の肥やしになっっているのかどうかしたい。

魔力で加工が出来ない事も無い。しかし、折角良い素材があるのだ。何処かの「ファミリア」の団員と専属契約を結んで加工してもらう………というのはリリの発案だが、中々良いんじゃないかと思う。問題は口が堅くて義理と人情に溢れている鍛冶師がいるのかということ。

鍛冶師の育成を促せるのなら、自分で出来るからといって一人でこなすより、お願いした方が良い。………と言ってくれたのもリリで、まったくその発想に至らなかつた自分が情けない。

ただ、「そんな人は早々いませんよね」とのことで廃案になりつつある。褒められているようでちょっと照れくさかった。ドロップアイテムを最大限活用して創った幾つかの武器はリリのお気に召さなかつたらしい。過保護にならない程度で、それなりのものを持たせてあげたい自分としては複雑な気分だ。

……今日別行動しているリリに新人で契約を結びやすい人の作品を探してもらっている。一人、というか一人だけ心当たりがあるのでそれを当たってもらっているが、どうなることやら。素材を扱いきれるのかという不安もある。

魔石については特に問題はない。『倉庫』ごしに魔石から魔力が抽出できると気が付いて、128階層から出来るだけ回収している。といってもほとんど破壊してしまって魔石が残っていないので目につく限りの少量ではあるが、127階層に出てきていた巨狼の魔石でもかなりの魔力が抽出できるため魔力タンクには丁度いいのだ。魔力が空っぽになった魔石が『倉庫』に残るが、また魔力を込めてやれば再利用が可能となる。

ダンジョン以外で魔力を調達するとなると、一度魔素を精神力^{マインド}に変換しなければいけないので、すぐさま使う事が出来ない。無くなることのないダンジョンの保有する魔力には驚嘆する。

その他、魔力をプールできるといった特質を生かしてイガリマを始め、対の剣であるシウルシャガナといった、能力を付けた武器の構成に魔石を使っている。魔石を魔力から作るとなるとそれなりに精神力^{マインド}の消費があるからだ。

……最大射程が視界の範囲というところでも武器を創ったとしても、リリでは使用する魔力は代用できないため、能力を発動する魔力は武器に溶け込ませた魔石から補っている。

リリから教えてもらったが、武器の区分でいうと『魔剣』が一番近いのかもしれない。使い切っても壊れないけど。

ホームである教会に着き、その外観を眺めて何度目になるかわからない自画自賛をする。

廃墟同然だった教会は【大魔法使^{アルス、マグナ}】を最大限に活用し、今や新築同然。活用したといっても、ボロボロだった箇所を直し、建物として機能するよう修復しただけのこと。隠し扉から続く地下に住んでいるといっても、やはり見た目はどうかしたかった。

一応頑丈になるよう『不壊』の属性を建物と辺り一帯に付与しているが、こうして目の前にして感じる荘厳な雰囲気は自分が手を加える

前、教会として機能していた時からのものだろう。

修繕したばかりのフレンチドアを開けて中に入ると、肅々とした雰囲気があった。半壊した長椅子は元通り。割れていたステンドグラスは夕日の光を浴びて描かれている紋様を映し出している。勿論床や壁から草木や苔が生えていることもない。

ただ、正面奥に祀られていた顔が半壊していた女神像は、ヘステイアの許しを得て、ヒマティオンを着た長髪をおろしている少し背が低い女神の像に挿げ替えてある。ヘステイアの像だ。

像は慈愛の笑みを浮かべて胸の前で手と手を握っている。全てを慈しむようなその姿は普段の元氣澆刺、悪く言えば子供っぽい印象から離れ、大人の女性を伺わせている。本来の女神ヘステイアとしての顔だった。

製作者は自分だ。彫刻士顔負けの細工が出来たのは偏にアルス・マグナ【大魔法使】のお蔭だが、ヘステイアにこの像を見せたとき、作った甲斐があったと思えるほど照れて、喜ばれた。

今まであった像を外すことを渋っていたヘステイアにお許しを出されたくらいだ。一応前の女神の像は修復を施して『倉庫』の中で眠って貰っている。台座は揃えて作ってあるのでいつでも入れ替えようと思えば入れ替えられるが、多分もうその機会はないだろう。

——相当気に入ってくれたようで、今もヘステイアは二列目の長椅子に座り、前の背凭れに片肘をつけて像を眺めていた。

「ただいま帰りました」

「……………？ あ、ベル君。お帰り。リリくんは未だ帰ってきてないよ」「そうですか。……………その、気に入ってくれたようですね」「うれしい限りですけど、飽きないんですか」

「そりゃあね。……………君の魔法には驚かされたけど、ベル君がボクの為にこうしてなにか作ってくれたんだ。見てて飽きるわけがないよ」ヘステイアはそう言って、像とそっくりの優しそうで、しかし同時に嬉しそうな笑みを浮かべる。像と違って生きていて、やはり彫像だけで表現できないものだを知る。

しばらくヘステイアの顔を眺めて……………二度目を決意した。

「——好きです、神様」

暫くじつと像の自分の顔を見てみると、反対側の長椅子に座っていたベルに不意をつかれて胸が高鳴る。

……二度目だ。この像を作ってくれた時、喜ぶ自分にベルはそう言った。

「だから冗談は止してくれと言ってるじゃないか……女神を、口説くもんじゃないって」

前にもそう言ってはぐらかした。冗談なんかじゃないとわかつている。本心からだ。

でも、それを受け入れてしまえば——

嘘を吐いて、それはないと自分を誤魔化す。認めてしまえば最後だ。

「神様、怖いですか」

「——っ！ ボクが何を怖がってるというんだい……」

「よくはわかりません。ただ、怖がってる」

「……なんだよ、それ」

口では何でもないかのように振る舞う。だがベルの言う通り怖いのだ。

ベルはいい子だ。本当にいい子だ。L.V.に見合わない強さを持つているだとか、出鱈目のような魔法を持つているだとか、ハーレム云々を抜きに見れば本当によくできた子なのだ。気は利くし、誰かを思いやれる。誰かのために何かが出来る。今時そんな子はそう居ない。

そんな子に隠し事をしている。自分は一度も「ステイタス」の更新をしておらず、全てベル自身が行っている。そのことに気付いてはいないだろう。気付かないでほしい。

自分は「ステイタス」を与えただけで、ベルに何もしてやれていないのだから。

果たしてこんな自分がベルを好きになっていいのかわからない。好きだとは到底言えない。

もし【常想強我】の存在をベルが知ってしまったらどうしよう。そんな恐怖がベルの【ステイタス】を見る度に湧き上がる。

自分らしくないのは分かっている。でも、それでも。……家族を失ってしまうかもしれないと恐怖して怯えている自分が情けない。

「神様」

「……………なんだい」

「僕は裏切りませんよ」

その言葉にヒヤリとする。見透かされているような、そんな気分になつてベルの顔が見れない。

「死が二人を別つまで、何があろうと僕は裏切りません。勝手に何処かに行ったりもしません」

「……………っ」

「僕は神様が好きです。だめですか？」

「……………。ああ、だめだ。大体、ベル君にはリリくんが居るじゃないか」

「じゃあ神様には誰が居るんです」

「っそれは……………」

——ああ、ダメだ。駄目なんだ。好きになつてしまつてはだめなんだ。

リリに合わせる顔がなくなつてしまう。——本当に楽しそうで、嬉しそうなリリの顔を曇らせてしまう。

全部ベルが悪いと言えたらどれだけいいだろうか。悪くないのが分かっていて。リリも言っていたようにベルは優しすぎるのだ。

その優しさに溺れてしまったとリリが言っていた。罪を犯して生きて来た自分を許してくれたと。

——リリを普通にしてくれた。

生きることに一生懸命でお金を稼ぐことにしか縋れなかったリリに多くのものを与えてくれた。

そう切なそうに、嬉しそうにパルウムの少女が語ってくれた。

「ベル君。……………ボクは」

神の一生は長い。 亜 デミ・ヒューマン 人の長命種よりもずっと。

好きになつてしまえば、ベルがどこかへ行つてしまった時に辛いから。行かないでくれと懇願するために、死のうとしてしまう自分が想像できてしまうから。

ベルの一生の時間は神の生きる時間の一瞬でしかない。でも、きつと好きになつたら一生とは言わず、天界まで追つていくだろう。

好きになつてしまえばベルの重石になつてしまう。ハーレムを望むベルをきつと自分は許せない。もう一人の眷族の事を尊敬すらしてしまふ。

息が口から洩れるだけで躊躇してしまつて声はでない。

「ごめんなさい。……意地悪でしたね」

ベルはそう優しく言う。

甘えてしまつた。答えを出そうと、自分を好いてくれるベルに酷な事を言おうとする自分の決心が鈍る。

リリが帰ってくるまでベルとの間に気まずい空気が流れた。

三——三——三——

リリが帰ってきて、半月前から様変わりした地下へ降りる。シャワーはお風呂にランクアップして、一人一人に部屋が出来ている。

自分はなんでもないように振る舞えたが、ヘステイアはどこかぎこちなかった。また何かやったのだろう、というリリの視線に後ろめたくなりつつ夕食を済ませる。ヘステイアは心ここにあらずといった様子だった。

ヘステイアがそそくさと風呂に行つたのを機に、居住スペースである地下室に増設した自分の部屋にリリが来る。

「何やったんですか」

来て早々、ベッドの上で横になつていた自分の横にリリはちよこんと座つて言う。

「怒らない？」

「……なにをやつたかによります」

「……好きって言つた」

「なるほど。はあ、また言ったんですね」

怒られはしなかったものの、その言葉に呆れを滲ませている。

「ごめんね、リリ」

「いえ、良いんです。リリもヘスティア様であればむしろ良いかな、って思ってますし」

「……………ありがとう」

「それは言わない約束です。感謝されるようなこと、リリはしているつもりはないですから」

すこしそっぽを向いてリリは言う。それがいじらしくて、抱きしめなくなる。

その癖のある柔らかい髪に手を伸ばして、リリの頭を撫でる。

「ずるいです。そうやってリリの頭を撫でたからって、節操がないのは許しませんからね！」

「わかってる。真摯に向き合うよ」

「……………ふん、です。ベル様のすげこまし。女の敵」

「ははは。……………否定できないや」

暫く撫でているとリリの小さな手に握られて、撫でるのを止めさせられる。ベッドから降りて部屋の入口に行く。

「……………名残惜しいですがリリもお風呂行つてきます。今日の報告はまた後ほど」

「うん。それじゃあ、また後で」

扉が閉まる音がする。今日あったことといえば、とミノタウロスの血を頭から被せることになってしまった少女のことを思い出した。

これは怒られる。迂闊な真似をしたと改めて反省して、二人がお風呂から出るのを待った。

どうしたものかと思案する。【ロキ・ファミリア】の幹部に泥、というか血を塗ったのはやはりどう考えてもまずい。相手の出方次第で、弱小【ファミリア】はいとも容易く潰されるだろう。戦争^{ウォーゲーム}遊戯を仕掛けられたとしても勝つ自信はあるけど、仕掛けられるつもりもしておかないといけない。

あの少女が黙っていてくれることを願うばかりだが気が重い。重すぎる。

お湯に浸かりながらそんなことを考えていたせいか、すこしのぼせ気味になりつつお風呂から上がると、二人は既に元からあった部屋、ダイニングに集まっていた。

「長かったですね。顔が赤いですよ?」

「だ、大丈夫かい、ベル君?」

まだ少し夕方の件を引きづっているようでぎこちないものの、ヘスティアの気遣いが身に染みる。

「ええ、大丈夫です。ただ、ちよつと時間をください」

すでに回復しているが、話しくいことなのでそれを口実に逃れる。不安を誘うようだが、ただ湯あたりしただけだ。「横になってください」とリリに言われて新しく購入したソファで横になる。

「いつものようにダンジョンから帰った後、ベル様に言われて探して8階で見つけました」

「ヴェルフ・クロツゾさん、だよね」

リリが『魔法の鞆』から軽鎧を取り出して言う。横目で見ると、自分が『不壊』の属性を付与した『兎鎧』^{ヒヨウキチ}と銘打たれたそれは少しデザインが異なっていた。

「はい。……名付けのセンスに目を瞑れば、一番良かったといつても過言ではないですね。まだ直接会えていませんが、クロツゾといえど鍛冶貴族。生身で強力な『魔剣』を打つことのできる一族の末裔と聞きます。ただ何を思ってたか『魔剣』は打たないそうです。聞く限り相当な偏屈な気もしないでもないんですが……。リリは一度会ってみても良い気がします」

「うーん……。何か事情はあるんだろうね。前も言ったけど、近々神の宴がガネーシャの主催で催されるし、そのときにヘファイストスに内々で相談してみるよ。例のドロップアイテムの幾つかを見せれば理解してくれるはずだ」

「いいんですか?」

「多分。ヘファイストスなら黙っていてくれると思う。ただ、ボクの

方は直ぐにはいかない。ヘファイストス、オラリオ中を飛び回っているようだからね。二人は二人で、そのヴェルフ君？ とやりに会えるよう動いたほうがいいだろう」

「はい」

「わかりました」

前に【ステイタス】の錠の仕方を聞いてくると言っていたが、結局のところ先日知り合いになったミアハに聞いたようだった。

下界で世話になっていたというヘファイストスという女神は多忙な身の上のこと。まだ会えていないそうで、「ファミリア」結成の知らせも出来ていないとのことだ。このホームも勝手に修繕修復しているが、もとはその女神の持ち物らしく、「ファミリア」単位で恩神おんじんと言えた。

早く会えればいいと思うが、折角なのだ。神の宴という場で、綺麗な装いをして良い知らせをした方が格好がつく。

「ぐらいいですね。リリの方は他に変わったことはありませんでしたよ」

後は自分だ。元々たいした報告をするつもりがなかったのにどうしてこうなったのだろうかと思議で仕方がない。

眷族の中で一番問題を引っ提げてくるのは自分じゃないだろうかとも思いつつ、横にしていた身体を起こした。

リリルカ・アーデは追い着きたい

「ベル様もう大丈夫なんですか？」

「うん、平気。もう大丈夫だよ……あの、僕からも一つお話が」

リリに心配されるが、湯あたりを口実に話すのを先延ばしにしているだけなので大したことはない。

「なんだい？ ……ベル君が到達階層一つ増やしたとかなら、もう驚かないぜ？」

「いや、それは確かに増やしたんですが……えつとですね。その、行く途中5階層でミノタウロスに遭遇しまして」

「5階層ですか？ 迷い込んだにしては随分とまあ……」

「うん。それで放っておけないから倒したんですが……迂闊にも一撃で仕留められなくて。その、そもそもミノタウロスっていうのが遠征帰りの「ロキ・ファミア」から逃げ出してきたようで」

「もしかして見られたのかい？」

ヘステイアの推測に頷く。

「勿論素性は明かさずに、「ロキ・ファミア」だと分かった時点で逃げ出したんですが……。その、ミノタウロスの血を浴びせてしまっただんです」

ヘステイアは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「えつと若い女の人でしたし、その、血で顔もわからなかったので確定じゃないんですが、立ち振る舞いからして多分「ファミア」の中でも幹部ぐらいじゃないかと。一応、僕のこととは秘密にして欲しいと言いましたけど……まずいですよね」

一応成り行きは全て話した。ヘステイアは苦い顔のまま腕を組んで絞り出すように口を開いた。

「ああ。まずいね。非常に不味い。あのロキのことだ。何かしてこないわけがない。……願わくばその幹部の女の子ってのがベル君との約束を守るかだが、まず無理だろうね。希望的観測はよそう」

「知ったような口ぶりですが何かあるんですか？」

「……ロキとは天界に居たときから仲が悪いんだ。……あんの悪

神、こつちにきて性格が変わったようだという話は聞くけど、嘘だね！ 本当に性格が悪いんだぜ！ きつとどこからともなくボクが神の宴に行くことを聞いて、態々綺麗なドレスを着て『なんや貧相な格好して、よくもまあ、これたもんやなあ!? 自分恥ずかしくないん？ なあなあ!?』と言ってくるとか平気でやるような奴さ!!」

ロキという神の顔は知らないが、よくもまあそんな具体的な想像が出来たものだと思心する。実は仲が良いんじゃないかと思わないでもない。聞く限り、ロキというのは所謂はしやぎ好きの女神なのだろうか。

少なくともそれは言われぬようするので安心だ。神同士であってもヘステイアが悪く言われるのはあまり気分が良くない。

「大体女なのに男装した方が見てくれが良いなんて、女神として終わってるよ！ ふんだっ！」

「あの、ヘステイア様そろそろ落ち着いてください。ここには居ませんよ」

誹謗中傷が入ってきたのでそろそろ止めないと、と思っているとりが止めに入った。

「ああ、ごめんごめん。——でも、とにかくロキはそういう奴なんだ。その一件を知られでもしたらあの手この手を使ってベル君を探し出すだろう。そうなってしまうえばお終いだ。なんせ色んな所に喧嘩を吹っかけて天界を終焉一步手前まで陥れた神だ。神々の黄昏というやつなんだが……まあ、身内の恥のようなものだから知らなくてもいいけどね。……とにかく気を付けてくれよ、ベル君？ 何度も言うようだけど、君は爆弾みたいなものなんだから」

「はい。心配させてごめんなさい」

「それじゃあ寝るとしよう」と調子を戻した様子のヘステイアが締めくくる。随分と疲れを感じた一日だった。

— — — — —

朝三時に目を覚ます。いつもの時間だ。音を立てないようホーム

を出てオラリオの市壁に上がった。

トレーニングを始める前に【ステイタス】を確認する。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : S S S 5 7 9 4 2

耐久 : S S S 5 4 8 7 6

器用 : S S S 4 5 0 9 5

俊敏 : S S S 5 6 8 5 3

魔力 : S S S 5 9 5 8 9

基礎アビリティの数値が『器用』を除いて50000を超えた。力任せに振る舞うことが多かったせいか、他の数値に比べて『器用』が少し低い。極力刀のような技術や繊細さを必要とする武器を使っているが、昨日だけでは流石にそこまで育たなかったようだ。2000ぐらいしか上がってない。力加減にも気を使いつつ、魔力による身体へ負荷をかけてトレーニングを開始する。

三十分後。手早く一度目を終わせた。『器用』の数値が他と均等に上がったのを確認して、【ステイタス】の補正をオフに。肉体のトレーニングにかかる。あとひと踏ん張りだ。

……四時五十五分。天を仰いで、地に這いずる自分を再確認し、【ステイタス】の効力をオンに切り替えて【起死回生^{レ・アニメス}】で傷んだ身体を再生させる。また一つ強くなったのを実感する。

ホームに帰ってエプロン姿のリリと「ただいま」「おかえりなさい」と言葉を交わしてソファに腰かけた。新婚の夫婦のようなやり取りに少しだけむず痒くなる。

いつものことだが、まだそんな関係ではないので中々慣れず、ドキドキとしてしまう。

「ベル様ーもう少して出来ますよー」

「それじゃあ僕が今日は神様起こしてくるよ。もうちよつとかかるで

しよ?。」

「はい、おねがいします。……起こすだけですよ?。」

「わかってるよ。何もしいって」

このホームで暮らし始めて一週間した頃、寝ぼけたヘステイアとソファで寝ていた一件からリリの目は厳しい。一人部屋を作った理由はそれを回避するためでもあった。

確かにあの時、目覚めて早々ドキリとしたのは否定しない。極上の安眠枕のようだったが、やわつこい二つの爆弾が隠されていた。しかし、リリが怒る理由が分からない。

確かに世のカップルが宿を一つ取って一夜を共にする、というのは異世界の知識にもあった。寝る場所は一つしかないため、カップルがベッドで一緒に寝るのはわかる。裸になることもあるようだ。

だが、それで何をするのかさっぱりだ。怒ると言う事はリリは知っているのだろう。カップルでもないヘステイアと一緒に寝ていたというのが、彼女を怒らせたのだろうか。

ハーレムを宣言している以上、リリに何かしたんじゃないかと思われるても仕方ないのだが。実際には何をするのか知らないためしようがない。

本当に異世界の知識にもなかったが、時として裸の男女がベッドに入って何をすると言うんだ。——添い寝な訳がないだろうし。と
うか見るのも見られるのも恥ずかしくて自分には出来そうにない。
亡き祖父曰く、女体を見たときは目を逸らすな、とのことだから逸らすことはしないが。

リリに聞こうにも、もし常識的なことなら聞くのが恥ずかしい。
……せめて教えて欲しかったよお祖父ちゃん、と思いつつ。ヘステイアの部屋のドアを数度ノックして返事がないのを確認する。

確認せずに、ドアを開けて痛い目を見た物語の彼らたちを何人も知っている。そんな多くの知識から推理すると、亡き祖父の教えでも間違いが幾つかある。

何を思って祖父は自分に間違いを教えたのだろうか。

中に入るとヘステイアは案の定寝ていた。また夜更かしでもして

いたのだろうか。枕元に読みかけらしき本が置いてある。

「神様、起きてください……………」

「ううん……………」

毛布を抱いて寝ているヘスティアの肩を揺する。起きない。

「神様ー」

「うあ……………」

「食べちゃいますよー」

「……………あう……………だめだぞう……………ベルくうん——んん」

「——っ」

寝言がすこし艶っぽくてドキドキする。というかどんな夢見てるんだ。

「ん——べるくん……………ボクも好きだよーう」

そんな寝言が聞こえてきて顔が熱くなってくる。魔法でわかるとはいえ、ヘスティアの夢の中を覗くわけにはいかない。自分が耐えられそうにないので手早く魔法をかけて起こす。

「んあ……………?」

「おはようございます、神様」

「あれ、ベル君……………? ……………あれ? リリくんが許してくれて

……………え?」

「何を言っているのかわかりませんが、多分夢ですよ、それ」

「寝言でなにか言っていた?」

「……………」

赤くなっているだろう顔をそつと逸らす。聞いてなかったことにするのはちよつと惜しいと思つてしまった。

「ぬわあああああああ!! ボクはまたなんてことを?!」

ぬがー、ふおー、と言いながらヘスティアは毛布と格闘し始める。寝言で返事をもらえたとはいえ、ノーカウントだと自分に言い聞かせてヘスティアの側を離れる。

「顔を洗ってきてください。リリがご飯を作ってくれています」

やはりちやんと返事が聞きたい。なんとなく窺い知れたヘスティアの迷いに蓋をする。整理がつくのを待つのを決めた。

「ううう……ベル君のばかあ……。なんでリリくんじやないんだよう」

じろりと睨んでくるヘスティアを一瞥して先に部屋を出る。

「あの、リリ？ 何もしてないからね」

部屋の外で様子を伺っていたらしい彼女にため息を吐かれた。

「分かってます。……ただ、ベル様が起こしに行くのはやっぱり駄目ですね」

「……………うん。僕も反省するよ」

「早く食べましょう」とリリに手を引かれて朝食の席に着いた。

☪—☪—☪—☪

機嫌の悪いヘスティアに見送られて、西のメインストリートを行く。

『豊饒の女主人』。開店前のその酒場を訪れる。昼間はカフェテラスとして運営するようで、店の外にも机が並べてあった。

「——あ、ベルさん！」

机を並べる作業を終えて入り口で立っていた女性——シル・フローヴァが笑みを浮かべて駆け寄ってくる。

「おはようシルさん。今日もいい天気ですね」

「はい！ 今日も沢山お客さんも来てくれると思います。……ベルさんも、来てくれたらいいのに」

「うーん」

「だめですか？」

上目づかいで見られる。今日はバイト先で飲み会があるそうでヘスティアが居ない。今日ならリリと行ってもいいだろう。

料理もお酒も美味しいので、いつかヘスティアも連れて来ようと思っているのだが、リリに阻まれて中々来れない。

直接的に行かないと言われているわけではないが、ヘスティアが居るからだとか、自分の料理が食べたいだとか言って来ないように促されている。そんないじらしいリリの意思を尊重して今まで三回し

か来れていない。

横に目をやるとジトリとした目と合った。仕様がなと言わんばかりに小さくため息を吐かれる。幸せが逃げてしまいうらしいので、なるべくさせたくないのだが……中々難しい。でも、今日は行かせてもらう。無論リリも一緒に。

「えつと、じゃあ今夜」

「え、あ、はい！——……やったっ！」

シルが小さくガツポーズをしている。素に近い喜び方をしている。ほっこりする。

そんな自分と違って隣にいるリリの目は先ほどから冷ややかだ。

「あ、リリルカさんもいらしてくださいね？」

「……ええ、行きますよ。ベル様に悪い虫がつかないようにするために」

「……そんな虫ウチには出ませんよー」

終始黙っていたリリが口を開く。リリとシルの間で火花が散っている幻視をした。

シルにお弁当を渡されてダンジョンにもぐる。やはりリリはお冠な様子だ。

「怒ってる？」

「怒ってないです」

リリを見ると頬を膨らませていた。やっぱり怒ってる。

「ごめんね、リリ。どうしても断れなくて」

「むうー。ベル様が行きたかっただけでしょように、まったく——だいたい、あの女タヌキですよ！ 良質町娘の皮を被った！」

「シルさん狸人ラクーンじゃないよ？ 確かに似合うと思うけど」

「違いますっ！ 腹が黒いつて意味ですっ！ ……というかわかってやってますよね、ベル様！」

ヘルハウンドが横腹を殴られ魔石が砕け塵灰になった。

「あははは。……うん、まあ、確かに強かなんだけど可愛いものだよ」

「ベル様が男だからそういう風に見えるのでは!？」

「そうかもね。……でも、僕たちのことを好いてくれてるし、あんまり行けないのに毎日のようにお弁当作ってくれる。僕のだけでなくちやんとリリの分まであるし」

「それはあの方はベル様のことを——いや、でもベル様は優しすぎです! あれは演技なのかもしれませんっ! ベル様がいつころつと騙されてしまうか……リリはそれはもう心配で心配で!」

「うん。でもまあ、その時はその時だよ。騙されてても死ぬわけじゃない」

「確かにそうですが……」

横目で話しながらも、リリと素早くモンスターたちを片づけていく。

リリがアルミラーズの頭部を抉って染みに変える。慣れた手つきで魔石を抜き取り、ポーチへしまう。

……シルと知り合ったのは一週間ほど前だ。魔石を拾ったと言って近づいてきた。少なくとも魔石は自分の『倉庫』か、リリのポーチを経由して『倉庫』に仕舞っている。落とすはずがない。

適当な理由を付けて魔石は持っていないはずだと言ったら「お客を獲得するための切欠として持っていた」と正直に話してくれた。だが、本当のところはどうなのか定かではない。自分からみて一般人でしかないシルがどうして魔石を持っていたのか不思議に思う。

勘違いでも何でもなく、彼女は自分に好意を向けている。何故なのかはわからない。もしかしたらリリの言うように自分を騙そうとしているのかもしれない。

確かにどこか演技めいた言動は多い。

——でも、そんな彼女と本当の意味で仲良くなれたらな、と思うのだ。

「あの方もなのですか……?」

「うん。だめかな?」

勢い良く殴られたモンスターが吹き飛んでいく。

「……まあ、ベル様が好きって言うんならリリは黙って受け入れる

だけです」

リリは少し気落ちした声で言う。そんな彼女に苦笑しかできず、籠手を着けた手で叩かれて抗議される。

痛くもかゆくもない可愛らしい攻撃に、胸の内が痛かった。

モンスターをある程度狩り終えて、ルームを一つ占拠した。ベルによって壁はボロボロに傷つけられ、モンスターの湧きつづしが行われたルームに連打する轟音が響く。

「まだ早くできるっ！」

「っ!? はいっ!!」

——改めて思うがベルはおかしい。

【ヘスティア・ファミリア】に入ってから始まったベルによる戦闘訓練の時間は、自分からの攻撃がほとんどを占める。ベルは自分の攻撃を防ぎ続け、時として受け流し、ある程度攻撃や回避が遅いと捕まえられる。本当の戦闘であれば捕まえられたら自分は死んでいる。

それでいてベルは予めダンジョンに刻んだ円の中から出ない。出せない。微動だにしない。——今日は未だに一步も動かせていない。

新しく発現したスキル、ヴァージュラパニー【執金剛】は重装備をしているという条件があるものの、アビリティにかかる強化は底知れないものがある。

装備過重により効果が増減するこのスキルは、【縁下力持】と相性がよく、重装備をしている時に限り自分はLv. の壁を越えて強くなれる。今は中堅のLv. 2の冒険者並みに強いはずだ。

本来であればLv. 1のベルは耐えられないはずなのだ。

「? どうかした? ちょっと休む?」

「ツいえー!」

しかしベルは生身で強く、あの馬鹿げた数値のアビリティがある。ベルにとって自分など大したことないのだろう。Lv. の違いなどものともしない。——だからこそ、今の自分があるのだ。

ベルの気遣いは今は無用だ。休んでなどいられない。一刻でも早くベルの側で戦えるようにならなければ。………まだ、ベルの創って

くれた装備を使うことはできない。装備に頼ってもそれは一時的な強さだ。自分が強くなれた訳じゃない。

重低音を連続して響かせる——まだ足りない。

風を切り音をたてる——まだ足りない。

ベル・クラネルの側に居るためには、まだ。

「頑張れ頑張れ」

「……………っ!!」

——人の気も知らないでっ！

ヤキモキとさせられてる鬱憤を込めて打ち続ける。きつと自分が弱くても良いとベルは言うだろうが、それは自分が許せない。

ベルは自分に良くしてくれている。いままでもこれからも。きつと彼は優しくしてくれる。大切にしてくれる。

口では許せるといったが、まだ他の女性ひとにベルの好意が向くのが許しきれないのだ。心のどこかに不満が募っている。

誰にでも優しくできる。それがベルの美徳なのはわかっている。でも、自分だけを見て欲しいと思ってしまう。

ヘスティアは自分も好きだからいい。ハーレムにというのであれば自分も否定しない。

母親のように心配してくれて、姉のように叱ってくれて、妹のように世話がやける——そんな女神ヘスティア。

家族との団欒はきつとあんな感じなのだろう。自分が欲しかったものの一つだった。それを与えてくれる女神に彼が魅力を感じるのには仕方がない。むしろ魅力がないとか言ったら自分が怒る。

ふとした考えがよぎり、ベルにハンマーを打ちつけていた手が止まる。

「どうかした、リリ？」

「……………」

——もしかするとベルは自分と同じで家族に飢えているのではないだろうか。

確かに下心はあるのだろう。それは彼も白状している。しかし、仲良くしたいと言ってはいるものの、いやらしい意味で、手は一度も出

されたことがない。奥手というよりも知らないようだった。

ベルは否定するかもしれない。

——だが、彼の言うハーレムが今自分が思いついたものなのだとするなら。

「リリ？」

「なんでもありません。ちょっと考えごとをしてしまっただけ」

「そう？　なんだか凄く嬉しそうだけど」

……きつと認めはしないだろうが、ベルは家族が欲しいのだ。一年前に祖父を亡くしたばかりと聞く。身近にいたからこそ余計に、自分以上に家族に飢えているのではないだろうか。

可愛かったり、綺麗だったりする年上の女性ばかりというのはベルも男の子だからだろう。自分から見ても綺麗どころが多い『豊饒の女主人』に行くのは、やっぱりちょっとだけ気にくわない。

だが、ベルにも可愛いところがあるんだなと少しだけ気持ちに余裕が出来た。不満が少しずつ消えていく。

「続けましょう、ベル様。リリももつともつと強くならないと！」

「うん？　いつになくやる気だね」

「はい！　リリの気が済むまで付き合ってもらいますよ！」

頷いて、ハンマーを構える。好きな人にこうして武器を向けるのは慣れることは無いが、どこか身体能力が振り切れているベルに氣遣つていては近くに行けない。

今はただ、ベルの隣に相応しいよう頑張るだけだ。

エイナ・チュールは心配性

右、下。一回転して上、左、突き。手元で一回転。左から右へ、右から左へ。

巨鎚を扱っているとは思えない速度でリリは動き回り、攻撃を仕掛けてくる。時折フェイントが混ざる攻撃は曲芸師のようだ。リリの「ステイタス」が上がったこともあって、一昨日と比べて動きにキレがある。

加えて今日は途中から妙に吹っ切れた様子で、いつも以上に気合が入っている。何があったのかはわからないが、格段に動きが違う。強くなりたいたいという意志が対峙しているだけで伝わってくる。

「やア——ッ！」

ガアン、と腕に当たって音が鳴る。人間ってこんな音が出るんだ、と我が事のように思えないでいるが、鍛えたら誰しもこれくらいになるだろう。

リリにいつもやつてるトレーニングを勧めたが、残念なことに彼女は音をあげた。毎日となると流石に厳しかったのかもしれない。鍛えたら強くはなれるが、継続できるかどうかは別問題なのだろう。

それでよかったと思う。程々でよいのだ。自分のようになったらきつと苦勞するだろうから。

………打ちつけられた巨鎚が素早く退けられて、次の攻撃が始まる。

振り下ろされたそれをLv. 3相当の力で打ち返すと、リリは少し浮き上がるが戦闘鎚から手は離さない。円から少し離れたところにリリは着地。地面を蹴り、再びコンパクトに素早く力強く打つてくる。

——しばらく続けていると段々と攻撃と動く速度が落ちていくが、それに合わせてこちらでも力量を変えていく。

そうしてリリが疲れ果て動けなくなるまで続けた。

疲れ果てたりりを背負ってダンジョンを歩く。意識を失うまで続

けるということとは流石にしないので、背中に居る彼女と話しながらゆっくり階層を上がっていく。

リリは装備を外して、今はクリーム色のローブを着ている。当然のように鎧は外しているので、背中に感じる女の子らしい感触にドキドキしているのだが、彼女にバレてないだろうか。

「……………ふふっ」

耳元で小さくリリが笑う。……………どうやら複雑な少年の心はお見通しのようで、何かしゃべっていないと恥ずかしくなってしまうそうだ。

「今日は一段と頑張ってたけど、何かあったの？」

「んー？ そうですね。ベル様のことで色々と気が付いたというか」

「僕の事で？」

「ええ。きつとベル様は認めないと思いますけど——言っていていいですか？」

そんな前振りをされると何を言われるのかと思い、少し怖くなる。つい、黙り込んでしまった。

「やっぱりやめておきましょう」

「え？」

間拔けな声がでた。リリは少し笑う。

「じゃあ一つだけ」

——私に甘えてもいいですよ。

不意をつかれた。耳元で色香のある言葉が囁かれて、自分の顔が赤くなるのがわかる。自らのことを『私』というだけなのに凄く落ち着かない。

「色々とベル様に言いたいことはありますが、あまりくどくどと言つて嫌われたくないですから。……………辛いときは、しっかりリリに甘えてください」

「……………」

「リリはどんなベル様も好きです。夢を語る貴方も。あまり見せてくれない弱音を吐く姿も。——私に色んな貴方を見せてください」

「——っ」

普段の口調に戻ったかと思ったら、再び大人びるリリにたじたじになる。肩に置かれていた手が首に回されて、ただでさえ近い身体が密着する。

リリの意外に大きい膨らみをさらに感じてしまう。種族的に身長が低いだけで、年上の女性なのだと自覚してしまう。

「……………不意打ちは本当にズルい。」

心臓が早鐘を打つ。リリの息遣いや、自分と同じく早くなっている鼓動を感じる。

ちらりと見るとリリは悪戯な笑みを浮かべていた。

かなわないなあ、と思いつつモンスターがいる前に向き直り、足を動かす。

耳まで赤くなっている顔を見られたくなかった。

——ダンジョンを出るとリリの持つ金時計が昼の三時を指し示していた。

広場から北西のメインストリートへ。体力が回復したこともあり、リリが今日の換金分である魔石が詰まったバックパックを背負って前を歩いている。

冒険者御用達の店がひしめき並ぶ街道を進み、目的地であるギルドの入り口で一度立ち止まる。

「それじゃありりは魔石の換金をしてきます。あのアドバイザーの方との勉強会は今日もあるのでしようし、換金が終わったら先に帰っておきますね」

蠱惑的、というのだろうか。少しリリの顔が直視できないでいる。

「ベル様？」

「あ、うん、よろしく。……………その、気をつけてね」

「……………もう。ベル様も頑張ってきてくださいね」

気を取り直そう。リリが年上だって事は前々から分かっていたことだ。そんな風に落ち着かない自分を説得する。

リリが先にギルドへ入っていき換金所に行く。

……………18階層付近での収穫はサポーターのフリをしたりりに任

せるほかない。偏に自分が5階層付近で燻っているフリをしているせいなので、未だにサポーターのフリまでさせて付き合わせてしまっている彼女に申し訳なく思ってしまう。

………神々に目を付けられないためとはいえ、換金を全て任せていることで起きる危険もある。自分たちは無名の【ファミリア】だ。【ファミリア】の徽章エンブレムもない。オラリオに來たばかりの自分のように、スリからしてみれば恰好のカモに見えるだろう。

バックパックの中に『倉庫』に繋がるポーチを忍ばせているとはいえ、一見して弱そうなりりは狙われやすい。ただでさえリリの被害者や、リリへの加害者はオラリオに沢山いるのだから。バックパックごと盗まれたとしてもさして問題はないが、やはりリリが傷つくのは許容しがたい。

リリが多くの傷をつけられた【ソーマ・ファミリア】に関してはソーマがうまくやっていることを信じるしかない。それが何とももどかしい。

………それに、堪え性のない自分が「そろそろ頭角を現して良いんじゃないか」と顔を覗かせている。強いことを知らしめれば、危害を加えようとは思われなくなる。

ままならない世の中に一つ溜息を吐いてギルドの入り口をくぐり、自分は受付の方へと足を運んだ。

— — — — —

換金待ちの間、手持無沙汰になったのでベルを眺める。

彼は今、アドバイザーであるハーフェルフの女性——エイナに今日あった出来事を話している。話の内容は嘘八百ではないのだろうが、誤解はさせているだろう。

そんなどこか微笑ましいベルの姿に慈愛ともいうべき感情が湧いていた。

でも、少しだけ嫉妬。

自分もベルに頼られたいと思ってしまう嫉妬。

……いつもはもつと嫉妬してしまうのだが、今日はなんだか羨ましいぐらいで済んでいる。

あるのはちよつとした独占欲だ。

年上のお兄さんのようにカッコいいベルもいいのだが、あのように弟のように振る舞うベルも良い。しかし、そう思うとまだエイナは弟のような姿しか知らないのだ。

優越感が胸の内を満たす。

——鑑定に掛けていた魔石がヴァリスに換わって戻ってきた。計器に乗った1万ヴァリス硬貨の入った袋の中身と、1万ヴァリス以下の硬貨が入った小袋の中身を提示された金額が合っているかどうか確認して、バックバックに詰める。

ギルドの奥にある資料室に移動するベルとエイナを一瞥して、一足先にホームに戻った。

「うーん。これまた成長したねリリくん」

「そうなんですか？ でも、ベル様に追いつくのはまだまだでしょう？」

「そりゃあね。まったく、君も随分と遠い目標を建てたものだよ。この前なんてベル君トータル1万2000オーバーだぜ？ ボクはアビリティの上限が999だつてこと忘れそうになるよ」

「……………まあ、ベル様ですし」

「そうだねえ、ベル君だし。……………ん、終わったよ」

飲み会までに時間があるのか、まだホームにいたヘステイアに「ステイタス」の更新を頼んだ。「ステイタス」の写しをもらい、今日一日の成果を見る。

リリルカ・アーデ

L v. 1

力： S 899↓944

耐久： B 687↓723

器用： A 792↓834

俊敏：A 831↓883

魔力：E 423↓426

《魔法》

【シンダー・エラ】

- ・変身魔法。
- ・変身像は詠唱時のイメージ依存。具体性欠如の際は失敗。ファンブル
- ・模倣推奨。
- ・詠唱式【貴方の刻印きずは私のもの。私の刻印きずは私のもの】
- ・解呪式【響く十二時のお告げ】

《スキル》

【縁下力持】アーデル・アシスト

- ・一定以上の装備過重時における補正。
- ・能力補正は重量に比例。
- ・能力補正は重量に比例。

【執金剛】ヴァジラバーニ

・装備過重時におけるステータス強化。

・能力補正は重量に比例。

これで少ないと思うのは毒されているのだろうか。桁を三つほど間違えているように思えてならない。

「リリくん。トータル150オーバーは大きい。いつも以上だよ。気をしっかり持っただ」

「……………そうですね。ベル様ほどではないですけど、強くなりましたね」

「つつい皮肉が出てしまったが実際そうだ。なんなんだ1万2000オーバーって。」

彼は本当に同じ冒険者なのだろうかと、毎度のように疑わしい。

素で第一級冒険者以上だというのに、他を追従させないあの「ステータス」はなんなんだ。

あれでは『神の力』アルカナムを使ったと思われても仕方がない、とヘステイアがぼやく。しかしそれに反して少しだけ楽しそうだ。

おそらく本当のアビリティの上限が幾つなのか気になるのだろう。

……少しだけ自分も興味が湧いている。

彼の背中は遠く遙か彼方。彼の隣で戦えるようになるのはもつと先だ。

しかし、念願叶って『力』のランクがSになった。ベルと出会ってから魔法を滅多に使わないせいとか、今では『魔力』のランクが一番低い。嬉しいのか、それとも強くなっていなくて悲しいのか複雑な気分だ。暇な時に魔法を使うようにしよう。と昔では考えられないようなことを思いつく。

あと二つだ。Sがあと二つ要る———と思いついてやはり自分の常識が崩されつつあることを自覚する。だが、いつそのことそんな常識取っ払ってしまえばいいのではないだろうか。

まだまだ足りないその「ステイタス」を握りしめる。

——『冒険者』リリルカ・アーデは、いつか必ず背中を越えて彼の隣へ行くのだと改めて決意した。

☺—☺—☺—☺

——クシユンツ！

「大丈夫、ベル君？」

エイナに氣遣われるが「へつくしよん！」ともう一度大きなくしゃみが出る。資料室は埃っぽいというわけではないのだが、少しむずむずする。

「はい。……誰かが噂でもしてるのかな」

「あんまり無理し過ぎたら駄目だよ？ ……無理させてる私と言うのはなんだけど」

「いえ、勉強は為になってますから」
為になっているのは少しだけで、あんまりなっていないとは言えない。

「うーん。でもちよっと休憩しよっか。覚えられないときは覚えられないだろうから」

「そう、ですね。僕としては早くエイナさんを安心させたいんですけ

ど」

「もう、そんなこと言っても勉強は減らさないからね？」

「……………わかってますよー」

「それじゃあ、休憩ね」と言って少し嬉しそうなエイナは一度分厚い本に葉を挟んで閉じた。

ちよつとだけ期待したのだが、エイナの納得を得られるためには抜き打ちテストに合格しなければならぬ。納得を得るには「ステイタス」を見せるのが一番早いのだが、馬鹿正直にランクがSSSだなんて言えない。いや、魔法で誤認させれば――

「あ、そうだ。そういえばベル君は有名な冒険者の名前とか知ってる？」

「て、テストですか？」

つい、テストの事を考えていたせいかそんな発想をってしまった。「違う違う。ちよつとした世間話。それで、知ってる？」

それにしても自分、テストじゃないと知ってホッとしてしまうあたりどうなのだろう。

ノーマークだった。名前だけ知っているのみで顔や特徴が一致していない。

多分その人達より自分は強いのだ。オラリオの先達には悪いが、自分の目指す先はもつと向こうだ。もつと先だ。英雄に近いと呼ばれている彼らの人相までは把握していない。

「えっと、名前だけなら」

「そっか。……………んーじゃあ、有名な冒険者と言ったら大手の【ファミアリア】の人たちが挙げられるんだけどね。その中でも【剣姫】って二つ名を持っている、エルフみたい綺麗な女性のヒューマンが居るの。その人が今日、白髪で赤眼の――まるでベル君みたいな冒険者は居ないか探してるって」

……………。

どうしようか。心当たりがある。エイナの方を見れず、資料が並べられている棚の方へと目をやる。

「それってエイナさんが受付をしてたんですか？」

「私じゃなくて他の人。公開できる範囲で一通り白髪で赤眼の冒険者の写し絵を見せたら、どうやら見つかったみたいなんだけど、誰なのかなあって。誰なのかわねずに行つたみたいだし」

「そう、ですか……………」

ちら、とエイナを見るとジツとこちらを見ていた。ちよつと恥ずかしくてまた顔を背けてしまう。特に怪しまれているというわけでもなく、なにか考え事をしながら観察されているような感じだった。

「うーん。まあ、ベル君なわけないよねえー」

「そうですね。たぶん違うと思います」

そういえば「ロキ・ファミリア」で「劍姫」って二つ名の人が居たなって今思い出したけど、きつと気のせいだろう。別の「ファミリア」にいるケンキかもれしない。きつとそうだ。……………そう思いたい。

しかし、このままだといつボロが出てしまうかわからない。話題を変えるため、何かないかと思考する。

「うん。それじゃ、休憩はそろそろ終わりにしよう！ やろうと思えば頭に詰め込めるから！」

……………何も思いつかず、いたずらに時間が過ぎてしまった。正直に全然休憩になってないと申し入れたい。それにさつきと言ってることが違うじゃないか。——やっぱりエイナはスパルタだと心の中で嘆く。

後ろめたいことがあると碌な事にならない、と日頃の行いを反省して、エイナに見られながら勉強を再開した。

「はい、お疲れ様。今日は合格！ よく頑張ったね、ベル君」

不意に手を伸ばされて「えらい、えらい」と言つて頭を撫でられる。疲れていて避ける気がなかったが、勉強中と打つて変わったエイナの優しい声に顔が赤くなる。

「そのっ、エイナさん？」

「あ、ごめんー！」

「い、いえ……………」

咄嗟に手を離れた彼女は少しだけ恥ずかしそうにして、誤魔化すよ

うに笑っていた。

そんなエイナに飴と鞭という言葉を思い出す。ズルいひとだ。無意識でやってるようだから仕方ないのかもしれない。彼女から偶に人を頑張らせる才能みたいなものを感じる。

「つい、弟みたいって思っちゃって——」

「え、弟？」

「……………って何言ってるんだろ私！ ごめん、忘れて！」

「もう、恥ずかしいなあ」と呟きつつ片手で頬を覆っているエイナの顔は赤い。この様子だとちよつと不機嫌な自分には気が付いてないだろう。

顔には出さないようにしているが、少し不満なのだ。エイナは自分を男と意識していないのだろうか。

いや、されるわけがないのは分かっている。エイナからしてみれば、年下の物覚えの悪い男の子でしかないだろう。偏見かもしれないが、エイナみたいにしっかりしている女性は頼りがいのある男が好みはずだ。

一刻も早くそう思われるようになればと密かに思っているが、ギルドの職員であるエイナに実力があることを打ち明けるのを躊躇してしまっている。

頭を撫でたことが尾を引いているのか、そそくさと歩くエイナを追って資料室から受付へ戻る。

それにしたって探索ペースが遅くてじれったくて仕方がない。……………ただ、もしかしたら改善できるかもしれない。勉強中、思っていたことに関して気になることを聞いてみる。

「エイナさん。7階層ぐらいでやっていける冒険者のアビリティのランクってどれくらいなんですしょう？」

「うーん……………。その人の持つスキルだったり魔法だったりで変わるけど、「ステイタス」のアビリティがだいたいFになった冒険者がパーティを組んで安全に立ち回れるかな」

「なるほど……………それをまずは目指せば良いんですね」

「うん、そうなるね。……………始めのうちは油断慢心が抜けきらないだ

ろうからとやかく言うけど、やっぱり本当ならあんまり言えないんだよね。アビリティのランクを教えてくださいれたらもつと親身に相談にのれるけど、どうしても「ステイタス」の内容を話すのは問題があるから」

……ソロで余裕を持つてとなるとEぐらいあればいいのだろうか。今日思いついた方法をヘステイアと相談しなければ。それなりに成長の早い冒険者を演じられるかもしれない。まったく、自分の数字とランクが指標にならないので困ったものだ。

「そういえばベル君は『ファミリア』の人とパーティは組んでないの？」

担当官だけあって、やはり「ヘステイア・ファミリア」の歪さは知識としてあるようだ。

リリは『改宗』の手続きの際、念願かかって【ソーマ・ファミリア】を抜けたリリと、オラリオに來たばかりの自分が偶然同じ日にヘステイアに声を掛けた——と、担当した職員に説明している。

そのあとで仲良くなつていても別におかしなことでは無い。

——バレなきや嘘じやないんです。と、なんとも実感がこもっている言葉が印象深い。

「……そう、ですね。リリは波に乗ってるようですから邪魔したくなくて。都合がつけば一緒に、ですかね」

「うーん。やっぱり出来ることならパーティを組んでダンジョンに入ってもらいたいけど……。そういうことなら仕方ないか。ソロとパーティだと安全性は格段に違うのは分かっているとと思うけど、ソロの時は十分気を付けてね？　あと、冒険はしないように！　いい？」

「はい、無茶しません！」

仕方ないなあ、と言う風にエイナは眉を下げる。

心配してくれるのはやっぱり嬉しい。

弟のように見られてしまうのは少し思うところはあるのだが、そんな風に親身になってくれる。そうなれることが彼女の魅力なのだろう——。

「もう。頑張つてね、ベル君」

——でもやっぱり、弟と思われて意識されていないのは気に入くない。

「エイナさん大好き——！」

「ちよっ——!?!」

ちよつとした意趣返しに恥ずかしい思いをしながらも、そんな別れを告げてギルドを飛び出す。呼び止めるような声が後ろから聞こえたが無視だ。少し同僚の人に冷やかされたらいいと、らしくなく悪いことを考える。

……夕日でオラリオが赤色で包まれる中、大胆過ぎたかもしれないと流石に省みた。視界の色と同色に頬を染めて、リリの待っているホームへの道を駆けた。

シル・フローヴァは触れ合いたい

地上部分の教会でリリは一人ぽつんと、長椅子に腰かけて待っていた。

「ごめん、リリ。えっと、神様は？」

「おかえりなさいベル様。ヘスティア様なら出られましたよ」

「そうなんだ。……ちよつと相談したいことがあったんだけど」

「急ぎの用で？」

「いや、帰ってきてからでも大丈夫。それじゃ行こうか」

「はいー」

不思議な事に、今朝、『豊饒の女主人』に行くのを渋っていた筈のりは随分と行く気満々だった。

何かに打ち勝った余裕。もしくは覚悟を決めているような雰囲気纏っている。

ダンジョンでの一件も含めて今日の彼女はなんだか一段と気高く、可憐に見えた。

地上の戸締りをしてホームを出る。施錠は「ヘスティア・ファミリア」以外の人間と神々が中に入れないようにするという簡単なものだが、魔法でやっているので防犯性は高い。

「やっぱり絶対おかしいです。リリの知ってる魔法じゃないです」
「そんなこと言われても。だってスキルだから」

強力な力である魔法には詠唱がつきものだ。詠唱もいらず、魔力の放出・操作による魔法の再現が行える自分は魔力暴発イグニスファトウスと無縁だ。暴発するようなそれは魔法としてどうなのだろうかと正直思う。

——異世界の賢者たち曰く、物理法則から離れた、いわゆる外法。

——埒外の力。無の否定。すなわち有るといふ存在証明。

——時として理不尽を覆す万能の力。

自分にとつての魔法とはそういうものであり、異世界の知識に偏っているのは自覚しているものの、戦闘で使えるだけのもの、という認識ではないのだ。

一般に言う魔法も確かに、逆境を覆す大いなる力という意味では魔

法なのだろう。

——憧憬の英雄たちには『魔法使い』もいる。

ありきたりな話
御伽噺に出てくる魔法使いは時に、主人公の女の子を幸せにしようと画策したりする。目の前にいる彼女がそうだったように、不幸な女の子や女性に手を差し伸べるのだ。手を差し伸べて、幸福に導く。そんな魔法使い。

「ぐぬぬぬ。ぶっちゃけると羨ましいです。ベル様ずるい！」

——未だ至らぬ身で、僕はこの子に何かできたでしょうか。

魔法があればもつとスマートに、出来たのではないかと思うことがある。

——リリは今幸せだろうか。

——僕は君を幸せに出来ているだろうか。

そんな幾度目かになる自問自答を抑え込み、リリとじやれ合いながら路地を抜け、西のメインストリートに出る。表通りに面した多くの店からは光が漏れ出て、自分たちと同じくこれから食事に行くのだろう道を行く人たちを誘っていた。

『豊饒の女主人』に着き、中に入ると「二名様ご来店ニヤー！」と
キャットピエール
猫 人の店員の景気の良い声がとぶ。

一人がお盆を持ったまま駆け寄ってきて、顔を綻ばせる。

「こんばんはシルさん」

「こんばんはベルさん。私、貴方が来てくれて嬉しいですっ」

酒場の熱気に当てられたのか、それとも別の理由からなのか。胸元で盆を抱えているシルは頬を少し染めていた。

「お給金上がるから？」

「もうっ……ふっ、バレちゃいました？」

魔石を口実に知り合いになったあの日に言われたことだが、今日に限っては本音半分冗談半分だろう。小さく舌を出しておどけて見せるシルはやはり小悪魔のようで、愛らしい。

「二人だけの世界作ってないで仕事してください」

「……………。それもそうですね。では、お二人ともこちらへ。席はご用

意してますよ」

やはり二人の間に散る火花を幻視したのは間違いではなさそうだ。シルの言葉に少しドキリとして、案内された壁際の二人掛けの席に座る。

「それじゃあジャンジャン注文してくださいね！ まず、お飲み物からお聞きしますが、ベルさんはお酒で……。リリルカさんは何を注文なさいますか？」

「ベル様と同じものを一つ」

顔を近づけて声のトーンを少し落とす。

「……………いいの、リリ？」

「……………良いんです。いい機会ですし、美味しいお酒を飲んで克服したいというか」

「……………そっか」

やはり今日のリリは一味違う。

「むむむ……………お料理はなんになさいます？」

少し羨ましそうなシルの声に従ってメニューを見る。

「じゃあ、この本日のオススメ二つ。あと、この魚料理を一つ」

「かしこまりました。……………暇を見てお話にきますね？」

「お仕事してください」

注文を受けたシルは可愛らしくサボタージュの宣言をして、リリに冷静にツツコミを入れられる。

わざとらしく染めた頬を隠すような仕草をしたシルは、注文を受けて女主人のミアの所へ伝えに行った。

ミアと目が合う。顎で店内のメニュー表をしゃくってしつかり頼めと催促される。

苦笑いを浮かべて了解の意も込めて会釈。納得したのか口角を上げた彼女は二つのグラスを取り、この酒場特製だと話していた果実酒の瓶のコルクを抜いた。

「どうです、楽しんでますか？」

「あ、シルさん」

二回、三回目に注文した酒と料理に酔いしれていた頃になってシルがやってきた。サボりなのだろうか。

「お仕事はいいんですか？」

「ええ。少し手が空いたので。といつても、また慌ただしくなると思いますが」

一杯目のお酒をちびりちびりと飲んでいるリリの指摘に、少し肩を竦めて見せたシルは店内をぐるりと眺める。つられて自分も周りを見た。

——酒に酔うドワーフも居れば、会話に花を咲かせるエルフも居る。

何があつたのだろうか、冒険者の格好をしたすすり泣く男を慰める女も居た。女の方は少し嬉しそうにしている。

さらに向こうの席には、少し不満そうな様子で酒を呷っているヒューマンの男たちがいて、喜怒哀楽が一堂に会しているような気になる。

十人十色な人生の一部が垣間見える光景に、いつかの彼女が言っていた言葉を思い出した。

「心が疼く、でしたっけ。ちよつとだけ僕も分かった気がします。オラリオに来てリリや神様——それにシルさんにも出会えて。僕、来てよかつたなあつて」

「あの、ベル様酔っぱらってます？」

「うん。ちよつとだけ。いつもはこんなことないんだけど、楽しくてついね。雰囲気酔っちゃつたのかも。……シルさんがいるからですかね？」

楽しくて自然と口角が上がる。シルの顔を見ようと、見上げると顔を背けてしまつて良く見えない。

「ごめんなさい、恥ずかしい事言っちゃいました？」

「い、いえ……えつと、大丈夫ですよ？」

大丈夫と言いながらもシルは顔を合わせてくれない。

リリが座っている方からなら見えるだろうか。

「ふふっ……ベル様、シルお姉さんを苛めるのはその辺にしておい

てはっ。」

「ええ!？」

実はあんまり酔っていない。折角シルと話が出来るのに、幾ら美酒といえど酔っぱらう阿呆がどこにいるというのだ。

「ベルさん! 私をからかったんですね!？」

「いつもの仕返しです。……朝のあれ、結構断るの辛いんですよ。」
「たまーに、ベル様そういうことしますよねー。今回は敢えてリリも乗ったんですけれどー」

「もう!」

リリと顔を見合わせて笑う。シルは少し頬を赤らめて膨らませる。

「怒りましたよ、私。ミアお母さんに言いつけてやります。ベルさんに弄ばれたって!」

「そ、それは大変だ。……どうしたら許してくれますか?」

「え、あ。……うーん、そうですねー?」

自分が少しおどけて見せ、シルがなにやら悪巧みをしている時だ。

「——ご予約の団体様ー! ご来店でーす!」

「邪魔するでーミアかーちゃん!」

「邪魔するくらいなら帰んな! ここは大人しく飯と酒を飲むとこさ!」

「うっわ、ひっどいわー! 堪忍してー」

言い方は違うのだろうが、異世界の知識でいうところの『関西弁』だろうか。親しみやすそうな女性の声が店内に響く。少し引つかかるイントネーションだ。つい最近聞いたような――。

「来られましたね。今日は団体のお客様のご予約が入ってるんですよ」

「ああ、それでさっきまた忙しくなると」

「はい。まあ、でも私は動かなくても良いかなあ……」

「……仕事してください」

てへっ、と舌を出して見せる。……可愛いなあ。

「まあ、実はベルさん達とお話している、というのであればちよつとサボっても許してくれるそうなので」

「ええ!？」

「かわりにしつかり注文させろとの言いつけですつ！」

ちらりとシルが視線を動かすと、視線の先に居た女主人は頷いてみせる。

そんなやり取りをしている間にも続々と団体の客は入ってくる。

「おお！ あの金髪の、えれえ上玉！」

「おい馬鹿、止せ。ありや——」

——【剣姫】だ。

誰かが言ったその言葉に背筋が凍り付いた。

—E—E—E—E—E—

【剣姫】の名前をリリから聞き、ようやくとその二つ名と本来の名前、顔が一致する。記憶にある血を被ったシルエットとも一致した。アイズという呼ばれている彼女は少し落ち込んでいるようだった。一人浮かない顔をして果実水を飲んでいいる。どうも彼女だけでなく【ロキ・ファミア】はこちらには気が付いていないようだ。

「シルさんが居るから目立ってるはずだけど……………」

「…………バレて、ないみたいですね」

もしかすると約束を守ってくれているのかもしれない。

リリとの会話に聞き耳を立てているシルはなんだか楽しそうだ。

「なんだか面白いです。お二人が何に怯えているのかはわかりませんが」

「お、お気になさらず……………」

「いいえ、気にしますよつ？」

喜色を隠すことなく言うシルは先ほどの仕返しとばかりに振る舞う。

「お二人は【ロキ・ファミア】から隠れているのですよね。何があつたのかすつごく気になります。教えてくださいっ？」

「黙秘します！」

「言ってくれないとさっきの件、ミアお母さんに言いつけますよう？」
「うぐっ……………」

それはそれでまずい。あの拳骨の威力は尋常じゃなさそうだ。今【ロキ・ファミリア】の前で目立つことは避けたい。分かかってて言うてるのだろうか。

「それだけは堪忍してください。……………その、なんでもしますから」
「駄目ですよベル様！ 何を要求されるかわかったもんじゃありません!!」

声を小さくしながら怒鳴るといふ器用なことをして止められる。シルは薄く目を細めて、少し怖い笑みを浮かべた。

「ぎーんねん。では、ミアお母さんに言いつけてしまいましたよ。——あと【ロキ・ファミリア】の方々とお話してきますね？ いいですな？」

「ま、待って！ 話します、話しますから！」

「ふふっ！ 最初からそうしていればいいものを……………往生際が悪からです。さあ、きりきりお話ししてください？」

シルはそういって、腰を折って形の良い耳を覗かせた。リリがそんな彼女に「絶対魔女です」と言っている。

渋々彼女の耳元へ口を持っていき、周りに聞こえないよう嘘の事情を話していく。

「……………助けられたんですけど、逃げ出しちゃって」

「まあ、それはそれは、大変な事をしてしまいましたね？」

他人事だと思つて。

「言わないでくださいよ？」

「安心してください。これでも私、口は堅い方で——」
「……………」

普段の行いを省みても、シルの言葉に根拠になりそうなものが見当たらない。

「む、信じられないって顔ですね？」

「……………当たり前じゃないですか」

「これでも、ですか？」

「か、可愛く言ってもダメですよ」

のぞき込むようにこちらを見ていたシルが少し顔を赤らめて、口を尖らせ「ホントなのに」と、そっぽを向いて言った。

直立したシルは遠征からの帰還を祝う彼らを見る。

「でも、それなら今がお礼を言うチャンスなんじゃありません？」

「……………色々守ってくれたんです」

「それは先ほどお聞きしましたけど、まだ何かやっちゃったんですか？」

「いえ。……………モンスターの血を代わりに彼女が被ってしまつて」

「……………なるほど。それはとてもじゃないですが、面と向かつてお礼なんて言えませぬね。——私、なんだか心が疼いてきました」

「それ絶対違う意味だと思っただけど……………っ！」

「冗談ですよっ。……………いきません」

「……………僕が此処にいる事も言っちゃあダメですよ？」

「それもするつもりはありませんよー」

リリと二人でシルを睨みつける。しかしにこにここと笑うばかりで動じた様子はない。おどけていたが本当かもしれない、と思つて目尻を下げる。しかし、釘を刺していなければ話に行っていたかもしれない。

話題の中心である「ロキ・ファミリア」を見る。

「よく来られるんです。主神であるロキさまがこのお店をご贖員にしてくださいって。んーアイズさんは、そうですね。強いことで有名ですが、こうしてみている限りですが何処か天然な方なのかもしれない。私と同じくらいの年齢、だったかな？」

シルは「でも、ほんの数回お見かけしただけですから」と付け加える。人間観察が趣味だと豪語するシルの分析に驚きながら——一件の人物アイズ・ヴァレンシユタインを見る。

「あと、凄くお綺麗ですよ。町娘の私としては嫉妬しちやいそう……………」

確かに、とシルの言葉に内心で同意した。改めて見るとアイズと言

う女性は魅力的な女性だった。

神秘的で。それでいて儂げで。憂いを秘めていそうな金色の瞳が揺れている。

深窓の令嬢というのはああいうのだろうか、と知識でのみ知っている概念とすり合わせる。

しかし、そんな儂げな印象とは裏腹に、その実態は二つ名が付くほどの強者。こつこつと強くなった有名人。自分の目指す英雄ではないものの、自分よりも認知されていて英雄視されている。

きつと並々ならぬ努力があったのだろう。あれだけ苦しい思いをしている自分が未だにL.V. 1なのに対して、L.V. は自分よりも三つも四つも上。何が彼女をそこまで突き動かしているのだろうか。

そんな人に血を浴びせるなんてと自己嫌悪してしまう。仕方がないとはいえ、シルにも嘘を吐いてしまった。いつも揶揄われている仕返しだと、あまり気にしないようにする。

……色んな感想を錯綜させながら警戒すべきはずの【剣姫】をじつと眺めてしまっていた。

そんなことをしてしまえば目が合ってしまうのは当然のことだ。

リリの方へさつと目を逸らしたときには遅く、金髪の彼女は目を見開いて固まってしまっている。

気づかれた。

「アイズラー！… どうしたの〜?」

「う、ううん。……なんでもない」

隣の席に座っていたアマゾネスの少女が、固まっていた彼女を気にしてこちらを見てきているようだった。

リリは額に手を当てて「あーあ」と言わんばかり。

しかし、アマゾネスの少女は首を傾げた後、こちらを意識の外に追いやったようだ。「しっかり食べて元氣出そっ!」と天真爛漫に目の前にあった料理を件の少女に勧めていた。

わくわくといった様子で状況を楽しんでいるシルに五回目くらいになる注文を申し付ける。

「…………やはり約束を守ってくれているんでしょうか?」

「どうだろうね。……まあ、少し様子を見よう」
彼らを気にかけてこれ以上気取られないよう努めた。

ベル・クラネルは抱きしめたい

——「ロキ・ファミリア」の団員は多く、店内の客席だけでは収容できていない。団員のほとんどは外に面したテラス席にいる。

自分が注文した料理が再び運ばれてきたあと、シルはミアに呼ばれて業務に戻っている。想像以上に忙しいようだ。

シルの演技と本性の境目はよくわからない。どちらにしろ可愛いのので真偽は問わないが、離れていく際に名残惜しそうな雰囲気を漂わせていた。多分恐らくあれは本音の部分じゃないだろうかと思う……のは自分が男だからだろうか。

「リリ、大丈夫？」

「大丈夫ですよ？」

こんなことを考えている場合じゃないのは分かっているが、酔ったリリが可愛すぎて辛い。

酒に抵抗感があることもあって、ちよつとづつお酒を飲むリリは小動物のようだった。自分の飲んでいるものと同じそれは、作っているのが酒好きなドワーフなだけあって酒精アルコールが強い。飲みやすく、美味しいので分かりにくいが一般人であればグラス一杯でも充分に酔える。体格が小柄なりりであればもつと少なくとも酔ってしまえるだろう。

まだ一杯目の半分ほどしか飲めていないリリは頬を赤らめていて、可愛いようにも艶っぽいようにも見える。どこからどう見ても既に酔っていた。自分も結構飲んでいたので、そんな彼女を抱きしめたい衝動にかられる。いつもよりも抑制が甘い。

人前だからやってないがホームだったらまずかった。きっと抱き枕にしていたことだろう。

「ベルさまー、美味しいですねえー」

「……………っっっ」

男女七歳にして同衾せず、という諺が『日本』にあったが極東にもあるのだろうか。そんな取り留めもないことを考えて、帰った時の自分を今から自制させる。リリ可愛い。

「……………」

——四人掛けの席に座っている金髪の彼女からの視線を時々浴びる。見られながらの食事は堪えるこたものがあつた。どこか食事は味気ない。シルへの日頃の感謝の気持ちも込めて、高くて量の少ない料理を頼んでいるのだが、これでは折角の美味しい料理が勿体ない。

見ないで欲しいと直接言いには行けない。料理が運ばれてきてから酒だけが減っている。「酒、飲まずにはいられない！」と悪態をつきたい気分だ。

美人な人にかけて貰えているという状況は何時もなら嬉しいのかもしれないが、今だけは複雑だ。アイズが一人の時に再会しなかった。

……………今食べているものが無くなつたら出てしまおう、と思つていると【ロキ・ファミリア】が少し慌ただしい。

どうしたのだろうか。そう思つて視線を向けると、苛立った様子の狼ウエアウルフ人の青年が浴びるように酒を飲んでいて、周囲の者たちは嘔吐してゐるか、飲み過ぎだと心配をしている。

心配している女性の中には一際美人なエルフもいる。

グラスに注いであつた酒を一息で飲み干し、狼ウエアウルフ人の青年はクハアアーと酒臭さそうな呼気を吐き出す。

酒臭そうな上にオッサン臭い。なのに上品そうな絶世の美女と言えるだろうエルフに心配されているという——。羨ましいなあと思つてしまうのは間違つているだろうか。

「おうい、アイズウ……………！」

狼ウエアウルフ人の青年はで立ち上がつて、アイズの方に向かって歩いていく。

「ぎゃー！」

「ちよつと、ベート!! レファイヤー大丈夫!?!」

「大丈夫です……………」

どけ、とアイズの前に座っていたエルフの少女を粗暴にも退かして座り込み、睨みつけた。

「……………お酒、臭いです。なんですか、ベートさん」

「なんで、黙つてやがんだ? ああ?」

「なんのことですか」

「はっ、お優しいのは結構だがよう——なんだって雑魚を庇うような真似をしてんだよ、お前」

「——!?!」

アイズがふとこちらを見て、視線が合ってしまった。……視線を外す。申し訳ないが今は何も言えない。

せめて彼女が一人の時に会えたら良かったのに。と改めて思いつつ、他の所の様子を見る。

「なあ、フィン。ベートが言うてるのは何のことや?」

「帰りに遭遇したミノタウロスたちが凄い勢いで、逃げ出したつてのは昨日報告したと思うけど。最後の一匹は5階層までアイズとベートの二人が追って行ったらしいんだ。その時何かあったっていうのはわかるんだけど……」

「なんや、聞いてないんか?」

「……うん。どうしてか二人とも口を閉ざしていたみたいだね」

主神であるロキが团长らしき人物に事情を聞いていた。フィンと**バルム**というらしいその小人の男性は事態の推移を見守るように静観している。

——しかし、そうか。本当にアイズは約束を律儀に守ってくれていたのだ。

「何処見てんだアイズッ! 聞いてんのかア!」

「………なんですか」

「チッ。大方、ミノからびーびー泣いて逃げてた冒険者でもいたんだろオ! ええ!?!」

「………ッ」

「ハン、そんな雑魚相手に何してんだ、アイズ。何度言ったらわかるんだ。お前は強エ。雑魚に構うんじゃねえって。所詮、雑魚は一生雑魚だとなア!」

「あれは、………仕方がなかったんです」

「おーおー、うちの姫様はお優しいことで。だがよオ、雑魚を庇ってクセエ血を被ってちゃあ、世話ねエよなあ? ああ!?!」

——……………自分には何も言えないが。

「おい、もう止せベート。我々の不手際だ。アイズを責めるな」
「黙ってるババア！俺は煮え切らねえアイズに言ってるんだ！」
「くっ……………」

酒を飲むのを止めようとしていた上品そうなリヴェリアと呼ばれていたエルフに注意されて、衰えているとは思えない美貌を前によくもまあそんなことが言えたものだ。リヴェリアは顔を顰めていて、眉間に皺が寄ってしまったている。

彼女の言う通り。とは言い切れないが自分の迂闊が招いたことだ。アイズを責めるのはお門違いも甚だしい。

指先から魔力を放出。

「……………」

形状を固定。『気絶』『酩酊』『不可視』の属性を付与。

真実を知らなければ確かに彼の言っているのは正論だ。それ故に、口惜しそうに黙って聞いている人は多い。

自分がこんなことをするのも間違っている気がするが、黙って見ているだけなんて出来そうにない。

「なあ、アイズ。笑い話にもなりやしねえぞ？——まだ臭うんだよ、クセエクセエ牛の血の臭いが。……………真っ赤なトマトみたいになりやがって。あんときは笑えたが、そのあとのお前の態度が気に食わねエ。まるで雑魚を庇ってるみてエに下手な嘘までつきやがったよなあ？」

ウエアウルフ
種族的に狼 人の嗅覚は鋭いのだろう。洗ってもどうしても臭いが残ってしまうのかもしれない。それだけでも十分ひどい事をしてしまったというのに。……………彼女に嘘までつかせて、この始末だ。

酒が入ってなおの事イライラとしている自分がいる。誰かに、じゃない。他の誰でもない自分が腹立たしい。

「ああ？それともなにか？ミノ如きに怯えて、守られなきゃなんねえような雑魚がお前は良いつてのかア!? 冗談は止せよオ？ 雑魚じゃあ、お前には釣り合わねエ！ 他でもねえお前が認めねエッ！ そうだろうがア!!」

「……………」

「黙ってねえでなんとか言え、アイズツ!!」

何かを言いかけたようだったがアイズは俯いて黙ったままだ。

「酒が不味うなるわ。ベートの言い分も分かったから、もうその辺で止しとき——」

主神のロキが真面目な顔をして止めに入る。店内に不穏な空気が漂い、ミアがイライラとしているのがわかる。

……………彼らから視線を外して、ウエアウルフ狼人の彼の頭上に用意していた極小の魔力球を、目標である後頭部めがけて飛ばす。机と音を立てて、ベートというらしい狼人の彼は気絶した。

酔いつぶれたように見えたはずだ。傍目には急に酔いつぶれたようにしか見えないはず。

「……………」

——どうしてあのエルフの女性とアイズに見られている？

最近視線に敏感になっているので別の方向を向いていても具体的にわかるが、なんだかぎよつとした様子で、まるで……………悪い想像はすまい。気取られていないことを願おう。

極力気づかれないようにしていたはずなのでバレていないはずだ。

「つて、酔いつぶれたんかいな! あ、アイズたくん、ベートに泣かされてないか? 怖いことなかったあー? 大丈夫う?」

「大丈夫、ですっ」

「ああん、アイズさんのいけずう〜!」

ロキはアイズに近寄って行き、その肩に腕を回そうとしてすげなくあしらわれてしまっていた。

「——ロおキい?」

ぷつ、と誰かが嘔き出すも地を這うようなロキの名を呼ぶ声がそれをかき消す。

「げえ!? す、すまんミアカーちゃん! みんな死んだベートふん縛って店の外に叩き出しとけ!」

「……………ほーう?」

「し、縛り方は恥ずかしい奴で!」

「んなこと言ってるんじゃないよ。大体近所の迷惑になるから止めな。それにしつけのなつてない眷族ことどもの責任はあんたが取るもんだらう？」

——あんたに酒はもうださないからね」

「いきい!? か、堪忍してーやあ! 飲みたい飲みたい飲みたいー!」
演技……ではなく、本当に泣いて駄々をこねているロキはヘスティアから聞いていた話と違ってここ半月でオラリオで見てきた多くの神々と同じように見えた。トツプ「ファミリア」と言ってもどこの神も変わらないのか、と思ってしまう。

しかしロキの大人げない姿に張り詰めていた空気は払拭されている。来る前から飲み食いしている「ロキ・ファミリア」に関係ない人も絶望させてみせている神の姿に笑っている。

カウンターから身を乗り出して沙汰を言い渡したミアへ許しを請うロキ。それを鼻で笑って突き放すミア。

幾ら鍛えても、知識があつても得られない人生経験のようなものをその光景から感じて、まだまだだなあとひとりごち。ほろ酔い気分が残っていたグラスの中身を呷った。

————

異世界の知識にある物語の登場人物に似ているというか。ベートというらしい狼ウエアウルフ人に既視感を覚えていたのだが、違うなあと意識からそらす。「ロキ・ファミリア」の居る付近に、海老反りの格好でロープで縛られ転がされている姿はどうにも違う。

……彼がこうなっているのは全てが自業自得というわけではない。むしろ自分に一番の原因がある。心の中で気絶している彼にすこし謝罪した。しかし、それ以上は謝らない。

——ババアだ、なんだと言つて騒いでいたのは彼の責任である。

「帰るよ、リリ」

「ふあい、ベルさまあ……」

ようやくとグラス一杯飲み終えたりりは少し呂律が回っていない。目が据わって眠たそうなりりの肩を支えてカウンターまで行く。

肩にかけているポーチから1万ヴァリス硬貨が二十枚ほど入った袋を取り出してミアに渡す。

「……………聞きやあしないよ」

流石に食事代にしては多い額だ。詮索しないでくれ、という意味を込めて渡したつもりが中身を見て呆れられる。

自分と【ロキ・ファミリア】の双方を知っているこの人のことだ。見ていないようで客の事はよく見ている人だから、自分が何か関わっていることに勘付いているのだろう。

「——ベルさん」

「シルさん、今日はこれで帰ります」

「そうですか。もうちよつとお話したかったんですけど」

寂しそうな仕草をして見せたシルに笑う。

「僕もです。ただ、もう」

「それも、そうですね」

ちらりと眠そうな彼女を横目で見て、シルも納得した。

「はい。……………でもシルさんが残念なのはそれを口実にサボれたからでは？」

「な、……………むうー」

本音半分、冗談半分で拗ねて見せたシルは可愛らしい。本当に年上ののだろうか疑問に思う。

そんなシルの様子に忍び笑いをしていたミアは、入り口の方をしゃくった。

「アンタのお得意様がお帰りだろう？ 店の入り口まで行って見送つてやんな」

「……………いいんですか？」

「いいもなにもこれだけ払われちゃあねえ。——ほら、さつさと行ってきな。仕事は山ほどあるよ」

ジトーつとした目でミアを睨み、一息をついてシルは笑顔になる。

「それじゃあお見送りますね……………。ベルさんったら意地悪です」

「シルさんには負けますよ？」

「違いますつ。そういう意味じゃないんですつ……………もう、知りませ

ん」

ふい、つと顔を逸らして先を歩くシルに続いて出口へ向かう。右へ、左へと揺れている髪の毛が可愛い。少しだけ注目を浴びているがすぐに霧散した。若干名からは幾度かチラ見されている。

段差のある店の出入り口を降りると視線は流石に失せていた。振り返ったシルと向き合う。

「それではベルさん。今日はありがとうございました。……その、ベルさん的には楽しめなかったのかもしれませんが、今日は一段とお仕事を楽しかったです」

「僕も今日は楽しかったです。こちらこそありがとうございました」
「……それは良かったです。私のせいでベルさんたち怒ってないかなあって少し不安でしたから」

「確かに緊張してましたけど、杞憂だったようですから気にしてません。……あの、シルさん」

「? なんでしょう」

そつと、手に忍ばせていたお手製のアクセサリーを手渡す。

ポーチのアレンジのための小物に手を加えたものだ。仕事にもつけられるよう、敢えてシンプルなデザインに。

銀の足に、飾りとして小さな丸い鈴をつけている。『日本』に似た文法の極東にもあるという簪だが、装着中は勝手に取れないといった補助効果のほかに、込めた魔力が尽きるまでどんな状態で死にかけても万全の状態で蘇生できる効果を付与している。

勿論、他にも使い道はあるがシルがそんな場面に遭遇しないことを祈ろう。

「え、こんな——もう、リリルカさんに怒られちゃいますよ?」

「大丈夫です。ちゃんと話はしていますから。ちよつとしたお守りです。……その返品は受け付けませんので、要らなかつたら捨ててください」

「……………」

流石というべきだろうか。オラリオに住む年頃の女性であるシルは簪を知っていたようだ。

シルは簪をじつと見てから一度店内の方へと顔を向けた後、自分の手を引つ張つて陰に隠れた。自分の服の端を掴んで、眠る一步手前のようなリリも自然とついてくる。

「シルさん？」

「——つけてくれませんか」

「え」

見上げて来た彼女の表情は今までに見たことがなかった。恐らくこれが素の表情なのだろう。

今いる場所は少し薄暗い。困惑と期待で彩られた少し朱のさした彼女の顔が、店内の明かりに照らされている。

「はつきりと聞いたことは無かったです、お二人はそういう仲なのでしょう？」

「……………どういう仲ですか？」

「意地悪しないでください。——私は真面目に話しているんです」

シルの表情は憂いを帯びる。

「リリルカさんの手前、こんなことしたらいけないのは分かってるんです……………」

「……………」

「ベルさんは優しいです。でも、意地悪です。……………期待をさせて、その気があるように振る舞って。いつそ突き放してくれたら楽なのに」

悲哀が籠ったそんな声に胸が締め付けられそうだ。これも演技だとすると未恐ろしい気もするが、もしこれがシルの本性であるなら。

——……………いや、例え演技であつてもこんなこと言われて何もしないのでは男が廢る。

「痛かったら言ってください」

「!？」

驚く彼女を無視して、胸に抱いていた簪を抜き取り、彼女のお団子に纏めている根本のあたりへ少し斜めに差し込む。

「シルさん。初めに謝っておきます」

「——っ！」

息を飲んだ。

「リリのごとも、貴女の事も好きだから。——選べと言われたら、僕はどちらともを選びます。選ぶことなんて出来ないから。だから、その……。シルさんが、そんな僕でよかったですけど」

「あ、あの。それは……」

いざ口にするとはやはり気恥ずかしいものがあつた。やはり、覚悟を決めているとはいっても傍から見たら浮気者そのものだ。罵られても仕方がない。

はらりと、潤ませるだけでついぞ見た事の無かつたものが彼女の頬を伝う。

やはり怒らせてしまっただろうか。

「ごめんなさい。……やっぱり不誠実ですよ。僕」

流れたものを拭つた。

「いえ、いえ。違うんですよベルさん。これは嬉し涙、ですから」

「よかつた。悲しくて泣いてるわけじゃないんですね——」

「……。でも、少し悲しいかもです」

「ごめんなさい」

「……ふふふ。嘘ですよ。私はいまとても嬉しいです——」

クスリ、とシルは笑つて見せる。少しだけ調子が戻ってきたようだった。やはり演技もそうでなくとも、笑つていた方が安心だ。嬉し涙であるなら時に泣かせてみたい気もするけど。

「……でも、その。リルルさんに悪いんじゃないですか？」

「リリにはもう話してます」

「それは、まあ」

シルは目を見開く。……引かれてしまつても甘んじて受けよう。例えやっつていることが浮気男のそれだとしても、自分の覚悟は揺るがない。

シルは少しだけ喜色を交えた息を吐く。

そんな仕草をリリもしていた。それに少しでも慣れなくて、抵抗がある。

——なんだか子ども扱いされている、というか。

……いや、確かに子どもから片足抜け切れていないけども。

「リリルカさんも苦労してるんですね」

「……………苦労させちゃってます」

シルは労わる様に。自分に身を預けて眠り始めたリリの頭を優しく撫でた。

『豊饒の女主人』を後にして、ホームへの帰り道の最中。目の前の夜空には月が浮かんでいた。

綺麗な夜だ。……………そういえば月を恋人に見立てて愛を囁く粋な表現の仕方があったな。と世界の知識を思い起こし、月に想いを馳せる。その台詞を呟いてみたが、どうにも自分は似合っていないような気がした。

少しだけバベルの方角から感じていた視線が柔和になった気がする。そんな視線を受けてなのか。背中で眠っているリリがもそもそと動く。

「ベルさま——」

「ん、どうしたの」

どうしたのかという質問にリリは答えない。

……………しばらく待ってみてもリリは何も言わなかった。

——寝言だったのかも知れない。そう思い前を向いた。

肩に置かれていた手が離れ、リリの腕が首に回されて驚いて背中を見る。

抱きしめられたことで少し揺れていた小柄な身体が安定し、密着する。

——魔石街灯が夜の闇を明るくしていたが、彼女の心の中まで照らしてはくれない。

リリは夢現の中、ただ強く抱きしめる。

この温もりが何処にもいかないように。何処かにいってしまわないように。

——……………朦朧とする意識の中でも感じる温もりに、只々安堵し

たいがために。

バグ・クラネルは夢を見て

先に帰っていたヘスティアにリリを預けて浴室に向かい、汚れを落して湯に浸かる。無駄に力を入れて作ったため、保温性はぼつちりだ。魔法の無駄遣いだと我ながら思う。でも心の洗濯という言葉もあるくらいだから、入浴に関する事で力を入れるのは悪い事ではない。

身体の芯まで温もって出そうになった欠伸を噛み殺し、心地よい温もりの誘惑を振り切って浴室を出る。脱衣所で服を着ると、いよいよ眠気が本格的になってきた。

ヘスティアに今日あったことを話さないと、と思ったが明日でも良いだろうか。必ずしも今日中にどうこうしなければ、というわけでもない。

リリの部屋からヘスティアが出てきて「明日聞くから早く寝なよ」と、地上にある像と同じ顔つきで言った。

「では、おやすみなさい」

「うん、お休みベル君」

部屋に戻ってベッドに倒れる。ぼふん、と少しだけ埃が舞って、くしゃみが出そうで出ないむず痒さが鼻につく。一つ鼻を鳴らして、落ち着くと同時に滂沱と襲ってくる眠気に意識が流されていく。

—————深い深い夢を見ている。

遙か頭上の煌めく水面を、自分は水の中で揺蕩いながら眺めている。

水面を目指す気泡のように、湧き上がる知識は異世界のものだ。

自分は異世界があることを、異世界でも人が生きていることを知っている。

異世界に生きる人々を魅了する物語があることを知っている。

その多くの物語は自分から見ても劇的で、感動的で、魅力的だった。知識を得た代償か。はたまた別の理由なのかはわからないが、記憶にも霞がかかって忘れていることがあるけれど、きっと今は必要ない

事で、いつかは知れることなのだと思う。さほど気になってはいない。

……それよりも今自分が気にするのはその無数の物語に出てくる無数の彼ら、自らの憧憬に携わる英雄たちの事だ。

一撃のもとに悲しみも、怒りも、理不尽も、不条理も。何もかもを打ち砕くヒーロー。理解を求めず、趣味だと言って、何でもないかのように誰かを救える。凡人であった彼は無我夢中で自らを鍛え続け、その強さゆえに、泣いている誰かを、顔も知らない誰かを助けることが出来るようになった。しかし彼は人間らしくあり続ける。その行いが出来ることが何よりも尊い。

正義の味方を目指す主人公。未来の彼。まっすぐすぎるが故の、歪さを垣間見せる彼の生き方は見習うべきものであるが、同時に戒めでもある。相互理解は必要。ただ万人の味方であろうとするがむしやらかな生き方は眩しいほどに愚直。未来の彼は、自分のようになるなどという戒めを過去の己に残し、その戒めは英雄になりたい自分にも刻まれた。主人公の二人、いや、一人に自分は多くの影響を与えられている。

農民でありながらその業を魔法の域へ至らせた名もなき、粹を知る雅な男性剣士。

病弱な身でありながら、仲間のため、一念の下に剣を振り続けた女性剣士。

始めは魔法という言葉に惹かれての事だったが、二人の卓越した剣捌きは当然、その生き方、在り方には心震えた。

水面へと上っていく泡のように、知識と想いが浮かんでは自分を取り残していく。

この知識は異世界に生きた誰かの追体験なのだろうか。人の良いも悪いも内包していた異世界の知識は、自分にとってまさしく劇薬だった。

……一年前。知識を得たばかりで沸き起こった戸惑いや混乱から、無意識の内に目を背けるのに、『異世界の物語』は丁度良かったの

かもしれない。

しかし異世界に生きる多くの人が共感し、憧れ、感動する彼らの生きざまを綴った無数の物語は、この世界の有名な英雄譚に匹敵するほど。いやそれ以上かもしれない感動を与えてくれた。例えば逃避から始まったとしてもそのことに間違いはない。英雄譚フリークの自分が惹かれるのは、なんらおかしいことではなかっただろう。

英雄達の素晴らしさを祖父に聞かされて育った自分に、その兆しは確とあった。『中二病』と呼ばれていたものが開花し、「彼らになりた」と思い始めたのは割とすぐの事で、その思いはいつしか「彼らになる」という覚悟に変わった。

どんな努力でも身を結ぶことを彼らが教えてくれたから。実際にやってみて一歩近づいたと実感した時は感動したものだ。

——泡が浮かぶ。

やれる、と。確か、燻っていた覚悟に火が付いたのはその時だ。

しかし、実践してやっついていくうちに気が付いた。彼らにはどうしても……何をやってもなれないことに。

答えは簡単だった。知識に頼る必要もなかった——自分は彼らではない。

生き方、在り方を真似ることは出来る。確かに技術や能力は自分の糧になった。だが、何処まで行っても彼らではないのだ。彼らになりきることはできない。

届きようがないのも当然。追いつけないのは当然。自分は他の何でもなく、英雄に憧れるベル・クラネルだった。生きて来た道が、生きていく道が違うのだから。

——気泡が浮かんで離れていく。

どこであろうと、英雄の生き方はどこか哀しい。そう感じてしまうのは当人ではないからで、彼らは望んでそう生きたのだ。悲哀するうしろめたいのは間違っている。

——口から泡が漏れる。

彼らの不屈の魂に宿る力と知恵、勇氣は何よりも遠くて、尊くて、眩しい。

しかし彼らにはならない。どうあつてもなれない。でも彼らのようにはなれる。

いつしか彼らは憧憬の一部となった。数多と連なり、幾重と積み重なって形作る憧憬の一部に。

知識を得てからの約一年という時間は長く、目標を、憧憬を構築するには十分な時間だった。

——気泡となって漏れてゆく。

一撃のもとに、誰かの身体と心を救い。

剣に生きた彼らの剣戟を踏襲し。

時として魔法少女のように愚直に、己の道理を力で押し通し。

獣の言葉に則り、想いは違えど愛を抱いて。

常に己は弱いのだと自覚をして、強くあろうと我を忘れず志す。

……………。

自分の大切なものを守れるように。

人ではなくなってしまうぬように。

不条理な運命すら撃ち碎けるような、そんな理想の英雄ベル・クラネルに自分になりたい。

しかし、牛歩のようでは想い描く未来の自分に追いつけない。——早く。——

理想を理想のまままで終わらしたくない。——もつと早く。

水面に映る見えない己に手を伸ばす。道程は既に定まっているのだから、悩む必要など何処にもない筈だ。

リリの事も、シルの事も。ヘステイアへの想いも。多情な己を許せと懺悔する必要などない筈なのに、彼女たちに罪悪感を持つてしまう。……………そんなことでは到底叶わぬ夢だと知っているのに。

挫けそうになるたびに己へ訴え続けて来た。

強欲であれ、貪欲であれ。想いを一途に描き続ける。

そうすればきつと自分は英雄になれるから、と。

——深い夢みずの中でハツとして息をのみ、水面ではなく、水底へと意識を向けた。

同じような事をどこかで聞いた。知識に埋没かこしていた記憶の声

響く。お前の祖父は何と言っていただろう。

——始めから僕は知っていた。

思い出した記憶が——祖父の言詞が苦悩した末に辿り着いた答えの全てを語っていた。

気が付いた。もともと迷う必要なんてどこにもなかったのだ。

異世界の知識でなくても自分には彼の言葉があった。

——水面へと向き直ってこの手を伸ばす。思い出した祖父の言葉が耳元で紡がれ、反芻する。

『己を賭した者こそ、英雄と呼ばれるのだ』

道を外さぬように全速力で駆け抜けろ。

失敗を先人から学べ。その先に居る未来の自分を目指せ。

『仲間を守れ。女を救え。己を賭けろ』

人としての正道を為せ。好いた女を愛せ。己の行く末を切り拓け。

『折れても構わん、挫けても良い、大いに泣け。勝者は常に敗者の中にいる』

休んでも良い、遊んでも良い、回り道をしても良い。

——僕は貴方を失う悲しみを、苦しみを、悔しさを知っている。

『願いを貫き、想いを叫ぶのだ。さすれば——』
ただし本質は見誤るな。

『それが一番格好のいい英雄だ』

——「間違っているだろうか」なんて後悔はしてられない。

そんな何時になく強く想う。

原初の英雄願望を呼び覚まし、より一層の覚悟と決意をする。

泡沫と上る記憶の最後——笑う祖父を見た気がした。

——……久しぶりに見た夢から目覚めた。こんな目覚めは本当に久しぶりだ。

夢は記憶の整理だと聞くけど、改めてそうなんだと思い知った。悩みも、迷いも全て消え失せていて、あるのは英雄になりたいという純化された強い想いだけ。……ハーレムにしてもそう。帝王になるわけじゃないけど『引かぬ、媚びぬ、省みぬ』だ。分かりやすい。

どうしてもそう思ったときは心の中だけに留めるとしよう。僕は『アルゴノウト』の青年で終われないから。

消えそうになる夢の内容を記憶に刻みつけて、身体を起こして顔を上げる。

部屋の時計は午前三時少し前を示していた。寝坊することなく起きたことに安堵して、毛布を握りしめていた手の力を弱める。目元を拭うと、少しだけ雫が手の甲に付いた。

お祖父ちゃんとの思い出が、思い出せるようになっていく。……記憶にかかっていた霞は大切な人の記憶も隠していたのか。まだ何か忘れていたような気がするけど、気にならないという不思議な感覚が心の中を占めている。なんだか、誰かに隠されているような気さえる。……いや、気のせいかな。

ベッドから降りて、寝ている間に凝った体を伸ばす。

市壁の上へ行き、トレーニング前の「ステイタス」を確認。日常生活の中で1上がっているのはどうなんだろうと思わないでもないけど、昨日ダンジョンからの帰り道で見た数値と大した変わりはない。いや、一つだけ大きな変化を見つけた。——スキルが変わっている。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : SSSS 61084

耐久 : SSSS 59945

器用 : SSSS 50632

俊敏 : SSSS 59321

魔力 : SSSS 62486

《魔法》

□

《スキル》

リアリス・フレイゼ

【憧憬一途】

・早熟する。

- ・理想おもいが続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

・精神異常に対する完全耐性。

【常想強我】
フォルテイス・イデア

- ・ステイタスの自動更新権。
- ・理想が続く限り効果持続。
- ・理想の丈により効果向上。

【起死回生】
レ・アニムス

- ・精神力を消費して再生させる。
- ・瀕死度合によって効果向上。
- ・意思の強さによって効果向上。

【大魔法使】
アルス・マグナ

- ・魔力・魔素における絶対干渉権。
- ・魔力放出。
- ・対象への属性付与。
- ・周囲の魔素を精神力に変換し吸収する。

【帰】

- ・あらゆる不可能を不可能のまま可能にする。
アクティブ・アクション
- ・能動的行動に対するチャージ実行権。

三三三三三三

……少しだけ気になることが出来たけど、僕ではわかりそうにな
い。神様でも分からないかもしれない。心当たりがないわけではないな
いけど。

トレーニングを終えてホームに戻ると、いつもの鼻孔を擦る美味し
そうな匂いを感じ取れなくて、リリがまだ起きていないことを知る。
元々僕の生活習慣に付き合わせていたところもあるから無理は言
えない。でも少し残念に思う。リリの手料理というだけで美味しい
から。

……とはいえ本格的な料理を作る気も起きないし、簡単に済ませ

てしまおう。ソファに座る。

リリと神様が気後れしてしまうだろうからいつものは出さない、10階層以下で採れた迷宮産の食べ物、『倉庫』の中から籠を取り出してその中へ入れていく。

肉果実ミルーツのような不思議な味わいをしている美味しいだけの果物フルーツもあるけど、下処理が必要なものもあるから、初見では美味しそうに見えても一つ誤れば痛い目を見てしまう食べ物もある。

出そうと思ってやめた、お酒を入れた瓶に浸しているあの果物フルーツなどその最たるもので、お酒に漬けるという処理をしなければ食べられない。

ただし、食べられるように処理を施せば身体の傷は勿論、何もかもを最良の状態まで癒す、文字通りの万能薬に変わる。お爺さんお婆さんが食べればたちどころに僕の歳くらいまで若返ってしまうくらいだ。

加えて、毒抜きに使ったお酒も『神酒』に勝るとも劣らない一品になる、という捨てる場所がない稀少果実レアフルーツだ。

何故お酒なのか。毒はどこに行ったのか。その原理までは分からない。便利で有益だと思うけど、それによる混乱を考えれば少し気後れしてしまう。けど、これを世の中に出せれば救える人は大勢いそうだ。

ナアーザさんなら上手く扱ってくれるだろうか。ただし、それだと「ミアハ・ファミリア」を巻き込んでしまうことになるし、と気が付いて迂闊に行動できなくなってしまういそう。

……………いつそのこと仲間に引き込むつもりで話をする機会を設けてもいいかもしれない。

そんなことを考えていたらリリが頭を押さえてダイニングに出てきた。二日酔いかな。

「ベルさまあ……………」

「おいで、リリ」

「……………はあい」

ふらふらとした足取りで、リリは隣に腰かける。完全に二日酔いの

症状だ。流石といって良いのか疑問だけど、ドワーフの作るお酒一杯でこうなってしまうとは。止めておけばよかったと少しだけ反省する。

あうあうとうわごとを言うリリの頭を太股の上のせて、虚空の中に腕を突き込む。確か『倉庫』の中に二日酔いに効くお腹に優しい食べ物があったはずだ。

「あった。リリ、これ食べて」

「ありがとうございます……」

チェリーのような見た目の二つ実のついた果物を取り出して、リリの口元に据える。種は無かったはずだから、リリでもそのまま食べられる。

自分も口に含んで噛み締めると果汁が溢れた。しつこくない甘味と酸味だ。頭が冴える。

リリも同じよう目で目をぱちくりとさせていた。……可愛いなあ、もう。

少し癖のある髪の毛を撫でると、今どんな体勢になっているのか分かったようでちよつと顔を赤らめた。

「あの、ベル様」

「ん、なに」

「は、恥ずかしいです……っ」

リリが起きて、膝にあった軽い重さが消える。少しだけ名残惜しい。

「で、なんですかこれ」

赤らめた顔のままこほんと一つ咳ばらいをして、リリは机の上に並べてあるものを見た。

「迷宮でとれた食べ物。全部食べられるよ。……ご飯作るのが面倒臭いなあって」

そういうとリリがハツとして時間を見る。

「ごめんなさ」

「ストップ」

謝ろうとしたリリの言葉を遮って続ける。

「リリが謝る必要はないんだよ？ 元々僕が早起きなのに合わせてくれてただけだし。それに、ほら、折角出したからリリも食べよう」
「ですが……………」

「美味しいよ？ 100階層より下で採れた選りすぐりだからさ」
「……………はい？」

申し訳なさそうにしていたリリが固まってしまふ。ぎこちなく机の上に出ているそれらを見た。

「今、何とおっしゃいましたか？」

「100階層より下で採れた選りすぐり」

「わ……………とても高価なんでしょうねー」

何処か他人行儀に、リリが諦めましたというそぶりを見せる。

なんだかちよつと気に食わない。

「そう言われても。売れないんだし、食べないと無いのと同じでしょ？」

「それはそうですが……………」

ええい、しつこい！

「むぐつ!？」

「美味しい？」

もきゅもきゅと口を動かす。

「ふあい……………んぐ。確かに美味しいですけどっ！」

「良かった」

笑いかけるとリリは「ベル様の馬鹿」と言っつぽを向いた。

中々驚かされるのに慣れないのは分かる。立場が逆なら僕も同じように思うはずだから。でも、今の僕の立場からすると、行ったついでに獲ってきたという感覚しかない。

まだ三回しか行っていないからいいものの、消費しなければ増えていく一方だ。それにこれからはどんどん採りに行く機会も増える。

「絶対世界で一番豪華な朝食ですよ……………」とリリの呟きを拾って苦笑い。

「うーん……………おはよう、二人とも……………やっぱり早いねー」

神様が起きて来た。

眠たそうな目をこすりながら、ソファにどかりと座って小ぶりの果実を口に入れる。滅茶苦茶美味しいやつだったせいもあって、神様は「天界だったけ」とまだ夢見心地のようだ。

「そりゃそうそうなりますよね」と心を見透かしたかのようにリリが言う。

苦笑しつつまだまだ沢山あることを告げると、僕の名前を疑問形で呼んで神様は目を覚ます。まだ早朝とも言わなければならないという形容しにくい奇声が響いた。

幕間の物語 『豊饒の少女』

あなたは捲りかけの頁から指を離す。彼女が出てくる前と後をおあなたは何度も開く。唐突に出てきた少女へ告白したことがあなたには不可解だった。

先の展開よりもあなたはその経緯が気になって仕方がない。どこかに記述されているのだろうか、あなたは何度も本文の中を探してみることがどこにもそれらしい記述は無い。

ふとあなたは本を閉じて、分厚い装丁に施された仕掛けを見抜いた。あなたにしか解けない仕掛けだった。装丁の内側が開き、中からあなたが求めていたものを見つける。

それは『豊饒の少女』と銘打たれた幕間の物語だ。厚さからして探せば他にも出てきそう。しかし、あなたは目先の興味を優先する人物だ。

あなたは顔を少し上げて周囲を見渡す。誰も触れたことが無いように、どうやらこれはあなたが初めて見つけたらしい。悪さをしていくわけでは無いはずだから責められることは無いだろうと、あなたはその大きい胸をなで下ろした。

三—三—三—三

まず目に飛び込んできたのは赤と白。きつと日の光を浴びれば綺麗に輝くであろう白い髪に、軽鎧を上から纏った赤い着流しから覗く、私も羨むような白い肌。瞳の色は赤く、情熱的と言った方が良いでしょう。あの深紅ルベライトの瞳は、宝石のようなという表現は的確ではありません。瞳の奥には熱意のこもった夢のように、強くて純粹な意思が宿っていて、無機質な光ではない情熱の火が揺れているように……とてもきれいでした。

腰に帯びている細長い形状の武器はあまり見かけませんが、鎧とあわせて冒険者だと一目でわかります。

けれど、顔の造形は幼く毛深くもなければ、野性味もない。むしろ

愛らしさすら感じる。まるで冒険者らしくないけれど、でも恐れを知らない冒険者としての凛々しさは持ち合わせている。こんな方もいるんだなと思いました。

今まで見た事がないその男性は店内にいる私たちを無邪気に見て—— 勿論心の中でだけですし、顔にも出しませんが、つい見とれてしまつて。……正気に戻った私は、忘れていた自分を叱咤しました。

—— 仕事は仕事。私事は私事。色々な人を見るのは趣味ですが、仕事においてはやりがいの一つとして。そんな風に分別はつけています。……いえ今になっては「つけていた」というのが正しいかもしれませんけど。

私のお仕事はここ『豊饒の女主人』のウエイトレスです。所属する「ファミリア」から許されて半脱退状態のミアお母さんが経営している酒場兼カフェテラスの一従業員です。

冒険者の方々も相手にするお仕事で一般人の私が務められるのは訳がありますが、長くなるので割愛しましょう。特別面白い話ではありませんから。

—— 兎も角、彼との出会いはこの時が最初です。従業員とお客の関係として出会いました。今思うと、この関係が変わるのは早かつたようにも、短かつたようにも思います。あの時はあれだけ長く感じたのに……。時の流れは残酷なものです。

案内のため、初めて見る彼に近づき声を掛けようとして、後ろにいた少女に気が付きました。彼一人だけかと思いきや、同伴者が居たのです。それだけ彼の存在感が大きかつた……というのはい言ひ訳にはなりません。同伴者である彼女は、身体に合っていないバックパックを軽々と持っていて、そのことから「ステイタス」を持っているのはすぐに分かります。

……深く被ったクリーム色のフードから彼を見上げているクリリとした目は、怯えを映し出していて陰を感じさせます。貧民街であるダイダロス通りで偶に見かける目です。その目を見て、ある冒険者

の方のお話にあった専門職のサポーターの話を思い出しました。

うちに来る人達でそういうことをする人はいない、というか追い出されるのですが、他のお店では公然とサポーター専門の人たちが蔑まれ、分け前話で揉めているという話です。お話を聞かせてくれた良識ある冒険者の方は、そういった酒が不味くなることに出くわさない此処は良い、と続けて言っただけで済みました。

今でも来てはいますが、ああいう人は稀で、出来れば死んでほしくないと思います。ですが、そのうち来なくなるのは分かっているので深入りはできません。良い人ほど早死にしてしまうのが世の常で、冒険者であればなおのことですから。

本当に二人かどうかを確認して二人をカウンターの席へ案内します。一目見て私は大丈夫だと確信しましたが、一応念のため。ミアお母さんの鉄槌の射程圏内です。ちらりと二人を見たりユー達も少しだけ警戒をしています。私と同じように程度は違いますが、そういったことが起きるのではないかと危惧をしているのでしよう。

観察をやめて案内のために二人の前を歩きます。一般人の私でも流石にすぐ後ろの人の気配ぐらいは感じ取れるのですが、一瞬彼の気配が消えました。小さな声で彼女が彼と会話をしているのを聞いて、気のせいだったと安心します。

大きなバックパックを背負った彼女も座っている人たちに当たることなく、無事に案内した席に着きました。大荷物を持つてはいませんが身のこなしは良いのでしよう。

二人は今日のオススメであるミアお母さんの作るミートスパゲティを注文します。詳しいレシピはわかりませんが、隠し味のハーブやスパイスで、ジューシーなまま後を引かない仕上げになっています。賄いで出たときはみんなが喜ぶほどの絶品で、食べ過ぎてしまわないよう注意が必要です。二人の驚く顔を少しだけ期待します。

……他のお客様の注文や料理を運びながらで、遠目に見ていただけでしたが——料理を待つ二人はとても仲が良さそうです。彼の彼女へ向ける好意が目に見えてわかりました。それを見た私の胸の内側に冷たい風が吹いた気がしました……。そういう関係なのか、

と、何故という疑問が浮かぶ暇はなくお客様に呼びつけられてしまします。

仕事は仕事でしつかりしなければ、という風に考えを中断出来たので正直助かったと思いますが……。やはり、ミアお母さんに聞き出された名前に聞き耳が立てられなかったことで少し恨めしいです。しかし聞けなかったからといって聞きには行けません。従業員にもお客様にも変だと思われたら厄介です。サボるなど裏で鉄槌が……。睨まれたので考えないようにしよう。流石に言い過ぎ？ 考え過ぎでした。ですが、きつと事情を聞かれても恐らくは答えられないので、あながち間違いでないです。

二人が料理に感動しているのを少し後ろで見ました。

……そんな二人を見て、事は起こらなさそうだとみんなはほつとして居ますが、私の中ではぐるぐると考えが錯綜していました。

話していくうちに安心したらしいミアお母さんにお酒を勧められています。エールを飲んでる彼は少し色気があつて……。ですが、そのにこやかな表情が隣の彼女に向けられていることに複雑な感情が芽生えて、やっぱりそういう仲なのかな、と気分が落ち込んでいきます。初めてのお客様には感じた事のない感情です。……嫉妬のような感情です。羨望にも似ていますが、少し違います。寂しい？ いや、悲しい？

リリと呼ばれた彼女は年下扱いされたことへ怒ったように彼の名前を言いました。敬称を付けられて少し大きな声で呼ばれた彼の名前はベルです。つい、といった風に聞き逃してしまった彼の名前が少し知れて嬉しくなりました。下の名前はなんと言うのだろうと気になつて――。

……そして全然らしくない自分に気が付きます。

冒険者である彼の挙動に一喜一憂して、私は何に怖気づいているんだと。らしくないと。

——冒険者の人たちとは一期一会だと思わなければならぬ。この食事が彼らにとって最後かもしれない、ということをおぼえていました。今までと同じように、それとなく会話に入つて行けばいいの

に、それが出来ないとはどういうことか。さあ、今すぐにも話しかけに――。

しかし、そう私の奮い立たせた思いはどこへやら。

――いやー今日は驚いたぜ！ 18階層まで行くつもりしてたんだが、ほら、手前のゴライアス！【ロキ・ファミリア】の遠征から大分経つ。居ると思ったんだがなあ、これがなんとあったのはドロツプアイテムと無傷の魔石でよ!! いやー持って帰るのは苦だったが、儲けた儲けた!!

……. そんないつものように店内に響く、自慢話が聞こえてきました。さして気にするようなことではないと思つて二人に視線を戻すと――二人は固まっています。彼が動き出し、少し残っていたエールを飲み干して、空のグラスをカウンターに置きました。金貨が入れてあるだろう袋の口を開き、ヴァリスを取り出していきます。

「ミアさん、お勘定はこれで足りみますか？」

「ううん？ ああ、ぴったりだよ」

「ごちそうさまでした。リリ、行こう」

話しかけようとした私を他所に、どこか気まずそうにして二人は出ていきました。私はというと……. 緊張の現れでしょうか。滅多に搔かない手汗を掻いていて、エプロンの端でこっそり拭きます。

「なんだい、ゆっくりして良きやいいのに」

ミアお母さんは二人が出て行ってからそう呟きました。

二人が急に出ていったのには訳がある筈です。

きつとあの自慢話が切欠なのでしよう。……. 話しかける機会を逃したことで、少し不貞腐れてしまひそうです。

「まあ、駆け出しだって言つてたのを捕まえて、無理な支払いさせるのは酷つてものかね」

私に話しかけているわけでもなく、ミアお母さんは独り言を続けました。

話の中に出てきたゴライアスというのを倒してかなりのお金になるのであれば、お金は沢山持っているはずです。――すなわち、それは二人のうちどちらかは少なくとも凄腕の冒険者だということだ

……。

「黙ってなシル」

ミアお母さんは察していたようです。私が勘付いたことにも……。おそらく彼のほうがゴライアスを倒したのでしよう。ベルという名前の響きを胸の内でも反響させて、仕事が終わってからミアお母さんに彼の名前を聞こうと決意しました。……。こんないつもと違うおかしい私を、ミアお母さんは笑う人ではありませんから。

——ベル・クラネル。彼の名前を一度呟いて、舌の上で転がせます。とてもいい名前です。……。何と呼んだらいいでしょうか。クラネルさん？ ベルさん？ ……。「ベルさん」が一番しっくりきます。でも直接聞いていないので、次に会った時馴れ馴れしく呼ぶのは控えましょう。呼ぶとするならまずは冒険者さんです。

訝しまれましたが、何でもないと行ってミアお母さんから離れて掃除に戻ります。

リリと彼に親しみを込めて呼ばれていた彼女の名前も聞きました。彼女は自分でパルウムの15歳だと言っていたため、見た目とは不相応の雰囲気にな得はしています。見ただけでは推し量れない苦勞をしてきたのでしよう。——ですが、こと彼に関して言えば、私は彼女に劣っています。

あの二人の仲を引き裂くことになるのかもしれませんが。悪いことをしようとしているのかもしれない。ですが自分自身を偽っても良い事なんてないので認めましょう。

一目惚れでした。

心の疼きは今までよりも強いもので、掻きむしりたくなるほどの激情になっていきます。冒険者は帰ってこないかもしれない、なんて不安は一切感じません。少し気が急いでいるかもしれませんが、彼なら私を置いていくことはしないと直感しています。いわゆる女の勘ですが、根拠のない確信があります。

また来てくれるかな、と終業あとの片づけをバレないよう適度にサボりながら、彼が通るだろう大通りに想いを馳せました。

彼を知って次の日。待ち焦がれてまた次の日。

彼への想いは募ります。積もっていきます。店内から窓の外を眺めて、店の前を彼が通るのではないかと期待していました。

——どんなことで笑うんだろう。

——どんなことで怒るのだろう。

——何が好きで、何が嫌いなんだろう。

彼のことが気になってしまった昨日の一日はとても長くて、切なくて。幾度となく吐息を漏らしてしまいました。今も体調不良というわけでもないのに、頬は熱を帯びて身体は少し気だるさを感じています。

会いたい。会って話したい。

特定の誰かにここまでの想いを抱く経験がなくて少し戸惑っていますが、この心の疼きが身を焦がすような感覚は心地が良くて……だからサボっているように見えたのは仕方がないのです。

昨日と同じように窓の外を眺めていたら「そんなに外に行きたいんなら、買い出し行ってこい」とミアお母さんにお尻を叩かれました。恨みがましく見ながらお尻をさすります。そんな私の抗議の視線は、異論は受け付けけないというようにメモを突き出されて、まったく相手にされません。

受け取ったお使いの内容はメモ用紙の裏面まで続いています。見るからに何往復もしなければならぬ量でした。

近くにいたリユーに助けを求める視線を送ると、顔を逸らされません。ミアお母さんを見ると、顎で入口の方をしゃくられます。……観念して行くとしましよう。

お店の常連の神様たちを捕まえて持って帰るのを手伝ってもらい、案外早くずらりと書かれたメモの表面を終えました。「ファミリア」に入らないかと口説いてくる神様たちには困ったものですが、正直助かりました。口説き文句が囁かれている途中で男神たちは用事を思い出したらしく、帰られてしまったので今度は一人で持って帰らなけ

ればなりません。ですが、残りは一人で持つて帰れそうな量です。何の用事かはわかりませんが、酷く焦った様子だったので何か重要な用事だったのでしょうか。彼らが一樣にして見ていた方向に苦笑します。此処まで運んでもらったものを、お店の裏口から運びいれてもう一度出かけました。

「早かったね。……………どうせまた誰かに手伝ってもらったんだらう？」

ミアお母さんにはバレバレです。ですが、手伝ってもらったらいけないなんて一言も口にはされていません。

「まあいいさ。随分と得させてもらったようだからね」

私の日頃の行いが良いからでしょう。市場の露店で快くおまけしてもらいました。ミアお母さんの機嫌が取れて何よりです。これでサボっていた分はチャラでしょう。

「にしても、あの訳アリなんだってんだらうねえ。ソーマのことを聞いてくるなんて」

「何の話？」

「あんたが名前を聞いてきた、あの白髪のヒューマンさ」

——白髪のヒューマン。

「あんたが出てきている間に来て、『ソーマ・ファミリア』の事と『神酒』について聞きたいって言ってるね。ここは飯食うところだって言ってるが………シル？」

——彼が、私が留守にしている間に来ていた？

すれ違い。

取り繕うことができないほど、気持ちが落ち込んでいくのがわかります。

神の悪戯か。運命なのか。……………いえ、ミアお母さんのせいです。

「お母さんの馬鹿！」

「誰に向かって馬鹿だって!？」

「あ、ちが——っ!?!？」

ついといった風に口をついて出た言葉は取り消せません。加減さ

れた拳骨が落ちました。それでも涙が出て、目の前に火花が飛びます。

頭を押さえて蹲り、恨みがましく見上げます。思ったより怒っていないようで、どちらかというとき呆れていました。

「はあ……………何か様子が変だと思ったら、そういうことかい」

完全に気付かれませんでした。ぎくりとしつつ痛む頭を押さえて、蹲ったまま本来の理由で落ち込みます。

会えなかった。嗚呼、会いたかった。ちよつと買い物するのが遅ければ。私一人でお使いを全てやっていたら。何かが違えば彼に会えたかもしれない。いえ、そもそもお仕事に真面目であれば買い出しを頼まれる事も無く、話も出来たのかもしれない……………運命やミアお母さんのせいではなく、己の迂闊さを恨みます。

ミアお母さんに馬鹿なんて言わず、いつものように誤魔化してしまえば良かったのですが、その余裕はありませんでした。口惜しさで涙が出てきます。

「客の前にそんな顔で出るんじゃないよ、まったく……………へーそれにしても、アンタがねえ？」

「悪いですか……………」

「いや、安心したよ。でも、なんだってんだい？」

「ううう……………言いたくない」

流星に理由を聞けばこの人にも笑われてしまいそうです。一目惚れなんて信じられないでしょう。私自身、疑っているほどです。

「そうかい。なら、好きにしな……………明日、明後日とアンタに暇を出す」

「でも」

「仕事もままならないようじゃあ、居ても邪魔になるだけだからね」
「……………はい」

呆れたように言ったミアお母さんは微笑んでいるようでした。

急に出来た休みの使い方は決まっています。いつもならマリアさんの所へ行きますが、今日やることは決まっていました。

白いワンピースに着替えて、すこしだけおめかし。日よけのため、つばの広い帽子を被ります。そして街に繰り出しました。

しばらく人通りの多い道を歩き、知り合いの露店のおばさんを見つけて聞きこみを行います。「白い髪の冒険者さんを知りませんか」と。……あまり期待はしていませんでしたから良いのですが、肩を竦められて首を横に振られてしまいました。落ち込んではいられません。時間は有限です。気分はちよつとした探偵です。

それから西へ、北西へ。ギルドの前を通り過ぎて、一般人の私が足を踏み入れてもおかしくない、行きそうな場所に行ってみます。訳アリであればギルドが情報を持っているとは考えられません。持っていたとしても、リユウのように教えてはくれないでしょう。

『豊饒の女主人』でかわりのある、馴染みのお店も回ってみましたが——惨敗でした。彼の足取りを掴む、手掛かりになるような情報はありませんでした。

……くたくたです。そこまで弱くないつもりでしたが、足も疲労を訴えていました。ぐうとお腹も鳴ったので近くにあつた喫茶店に入り、休憩を兼ねた昼食です。

先に運ばれてきたお茶を飲んで一息ついて。……今になって、お店のみんなと鉢合わせてしまう可能性に気が付きました。

この連休はミアお母さんから直接言い渡されていますが、アーニヤあたりにサボってると言われかねません。いつもと違って本当にサボってしまっているようで、見られると少し気まずい。……その時はその時で、また適当に取り繕いましょう。今考えても良い事なんてありません。

まだかな、とキッチンのの方を見ます。午後の英気を養うためにも美味いパンケーキを所望します。

——後からベルさんに直接聞いた話ですが、この日このお店の前の道を二人で通ったそうです。丁度私が休憩をしているぐらいに。その時は別のことに気が向いていて見ていなかったのでしょうか。

——パンケーキなんか後でもいいでしょうが！ ……過去の

私に窓の外を見ておくと、言えるものなら言っておきたいものです。

二日目も同じように過ごして収穫はゼロ。翌日の今日に持ち越してしまった疲れだけが獲得物です。幸いだったのが『豊饒の女主人』のみんなと鉢合わせなかつたことでしょうか。

とぼとぼと歩いて『豊饒の女主人』に出勤します。休む前より気分は落ち込んでいました。分かったのはおそらく彼は最近このオラリオに来たということだけ。聞き込みの仕方が悪かったのかもしれないが、情報が一つもないなんて、そうとしか考えられません。

都市外の人で高レベルの「ステイタス」の持ち主、というのはいま聞かない話ですが、ありえない話ではないでしょう。まさか生身で倒しているはずがありませんから、リユー達から聞いた話が確かなら彼はリユーやアーニヤたちと同等の「ステイタス」を持っているという事。それだけでも信じられないのに、まさか、そんなことあるわけがない……。生まれ持った身体能力だけで倒せるなんて。

脳裏をよぎったその突飛な妄想を一蹴します。

ええ、そうです。仮にそうだとしても、ちよつと想像がつきません。言い方は悪いかもしれませんが、もしそうなら人の皮を被った怪物モンスターなのかと。仮にそうであっても、そう思うだけで、嫌う理由にはなりません。あんなに優しく笑える人が、心まで怪物だなんてある筈がないですから。

職場について早々リユーに心配されましたが、なんとかやり過ごします。心配してくれて嬉しいけど、まだみんなには話せそうにないから。

……その日は夜の営業の準備まで代わる代わる配膳係ウェイトレスのみんなに聞かれて疲れました。でも、そのおかげで調子を取り戻せて、サボった分を取り返すように働きました。

片づけをして帰路に就きます。

——この時の私は何を思ったのでしょうか。普段とは違う道を通って帰りました。

リルカさんとベルさんが抱き合っている、二人の関係を意味付ける決定的な瞬間を目撃して……。二人の関係をはつきりと認識してしまいました。

……それからどうやって帰ったのかはわかりません。気が付いたら私の部屋に居て、ベッドの上で横になっていました。ただ、路地の陰で崩れ落ちたあと、幽鬼のようにふらふらとした足取りで立ち上がったのは覚えていません。

涙が流れていました。今も涙が溢れてとまりません。湧き水のようにとめどなく、拭つても拭つてもシートに染みをつくる涙は出てきます。……失恋したと、私はその時自覚しました。

胸の奥が苦しくて、賄いで食べたモノが出てしまいそうでした。それだけはいけないと、なんとか耐えて、嗚咽が聞こえないよう枕に顔を押し付けます。こんな私を認めたくない。あの二人の関係を認めたくない。……言葉に出来ないそんなことを思いながら、その日は泣き疲れて眠りました。

……着替えもせず、お風呂にも入らずに寝てしまった所為で朝起きたら髪の毛はぼさぼさ。鏡に映る私の目は赤く腫れています。時間を見て、お風呂に入っている時間はないと服だけ着替えて出勤しました。

裏口から入って、アーニヤがぎよつとした顔で見ってきます。ミアかーちゃん、と叫びながら慌てた様子で何処かへ行きました。

「…………シル、あんた」

アーニヤに連れてこられたミアお母さんと呆然としたまま、顔を見合わせます。先に動き出したミアお母さんに捕まりました。まだ準備時間中のフロアの椅子を二つおろし、一つに座らせられます。対面するようにミアお母さんが座りました。

「あたしやあ休めと、言ったよねえ」

マジでキレル前兆でした。力なく頷きます。

「はあ……………こんの、アホタレ。怒る気力もおきやしないよ。……………整理つけさせるために休ませたつもりが、どうしたらこんな風になっ

ちまったのか。外出禁止と言わなきゃいけないかったのかい、アタシは」

少なくとも、彼を探すための休みではなかったのです。気付いていながら無視をしました。だんまりを決め込みます。居ても立っても居られなかったから、ただ休むだけなんて苦痛でしかありませんでした。

「昨日、気持ち悪いくらい元気だったのが、どうしたらそうなった。ええ？」

「……………見たんです」

「何時、何を」

思い出しただけで悲しくなりそうです。あ那时的ショックが想起されそうでした。

「昨日、帰りに、二人がその、……………抱き合っていたのを」

「抱き合ってた、だ？」

少し声のトーンを落として、確認するようにミアお母さんは言い直しました。それからお母さんは厨房の方からのぞき見をする皆を一度見ます。蜘蛛の子散らすようにしてみんなは去って行きました。

「路上で、なんだ。やってたわけじゃないんだらう？」

「違いますっ」

大つぴらに言うような事でもない内容で、声を落してミアお母さんはそうのたまいました。そんな、常識外れのような事をするひとじゃありません。……………まだ、よく知らないけど。

ああ、まだ諦められていないことを自覚しました。一步も踏み出せないままに終わってしまった所為でしょうか。でも、あんな二人を見たら終つたと、諦めなきゃいけないと思っても仕方がないです。

「あの二人。本当に、幸せそうで……………もともと眼中に無かつたんだらうなつて……………」

意識の外にいたなんて、当たり前前の事です。私は仕事で、彼はお客として一度しか話せていないんですから。私の事なんて覚えているわけがありません。……………枯れたと思っていた涙が一滴頬を伝って手の甲に落ちました。血が通わなくなるほど、エプロンを握りしめて

しまっています。

そんな私を見たミアお母さんは溜息を吐きました。

「——全然アンタらしくないねえ、シル」

「お母さん……………」

「何怖気づいてんだい。あんたは人のモノであろうと、なかろうと欲しいものは欲しいという奴だろう！」

「でもっ」

「気にすんなって言うてんだよ！　くどいよっ！」

「でも本当につ！」

「——欲しいものは、力づくでとるんだよ！　こと色恋沙汰に関しちゃあ、奪わなきゃならないこともある！　最後まであきらめなかつた奴が報われるんだ！　商売と一緒だよっ」

「つ……………」

「それとも、なにかい？　アンタは諦めるって言うのかい？　……………あたしやあ一度来たりリルカって客よりも、アンタの事を応援したくはあるけどねえ？」

それは明らかな挑発でした。ですが、言っていることに間違いは感じません。一理あります。

それに、そうです。私はそういう女です。自分にさえ物わがりの良い子を演じなくていいのです。……………弱気になるだけ無駄でした。大きく息を吐いて、両頬を二回叩きます。

「お風呂使います」

「さっさと行ってきな。しつかり働け」

「はい」

……………さっぱりして、気持ちも入れ替えました。悪感情も、悲しさも全部流しました。弱気であらしくない私とはおさらばです。彼女には悪いですが、私はこの恋を諦めたくない。一度しか話したことがなくても、いえ、だからこそまだ諦めたくないんです。

とはいえ仕事に私事を持ち込むのはやめにしましょう。これ以上お店に迷惑はかけられません。

それに、二人の関係を知ってしまったのは何も悪い事ばかりではあ

りません。彼女がいることで焦る必要は無くなったのですから。

熱意に燃える私に、盗み聞きしていたみんなが怯えます。盗み聞きしていたのには物申してやりたいですが、私もしばしばやる方なのでとやかく言えません。……なにも一般人の私にそこまで怯えなくてもいいのに。そんなに怖い顔になっているでしょうか。

迷惑を掛けたみんなには謝ります。怯えから困惑に変わりました。リユーなどは目に見えるほど慌てていて、少しおかしくなって笑ってしまいます。心配しているんだ、と照れくささを隠すように語気を強めたリユーに安心するよう言いました。「がんばるよ」と。

誰もが羨む整ったその唇を少し噛んで、リユーは何かを言いたげです。ですが結局リユーは何も言いませんでした。

仕事も恋も。どっちも頑張ろうと決意をして二日間お仕事に励みました。それはもう、今までサボってきた分を取り返すように、誠心誠意働きました。従業員を啞然とさせるくらいには頑張りました。

——そんな私に運命の女神様はご褒美を下さったのでしょうか。

朝、開店準備をしている時でした。テラス部分に机を並べている時です。市壁の方角から、彼が彼女を伴って歩いてくる姿を見つけます。機会が巡ってきたのだと、動かしていた手を止めてしまいました。彼女の眼に陰はなく、幸せそうなのが伺えましたが動揺なんてしません。してられるものですか。

記憶にある彼の格好とは少し違って、彼は今本当に駆け出し冒険者のようです。赤衣着流しを脱ぎ、ただの革の鎧を身にまとった姿は頼りなさそうにも見えませんでした。しかしみんなが言っていたように隙が無い気がします。

……私が誰に恋慕を抱いているか知られてしまったので、不満そうにしていたリユーを除くみんなに意見を求めました。三者三様に言う事が違うので当てにはしません、一つだけ「隙が無かった」と口をそろえて言っています。「年下男見いいニヤァ」とのたまったクロエは要注意です。潜在的ライバルの可能性大です。

いやらしい笑みを浮かべていたクロエを隅に追いやって、徐々に大

きくなつてくる姿に心の中で気合を入れます。ポケットに入っていた魔石を取り出して、手に持ったまま作業を続けました。

胸の音が高鳴り、彼もまた近づいてきます。

一歩、二歩と、徐々に。一つ、二つと、足音が耳に入ってきてきます。

はやる気持ちを抑えて、この胸の高鳴りが表に出ないよう心がけます。顔に手を当てて……大丈夫、自然な表情は出来ている。彼らが店の前を通り過ぎたあたりで呼び止めました。

「？　なんですか？」

「あの、これ落しましたよ」

今拾ったという体で、掌に握っていた魔石を見せます。

受け取ってくれたなら、いつも通り。そうでなかったら、また別の方法で。彼は少し眉を寄せて、私の事を訝しく見ってきます。

「うーん。落すはずがないんだけど。……本当ですか？」

手に取ってみることもせず、彼は私の演技を見抜きました。

一応抵抗して見せましたが、甘くはなかったです。いつもの手口に引つかかるような人ではない、ということでした。残念だが、その分彼に近づくのは容易くないという事でもありました。残念だという風に肩を落として見せて、『豊饒の女主人』の従業員であることも含めて正直に話します。

「なるほど……。客引きで、ですか」

「はい。……失敗しちゃいましたけど」

今、内に秘めている私にとっては、こうして話が出来ている時点で成功と言ってもいいです。でも、次につなげないといけないので、喜んではいられません。

「うーん、別に失敗というわけでは——まあ来たことがあるから、そういう意味では失敗なのか」

「え？」

「はじめて行ったとき席まで案内してくれた方ですよ？」

あ、駄目だ。そう思いました。顔が赤くなるのが抑えきれません。

「えっと、大丈夫ですか？」

「は、はい……っ」

憶えられていたんだ、と嬉しさが込み上げてきます。

「あの、私も憶えていました。……………あなたの事」

「え？ どうして」

「お話も出来ず、帰られてしまったから気になってしまった。……………その、一従業員が言う事でもないのですが、なにか私たちが粗相でもしてしまったのかと」

言わなくてもいいのに、嬉しくてつい本音を言ってしまうことが、取り繕うための言葉は自然と浮かびました。

「あ……………そういうわけではなかったんですが」

二人が出ていったのは、あの自慢話の原因だと分かっています。知られたくないことに深く追及するつもりはありません。知らないフリです。

「構いません。……………人それぞれに事情がありますから。そうでないのなら良かったです」

無理には聞き出しませんが、何時か教えて欲しいです。いいえ、教えてもらいます。

「……………なんか気にさせちゃったみたいで」

「いいえ」

申し訳なさそうにする彼に笑いかけました。崩されていた調子が戻ります。あとは今夜のお誘いです。

「……………ちよっとお話は変わるのですが、冒険者さんはこれからダンジョンに？」

「はい。そのつもりです」

「それじゃお昼はこれから買うつもり、と？」

はい、と頷いたのを見て、待っているように言っただけで店内へ。朝ごはんは作っていたお弁当を引っ掛んで急いで彼のもとに戻ります。

「え……………」

———幸か不幸か。入り口の階段を降りようとして足もとが絡まりました。急いでいたせいもあり、勢いよく外に、前のめりになって体が投げ出されてしまいます。勢いづいた体とは正反対に視界に映るものはゆっくりでした。

絶対痛い。そう覚悟してぎゅつと目を瞑りましたが、僅かに硬いものが身体に当たったただけで衝撃も無ければ痛くもありません。

「——危なかった…………。大丈夫ですか？」
「……………!?!」

息が詰まりそうでした。一週間。ずっと聞きたかった声が頭の上、本当に数Cの距離セルチからしていることに気が付き。それから今どんな体勢でいるのかに気が付いて、いよいよ誤魔化しきれないほど顔が真っ赤になります。ボン、と音が出る感じでしょうか。こんな顔は見せられません。

密着する服から漂う彼の香りが鼻孔を撥ってきました。決して汗臭いわけではありません。否応なく落ち着いてしまう、まだ成熟しきっていない、かといって魅力がないわけではない。そんな境界線を行き来する異性の匂いでした。このままでは私の演技も、誤魔化しも全て機能しなくなる。そんな危機感がつり、このままでは不味いと思っ

「ごめんなさい！ えっと、その……………助けていただいてありがとうございます」

「いえ、ちょっと危ないなと思っていただけですから。怪我しなくてよかったです。足はくじいていませんか？」

「はい……………」

なんとか平靜さを取り繕えました。しかし、直視はできません。ただでさえ赤い顔が茹で上がりそうです。

「あのお礼のつもりではなかったのですが……………これ、お二人で食べてください」

彼に押し付けてしまっていたお弁当を、彼の手を取って上に置きます。

「何もそこまでしてもらおうこと、これっぽっちもしたつもりは……………」
「いいえ、していただきました。私は賄いが出ますから、どうか受け取ってください。ただでさえ格好悪いところ見せちゃったから。

……………ダメですか？」

「……………うーん」

流石に困らせてしまうのは分かっていました。最後のお願いをします。

「それじゃあ今夜お店に来てください。……………今日に限りオーナーにお願いしてお安くしておきますから」

「いや、安くしてもらうなんて出来ませんよ!」

「ですが……………」

彼はそう言いましたが、そうでもしないと来てくれる筈がないのです。ただでさえ夜は冒険者志向の営業で値が張りますから。……………言ってから気が付きましたが、ミアお母さんを口説くのが一番難関だということも忘れていました。

手詰まりです。どうしよう。……………まだまだお話したいことは沢山あります。これじゃあ全然足りません。……………私が取り付く島はないということでしょうか。取り繕うことなく、落ち込んでしまいます。

「うーん……………お弁当はありがたく頂戴します。それと、その、ミアさんにお礼もしたいので」

「ええ?」

「今日の夜、行きますね」

はて、ミアお母さんが何かしたのだろうかと考えていると、私の思惑に応えるかのように彼はそう言いました。……………随分と明け透けな態度をとったはずです。不思議に思いました。私が喜ぶよりも不思議に思う理由である彼女。意識して見ないようにしていた、少し離れて立っている彼女の方を見ます。

—— 凄く睨んでいます。私とベルさんのことを責めるように、目尻に涙まで浮かべて身体を覆い隠すように着ているローブの握りしめています。

その目に宿っていたのは嫉妬です。あと、理解が及ばないことへの憤怒。しかし私はその仕草を可愛い、と思ってしまうました。これが神々が言う『萌え』なのかと納得です。

そんな思考と同時に私の中で罪悪感が過ると、彼女は彼と私に背を向けてバベルの方へと歩いて行きます。駆けだしました。大きい

バックパックを背負っているというのに、身軽そうです。

「あ、えっと、それじゃあ僕もこれで！ お弁当ありがとうございます！」

「は、はいっ……………」

さわやかな笑顔に焦燥を交えてそう言った彼は去って行きます。

……………彼女には悪い事をしたと思っと思っていますが、反省も後悔もしません。反省したから、後悔したからといって諦めるなんて出来ないんですから。

二人を見送ってから暫くして。

知ってもらおう上で肝心な自己紹介をしていない事に気が付いて、浮かれていた自分を私は情けなく思いました。

今日だけで何度みんなに冷やかされたかわかりません。何度も入口の方を見て、彼を待ちわびました。

「あ、冒険者さんー！」

彼が来ました。……………彼女も一緒です。

「こんばんは」

「……………」

じつと睨んでくる彼女に対して彼は苦笑します。気付きながら、白を切ります。

「えっと、自己紹介がまだでしたね。……………私はシル・フローヴァです。一応、オーナーからお二人のお名前は聞いているのですが。お名前、聞いてもいいですか？」

「ああ、はい。ベル・クラネルです」

「……………リリルカ・アーデです」

「ベルさんに……………、リリルカさんですね。ではまず席にご案内します。どうぞ」

ようやくと彼のことを、『ベルさん』と口に出して呼べました。業務的な私を取っ払って、何度も何度も彼の名前を呼びたくなります。……………ああ、いけない。お仕事に集中しなければ。注文を受け付ける前に残念なお知らせをしないといけません。

「ごめんなさい、交渉失敗しちゃいまして。通常価格でのご提供です……」

「え!? それ、怒られたんじゃないですか」

ベルさんがミアお母さんの方を見ます。見られている事に気が付いたミアお母さんは当たり前だよ、と鼻で笑いました。

「怒られちゃいました。むしろじゃんじゃん金を使わせな、というご命令が下ってしまつて。今夜のお給金が増えるから私は構わないのですが……。お二人とも、沢山ご注文くださいね?」

事情あつて目立たないようにしているベルさんには申し訳なく思います。ですが私を恋しくさせてしまったあなたが悪い。心の中でそう呟きました。

絞り上げるためという理由で今夜の私は二人の専属です。私の調子が振るわなかつた分と、今夜の私があり機能しない分を取り返そうという魂胆もありますが、少しだけミアお母さんの後押しを感じます。

取り繕つた私に「シルさんは強かな人なんですね」とベルさんは笑います。リリさんには睨まれました。

名前を呼ばれて喜ぶ自分を抑え込み……無理矢理にでも抑えこんでなんとか取り繕えました。好きな人に名前を呼ばれたからと喜んでいては身が持たない。制御しきれなくなれば色々とおしまいです。

葛藤する私を他所に、メニューの中からベルさんは三番目に高い料理を選ばれます。……お値段2000ヴァリス。原価に対して吹っ掛け過ぎだろうと思うのですが、冒険者のみなさんは平気な顔をして頼まれます。駆け出しの冒険者であれば手が届くはずがないものです。

やはり、と思つているとベルさんはお酒も注文されました。メニューに載せているものの中ではそれなりに値が張る……ミアお母さんがうちで作つてるお酒です。

「結構強いお酒ですけど、」

「おねがいします」

ちよつと心配でした。しかし、ベルさんは心配する私が言い切る前にそれでいいと答えます。

こんな高い注文をして隠す気あるんでしようか。彼に言った通り、強いお酒で酔いっづれてしまわないかという心配もあります。……せつかく来てくれたのにお話しできないなんてあんまりですから。

とはいえ、目立つような真似をして良いんだろうかと少し呆れてしまいました。

朝のやり取りの中で、ミアお母さんへお礼すると言っていたのを思い出して自分を納得させますが、少し腑に落ちません。

……時折ルノアやクロエ、アーニヤといったフロアのみんながこちらを気にするそぶりを見せて、聞き耳を立てています。仕事には従事しているようですが、アーニヤは注文を間違えているようで、料理をテーブルに運んでは不満げな顔をされています。私の事を冷やかすなら、まずは自分のことを気にしてほしいものです。アーニヤの馬鹿。

注文されたベルさんのお酒と、リルルカさんの果実水ジュースを持ってきて、厨房が料理を作り終わるのを待ちます。

その間ベルさんはお酒で喉を潤していました。飲みやすくして美味しいので気が付いたら酔っぱらっていた、ということがよくあるお酒です。酒豪な方が多いドワーフの方にも人気なこともあって、ヒューマンのベルさんは大丈夫なのだろうか、やはり心配でした。どうか酔いっづれてしまいませんかように。

料理を運んできたころにはベルさんのグラスは空になっています。頬に朱色がさしています。目も口もしっかりしています。……見た目にそぐわずお酒に強い人なのでしょう。なんともうおかわりです。

少しお酒が入って気分が良くなっているのか、色々なことを話してくれます。喋れることだけ、話せることだけのようですが、一週間前にオラリオに来たことだとか、ジャガ丸くん美味しいとか。お酒の入っていないときには見えなかった、彼の見た目相応の『可愛い部分』

が見えました。

しかし意識ははつきりとしているようで、ボロは出しません。色々
と私以上に強かに見えます。

……ジャガ丸くんの屋台に顔を出せばよかった。探偵をしてい
た私は、後悔をしつつ、恋心が少しずつ変わるのを自覚していました。
あのひとのような危険な思考です。

私に威嚇していたリリルカさんも、こんなベルさんの姿は見た事が
なかったらしく、小動物のような私への警戒はやめています。そんな
彼に私の嗜虐心は刺激され、聞き手から少し攻勢に移ろうと決心をさ
せます。丁度リリルカさんが食べ物を口に運んだ時を見計らって疑
問を呈しました。

「ベルさんお強いんですね？」

「んー……お酒のことですよね」

のどに詰まらせた彼女が睨んできます。ベルさんは飲み物を飲む
ように言っ、私の方を見て苦笑します。

「お酒ではありませんよ。……どうして実力を隠しているのか聞い
てもいいですか？」

少し考え込む素振りを見せて、一口お酒を含みました。

「詳しくは話せないですよ。……けどまあ、従業員さんたちから視
線を感じますし、お気づきなんだと思いますけど。先日帰った切欠は
アレです。……詳しくは想像に任せます。それなりに関わってい
るとだけ」

……あ、いや。勘違いされてる。見られているのは多分とい
か、主に私のせいです。

「ごめんなさい……」

「シルさんが謝ることはないですから」

「いや、多分——いえ、なんでもありません」

「??? ……リリ、大丈夫？」

「うええ……ひぬかとおもいましたあ」

不思議そうな顔をするベルさんに、まだ私の思惑は言えそうにない
です。リリルカさんからあなたを奪おうとしているだなんて、本人を

前にして言えません。……………今はまだ。

色々な事を聞きました。色々な事を話しました。私の趣味について話すと、ベルさんは感心してみせて凄いと行って笑いました。あまりよろしくない趣味と思われたのか、彼女には引き気味に見られました。

所属している「ファミリア」はどこなのか、だとか。お肉とお魚だとどちらが好き、だとか。何処で生まれて育ったのか、だとか。色々な事を、色々な理由を付けて聞きました。話しました。

勿論話していない事、話せないことはお互いにあります。私の方が聞いてばかりのような気もしました。

加えて言えば終始彼女にも睨まれていて気が休まることはありませんでした。――。

楽しかった。……………本当に嬉しかった。

お客と従業員という関係ではあったものの、いつものように他のお客様と話すように過ごした時間は、一週間の間に私に空いてしまった心の穴を埋めるようでした。

……………でも、もうお別れの時間です。

彼への恋しきは愛おしさに変わり、嫉妬や悲哀のような感情を薪にして、完全に覚悟に火がつかきました。

リリルカさんには負けたくない。負けない。認めない。

そんな卑しい横槍を入れるための……………泥棒猫になるための覚悟です。

初めてのことです。いつもの私であったなら無意識にしていたであろう、覚悟なんて必要のない事に本気になったのは。

もしかするとこれは恋故に、なのかもしれません。やろうとしていくことは愛の略奪と変わりないのに、と自嘲してしまいます。貴方が悪いんです。理由は分ならずとも、私にも機会があると思わせてしまった貴方が。

一般人の感性からすれば目を丸くしてしまうような額の支払いを、渋い顔を見せながらベルさんが済ませました。ミアお母さんに咎め

られそうでしたが、二人が帰るのを見送るため外までついて行きます。

「あ、……シルさん、ごめんなさい。お弁当箱持ってくるの忘れちゃって」

「いえ、そんな。明日でも全然いいですから。……明日もダンジョンに行くのであれば、そのついでに持ってきてください」「すみません……」

よし、と内心拳を握ります。気合を入れて明日は自分と彼の分を作ります。今日食べていた様子だと、少し量が多くても良いみたいです。そういう男らしいのも好きです。

「それでは、ごちそうさまでした。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい。——ありがとうございます！」

ベルさんが背中を見せたのに合わせ、ジッと睨んでいたリルカさんを睨み返します。今日一日を締めくくる、彼を獲りに行くという宣言布告です。

……の、つもりがどうにも妙です。リルカさんは哀愁に満ちた目で私を見ました。打って変わった態度に困惑が隠せません。

「ベルさま、ちよつと忘れものしたみたいなので、先に帰っててください」「い」

「え、待つよ?」

当てつけですか!? 当てつけですね! 同じ「ファミリア」で一つ屋根の下で暮らしているからって——くううう、悔しいっ!

「……」

「わかったよ。気を付けてね」

くっ……見せつけてくれちゃって。……やってやろうじゃありませんか。その油断が命取りになると知らない今を満喫しておけばいいんですっ。

——そんな風に内心荒ぶる私に忘れ物をしたと言った彼女が近づいてきました。

「どうかしましたかりルカさん?」

「……」一つ忠告をと思ひまして「

「なんですか？」

敵に塩を送るつもりでしょうか。

「ベル様はあなたが思うような人ではありません」

その言葉の意味を私は理解しかねました。

「まあ、何時かは知る事です。後で知って必ず後悔するでしょうから、今のうちにと思っただけですので」

「は、はあ……………」

彼女は妖しく笑います。意味が解りません。

「諦めた方が無難です。きつとその方があなたの幸せの為です」

「……………それ、あなたの為でしょうか？」

「ええ、一番はリリの為ですよ。勿論です。——とにかく！ あなたみたいなタヌキにはベル様の欠片も渡しませんからね！」

失礼します！　と言いつち、去って行く彼女が何を言っているのかは分かりませんでした。れっきとした恋のライバルでした。指先ほどはあった罪悪感も吹き飛びます。可愛いというだけが魅力だと思わない事です。

負けない、絶対に負けない……………と覚悟を新たに店内に戻るとミアお母さんが。

「働け」

「……………はい」

肩に軽く手を乗せられて、命の危機を感じました。……………お仕事します。

ベルさんとの楽しいひと時の後。昨日は私に何か物申したいリユーを他所に、みんなから何度目になるかわからない質問攻めに合いました。彼と再会する前に弱いところを見せたのが失敗です。

何気ないように振る舞い、それとなく答えましたが、何処が好きになったかと聞かれて少し返答に困りました。

一目惚れと一口に言ってしまうえば簡単ですが、びびっと来たのです。じゅわ、と胸の奥に広がるものがあつたと言っても曖昧すぎて伝わらないだろうしと悩み、思い至りました。

——そう、親近感。ともすれば近いものを感じたのです。『経験からくる』や『女の』などではなく直感でした。本能と言ってもいいでしょう。具体的にはわかりませんが、この人だと思ったのです。

そう答えようとして、ミアお母さんにサボるなど怒られたのでみんなにはまだ言ってません。言わなくてよかったのかもしれない。私を冷やかすネタを与えるだけでした。

考え事をしている間にもお弁当が完成しました。サンドイッチの詰め合わせです。……ちよつと焦げたけど、アクセントとしてはいいでしょう。

意気揚々と出勤して、準備をしながらベルさんが通るのを待ちます。

姿が見えてくると、彼も私を認識したのか手を振ってきました。……ちよつと可愛い。

「おはようございます、シルさん」

「ええ、おはようございます！」

私とベルさんで挨拶をします。……リルカさんは睨んでいます。

早速、ベルさんから手に持っていた空のお弁当箱を渡されて、私も手を後ろにして隠していた中身のあるお弁当を渡します。ベルさんは複雑そうに苦笑します。

「……今日もいいんですか？」

「はい。今日は二つ作ったので、私のことを気にすることなく食べられますよ？」

ベルさんだけを一秒でも長く視界に収めておきたいのは山々ですが、彼女の事も気にしなければなりません。……なんで笑ってるんでしょう。一瞬だけ彼女を見たら晒っていました。憐憫や嘲弄といった感情が籠る忍び笑いでした。その不気味な笑みに不安を誘われます。

「じゃあ、折角なのでいただきます。……昨日も言いましたけど、毎日に来れませんよ？ それなのに、いいんですか？」

「それはそれで構いませんから。これはこれで好きでやっていることですし、無理強いするなんて出来ません。……来てほしいけど」

ちよつと上目遣い。今日は絶好調。ばっちりです。

ですがベルさんは「勘弁してください」と言って苦笑い。むむ、やはり手強い人です。

「昨日も話しましたが、出来たばかりで色々と入用なんです。お礼する手持ちがあつたから昨日は」

「わかつてます。……ただ、やっぱり残念です」

「お金が貯まって時間が出来たらまた来ますから……」

わざとらしく、落ち込んで見せるとベルさんは焦りました。そんな彼に少し舌を出して見せて笑います。……実際、残念に思っているので、おどけてみせないとまた調子が狂いそう。

「強かな人だなあ、ホント。……あ、お弁当の感想書いた紙入れているので、今後の参考にでもしてください」

「感想ですか？ そんな、別に良かったのに」

「いや、朝ごはんを取っちゃった形になりましたから、それぐらいはしない。あと、シルさんの料理の上達のためにも」

「ええ？」

「好きな人に食べさせるなら、美味しいものの方が絶対喜ばれますから」

「!?」

「頑張りましょう、シルさん!!」

「はい！……っ？」

ベルさんの真剣な様子にどきりもしましたが、何故か責任感に満ちた目でした。

その夜。彼の言葉の通り、洗われたお弁当箱と一緒に包まれていたメモ書きを見つけました。

『塩加減を抑えて』『具材的に砂糖は必要ないです』『自分で味見をしましたか?』『基本大事に』『総評して微妙な味わい』等々、ベルさんらしき筆跡で書かれた感想の数々です。

抽象的な感想ではなく、改善点もしっかり書かれてました。使った材料も正確に書かれていて、改善されたレシピも書かれています。私

が傷つかないよう、優しく丁寧に柔らかく書かれています。

……私の味覚的にはばっちりだと思っていたのですが、ベルさん意外と舌が肥えているのかもしれない。村育ちと言っていました。裕福な所の出なのでしょう。でも嘘や謙遜してた様子が伺えなかったのは不思議です。……それか、もしかすると私の眼もあてに出来ないのかもしれない。神々ぐらいには真偽はわかるのですけど。……恋は盲目にさせると言いますが、その所為でしょうか。

私の眼はともかくとして、ベルさんにあまりおいしく感じてもらえなかったのは事実です。

つまり、これは彼からの挑戦状とも言えるでしょう。私の料理を美味しく食べたいという、如いては私に毎食料理を作ってくれという暗喩……！

落ち着け私。考え過ぎです。きつと多分言葉の通りなのです。前向きに考え過ぎて「違う」と言われた時に立ち直れそうにない……。

自己防衛のため落ち着きはしましたが、やる気は残りました。感想から伝わってくる彼の要求は、私が美味しい料理をつくれるようになることです。その想いは間違いなく感じます。……必ず彼には美味しいと言わせてやりましょう。

まずは昨日と同じように作り、ベルさんの書いてくれたレシピ通りに分量も間違えずに作りました。比較検討です。

——愕然としました。

私の料理が微妙過ぎます。そしてレシピの通りに私の手で作られた、本当に美味しい料理を知りました。リリルカさんの不気味……いえ、あの不敵な笑みにも納得です。ですが、一応ちゃんとした料理は作れました。

自分で食べるのならまだしも、今まで私が作ってきたのは人に食べさせられる料理じゃない。私がおいしいと思うものが普通なのです。味見は大事と覚えます。シルは賢い子です。……ああ、穴があったら入りたい。

下手に隠し味などは入れないように、とのことですから、まずは基本に忠実に作りましょう。ベルさんだけでなく、リリルカさんもぎや

ふんと言わせてやります。

戸棚を開け、埃の被ったレシピ本を開きました。

茹でたジャガイモの皮をむいて、皮を剥き茹でたニンジンを刻んで、レシピにある通りに調味料を加えて味を調えた後、チーズや干切ったレタスと一緒にパンにはさむ。ダンジョンに持っていくなら片手で掴んで食べられるものが良いという判断で昨日、一昨日と同じくサンドイッチです。

……なのですが、今まで作ってきたモノと比べて、なんて簡単なんでしょう。レシピに書かれているのはその程度の事でした。あんなに色んなものをいれませんか。いつも私用に作る朝ごはんのお弁当を考えれば物足りなさすら感じます。

レシピ通りに作っていいものか。私が作ったという主張をしなれば。隠し味を……と何度も思いました。

食べられるだけでいいや、と思つて料理を侮つてきた弊害です。ベルさんが言いたかつたのは、この意識を変えることなのだと思います。……ベルさんのメモを見て、自己主張したがる頑固な私を戒めました。

料理からここまでわかるものかと言いたくなるくらい、私が料理をしている時の心境まで書かれたベルさんの感想、というよりも指摘は的確です。ハツとさせられることが多く、暴走しかける私への戒めとしてだけでなく、観察能力の部分で負けている気分です。……というか、食べただけで調味料をどれだけ入れたかまでわかるものなの？ベルさんは自分の事を冒険者だと言つてましたが、実は料理人なのでは？

リリさんとの事然り、隠し事をしてること然り。……益々謎が深まるばかりです。

とはいえ完成です。……私の感性から言えばまだまだ物足りなさを感じるのですが、本当にいいのでしょうか。

ボウルの端に残っていた、いわゆるポテトサラダを掬つて一口食べます。……やっぱり、こんなに簡単に美味しく出来て良いものな

のか。少し怖いくらいです。

欠伸を噛み殺して仕事に行く準備をしました。

苦笑いを交わして、ベルさんから昨日の空になったお弁当箱を受け取ります。——感想は聞くまでもなく。昨日のお弁当が美味しくなかったのは目に見えているからこそその苦笑い。

おずおずとした様子を装い、今日作ってきたお弁当を渡します。

「……………今日も受け取ってくれますか？」

内に秘めている私は、装って見せている姿以上に不安でいっぱいです。

彼は真剣な表情で頷いて受け取ってくれました。……………やはり義務感のようなものを感じます。隣にいるリリルカさんは昨日と同じく不満げです。

とりあえず、ホツとしているとベルさんに注視されていることに気が付いて、少し顔が赤くなってしまいました。誤魔化せたかと思いません。

「手、どうしたんですか？ 目の下の隈も」

「っ——」

左手をあまり見せないようにしていたのがバレてしまったようです。お化粧をして隠していた隈にも気づかれてしまいました。心配する彼に堪えきれず、白状してしまいます。

「夜更かししちやって。てへ？」

「てへ、じゃないですよ！ 別にそこまでして貰うつもりは」

「いいんですっ！」

一日一回でも会いたい。その欲を叶えるためにも、私はお弁当を作って渡したいのです。私が無理をしたからと、止めるわけにはいかない。

「私が、ベルさん達にお弁当を作ってあげただけですから。むしろ、ちゃんと悪いところを伝えてくれて感謝しているくらいです。……………だから、ベルさんは気にしないで。ね？」

それに、寝不足なのともかく、怪我については私のうっかりです。

空のお弁当箱を持つ包帯をしていた左手を右手で隠して、お腹の上で握ります。

隠している左手には、睡魔に耐えかねてうっかりつくってしまった火傷の跡があります。……………レシピを見なくても作れると思った私の間違いでした。見なくてもやれると思った結果がこれです。何度目かは覚えていませんが、茹でている最中に居眠りして焦っていて。誤って、煮立ったお湯に手を入れてしまったのです。備えていたお薬をすぐに掛けましたが、流石にまだ治っていません。ちよつと跡が残っています。

火傷については反省もしましたし、彼に怒ってもいません。

だというのに、おどけて上目遣いをする私に、ベルさんは沈痛な表情を浮かべていました。

……………その顔は少し嫌。

「むー、ならばベルさんのせいでこうなってしまったので、跡が残ったらベルさんに責任取ってもらおうかな？」

「シルさん!？」

包帯を巻いた手を翻しながら見せて、驚く彼に少し愉悦します。

……………慌てるよりも、思いのほか真剣に考えているようなので、意地悪が過ぎないうちにネタばらし。

「なんて、冗談ですよ。……………非常用のポーションがあつたので、時間は掛かるけどちゃんと治ります。……………ただ、ちよつと寝不足気味というだけなので、」

左手で口を隠して一つ欠伸。なんでもないから。だから笑って。と、欠伸で出た涙を拭って笑って見せました。

「でも……………」

「つ……………じゃあ、今日だけじゃなくて、これからもお弁当を食べた感想をくれますか？」

「いや、でもそれは——」

「なんだか手を抜きすぎて、これでいいのかなって不安なんです」

「……………そんなので良いなら」

心配してくれている、と喜ぶ自分を押し込めます。……………心配され

て喜ぶのは、なんだか違う気がしたから。今更な気もするけど、そんな真似をしてまで気を引くのは私らしくない。

「いってらっしゃい、ベルさん。リリルカさん。感想お待ちしてますね？」

「……………はい。シルさんも気を付けてくださいね」

作った笑顔でベルさんを送り出して、ベルさんが見てないところで、顔を顰めたりリリルカさんと睨み合っただけです。開店準備の作業に戻り、少しひりひりとする左手を擦りました。

——残ると思っていた火傷の跡はその日うちに綺麗さっぱり消えていました。不思議な事があるものだと、この時は単純に思っただけで気にはしませんでした。

次の日は薄く切ったハムと、ゆで卵を潰して塩コショウで味付けしたもの。加えて、昨日も使ったレタスで挟んだサンドイッチです。『まずは簡単な物から』との事でしたから、一通りレシピ本にあるサンドイッチは試してみようと決めていきます。危険なダンジョンで両手が塞がるのは良くないでしょうから、サンドイッチを卒業しても似たようなものになるでしょう。……………なんだかお勉強みたいです。

微妙だとあらかじめわかっていた昨日のお弁当の感想は、『昨日と同じで多くは言いません』と一言書かれていて、『頑張りましょう！』と励ましの言葉が書かれてました。

……………こうも上から目線だとベルさんの料理を食べてみたいものです。

そんなことを考えたせいでしょうか。今日のお弁当と交換した、空だと思っていたお弁当箱は少し重かったです。

残された、と思う前にベルさんが「僕も作ってきました」と一言。「偉そうにするのもな、と思いましたが。それに作ってもらってばかりでしたから。お昼ご飯にでも食べてください」

「……………えっと、この前から思っていましたけど、ベルさんはそんなにお料理に自信があるんですか？」

「まあ、一応。一人暮らししてた時期に凝っちゃって。一応料理の腕

には自信があります。人に食べて貰って、今まで美味しいと言われたことしかないですから」

「へー、本当ですかー？」

「……………村の子どもたちと神さま、リリしか食べてないですけど」

「なんですか、それ。信用なりませんよ？」

あまり私とベルさんの前では喋らないリリルカさんが我慢ならず、と言った風に口を開きます。

「ベルさまの料理は美味しいんですからね！　美味しすぎて腰抜かしますよっ！」

「へえ、そうなんですな」

「きいー!!　信じてないですねっ！　やっちゃってくださいibel様！」

「なにをやるっていうのさ、もう……………」

ベルさんと彼女の掛け合いに嫉妬しながら、彼からの贈り物を受け取り、言われた通りお昼ご飯にすることに決めました。二人が去ってから、誰にも見られないようベルさんの手料理に喜びます。……………初めての贈り物なので取っておきたいですけど、食べ物ですし、流石にそれはまずいです。お昼が待ち遠しくてルンルン気分で午前中の業務に励みました。

腰を抜かすというのは流石に言い過ぎだろう、と思っていた私が馬鹿でした。

お肉のような、でもほろりと解ける練ったハンバーグモドキ。たっぷりの甘辛いタレに浸した、お肉を使ってないパテに白いソース——後で聞いたら『チーズソース』と言うらしい——が塗られていて、キャベツやキュウリと一緒にパンで挟まれたサンドイッチです。

なんと美味しい事でしょう。

『豆腐ハンバーガー風サンドイッチ』とありましたが、兎に角美味しい。『豆腐ハンバーガー』とは、という疑問が湧いてこないくらい美味しいのです。

胃袋を掴まれるとはこういうことなのでしょう。私が掴まないと

いけないのに、ガツチリ掴まれてしまいました。

「シルがうまそうなもの食べてるニャー！」

感動のあまり一つ目をじっくり味わっていると、お弁当箱ごとアーニャに取られてしまいました。

一口サイズに切られていたうちの一つを食べられてしまいます。あと六つです。呆然としていた私を他所に、ゆらりと揺れていた尻尾の毛が逆立ち、止める間もなくお弁当箱を持ったまま去って行きました。

「アーニャに取られたー！」

私の絶叫が『豊饒の女主人』の裏庭に響きました。

………お弁当箱が返ってきた時、中に残っていたのはパンの欠片だけでした。

指に付いていたタレを舐めるミアお母さんと、その後ろに隠れた馬鹿猫二人にルノア。お肉ではなかったようなので、食べたのであろう口の端にタレを付けたリユウを睨みます。

怒っている私を無視して、ミアお母さんはレシピを聞き出してこいと言いました。ベルさんが作ったというのもバレています。

………私に作れるわけがないから？

失礼な。最近頑張ってるんです。………というか、私一つしか食べてないのにあんまりです。あと一つ誰が食べたんでしょう。許しがたいです。

でも、此処まで認められるということは、ベルさんの料理の腕は相当なものなのでしょう。

理解しつつも、納得がいきません。何故だか悔しいです。胃袋を掴むのは諦めた方が良くのかもしれませんが。ちよつと落ち込みかけましたが、お昼ご飯に気を取られて忘れていた、楽しみにしていたはずの感想を思い出しました。

『前より美味しかったです』

『この調子で頑張りますよう！』

と渦巻に花びらを付けた花丸印が。やった、と誰も見ていないことを確認して拳を握ります。

お昼ご飯を食べられてしまった悲しみはこれで……いや、やつぱり悲しいものは悲しかったです。また食べたい。

リユースが二つ食べてしまったと白状して、謝りに来ましたが手放しでは許せません。

「いいよね、リユース？」

「……………は？」

お皿洗い一回分で手を打ちましょう。

次の日も、お弁当箱の返却と同時にベルさんにお昼のお弁当を渡して、昨日あった一件を話しました。

あの『豆腐』というのは極東にある食材で、昨日使ったものは自家製らしく、オラリオには売ってないんじゃないか、とのこと。ミアお母さんからの希望には沿えないようです。……………自家製で作れるのなら、と思ったのですが洩られて遠回しに断られました。

「残念です。でも、とても美味しかったですよ？ つい、嫉妬しちゃうくらいに」

「……………？ それはどういう意味で？」

「さあ、どういう意味でしょう？」

ベルさんに笑いかけ、わざとらしく横目でリリルカさんを見ます。彼女は少し勝ち誇った顔をしていました。ですが、遠回しに彼へ好意を示すのには丁度いいです。

困惑するベルさんにちよつと悪戯です。

「それにしても、男の人で料理が上手なのって素敵ですよね」

そう言うとベルさんは苦笑しました。

「……………だといいいんですが。あんまりそういうわけではないみたいです。リリにも悔しそうにされますし。感想で僕、シルさんに嫌な思いさせてませんか？」

「うーん。ベルさんに悲しまされているのは今更ですよ？」

「うえ!？」

「……………来てくれないから」

「あー……………そういう意味ですか。それは、はい」

頬を赤らめて、少し彼に上目遣いをしながら少し話題を逸らします。

「それで、今日は来てくれますか？」

「……………それは。えっと、まだお金がですね。……………ごめんなさい」

嘘だと丸わりの言い訳をするベルさんに、落ち込んだそぶりを示して見せて微笑みを。

「それじゃあ、しかたがないですけど。……………もつとゆっくり、私はベルさんとお話しがしたいんです」

偶に想いのままにしたいけど、我慢しなければ重すぎて嫌われてはいけませんから。別に私は彼のものではないのだし、欲張りすぎてもダメです。そう、攻めるのならじわじわと。ちよつとずつ意思表示します。

恋煩いしていた時が考えられないくらい絶好調です。

「僕もです。出来ることなら行きたいんですけど……………」

「……………え？」

「どうかしました？」

またです。違和感が生じました。……………リリルカさんの前で言うような事ではないことでしょうに。彼女が少し悲しそうにしているのはわかってる筈です。察しの良いベルさんが気が付かないなんてこと、あるのでしょうか。———どうにも不可解です。

「いえ、なんでもありません。行ってらっしゃい、お二人とも」

「はい、行ってきます」

とはいえ、敵に塩を送ることは無いと、疑問を飲み込んで二人を送り出します。私を恨みがましく睨んでいたリリルカさんは背を向けて、今度はベルさんを見上げながら、視線だけで抗議しています。

それに対して申し訳なさそうにするベルさん。ちよつと情けなく見えますが、そういう関係にあるのであればリリルカさんに弱い態度をとっていても不思議では———。

『あなたが思うような人ではありません』

ふと、彼女からの忠告を思い出しました。

……………もしかして。

思い至った想像を口に出して言うわけにもいかず、胸の内にはしまいます。

仮にそうであれば。もしそうなら。……………所詮想像にすぎないことですが、そうだとするなら、私が彼女を敵視するのは的外れなのかもしれない。

押し殺していたほんのちよびつとの罪悪感が消えました。……………リリルカさん、苦勞しているのかもしれませんが。とはいえ同情するにはまだ早い。もし違った時が厄介です。彼女に聞くのは負けた気がするだろうから聞けません。……………ゆつくり確かめていくことにしましょう。

確かめると決めて三日経たないうちに黒だとわかりました。私が空回りしていたことも。私を大切にしてくれそうだというのは誤解ではないのですが、ベルさんはホントに罪作りな人です。でも、ちゃんと男の人なんだなってわかって良かったのかもしれませんが。……………リリルカさんに親愛以上の感情を向けているので心配はしてなかったんですけど、やつぱり、ほら、そういう人もいると聞きますし。神様でもいるくらいですから。ええっと、「アポロン・ファミリア」の主神様とか。

……………私が転ぶように仕掛けたのだけど、リユーが満更でもないのはすこし気掛かりです。ベルさんに差し出された手をとれていることに気が付いていないのでしょうか。後で揶揄ってやろう、と思うと気が付いたようでさつと手を離しました。……………どうして私の方を怯えた目で見るとはどうでしょう？ そんなに怖い顔してますか、私。

ですが確信します。真の敵はベルさんです。リリルカさんは被害者ともいえるべきでしょうか。リリルカさんのようになりたいと私は望んでいます。彼女のようにならただの被害者で終わるつもりはありませんし、諦めるつもりなんてありません。……………でも、彼を独占するのは無理なんだろうなあと何処か悲しんでいる私がいいます。

朝お弁当を作って渡して、お話をしてお話をしてそれからお仕事に励む。夜、

彼からのお弁当の感想を読んで、ちよつとずつ料理が上手くなっていくことに自信が持てて楽しくなる。

そんな日々の繰り返しは、時間の流れを忘れさせるほど、私の胸の奥を疼かせました。

彼と出会つてもう半月。

たった一人の男性をここまで想う事なんてなかった。でも、これが恋なのです。彼と私で二人分のお弁当を作るのには時間がかかりません。忙しいですが、その時間も苦ではありません。……苦ではないのですが、最近、ちよつとだけ昼間に来る一般労働者の旦那さんをもつ奥様たちに尊敬の念を持っています。

朝昼夜と毎食作るというのだから、大変なのでしょう。飽きられないようにメニューも考えないといけないはずですから。……ベルさんは気にしないでくれますけど。

今夜、約一週間ぶりに彼が来ると聞いた時は素直に喜びました。恥ずかしいところを見られた気分です。「ロキ・ファミリア」の予約が入っていました。席はとれた筈ですから夜までゆつくりと二人を待ちましよう。

待ち遠しかった時間が終わり、やってきた二人を席に案内しました。今日は前回と違ってミアお母さんのお許しが出たので、団体のお客様が来るまでは近くでゆつくりできるでしょう。

……不意打ちは駄目です。ほんのり赤らんだ顔に、無邪気な表情を浮かべて。顔を背けて悶え殺されそうになるのを耐えていたところで、リルルカさんの言葉によつて揶揄われていた気がつきました。ベルさん絶許です。ミアお母さんに言いつけてやりましようか。

二人の様子が「ロキ・ファミリア」が来てから変わりました。二人の会話から、彼らに対して疚しいことがあるとわかります。ちよつと悪戯をしかけてやりましよう。

沢山いる「ロキ・ファミリア」の中でも気にしているのはアイズ・ヴァレンシユタインさんのようで、何があつたかを聞き出しました。ベルさんは助けてもらったと言つてましたが、多分うっかりで血を被

らせてしまったのでしよう。私の事を笑えないくらいおつちよこちよいです。……あなたの前だけだということに、気が付いて欲しいんだけどな。

一応教えてくれたことへのお礼として、ベルさんに知っていることをお話しします。しかし、ベルさんが彼女に見惚れていたせいで、向こうに気がつかれたようです。あーあ、と思いましたが知らないフリ。リルルカさんも同じようで、彼女は顔を隠して額に手を当てていました。ちよつと揶揄いたくなつたのは仕方がないのです。た、楽しそうになんてしてませんよ？ ……もうちよつと状況を楽しんでいたかったのですが、注文されては仕方ないです。

はい？ えつと、ミアお母さん？ 手伝え？ ……そんなあ。

最後に注文された品だけ運んで、一言伝えてから笑顔の仮面を被つて「ロキ・ファミリア」に注文をとりにいきました。

ウエアウルフ
一悶着ありましたが、ベルさんの手で沈められたようです。馬鹿な狼人です。彼から離れないといけなくなつた一番の原因なのでいい気味です。

とにかくその日も楽しくて、嬉しい夜でした。

ただの演技だけでは振る舞えない私を見抜いて、恥ずかしくさせて。

いつも以上に揶揄われました。

時として子どものような笑顔と、大人を思わせる笑みを浮かべるベルさん。

心配をかけたくないのに、残酷なまでに彼は優しくして。

帰り際に渡されたアクセサリー。本当にお守りのつもりだったのでしょうか。——ですが、お守りだと言つて渡されたものを見て、私は取り繕っていたものをかなぐり捨てて、想いの丈を告げました。私も年頃の娘です。それを渡す意味ぐらい知っています。『豆腐』の一件から極東の文化について調べたのは吉でした。

ベルさんはやはりずるい人です。女性に簪を贈る意味を分かっている上でやるんですから。……求婚と同じ意味だと知らない筈が

無い。

予想通りの答えが返ってきて、思わず涙ぐんでしまっている私に気がつきませす。こういうのを確かハーレムというのでしようか。ベルさんに向かってクズとか女の敵とか言いたいですが、惚れた弱みです。……どんな形であつても、好きあえるなら嬉しくないわけがありません。私が泣いているからと謝らないでください。私はとっても嬉しいのだから。

——他の女の事なんか気にしなくなるくらい、魅了したらいいんです。そう、思うのですが……美の女神にも靡きそうになさそう。といつても諦めたら負けです。どんな手を使つてでも、絶対メロメロにしてやりましょう。

私がやることは山積みです。表面上対立してみせていたりリルカさんと和解して、出来ることなら彼の「ファミリア」に入りたいですが、まだ先のことになるでしょう。でも動くなら早い方が良いでしょう。

ミアお母さんに連れて行つてもらつて、明日ぐらいにはあのひとにお願いをしに行かないと。……多分知っているのでしようけど。一世一代の私の告白も見ていたに違いありません。私と同じで人を見るのが好きな方ですから、ベルさんに気が付かないはずが——

三——三——三

あなたがふと顔をあげると鈍色の目と合つた。あなたは冷や汗を掻いて弁解するが、許してもらえそうにない。理不尽だとあなたは思ったが早々に諦めた。あなたは反抗しても敵わない相手だと知っている。あなたは謝罪の言葉を叫びながら逃げ出した。

「もう。お行儀が悪いんだから」

元あつたようにしまう。これは知られなくても良い、恥ずかしい話だ。この原本の写本は多くあるけど、あれを写したものは存在しない。一つだけあれば事足りる、一人の少女の恋と愛の話だ。

彼と一緒にいる事しかできない私からしてみれば、恥ずかしいもの。黒歴史といつても良い。でも、それでも一人の少女が生きた軌跡だ。彼が作った道具を使つて書いた、一人の人生の証だ。だから、多
少恥ずかしくても捨てる気にはならなかった。それは私自身の否定
につながってしまうから。

……読んでいたことを責めるつもりはなかったのだけど、結局私の
思惑は外されて負けてしまったし、取り繕うことなく正直に書いて
いるから、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。

それに生々しいことも書いてしまっているから、まだあの娘には刺
激が強いだらう。読んでいたところからすると、まだまだ先のようにだ
けど。……あの人に治してもらって傷一つない左手で、身に着けて
いる簪を撫でる。

「久しぶりにお弁当、作ってみようかな」

懐かしい思い出が蘇ってきて、想像した彼の喜ぶ顔に微笑んだ。

リユー・リオンは戸惑って

「迷宮産の食材は美味しい。」

階層の深度に応じてモンスターが強くなるのと同じように、ダンジョンで採れる食材も深さによって良いものに変わる。

ものにもよるが、常人であれば美味しすぎて『神酒』^{ソーマ}のように『魅了』されてしまうくらいだ。更に危険なものだと、あの酒に漬けた瓶詰の果実のように耐性がなければ口に含むだけで余りの美味しさに死んでしまうこともある。

過ぎたるは猶及ばざるが如し、という言葉があるようだけど一つの真理じゃないだろうか。

勿論、朝からそんな危険があるものを食べるつもりは無かったから用意していなかった。程々のものを選んで出したつもりだけど、二人はどうにも、おっかなびっくりという様子で食べていた。急に出したから驚かれたのかもしれないけど、今までの夕食にも少しつかつてみたりしていたから、二人が口にするのは初めてというわけではないのだ。

「やっぱり、朝ごはんがあれだったのは駄目だったかな」

「いや、それはリリが起きれなかったのが悪いので。別に怒っているわけではないんですけど……。リリが作ったものを食べて貰えなかったことが惜しいと言うか、悔しいというか」

ヘステイアに「行ってきます」を言っただけで出発したが、『豊饒の女主人』に向かうリリの足取りはいつもより重い。リリはシルさんをあまりよく思っていないから、それかもしれない。リリは「それに」と言っただけで愚痴をこぼすように言う。

「なんだか、嫌なものを見せられるような……。そんな予感がしてしまっただけ」

「……………あ」

言っただけでなかった。リリの意識が朦朧としている間に告白されてそれに返事をした事。

「ベル様？」

「ん、んんっ……………えっ、あーうん」

「……………なんですか、その反応は。何かリリに疚しい事でもやったんですか」

怒られる覚悟はできている。……………でも、やっぱり怒られて気持ちがいい事なんてないじゃん。

冷や汗がだらだらと。口の中が少しパサつく。

リリは抑揚なく、少し余裕を見せながら背負っているバックパックの肩紐を握って首を傾げている。

……………観念して話そう。

「あのねリリ——」

「はい」

怒られました。

「むう——！」

「怒らないで……………って無理だよね」

「当たり前です!!」

げしげしと膝裏を執拗にリリに蹴られる。痛くも痒くもないけど、ちよつと気まずい。僕が平気だからいいけど、リリが周りから暴力を振るう彼女だと思われるのは嫌だ。

「ちよつとは堪えて下さいよ、ベル様！……………結構痛いんですよ！リリが！」

そう言って蹴るのを止めたりりは少し息が荒く、少し涙目だ。

「なら止めよう？ 周りから変な目で見られるから」

「むー！ ならこの怒りの矛先を何処に向けると！」

「それは僕しかないけど……………」

煮え切らない僕に怒り心頭。我慢できないという風に、ふんすと大きく足を上げて先に行こうと歩き出したリリを、いつもより歩調を速めて追う。

「——デート一回ですー！」

目的の『豊饒の女主人』が面した西のメインストリートに出てリリは立ち止まり、彼女は未だ小路に居る僕に振り向いてそう言った。

「え？」

「何時かは来ることでしたから。それが思いのほか早かったに過ぎません。……………ヘスティア様については納得してたから、腹がたなかつたというだけです。だからシルさんのことでリリを納得させるのにデート一回です。勿論丸一日ですよ。……………安い話でしょう？」

リリの言う通り、それではリリが我慢しているだけではないだろうか。そんなことでいいのかと僕は戸惑う。

「それでいいのリリ？」

「はい。……………そのかわり、色々としていただきますので」

「っ——!？」

訂正。ちよつとりリリが何考えているのかわからない。

妖しく笑みを浮かべたりりに色香を感じて、何をされるのか想像が及ばない「色々」に、少しだけ恐怖にも期待にも似た何かを感じた。少し顔が赤いかもしれない。

「ふふふ。一日は長いですよ？ 何処に行きましょうかベル様？ リリは今から楽しみでなりません」

妖しい笑みを止めて、悪戯めいた笑顔を浮かべてリリが言う。

「あの、お手柔らかにね？」

「さあー？」

昨日から引き続いて彼女の大人っぽい姿に、僕はたじたじになるのだった。

上機嫌だったリリの機嫌は『豊饒の女主人』が近づくとつれて急降下を始める。仕方がないこととはいえ、僕にはどうしようもないことに、もどかしさを感じずにはいられない。

「ベルさんー！」

「シルさん!？」

店内へ入ろうとして、段差のある入り口からぴよんと飛び出して抱き付いてきた彼女を抱き止める。衝撃を殺すためにその場で半回転。リリにもやったけど、あんまりやり過ぎたら目が回りそうだ。ふわりとした彼女の存在を身体で感じて、ちよつとだけドキドキした。

飛び出してきた彼女、シルさんを地面に下ろすと、リリのジトつとした視線の重さが増しているのに気が付いた。こればかりは僕のせいじゃないんだけど。

「えへへ……………。おはようございます、ベルさん」

「おはようございます。ビックリしましたよ、シルさん」

「あなたの姿が見えて、つい嬉しくなっちゃって。驚かせてみようかなーって」

「……………もう。幾ら段差が低いからって、足でもくじいたら事ですよ？ ミアさんにも怒られるだろうし」

そう言うと、シルさんは僕の後ろに隠れる店内の様子を見た。

「んー大丈夫ですね!! それに、ベルさんならまた受け止めてくれるって、私信じてましたから!」

「はあ……………」

呆れもしたけど、ちよつとだけ頼りにしてくれていたことは嬉しい。

「遅くなりましたけど、おはようございますリルカさん。どうしてそんなに私を睨んでいるんでしょう?」

「心当たりがないとは言わせませんよ。……………よくも、ベルさまが断らないことを知っていて、やらかしてくれましたねっ! 贈り物をされたからと、調子に乗らないでください!!」

お、おお。修羅場。天国のお祖父ちゃん。これが、修羅場というやつでしょうか。男が入れない領域だと、僕も身をもってようやく知れたよ……………。うん、どうしよう! あんまり嬉しくない!

「やってませんよっ」

「なあっ!? そういう意味で言ったんじゃないやありません!! 色ボケ! リリだってまだなの!!」

「ほーう。それはいいことを聞きました」

「っ!? しまった……………」

……………本当に、二人が何を言っているのかわからないんだけど。リリとやってない事って結構あるけど、なんのことを言っているんだろう。曖昧な言葉で意思疎通できているところを見ると、実は仲良しな

んじゃないかと思ってしまう。

「というか、お二人はしてないんですか。そういうこと」

「……………っ！ ちょっと、こちらへ！」

シルさんの手を引いて、僕の反対側を向き、引き寄せた耳元に口元を近づけて何かを言うリリ。……………唇の動きを見られないようにしたかったのだろうけど、置いてけぼりを喰らったようで、少し寂しい。何かを言い終えた後で、僕からは伺えないシルさんの顔を見たりりは何か引き気味だった。待って、凄い気になるんだけど。

「仲良いの二人とも？」

「仲が良いってどこをどう見たらそう思うんですかあツ！ ベル様のばか！」

堪えきれなくなつて聞くと、こっちに向き直つてリリは猛反発。

「え……………私、リリルカさんとも仲良くしたいのに……………」

「へあ!? な、なに考えてんですか。怖いですよ……………」

シルさんも張り付けた笑顔でこちらに向き直った。確かに、あれだけリリを敵視していたシルさんが、仲良くしたいと言っているのはちよつと怖い。

「だって、ベルさん。ハーレムがしたいんでしょう？ リリさんや私

みたいに女の子を侍らせて」

「なんでそれをシルさんが!?!」

「いやいや、ベルさん。あれで無自覚だったとは言わせませんよ？」

告白した私にあれだけ酷いこと言ったのに……………」

そう言いながら、シルさんは昨日贈った簪に触れる。

「た、確かにそうですけど！」

「けど？ 何か違いますか？」

「!？」

僕の手をとつてシルさんは微笑む。

にたりとした作り笑いの向こうにある、女性の怖さみたいなものを感じて身がすくんだ。微笑みはもともと攻撃的なものつて本当のことなんですね……………。

動揺していると作った微笑みを止めて、別の趣おもむきある笑顔を浮かべ

て、僕の手の甲を撫でた。

「意地悪なこと言いましたけど、言い換えればそれだけ甲斐性があるってことだから……。ベルさんが幸せにしてくれることを私は信じてます」

「……………はい」

「ちよつと違いますね。ベルさんを信じる、私を信じてます。……………人を見る眼だけは、神にも負けない自負がありますから。……………彼女がいるあなたを好きになった時は流石に疑いましたけどね？」

「ごめ、」

「謝らないでください。ね、ベルさん？」

「……………ありがとうございます」

そうだった。……………悪い事を自覚しているのだから、悪びれるのは僕が免罪符を得ようとしていることにしかならない。だからもうやめようと、今日決めたばかりじゃないか……………。

「うーん。——えい！」

「ああああああああ!!」

思いつめているとシルさんの顔が見えなくなって、顔に手が添えられると同時に頬に柔らかいものが触れる。それに叫ぶりり。

……………え。あ、ええ？

「元気がないベルさんに、私からベルさんだけにしかしない、元気でるおまじないです。……………一歩先を行かせてもらいましたよ、リリルカさん？」

「~~~~?!?!」

癩癩を起こしそうなりりがいるけど、それどころじゃなくて。

……………柔らかい感触があった頬に触れて僕は何をされたのか、シルさんが何をしたのかを知った。

処理能力が追い付いてなかったけど、首から一気に赤くなる自覚があった。

「え、つと、あの」

「そんなに見つめられると、流石に恥ずかしくなっちゃいますっ」
頬に触れた物を凝視していると、シルさんは恥ずかしがって両手で

隠した。

「でも、ベルさんもしたいのなら、私がやったようにベルさんもしてくれていいんですよ？」

——だって、そういう仲間になったじゃないですか。

リリに掴まれ左右に揺さぶられながらも、口を隠したままこてんと首を傾げる仕草は魅惑的で、演技だとわかっていても可愛い。

そんな彼女にたまらず、僕は顔を赤くして俯くしかできなかった。

苛めすぎちゃいましたね、と反省するそぶりを見せないシルさんがお弁当を取りに戻ったのを、羞恥心で蒸発しそうになりながら待つ。そんな顔の赤さを手で隠す僕を、リリはちらちらと見上げてはそっぽを向くということを繰り返していた。拗ねているようにも見えるけど、いつものそれとは違う。

「…………リリもしたいです」

ぼそりと不意に素っ気なく呟いたリリの顔を見られずに、頷くだけに留める。女性との接触には慣れたと、リリと神様との生活の中で僕は無意識に思っていたのかもしれない。

僕が頷くのを見たリリも足元の石畳を見つめながら、僕と同じように顔を赤くしていた。

「——クラネルさん」

凜とした声が掛けられた。僕が見る、声の主である彼女はその柳眉を八の字にして、表情の薄い彼女なりに機嫌が悪いことを表現している。お互いに知っている仲だけど、あまり話したことは無かった。

「ん、うん？ ええっと、リユースさんですよね」

「はい」

きりつとした態度で、男性の自分をしてカッコいいと思わせるような所作でお辞儀をするリユースさんに、慌てて背筋を正して返礼する。デレっとしていた自分自身が情なくなつた。

「今まで言わないうございましたが……………昨日シルの想いに応じたそうですよね」

その指摘に間違いはないと、頷く。僕はシルさんの告白を最低と言

わかれても仕方がない形で受け入れた。

「シルが良いと言ったのかもしれないが、……これは友人として
言わせてもらいます。クラネルさん、貴方は——ふしだらです」
「!!」

リユーさんの言葉は、重みがある。重りを乗せられ、浮ついた僕の
足を地面に着けさせたようだった。

「貴方の隣にはアーデさんがいる。貴方はシルとアーデさんのどちら
かを選ぶべきだった」

「……」

冷や水を浴びせられ、身体の熱が奪われるようでもある。

「シルには言えませんが、クラネルさん。貴方はシルを拒んだ方が良
かったではありませんか」

リユーさんの第一印象でわかる彼女の在り方と同じで、どこまでも
正しくて、僕にとってはどこまでも厳しい正論だ。

「良い想像とは言えませんが、もし貴方がダンジョンで命を落した時、
残されるシルがどうなるか。貴方はそれを考えられない人ではない」

でも、それを長々と聞いているつもりも無いし——時間がない。

「ちよつと待つてくださいいリユーさん。それは買い被りです、考えた
こともありません」

「何を言っているのですか。そんなはずはないっ」

少し語調を強めた僕と同じく、リユーさんは僕の否定する言葉を強
めに否定する。

でも、考えた事がないのは本当の事だ。

「死ぬかもしれない、なんて考えるよりも無事に帰って会いに行きた
いと思う方が有意義です。僕が死ぬかもしれない、残されたシルさん
がどうなるか——そんなことを考えるより、僕はシルさんの作るお
弁当を楽しみにしたいです」

「そ、それは……考えることを放棄しているに過ぎません！ クラ
ネルさんアナタは——!!」

僕を糾弾しようとするリユーさんの頭に、布にくるまれたお弁当箱
が乗せられて、推定Lv. 4の「ステイタス」を持つ彼女は呆気なく

動きを止められる。

「はい、リユー？ 落ち着こうかー？」

「っ!? ……シル」

ああ、駄目だった。

お弁当箱を片手に帰ってきた声の主にリユーさんがぎこちない動作で振り向き、僕が右手で頭を抱える仕草をして見せると、リリも乾いた笑いを零した。

リユーさんが「そういうことですか」と一言呟き、僕の思惑を今になつて察したらしい。

窓から入る陽の光だけで、仄暗い店内にこちらへ帰ってきているシルさんの姿が見えていたから、リユーさんが真面目な話をしているとはいえ早々に切り上げなければ、と思つただけど……。間に合わなかった。

シルさんは狼狽えるリユーさんを見て、困つたように笑っていた。

「お二人とも、今日のお弁当です。リユーは後でお話ししようね」

「シル！ ですが」

「あーとーで！ リユー、ミアお母さんから言いつけられてた仕事あるでしょ！ ——リユーがごめんなさい、ベルさん。行つてらっしやいお二人とも！」

「え、ええ。行つてきます」

少し慌ただしく振る舞うシルさんはお弁当を僕に渡して、リユーさんを背中から押す。片目を瞑つて僕へお茶目に振る舞いながら、シルさんは店内に戻っていく。

…………リユーさん、ご愁傷様です。

「リユーが酷いこと言つてたの聞いてたんだからねっ！」

「…………すみませんでした、シル」

「…………でも、心配してくれてありがとう。リユーが私の事、友達だつて言つてくれて嬉しかったよ？」

「そ、そんなところから聞いていたのですか！」

「うん。…………お願いリユー。ベルさんのことを嫌わないで。多分、

本当にそう思ってくれている。それは私本当に嬉しいんだ。だから、お願い。ベルさんのこと、私が信じるように信じてあげて？」

「……………善処します」

「はあ……………。ねえ、リユー？ 嫉妬してる？」

「……………シルはなにを言っている？ そんな、あなたに嫉妬しているだなんて——有り得ません」

我が意を得たりと笑う。

「別に『私に』なんて一言も言っていないよっ？」

「……………？」

「……………ベルさんに私が取られると思ったんじゃないかって言ったつもりだけどっ！」

「あ、いえ、ちがつ！」

「なんだ、やつぱりリユーもかあ……………」

「……………!! 謀りましたね、シルツ！ 違いますからね!!」

ただでさえ姦しく興味深い二人の話題に、一人また一人と加わって朝の静寂は喜色に富む。

女主人の怒りに触れる前に、鈍色の少女は話の輪から抜けて仕事に戻った。

……………無論、火付け役のその少女が怒られないわけがなく、大量の買い出しを言いつけられて悲鳴を上げた。

ベル・クラネルは下見に行き

ダンジョンに着き、鎧に着替えるためサポーターを装いながらベルに続いてルームに行く。

……彼から渡されたシルのお弁当は既にポーチの中だ。ベルが楽しみにしている以上、食べないでくださいとは言えない。

確かに初めの頃に比べれば美味しくなっているし、目も当てられないということはない。……しかし、安心して食べられるようになったのがベルのお蔭で、しかも日に日に上達していることが分かるのは腹立たしいものだ。

加えて昨日、ついに恐れていたことが起こってしまった。

——それもリリが寝ている間に。

……男が廃るといえるのは確かに分からないでもない。確かに自分に立場を置き換えれば、当然の成り行きだったと納得もする。

それでも告白を受けて、了承したという話を聞かされた時は……幾ら覚悟が出来ていたこととはいえ、怒らずにはいられなかった。言いたいことが一杯あり過ぎて、何から言ってやったらいいのかわからなかった。

極めつけはそのあと。自分もまだしていないようなことを、シルが容易く行ったことだ。ああも見せつけられてしまったのは、デートに誘ったリリルカはなんだというのだ。あのタヌキめ。ベルの女たらし。

しかし、ああも簡単にはつぺにちゅーが出来るのは正直羨ましい。自分にはない行動力だ。

「はあ……………」

「? どうかした?」

「なーんでもないですうー」

ヘスティアが居はするものの、この人と一つ屋根の下。あんなこと、何時でも出来た筈なのだ。

手を繋ぐことも出来て、抱き付くことだって出来て、膝枕してもらうことも出来て。

……頬に接吻一つ出来ないでいる。

恥ずかしがってばかりでは駄目なことぐらいわかっている。

……わかっていたはずだった。

もう一つ大きいため息を吐くが文句は言えず。彼の服を引っ張って、不満を抱えていますと訴える。

しかし何と聞かれても答えるつもりにはなれない。

「えっと、ここでするってわけじゃない、よね？」

黙っているとそう言われて、ベルは膝を折って自分と顔の高さを合わせる。分かりにくいのが、顔が少し赤いだろうか。

——言わんとしていたことを……丁度先ほど考えていたことだと察して息を飲んだ。しかし、反射的に違うと首を振って怖気づいてしまう。

「良かった。まだ僕も心の準備ができてないから」

「……………はい」

こんなので自分はデートの時大丈夫だろうか。

不安が募る一方で、ベルの様子に違和感に似た何かを感じる。

……………ただの気のせいだろう。

『豊饒の女主人』には、出来ることなら近寄りたくない。

シルの事も一つの理由だが、彼に近づき、彼との隔たりを一層感じられるようになったのと時を同じくして、他者の力量もそれなりに見定められるようになってきた。幾ら強くなり、鎧を身に纏っているとしても、あそこに勤める彼女たちは自分の数段上を行く。

ベルとの差ほどではないにせよ、L.V.の差をひしひしと感じる。今のままでは逆立ちしたって敵わない。そしてベルは数段上を行く彼女たちの更の上。あそこに行けば己の弱さを実感し、くじけそうになつてしまうのだ。

もしかすれば、いやもしかしなくとも、アルカナム神の力の使用を禁じている

神々を除けば、彼は世界で一番強いかもしれないということに実感が伴ってしまう。

あれでまだ成長し続けているというのだから。この人に追いつく

のは果てしない道のりだ。

「リリー気が抜けてるよー!」

「……………はい!」

少し、集中しよう。ダンジョンでは気の緩みが死につながるのだから。

ハンマーを横殴りに叩きつけ、軸にして横へ移動。すぐさま引き離してベルの手から逃げた。空を切り、指を開閉させているベルの手を見る。

模擬戦闘だといっても気は抜けない。

——捕まれば死ぬ。

その緊張感を持つことが大事だと言った彼は徐々に殺気を込めて捕まえにかかってくる。初めて捕まえられた時は本気で死ぬかもしれないと覚悟をしたくらいだ。

一度距離をとって息を整える。

「どうする、まだやる?」

「……………つやります!」

やるかどうかを聞かれて「やれない」とは答えられない。

まだまだこの人の隣は遠い。背中ですら、手を伸ばしても届きそうにない。

——近くて遠い。

彼の隣を目指して手を伸ばすように、胸の奥は熱くなっていく——

——

リリは頑張っているみたいだけど、そろそろ止めにしないと。今日リリが動けなくなってしまうのはすごく困る。

「はい、おしまい。お疲れ様、リリ」

「ふう……………ありがとうございます……………」

どすん、と音が響く。リリがハンマーを落した辺りの床は少し罅が入っていた。

木の棒を振るっているのと変わりないと言っても持ち続けたり、向きや動きを制御するための握力は必要だからだろう。流石に疲れている。休みなしで二時間弱動けるのは大したものだ。

「あううう……疲れましたー……」

「ちよつと待っててね」

「はいー……」

腰に差していた刀を抜刀して納刀。一振りでルームの壁に数十の傷がついた。ポロリと何でもないかのようには、寶石が出土したので『倉庫』で回収。人目につかないのをいいことに、このルームに入ろうとして倒したモンスターから出た魔石とドロップアイテムも手早く回収する。

地面に『倉庫』を展開して回収するのは楽だけど、【剣姫】の時のように注意を怠ってしまえば厄介なことになる。

……そういえば、あの後どうなったんだろうか。シルさんが態々見送ってくれたことや、贈り物の簪を頭に着けていた事もあって、彼女からしてみれば色々と目に付くことがあったと思うけど。

ウエアウルフ
あの狼 人の彼には悪い事をしたとは思うけど、酒に溺れる人が悪い。酒に酔っても言って良い事と悪い事がある。僕の所為だといっても、アイズさん困ってたし。

もう僕の事がバレていてもおかしくない頃合いだろう。周知されるのは、自重を少しやめるいい機会だと思って諦めよう。

——ヘステイアやリリに迷惑は掛けたくないけど、自分の為にも許してもらいたい。

モンスターの湧きつぶしを終えて、疲労した様子のリリに近寄る。地面に座り込み、リリは足を投げ出していた。

「どう、座っていられそう？」

「はい、なんとか」

『倉庫』の中に入れていた水瓶と木製のコップを二つ取り出し、水を注いだコップの一つをリリに渡す。

「どうぞ。自分で飲めるよね」

「はい、今日はそこまで疲れてないので」

そう言つてコップを傾け、リリは受け取つた水を一気に飲み干した。重厚な鎧を着ているから余計に汗を掻くようだ。汗を掻くのを厭わず、少しでも強くなろうとするリリはいじらしく、それでいて格好良かった。

「ベル様？」

「リリはカッコいいなーって思つて。そんなに見つめてた？」

「いいえ。ただ、どこを見てるのかなと思ひまして。………ベル様えつちですから」

「な、リリでしょー！」

全く失礼しちやうぜ！………と神様の口調を口に出さずに真似てみたけど、僕には似合いそうになかった。やっぱり超越存在デウス・デアである神様ならではものだろう。

それにしたつて、今思い返すと恥ずかしい。僕は未だ世でいうところの『ラツキースケベ』に出くわしたことが無いが、リリには三度ほど上半身だけとはいえしつかり見られている。

僕に言われる心当たりはないのだ。リリにえつちだなんだと言われるのは………多分僕、満更でもない顔で神様と寝ていたんじゃないかな。最高級の抱き枕だと思つたら、弩級の爆弾だつたつていうあの事件は忘れられない。

「………。お相子ですつ」

僕が心当たりがないとは言わせないぞ、と見つめるとリリはそう言つてそっぽをむいた。

その仕草が面白くてついでという具合に、僕から笑いが零れるとリリもつられるように笑う。

「お昼にしよっか」

「ですな」

ダンジョンが自己修復に勤しんでいる間は、入り口が一つしかないここで、不意をつかれてモンスターに襲われるという心配はない。心配はないが、18階層のように綺麗な景色がないのは残念だ。贅沢は言えない。

ただでさえ『倉庫』があることで贅沢が出来ているのだ。物資の運

搬や獲得物の持ち帰れる量を気にしなくてもいいというのは、意識的に余裕が生まれる。『魔法の靴』さまさまと行ったところだろう。

少し回復したりりは不服そうな顔を隠すことなく、シルさんからのお弁当を取り出した。

いつもの容器に入っていたのは、定番のサンドイッチで、片手で食べられるようにと、形を整えられて作られていることにシルさんなりの気遣いを感じる。作るのに手間がかからない、というだけの理由ではないのは確かだった。

「……………まったく、リリは悔しいです。ベル様のお蔭でアレからコレになるなんて」

「あははは……………」

女の子には料理上手であってほしいと思うのは僕の我が儘かもしれない。

けど、シルさんが僕に好意を持っている持っていないに関らず、料理を作る以上は上手な物に仕上げた方が食べる方だけでなく作る方のためにもなる。美味しくなかったと言われるよりも、美味しかったと言われた方が気分は良い。

本当に、僕としては「美味しい料理が作れるようになってほしい」という願いから指摘したのだけど、彼女は張り切り過ぎたようで、怪我をしていた。

——あの贈り物は僕のつけた注文に応えようとして怪我をさせてしまったお詫びの印でもあるのだ。

シルさんは何でもないかのように振る舞っていたが、ポーシヨンなどでは治りきらない、跡が残ってしまう程の怪我だった。熱湯による怪我ということに、昨日はしてなかった化粧で隠した目元の隈。お弁当の内容でどういった経緯で起きたのかは怪我をした日のうちに分かった。

その日のうちに——その場に居合わせずに——魔法をかけて治して、無かったことにした。

勝手だとは思う。でもアレは浅慮だった僕の戒めであり、もう二度とあんなことが起きないようにするための対策だ。未だにその好意

の理由を聞けない、告白を受けたのは予想外だったけど。

——僕が告白を受けて承諾したのは、男の云々を抜きに彼女が好きだったからだ。

単純に可愛くて綺麗な年上の人ってだけじゃない。

酷い怪我を負って痛い筈なのに。隠して、おどけて見せて。僕のこ
とを怒ってもいいのに、そんな素振りを見せようとはしない。

何でもないかのように振る舞って笑って見せるシルさんの事を、あの時好きになった。同時に、烏澁がましくも守ってあげたいと思えた。

悔しい、でも美味しい。そんな複雑な顔をしながら食べるリリと違い、僕は感謝をしつつサンドイッチを頬張る。

……あの人が言うように、リリも歩み寄って欲しいと思う。シルさんが本心から言っていたことを僕は知っている。何か思惑はあるようだけど。

調味料以外に美味しきを感じるものが何なのかと思考を巡らせながら、僕はリリと一緒に弁当を完食した。

————

「それじゃありりは換金の後、例の件を済ませてきますね」

「うん、よろしく。僕も行ってくるよ」

「はい」

ベルと別れて、バベルに設けられたギルドの運営する換金所を利用する。今日は午前中だけダンジョンに潜る予定だったので、戦利品の量は少なく、こちらの利用で問題はない。

いつもの魔石やドロップアイテムの量であれば、時間がかかるためギルド本部の換金所を利用するが、今日はそうでもない。

バベルに設けられている換金所も規模は大きいが、なにせ利用する冒険者の人数が人数で、その一つが稼働しなくなれば迷惑な上に目立つし、待ち時間の居心地は悪いと利点が無い。手間ではあるが、本部の換金所を使うのが一番だった。……ベルがアドバイザーの元に

行くのなら、ついて行かないわけにもいかなかったという理由もある。

まあ、行動原理に理解ができたから、ちよつと信用してもいいと思つたのだ。ベルはやっぱり可愛い人だ。

「……………しようがない人です。ベル様は」

慈愛を持ってないとやってられない、というのはあるけれど。

ただ、ベルから向けられる愛情には現状満足しているし、到底一人では抱えきれないかもしれないも思っている。

——意地を張っていただけなのかもしれない。

そう納得しかけている、彼を独占したいと欲していた自分がいた。

大袋一杯の魔石とドロップアイテムを換金して10万ヴァリスほどになった。ヘスティアを含めて三人だけの「ファミリア」がやっていくには既に十分な資産が集まっているが、一応「ヘスティア・ファミリア」の目標総資産として10億ヴァリスという途方もない、しかし、ベルがいることで現実的になる数字にはまだ届かない。しかしあることを除けば容易いことだと思う。

ベルが最深層から持ち帰ったものに値段を付けて売ることが出来れば、すぐにでも到達できる金額だからだ。問題は値段が付けられないということにある。加工して武器や防具にすることもできるが――

「やりすぎ、なんですよねえ」

……………ベルが作つたら大変なことになる。彼を目指している自分は、それでも小心者なのだ。視界に入る範囲を焼き払う武器とか、ただの武器なわけがない。あと大きさ的にも武器というより何か別のもの。決して摩耗することはなく、魔力を込めれば繰り返し使える。

『魔剣』以上の代物だ。

あれを扱えるベルは、一人でオラリオの一切を灰塵にすることができると思う。……………自分も使えるらしい、という話は忘れたくとも忘れられない。

バックパックの中に入れたポーチの存在を一度確かめてバベルの

8階へ赴く。

この間『兎鎧 Mk-2』を購入した時と同じ店員に声を掛けて、先日の話がどうなったかを聞く。ヴェルフ・クロツゾに会いたいという話だ。

「え、会わない!?!」

話をついたようだが、面会は断るとのことだった。店員が言うには、「前にも言ったが彼は魔剣を嫌っている。才能の持ち腐れだとは思う」と。

「……………お客様の特徴を話すと、にべもなく断られてしまいました」「そんな……………」

恐らく、己の種族故に。

かつて自分が実際にそうだったように、小人は素の身体能力は優れているとは言えず、手癖が悪いと思われがちだ。

例外である「ロキ・ファミリア」の【勇者】のように、余程実力者として名を馳せなければその偏見はついて回ると思っていいる。

ようするに非力な小人が安易に戦力を増強するため、魔剣を欲していると思われたのだろう。もしかすると転売目的だと思われたのかもしれない。

兎に角、その彼の真意は分からないものの、会いたくないというならば仕方がない。

あわよくばここで今日会えたら。そう思っていたが中々上手く行かないものだ。

「ヴェルフ・クロツゾの作業場を教えてください」

「それは構いませんが……………我々が言っても聞かないくらい相当頑固なやつで。望み薄じゃないかと思えますがね」

そう念をおす店員からヴェルフ・クロツゾの工房の場所を聞き出した。

——会わないと言うなら、会いに行く他ない。

ベルが彼の装備を気に入っているという些細な理由もあるが、一言言ってやりたくなったのだ。

有難う御座いました、と店員に一礼して少しずれかけていたバック

バックを背負いなおす。

……少し鼻息を荒くさせながら昇降機に乗り込み、バベルの8階を後にした。

三—三—三—三

「リリ！」

「……………？ あ、ベル様！」

僕は北東のメインストリートを行くリリを見つけて、手を振って呼び止めると、少し顰めていた顔をリリは目尻を下ろして綻ばせた。……何か嫌な事があったのだろう。

そんな素振りを見せずに、リリは僕の進捗を聞いてくる。

「ベル様はどうでした？」

「うん、ぼつちりだって。…………一人で行くのは中々気恥ずかしいね」

「まあ、女性の方が殆どですしね」

「リリはどうだった？」

リリの向かっていた進行方向に向けて歩きながら聞くと、バックバックの肩紐を握るリリは少し肩を怒らせた。

「会わないって言われたそうです」

「……………なんでだろう」

「大方リリが魔剣の注文をするとでも思ったのでしょうか。ふん、あの頃のリリだと思って馬鹿にしてるんですよ、きつと」

「ちゃんと言わなかったの？」

「はい。だって対外的にはリリ達はLv. 1で燻っていた元サポーターと駆け出しですよ？」

「まあ、そうだよね……………」

「魔剣目当てでないと、声を掛ける筈がないとでも思われたんでしょうね……………」

リリはそう言って肩を落として見せたが「それに」と付け加える。

「リリが小人だから、という偏見もあったのだと思います。買いに行く時、バルウム狼ウエアウルフ人の子どもに姿を変えておけば良かったかもしれません」

「うーん。でも、これからお付き合いしていくかもしれないって人に、違う姿で会いに行くのはどうなんだろう。結果としては良かったんじゃないかな?」

「それもそうなんです。……ちよつとりりとしては悔しいです」
頑張って強くなっているのだから、小人パルウムに対する偏見でリリの第一印象を決めるのは僕としても思うところがある。

「それで、これは彼の所に行ってるわけだよね?」

「はい。会わないというなら、会いに行つてやろうって魂胆です」

「……なるほどね」

「その角、曲がります」

大通りから脇道にそれてリリの先頭にして進む。僕たちのホームに行く路地に近いものを感じる。

そこかしこから聞こえる音で周りにある建物が作業場や工場だとわかる。

此処が噂に聞く、魔石製品が造られている工業区なのだろう。

表通りに並んでいた店の多くが工具などを取り扱っていたのにも納得だ。

リリに続いて歩く。

何度か路地を曲がって、迷宮都市オラリオの端に着こうかというあたりで足を止めた。

「ここがそう?」

「はい。会わないとか抜かした輩の顔を拝んでやりましょう」

「リリ、怒ってる?」

「……そんなことないですよ」

僕から見えて、少し機嫌が悪いのは確かなようだ。

こじんまりとした小屋の屋根から煙突が一つ飛び出している建物は、少し愛嬌はあるものの、独り者の鍛冶屋というイメージがしっくりきた。魔剣が作れるのに作らないという話を聞いて想像している、彼の人物像にびたりと当てはまる。

窓が開いていて、戸締りをしていないから不在というわけではないようだ。

やっぱり装備につける名前としてどうなんだろうと思うけど、あの『兎鎧』ビヨウキチや『兎鎧 Mk-2』が此処で、この中にいる人に作られたのだと少し感動する。

ここで寝泊まりしているわけではないのだろう。かつての「ヘスティア・ファミリア」のホーム魔教会と同様に、生活に向いているとはお世辞にも言えない。

「ベル様、どうぞぞ」

「……………うん」

リリに促されて扉を二度叩く。

『居るぞー』

気の抜けた返事があった。若い男性の声だ。

少し緊張しながら、「お邪魔します」と僕はその扉を開ける。